

「現代日本語の従属節選択と複文の類型について」

熊本大学大学院社会文化科学研究科

二〇一二年度 学位論文

人間・社会科学専攻

フィールドリサーチ領域

園部 すみ

# 章立て目次

序章	1
第1部 先行研究と本研究の立場	
第1章 従属節の階層構造に関する先行研究	9
第2章 文の種類に関する先行研究	15
第3章 学習者の母語を考慮した研究	20
第4章 本研究の立場	28
第2部 対訳付作文の調査と結果	
第5章 調査の方法	35
第6章 調査の結果	42
第7章 考察	66
第3部 従属節の選択と複文の種類	
第8章 従属節の選択	82
第9章 複文の種類	102
第10章 従属節の主題化	143
第11章 結論と今後の課題	166
おわりに	169
参考文献	170
用例の出典	176

# 細 目 目 次

序 章 .....	1
1. 本研究の背景と動機 .....	1
1. 1. 日本語学習者の母語を考慮した研究の必要性 .....	2
1. 2. 他言語との対照可能な概念の重要性 .....	2
1. 2. 1 従属節の独立度 .....	2
1. 2. 2 文の種類 .....	3
1. 2. 3 認知意味論における発話の領域 .....	4
2. 本研究の目的 .....	5
3. 本研究の意義 .....	5
4. 本研究の文法記述の立場 .....	5
5. 本論文の構成 .....	6
第 1 部 先行研究と本研究の立場	
第 1 章 従属節の階層構造に関する先行研究 .....	9
1. 従属の認定と陳述性 .....	9
1. 1 松下 (1930) .....	9
1. 2 三上 (1953) .....	9
1. 3 渡辺 (1971) .....	10
2. 主従的關係の下位分類 .....	10
2. 1 連用と連体 .....	10
2. 2 連用節における条件節の位置付け .....	11
3. 従属節の階層構造 .....	11
3. 1 南 (1974) .....	11
3. 2 田窪 (1987) .....	12
3. 3 野田 (2003) .....	12
4. まとめ .....	14
第 2 章 文の種類に関する先行研究 .....	15
1. 発話機能による類型 .....	15
2. 演述の分類 .....	16
2. 1 佐久間 (1941) から益岡 (1987) まで .....	16
2. 2 奥田 (1988) から仁田 (2012) まで .....	17
2. 3 影山 (2008) .....	18
3. まとめ .....	19
第 3 章 学習者の母語を考慮した研究 .....	20
1. 学習者の母語を考慮した研究の必要性 .....	20
2. 学習者コーパスと対訳コーパス .....	21
2. 1 学習者コーパス .....	21
2. 2 対訳コーパス .....	21
3. 複文に関する中国語母語話者の誤用分析と日中対照研究 .....	22
3. 1 日本語教育における誤用分析 .....	22
3. 2 時間節と条件節に関する日中対照研究 .....	23
3. 3 条件節に関する日中対照研究 .....	24

3. 4 「の/こと」節と条件節・中止節に関する調査	27
4. まとめ	27
第4章 本研究の立場	28
1. 複文の定義と種類	28
1. 1 複文の定義	28
1. 2 複文の種類	28
2. 各節の概観	30
2. 1 連体節	30
2. 2 補足節	30
2. 3 連用節	31
第2部 対訳付作文の調査と結果	
第5章 調査の方法	35
1. データの種類	35
1. 1 作文対訳データベース	35
1. 2 中日翻訳問題	36
1. 3 深圳・熊本作文対訳データ	38
1. 4 中日対訳コーパス	39
2. データの分析方法と限界	40
第6章 調査の結果	42
1. ①作文対訳データベース	42
1. 1 従属節の誤用	42
1. 2 中止節選択の問題	43
1. 3 時間節の問題	45
1. 4 基本形の問題	47
1. 5 理由節の問題	48
1. 6 条件節の問題	49
1. 7 引用節の問題	51
1. 8 「の/こと」節の問題	52
1. 9 その他	52
1. 10 まとめ	53
2. ②中日翻訳問題	53
2. 1 調査の結果	53
2. 2 まとめ	60
3. ③深圳・熊本作文対訳データ	61
3. 1 調査の結果	61
3. 2 まとめ	64
第7章 考察	66
1. 選択形式の近さから見た誤用のタイプ	66
1. 1 比較的広範囲な形式間での選択	66
1. 2 類義形式間の選択	68
1. 3 助詞の有無に関する誤用	69
2. 「て」節の誤用例	70
2. 1 「て」節の誤用例数と内訳	70

2. 2	文の続け方に関する誤用	72
2. 3	論理関係に関する誤用	73
2. 4	日本語の従属節選択の誤用	74
3.	時間節の誤用例	75
3. 1	時間節の誤用例数と内訳	75
3. 2	助詞の有無に関する誤用	77
3. 3	条件節に関する誤用	78
3. 4	時間節相互の選択の誤用	78
4.	まとめ	80

### 第3部 従属節の選択と複文の種類

第8章	従属節の選択	82
1.	事実性・個別性	82
1. 1	「て」節と文の階層構造	82
1. 2	「て」節の特徴	84
1. 2. 1	形式的特徴	84
1. 2. 2	意味・用法の特徴	84
1. 3	「て」節と他の従属節の選択基準	86
1. 3. 1	「て」節と他の連用節	86
1. 3. 2	「て」節と条件節	87
1. 3. 3	「て」節と「のは」節	88
1. 4	まとめ	89
2.	即時性・新出性・起因性	89
2. 1	時間節の種類	89
2. 2	時間節と他の従属節の選択基準	90
2. 2. 1	あと系時間節と「と」節	90
2. 2. 2	あと系時間節と「て」節	92
3.	時間節と助詞の有無	93
3. 1	時間節+「は」	93
3. 2	「とき」「ときに」「とき(に)は」	95
3. 3	「あいだ」「あいだに」「あいだは」「あいだには」	99
4.	まとめ	101
第9章	複文の種類	102
1.	複文の種類の決まり方	102
1. 1	文の種類についての本研究の立場	102
1. 2	複文の種類の決まり方	103
2.	連用節の階層構造と文の種類	105
2. 1	A類の従属節と文の種類	105
2. 2	B類の従属節と文の種類—主題的解釈—	105
2. 3	C類の従属節と文の種類	107
3.	補足節の階層構造と文の種類	108
3. 1	補足節内の要素	108
3. 2	補足節と階層構造	109
3. 3	補足節と文の種類	110
3. 4	名詞節と階層構造	111

3. 5 名詞節と文の種類	112
4. 「の/こと」節と事態評価の述語	114
4. 1 「の/こと」節の特徴	114
4. 2 「の/こと」節の主題用法	115
4. 2. 1 感情表現と評価表現	115
4. 2. 2 事態評価の述語	116
4. 2. 3 感情表現と従属節	118
4. 2. 4 評価表現と従属節	127
4. 3 「の/こと」節と他の従属節の選択基準	135
4. 3. 1 「の/こと」節の誤用	135
4. 3. 2 「の/こと」節と事態評価の述語	136
4. 4 まとめ	139
5. 引用節の階層構造と文の種類	139
5. 1 引用節と階層構造	139
5. 2 引用節と文の種類	140
6. 疑問節の階層構造と文の種類	141
6. 1 疑問節と階層構造	141
6. 2 疑問節と文の種類	141
7. まとめ	142
第10章 従属節の主題化	143
1. 従属節の主題化と文の種類	143
1. 1 従属節の主題化とは	143
1. 2 顕在的主題化と潜在的主題化	144
2. 時間節の主題化	146
2. 1 「とき(に)は」節の主文の特徴	146
2. 2 「あいだは」節の主文の特徴	148
3. 目的節の主題化	148
3. 1 従来の研究	148
3. 2 「ため(に)は」節の主文の特徴	148
3. 3 「ため(に)は」節の独立度	149
4. 「て」節の主題化	152
4. 1 「ては」節の顕在的主題化	152
4. 2 「て」節の潜在的主題化	154
5. 引用節の主題化	155
5. 1 「とは」節と主題化	155
5. 2 「とは」節の事実性と情報の新旧	156
5. 3 「とは」節の主文の述語	157
6. 疑問節の主題化	158
7. 条件節の主題化	159
7. 1 潜在的主題化の構造的・意味的条件	159
7. 2 「なら」節の主題化	161
7. 3 条件節と主題	162
7. 4 連体と連用の対応	163
8. まとめ	165
第11章 結論と今後の課題	166
1. 結論	166

2. 言語類型論・認知意味論への示唆 .....	167
3. 日本語教育における活用 .....	167
4. 今後の課題 .....	168
おわりに .....	169
参考文献 .....	170
用例の出典 .....	176

# 序章

1. 本研究の背景と動機
  1. 1 日本語学習者の母語を考慮した研究の必要性
  1. 2 他言語と対照可能な概念の重要性
    1. 2. 1 従属節の独立度
    1. 2. 2 文の種類
    1. 2. 3 認知意味論における発話の領域
2. 本研究の目的
3. 本研究の意義
4. 本研究の文法記述の立場
5. 本論文の構成

## 1. 本研究の背景と動機

### 1. 1 日本語学習者の母語を考慮した研究の必要性

現代日本語の複文に関する構造・意味的な研究は、従来、従属節の階層構造や独立度といった構造的な側面に注目した観点から、連用節を中心とした研究が進む一方で、条件文、理由文、並列文などといった意味の種類別の各論的な記述研究も進んでいる。

一方、日本語学習者が日本語の従属節の形式を理解、産出する際の問題を見てみると、そこには母語干渉も含め複雑な要因が関係しており、学習者の母語を考慮した研究の必要性も一層高まっている。

かつて筆者は、台湾の日本語専攻の大学生が書いた約700編の作文を対象とし、従属節の選択に関する誤用を調査、分析したが、この調査の背景にも上述のような問題意識があった。たとえば、中国語話者が従属節の形式を選択する際には、「したら」と「すれば」の違いといった連用節の類義表現間の異同のみならず、時には連体と連用に跨るような広い範囲での異同が問題になる。

(1) 自分の家一軒が持てて、幸せなことだと思う。(塩入すみ, 2002)

この例は、これだけ見ると誤用とはみなされないが、「将来の夢」というテーマで書かれた作文の中の誤用例である。「自分の家一軒が持てて」は、通常なら既成事実と解釈されるが、実は学習者は将来起こり得る可能性として「将来自分の家が持てたら、幸せだ」、あるいは一般的な因果関係として「自分の家が持てるのは、幸せだ」ということを表したかったのである。このことから、この学習者は「て」節が既成事実を表すことについて未習得である、あるいは、十分に習得していないということが指摘できるだけでなく、日本語の従属節についての研究も連用節相互に限定せず、従属節全体に及ぶ広い範囲で考察する必要があることがわかる。この誤用例はまた、「幸せだ」という述語がその評価の対象となる事態を表す従属節には、少なくとも理由節、「の/こと」節、中止節、条件節、時間節の5種あり、その使い分けが問題になることを示している。こうした複数の事態表示形式をもつ述語を、本研究では「複数事態の述語」と呼ぶことにする。

複数の事態をどのような意味関係として認識し、どのような接続形式を選ぶかは、言語により異同があると考えられる。また、たとえ同じ意味関係として認識していても、それを言語形式として表示するかどうかは言語により異なるであろう。たとえば、日本人の中国語学習者の誤用として「因为…，所以（…だから）」の過剰使用があるが、因果関係の認識は両言語文化圏でなされたとしても、それを言語形式で表示するかどうかは言語により異なり、接続形式の意味・用法に反映しているものと考えられる。

以上のような問題は、日本語以外の言語を参考とした考察により初めて可能になるのであり、日本語の複文研究における他言語との対照研究や、学習者の母語を考慮した習得研



究、そして学習者自身による対訳付き学習者コーパス構築などの必要性を示しており、本研究の1つ目の動機となっている。

## 1. 2 他言語との対照可能な概念の重要性

### 1. 2. 1 従属節の独立性

本研究の2つ目の動機は、従来の研究で議論されてきた「従属節の独立性」と「文の種類」という2つの観点の普遍性と有効性を支持するとともに、両者の関係性を明らかにしたいということである。

かつて筆者は、日本語の従属節のうち「は」の付く従属節を取り上げ、その意味・用法を論じたことがあるが、その際複数の従属節の分類の基準としたのは、従属節の独立性であった。今回新たに文の種類という観点を加えたのは、「は」の付く従属節の主文の制約と冒頭の「幸せだ」のような述語文の分布が、文の種類と関わっているためである。

従属節の独立性と文の種類という観点は、日本語のみならず、他言語にも共通する概念であると考えられる。たとえば、独立性に関して、日本語の目的節「ために」と「ためには」を比べると、「ためには」は「ために」より独立性が高く、その結果、主文の述語の現れ方も異なっている。下の例で、「ためには」の主文には「福岡に行った」のような過去の1回の動きは現れにくく、「福岡に行かなければならない」のような必要条件が現れることがわかる。

(2) a. 試験を受ける {ために/?ためには}、福岡に行った。

b. 試験を受ける {ために/ ためには}、福岡に行かなければならない。

すなわち、(2a)と(2b)では主文の文の種類が異なっており、前者が動きを表す類型に属すとすれば、後者は状態を表す類型に属していると考えられ、従属節の独立性の高低が複文全体の文の種類に関わっていることを示している。

従属節の独立性が文の種類と関わるという現象は他言語でも見られる。英語の目的節に関する同様の現象は Faraci, Robert A.(1974)、Quirk, Randolph.et. al.(1985)などが指摘している。次の例のように、目的節の中でも、「ためには」に相当するような独立性の高い「in order to」節が文頭にあると、例(3b)のように主文が述語の単純過去形だけでは文の許容度が低い(Quirk, Randolph.et. al.,1985)。これは、英語では文頭の位置が主題的な意味をより顕在化させ、日本語の「ためには」のような主題的用法となっているためと考えられる。

(3) a. You have to pay to go in. ~<sup>1</sup> (In order) to go in, you have to pay.

b. He waited to see her. ~ ? (In order) to see her, he waited.

(Quirk, et. al.1985,p.1189)

また、中国語の目的節には、比較的小さな節「为」と大きな節「为了」があるが、両者の違いは日本語の「ために」と「ためには」ほど明確ではなく、「为了」の日本語訳には「ために」も「ためには」もある。田中寛(2003)は日本語の「ためには」に対応する中国語の表現として、「为了…」だけでなく、「为了…, 有必要…(…ためには、…が必要だ)」「为了…, 必須…(…ためには、…なければならない)」、「为…, 只好…(…ためには、…ほかない)」などの必要条件を表す表現を挙げている。

(4) (漢字の例文と日本語訳は田中(2003)より。発音記号は筆者による<sup>2</sup>)

a. Wèile cèliáng gùkè gòu wù, běn diàn juédìng yǎncháng yíngyè shíjiān.

为了测量顾客购物, 本店决定延长营业时间。 (p. 361)

(顧客の買い物の便宜をはかるため、当店は営業時間を延長することを決めた。)

b. Wèile jiànli fǎn, zài bìyào qǔdé de chǎnyè jiè hé jīnróng jiè de zhīchí.

为了建立法案, 在必要取得的产业界和金融界的支持。

(法案成立のためには産業界や金融界の協力が必要です。) (p. 371)

1 ~は左の文が右の文に言い換えられることを表す。

2 以下、本論文中の中国語の発音記号はすべて筆者による。

すなわち、例(4a)と例(4b)の区別は、主文が必要条件を表すかどうかという意味によっているのである。この場合、主題化は形式や語順で決まるのではなく、主文の種類で決まっていると言える。

以上の例は、従属節の独立性という観点で、日本語や英語においてそれぞれ複数存在する目的節の形式を区別するための有効な概念であることを示すとともに、日本語、英語、中国語において、従属節の主題的用法と文の種類が密接に関係していることを示している。

## 1. 2. 2 文の種類

文の種類という観点も様々な言語に共通して用いることのできる普遍的な概念である。

本研究で「文の種類」と呼ぶのは、文の意味が動き(あるいは出来事)を表すか、状態や属性を表すかといった意味レベルの区別であるが、品詞論やアスペクトなど文法カテゴリーとも関係しているほか、後述するように、主題など機能的な範疇とも関わっている。

日本語における文の種類に関する研究には、佐久間鼎(1941)の「物語文」「品定め文」という分類以来、関連する議論として、三上章(1953)、川端善明(1976)、奥田靖雄(1988)などがある。近年では工藤眞由美(2012)、仁田義雄(2012)による動きや状態といった種類の基準に関する議論もあり、「文の種類」はこうした議論の流れを受けた用語である。

一方、益岡隆志(2004)(2008)により提案された「叙述の種類」という概念も文の種類に近い概念ではあるが、「叙述(predication)」という用語は述語や文の意味を越えた機能的なレベルを指しており、これにより述語の意味中心であった文の種類に関する考察の対象が機能レベルまで広がったと言える。益岡(2004)はこの叙述の種類という概念により、たとえば「属性叙述の構成を基盤とする言語 vs. 事象叙述の構成を基盤とする言語」という言語類型が可能であると述べている。それによれば、日本語は「属性叙述の構成を基盤とする言語」であり、「主題—解説(topic-comment)」を文構成の基本とする。

こうした言語類型の観点は、Li, Charles. N. and Sandra A. Thompson(1976)により提案された「主題卓越言語(Topic Prominent Language) vs. 主語卓越言語(Subject Prominent Language)」という言語類型とも関わっており<sup>3</sup>、この概念が言語類型の研究においても有効な概念であることを示している。

文を属性と事象というタイプに分け、その違いを捉えようという考え方は、海外の研究でも進められてきた。眞野美穂(2008)は、益岡の叙述の種類という概念と共通する観点から海外の研究史を考察し、主に以下の2つの流れを取り上げ、文の種類あるいは叙述の種類という観点が他言語を対象とした研究と多くの共通点をもつことを示唆している。

1つは、形式意味論を中心とした、「総称性(genericity)」をめぐる名詞句の解釈や述語の意味に関する研究で、Carlson, Gregory(1980)などによる「個体レベル述語/場面レベル述語(individual-level predicates/stage level predicates)」、Davidson, Donald(1967)による「事象項(event argument)」という概念に関する研究などが著名なものである。

もう1つは、述語の「アスペクト特性(aktionsalt)」と「時間的安定性(time-stability)」に関する研究で、Vendler, Zeno.(1967)の英語4分類(状態、活動、達成、到達)、Givón, Talmy.(1984)の「時間的安定性(temporal stability)」による、品詞の特性や連続性、述語の時間的持続性に関わる研究などがある。

こうした研究が示唆するのは、事象と属性という文のタイプの決定には、名詞句の語彙的な意味や冠詞、述語の時制や語彙的な意味など、文を構成するいくつかの要素が関係しており、名詞句の場合は総称性に関わる意味、述語の場合は時間的安定性、あるいは特定の時間に位置付けられるか否かに関わる「時間的限定性(temporal localization)」(工藤, 2002, 2012)が文のタイプを決定する重要な要素となっているということである。

一方、文の種類という概念が考察の対象を文の意味から機能に広げつつあることにより、

<sup>3</sup> 益岡(2004)は三上(1959)を受け、日本語は主題卓越型であるとするが、Li and Thompson(1976)は日本語を主題卓越・主語卓越言語とし、中国語等の主題卓越型と区別している。

研究の可能性もまた広がっていることは確かであるが、影山太郎（2008）の指摘するように、この類型が意味だけでなく言語の形式によってどう裏付けられるのかという問題もある。また、従来の文の類型に関する研究は、私見では複文の場合に言及したものはほとんどないのも問題である。さらに、「ためには」など「は」を含む従属節のように、文の類型は日本語においては従属節の形式や主文述語の制約に明確に形として現れており、これらの用法を文の類型とどう関係付けるかも問題になる。後述するように、複文における文の類型の問題は、階層構造とも密接に関わっていると考えられ、2つの概念の関連性を示し、さらに発展させたいということも本研究の動機の1つとなっている。

### 1. 2. 3 認知意味論における発話の領域

複文における接続関係の意味解釈の問題は、従属節の階層構造という構造的な問題がより認知的な意味解釈とどう関わるかという問題も含んでいる。従属節の階層構造が構造的なものであると同時に意味的な階層も含んでいるということは南（1974）（1993）においても述べられている。

南は山田孝雄以来の述部の構造に関わる研究のうち、林四郎（1960）の提案した「述部の4段階（描述段階、判断段階、表出段階、伝達段階）」は単に述部の区別でなく、文全体の構造や身振り、表情まで含めた言語的コミュニケーション全体の構造といった言語行動の面においても認められるという先見性のあるものであると述べている。こうした区別を従属節に応用したのが南（1964）（1974）の階層構造であると言えるであろう。

海外においては Sweetser, Eve. E. (1990) が、認知意味論の観点から、発話に「内容領域 (content domain)」「認識領域 (epistemic domain)」「言語行為領域 (speech-act domain)」の3つの領域を設定し、この領域がモダリティ、条件、接続における意味解釈に適応できることを主張している。

また、こうした分類の拠り所として中右（1994a）の提示する階層意味論モデルは、述部の構造に関する研究、そして仁田義雄（1989）（1991）の示した日本語の文の構造とモダリティの下位タイプに共通するところもあり、文の意味的な階層構造が普遍性をもつものであると言えるだろう。ただし、Sweetser と南の複文に関する部分は、以下の表のように異なるところも存在し、いくつかの疑問も残る。

【表1：Sweetser の分類と南の分類】

節のレベル	Sweetser (1990)	南 (1964) (1974)
同時動作	/	Aの段階
事態	content domain	Bの段階
認識	epistemic domain	Cの段階
主題	(既知条件文→epistemic / speech-act domain)	Cの段階
メタ言語的用法	speech-act domain	/ (提示?)
働きかけ	/	Dの段階

まず、主題についての位置付けである。南は主題をC類に属するとしているが、野田尚史（1995）は主題の「は」が意志などの発話・伝達のモダリティ<sup>4</sup>とは共起しないことから、言表事態のモダリティの階層に位置付けている。一方、Sweetser は Haiman (1978) の既知条件文と topic に関する議論において既知条件文を「認識領域」あるいは「言語行為領域」のどちらかに属するとしているが、それ以外の名詞節による主題には言及がない。

また、Sweetser の「言語行為領域」とするメタ言語的な用法は、南（1974）がC類の提示のことばとして挙げる「例の件だが」のような例に対応するのか不明である。したがって、両者の分類における問題点としては、主題とメタ言語的な用法という認識領域あるいはC類に何が含まれるのかということがあり、分類の中身についてはまだ議論の余地があると

4 本研究でのモダリティの下位分類と名称は仁田義雄（1989）による。

言えるだろう。主題を階層構造においてどう位置付けるかは、本研究の扱う例(1)の「幸せだ」のような述語の対象となる「……のは」という名詞節による主題を、他の連用節と比較して考察する際に重要であると考えられる。

## 2. 本研究の目的

1. で述べた問題を背景として、本研究は以下の①～③を目的としている。

### ①【従属節の独立度と文の種類の統合】

従来の複文研究において議論されてきた、従属節の独立度と文の種類という2つの観点からの考察を行うことにより、日本語の従属節と複文に関する、総合的な意味・用法の記述を発展させる。

### ②【従属節の主題化と事態評価の述語に関する規則性の発見と記述】

従属節が「は」を伴わずに主題的にはたらく用法について、主文の感情表現を中心とした「事態評価の述語」(後述)の用例で具体的に検証することにより、従属節の独立度と文の種類という2つの観点が相互に関連していることを示す。

### ③【従属節選択における有効な概念の提出】

中国語話者による対訳付き日本語作文のデータを活用し、日本語の従属節の選択に関わる中国語話者の誤用傾向とその具体例についての分析を行い、日本語学習者の従属節選択における有効な概念を提出、検証することにより、日本語教育にも有益な観点から、日本語の従属節に関する意味・用法の記述を可能にする。

## 3. 本研究の意義

上述したような研究の動機と目的により進められた本研究の意義として、以下のような項目が挙げられる。

### ①【文の種類の複文への適用】

従来の単文研究で進められてきた文の種類という言語普遍的な観点を、日本語の複文において考え、複文の種類が従属節の階層構造と関わっていることを指摘した。

### ②【文の種類と「従属節の主題化」の関係の解明】

主文が感情表現を中心とした、評価の対象を事態として表す述語(以下「事態評価の述語」と呼ぶ)の場合に、連用節、引用節、疑問節は、その従属節自体が主題的な役割を果たす現象(以下「従属節の主題化」と呼ぶ)があることを指摘し、具体的にいくつかの述語の従属節のとり方を調査し、明らかにした。

### ③【言語類型論と認知意味論への示唆】

「は」の付いた従属節や事態評価の述語の評価の対象となる従属節の形成する複文は、連用節であっても「主題—解説」構造をとるものであると考えられ、このことは、日本語が連用節をとる複文においても意味的に「主題—解説」構造をとることを示唆しており、益岡(2008)による主語と主題に関する言語類型の観点からの主張—日本語が属性叙述を基盤とする言語である—を支持するものであることを示した。

### ④【日本語教育に有意義な文法記述の提示】

日本語の従属節選択の基準を記述することで、日本語学教育において有益な文法説明を提供するとともに、学習者の母語を配慮した文法説明を提言し、中国語の対訳資料や中国語母語話者の誤用例についての考察を行い、誤用傾向を明らかにした。

## 4. 本研究の文法記述の立場

本研究は、現代日本語の実例、日本語学習者による誤用例、日中対訳などの用例から日本語の法則性を明らかにするという、実証的かつ帰納的な手法を用いている。いわゆる記述文法の立場ではあるが、とくに非母語話者の日本語や他言語を含んだ言語現象を考察の対象として扱いたいと考えている。

記述文法研究の定義とその範囲は、野田春美(2011)が指摘するように研究の経緯など

の理由により曖昧なものとなっはいるが、言語現象の詳細な観察・記述とそこからの規則性の抽出という帰納的な研究手法は共通する特徴であると考えられる。生成文法など理論を重視した研究があらゆる言語に共通する普遍性を志向するのに対し、記述文法は個別の言語現象の網羅性を志向するものであるが、両者は決して対立する手法ではなく、重点の違いであるとも言える。妥当性のある普遍的規則は個別の言語データに裏付けられたものであり、一方、網羅された個別言語の記述は自ずと普遍的規則に収斂されるものであろう。明治以来の日本における日本語の文法研究は、理論と記述の中間にそれぞれの立場を位置付けて発展を遂げている。仁田義雄(2012)は、山田文法から近年の文法研究に至るまでの主要な学説を紹介し、言語研究に対する姿勢について次のように述べている。

言語研究者が自らの研究を進める時、言語事実・データがまずもってその拠りどころになる。自らが携わっている研究領域に現れる言語事実を包括的にきめ細かく観察し分析・記述することが、確かな研究のために、まずもって要請される。それとともに、体系的で首尾一貫した分析・記述の方途や枠組みが用意されていなければならない。自らの、言語事実の取り扱い姿勢や分析・記述の方途や枠組みは、言語事実を包括的にきめ細かく収集・観察するとともに、先行研究と対話・反発し、その成果を学びながら、獲得・確立されていくのだろう。また、自らが有し採用している言語事実の扱い方、分析の方途、記述の枠組みについて、研究者は常に自覚的である必要があろう。そのためにも、研究の流れの中に、自らが取っている言語事実の扱い方、分析の方途、記述の枠組みを相対化して眺める努力を要請されるだろう。(仁田 2012, p. 3-4)

ここには、言語事実のきめ細かな観察と体系的な手法や枠組みが表裏一体であることが述べられており、本研究も結果的には不完全なものではあるが、こうした基本的な研究姿勢を取することを志向している。

さらに、こうした日本語研究の手法に、本研究が新たに加えたいと考えるのは、日本語以外の言語や日本語を母語としない人の日本語をより意識した日本語文法の記述である。日本語の特徴は時として日本語だけを見てはわからないことがある。非母語話者の日本語が母語話者にとって新鮮なのは、その日本語に母語話者には予想できない規則が潜んでいるためである。本研究の動機や分析の進展も、中国語や英語といった他の言語からの視点なくしてはあり得なかった。

以上のように、本研究の立場は、言語事実を包括的に説明する枠組みを志向した記述的研究であり、その分析には対照研究及び誤用研究の観点を取り入れたものとなっている。したがって、用いているデータも可能な限り実例に基づいているが、必要に応じて作例も用いているほか、日本語と中国語の対訳データや、日本語学習者の作文データなども用いている。

## 5. 本論文の構成

本論文の構成は、以下の通りである。

序章として、本研究の背景と動機・目的、意義、本研究の文法記述の立場を述べた。

まず、本研究の動機としては、本研究が日本語学習者の誤用を問題の発端としていることから、学習者の母語を考慮した文法研究の必要性があることを述べている。また、従属節の独立度と文の類型という2つの概念について、それぞれの問題と相互の関連について明らかにしたいという動機を述べた。

研究の目的としては、上述のように、①従属節の独立度と文の類型という2つの観点から日本語の従属節に関する記述を行うこと、②従属節の独立度と文の類型という2つの観点の関連性を検証すること、③中国語話者を対象としたデータにより、日本語教育にも有益な観点から従属節に関する意味・用法の記述を行うこと、などを挙げている。

さらに、本研究の意義として、①文の類型を複文にも適用したこと、②文の類型と「従

属節の主題化」及び「事態評価の述語」との関係性を明らかにしたこと、③従来の従属節の階層構造、あるいは文の独立度という観点を再考し、個々の形式を位置付けると同時に、連用節以外の従属節の独立度についても捉え直していること、④日本語において有用な記述を示したこと、などを挙げた。

第1部では、本研究に関わる先行研究一文の階層構造、文の種類、そして学習者の母語を考慮した研究一をそれぞれ概観した後、複文の定義や種類などに関する本研究の立場を明らかにする。

第2部では、今回筆者が行った中国語話者を対象とした調査を含め、本研究で主に用いた4種類のデータの概要と調査の方法を述べ、調査の結果及び考察を述べる。次に、調査の結果を示し、各従属節ごとに誤用の種類や傾向を見る。

第3部では、調査の結果を踏まえ、従属節の選択、複文の種類、従属節の主題化について述べる。従属節の選択では、事実性・個別性といった従属節選択の意味基準を挙げ、「て」節と時間節を中心に選択の基準をまとめる。また、時間節と助詞の有無についても述べる。

次に、複文の種類について、種類の決まり方を示した後、連用節、補足節、名詞節、引用節、疑問節のそれぞれについて、階層構造と文の種類を論じた。とくに「の/こと」節に関しては、事態評価の述語のとする従属節を実例と誤用例で具体的に示し、それが従属節選択の誤用と関わることを、中国語とも照らしながら指摘する。次に、従属節の主題化について、「は」のある「顕在的主題化」と、「は」のない「潜在的な主題化」があることを述べ、その定義と具体例を、時間節、目的節、「て」節、引用節、疑問節、条件節のそれぞれに関して考察した。最後に条件節の考察では、認知意味論における条件節と主題に関する議論を取り上げ、また、本研究の従属節の主題化と先行研究の「連体と連用の対応」との意味解釈の原理を比較した。

最終章では、全体の結論をまとめ、本研究が言語類型論及び認知意味論における議論に示唆できることを述べ、さらに、本研究の結果が日本語教育においていかに活用可能かを述べた。

### 【本研究での引用方法と諸記号について】

本稿では、先行研究はその章において初出の場合、姓名と西暦年号で示す。2回目から同じ先行研究を引用する場合は、姓と西暦年号を示す。

例文の出典は例文の末尾に（ ）で示す。そのうち、①～④は第2部で示すデータからの引用とそれぞれの通し番号、『 』は著作、省略記号は大規模コーパスからの引用を指す（『 』BCCWJ）：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』。著書名のみ示されているものは青空文庫などからの引用で、論文最後に著書名と著者を掲載している。

例文の表記については、基本的に原点のままを原則としているが、ごく一部歴史的な仮名遣いや「,」などの表記について適宜直しているところがある。

例文に関する記号については、以下のように用いている。

- \* : 後続する形式が、非文法的である。
- ? : 後続する形式が、やや不自然である。
- {A/B} : AとBは交替形であることを示す。
- : 従属節部分に用いる。
- : 従属節以外で、注目したい場合に用いる。主に主文に用いている。
- ~~~~~ : 従属節と——部以外で注目したい場合に用いる。
- [ ] : 節を示す。
- A~B : 文Aと文Bは、ほぼ同じ意味で置換できることを示す。

## 第 1 部 先行研究と本研究の立場

# 第1章 従属節の階層構造に関する先行研究

1. 従属の認定と陳述性
  1. 1 松下 (1930)
  1. 2 三上 (1953)
  1. 3 渡辺 (1971)
2. 主従的關係の下位分類
  2. 1 連用と連体
  2. 2 連用節における条件節の位置付け
3. 従属節の階層構造
  3. 1 南 (1974)
  3. 2 田窪 (1987)
  3. 3 野田 (2003)
4. まとめ

## 1. 従属の認定と陳述性

### 1. 1 松下 (1930)

明治初期の西洋文法の導入以来、日本語の文法研究において「文」の認定は最も盛んに議論されてきた問題の1つであるが、それと同時に「複文」の認定もまた議論の分かれるところとなって今日に至っている。複文に関する議論の焦点は、文の認定と並行した「従属」あるいは「文らしさ」の認定に関わる問題である。

従属の認定に関してはこれまで多くの議論があるが、ここでは日本語学研究に影響が大きいと思われる3つの立場を概観する。

松下大三郎 (1930) は、それまでの日本文典の「単文」「複文」「重文」が英文法の「Simple sentence」「Complex sentence」「Compound sentence」を誤解したものであると批判する。それは、英文法の「Clause (松下の言う「従属句」)」がそもそも終止形のみを認めるものであるという理由による。たとえば、「明日天気善からば、我行かむ」「彼が語れる話を予に語れ」「我はダリアを愛し彼は牡丹を愛す」の下線部のような例は、いずれも終止形ではないため「修用語」であるに過ぎず、これらの例文はみな「Simple sentence (松下の言う「単断句」)」ということになる。

こうした批判に基き、松下は日本語では「単断句 (Simple sentence)」と「連断句 (Complex sentence、Compound sentence を1つにしたもの)」の二別が適当であるとし、ドイツ文典の「Zusammengesetzter Satz」を連断句の訳として挙げ、ドイツ文典も二別であることを根拠としている。

松下の立場は、明治初期の西洋文法を批判的に受け止め、「Clause」「sentence」が日本語においては何を指すのかという根本的な問題を提起しており、これにより以後の文及び陳述をめぐる議論が緒に就いたと言えるだろう。

### 1. 2 三上 (1953)

従属の認定に関する松下の立場は、述語の終止形で接続するものとそうでないものを明確に区別している点において、三上章 (1953) が接続助詞を終止形に接続するもののみ限定したのと共通するところがある。三上は従属の認定の議論を進め、「陳述度」の基準を導入し、いわゆる「係り」を「法」として位置付けた。

まず、連用補語を食い止めるか否かにより、食い止める「単式」と食い止めない「複式」に分け、中止連用形（「読み」「読んで」のほか「読みながら」「読んでから」等も含む）を「単式」とした。次に、連体として収まるか否かにより、収まる「複式の軟式」（例「頼めば来てくれる人」）と収まらない「複式の硬式」（例「\*忙しいから断った人」）に分け、前



者の係りを「仮定法」、後者の係りを「接続法」とした。最後に、普通体を丁寧体に変更することが相応しいか否かにより、以上の2つの検証をし、連体形の陳述度を決めた。

連用補語の食い止め方の解釈には疑問の余地もあるものの、三上の陳述度の3分類は、南不二男(1974)<sup>1</sup>の従属節の分類にほぼ相当するものであり、また、明確なテストを導入した点で、複文の認定と分類に構造的な基準を導入したのものとして大きな意義をもつ。三上の導入した、陳述度による複文の分類は、その後、南(1974)の従属節の階層構造として発展する。

### 1. 3 渡辺 (1971)

渡辺実(1971)は、橋本文法や山田文法、松下(1930)を照らしながら、接続を「独立性」という、三上の「陳述度」に近い概念によって分類した。そこでは接続は並列の下位分類であり、独立性の低い連用から陳述を備えた文に相当するものまで連続的であることが示されている。

中でも、独立性の基準として「は」を含むかどうか、語順の倒置の可否などのテスト方法が示されており、また、「ので」と「のに」のような「順態条件」と「逆態条件」の独立性の違いにも言及するなど、明確な構造記述と詳細な意味を具えたものとなっている。ここでは接続は大きく「時間的接続」と「論理的接続」に分類され、「論理的接続」はさらに「条件接続」(仮定・一般・確定—「ば」「と」「から」等)と「単純接続」(「し」と)に分類され、条件節の基本的な分類が示されている。

以上のように、複文の研究においてこれまで中心的に議論され発展してきた1つの方向は、三上(1953)の「陳述度」、あるいは渡辺(1971)の「独立性」と呼ばれる、文の独立度に関する概念であり、複文全体を統一的に説明する構造面を中心とした方向であった。

## 2. 主従的關係の下位分類

### 2. 1 連用と連体

もう1つの研究の方向は、上述のような文の独立度に関わる研究とは異なり、従属節の形式相互の異同や、個々の形式の意味・用法に重きを置くものであり、前田直子(2009)において「意味的な分類」と呼ばれているものに相当する。代表的なものに、鈴木重幸(1972)、寺村秀夫(1981)、仁田義雄(1987)、益岡隆志・田窪行則(1992)、高橋太郎ほか(2003)、前田(2009)がある。

これらの分類は、文の独立度といった従来の議論にも留意しながら、分析の中心を主従的關係の下位分類に移している点が特徴である。たとえば、鈴木(1972)は、「文」(述語文)を2つ以上結び付けて1つの文にしたものを「あわせ文(複合文)」と呼び、「あわせ文」をさらに「ならべあわせ文(並列的關係)」「したがえあわせ文(主従的關係)」に分け、それぞれの下位分類を行っている。

複文の主従關係の下位分類に際していずれの研究も採用しているのは、連体と連用という大きな分類を基本とすることと、連用節の中では条件節と原因・理由節が代表的なものとされているということである。

まず、連用と連体については、寺村(1981)や益岡・田窪(1992)が「補足節」、「連用節」、「連体節」というほぼ3つに下位分類を行っているのに対し、前田(2009)は「補足節」を「連体節」に含め、「連体節」と「連用節」の2つに分け、連体節の下位に補足節と名詞修飾節を位置付けている。

仁田(1987)は、従属節を「連体修飾節」、「埋め込み成分節」「接続節」に分類し、さらに「埋め込み成分節」を「埋め込み成分節」(「の/こと」節)、「付加的修飾成分節」(様態

<sup>1</sup>正確には、南不二男(1964)においてすでに階層構造の概念は提出されているが、多くの論文が南(1974)を議論の出発点としているので、ここではそれに従う。

「ように」節)、「時の状況成分節」(「…瞬間」等)に分けており、「埋め込み成分節」という、連用と連体の境界的な部分を取り出している点が特徴的である。

## 2. 2 連用節における条件節の位置付け

複文の主従関係の下位分類に注目した研究のもう 1 つの特徴として、連用節のなかで条件節と原因・理由節が盛んに研究されてきたということがある。

高橋ほか(2003)は「補足節」、「連用節」、「連体節」に「修飾語節」(「…ほど」)も加え、さらに「条件節」と「譲歩節」を取り出し、主従的関係の大きな下位分類として重視している点が特徴的である。この点は連用節を「論理文」と「状況文」に分けた前田(2009)とも共通するところがある。

また、仁田(1987)は「接続節」を「並列接続節」と「従属接続節」に分け、「並列接続節」を「接続節」の典型的なタイプとし、「従属接続節」の代表的なものとして「条件づけを表す従属節」を挙げている。

連用節のうち、条件文と原因・理由文を「論理文」というカテゴリーに統一する見方は小泉保(1987)に見られ、有田節子(2006a)も条件文と原因・理由文はいずれも「暗黙の前提が成立する場合の言語表現」として捉えている。

以上のような、主従関係の下位分類を主眼とする研究の長所は、個々の形式の用法と相互の異同に関する詳細な記述がなされていることによる、説明力と実用性の高さであると考えられる。

## 3. 従属節の階層構造

### 3. 1 南(1974)

三上(1953)が導入した「陳述度」の基準は、その後、南(1974)による従属節の階層構造という概念に発展した。三上の「陳述度」や渡辺の「独立性」という概念は、南(1974)の「従属句」の分類として以下のように展開されている。

(1) 南(1974)の従属句の分類(例文はすべて南による。説明文及び例文の表記は筆者が一部直した)。

#### 【Aの類】

～ナガラ(継続)。～テの形の中のあるもの(例：手をつないで歩く)。～ツツの形の中のあるもの(例：船は汽笛を鳴らしつつ岸壁を離れた)。動詞の連用形を重ねたもの(例：酒をのみのみ考えた)。形容詞・形容動詞の連用形で終るものうちのあるもの(足音も高く出て行った)。

#### 【Bの類】

～ノデ、～タラ、～テモ、～ト、～ナラ、～ノニ、～バの形のもの。～テの形で理由・原因を表すもの、継起的または並列的な動作・状態を表すもの(例：戸をボタンと閉めて出て行ってしまった)。～ナガラ(逆接)。～ズニ、～ナイデ。～ハ(対比)。

#### 【Cの類】

～ガ、～カラ、～ケレド(ケレドも、ケドモ、ケド)、～シ、～テの形のものや連用形で終るものうちあるもの(例：たぶんA社は今秋新機種を発表する予定でありまして、B社も当然なんらかの対応策をとるものと思われます)。

これらの分類の基準となるのは、「従属句」の内部にどのような要素が現れるかという観点と、従属句は同じ類かそれ以下の類の句のみ含むことができるという観点である。

1つ目の基準は、たとえば、Aの類「ながら」では「\*お茶を飲んだながら話す」とは言えないので、Aの類にはテンスは現れないが、B・Cの類では現れるということである。

2つ目の基準は、たとえば、「手をつないで歩きながら、歌を歌いました」ではAの類「ながら」の句が同じくAの類「て」(同時動作)の句を包含していると解釈できるが、「危ないところへさしかかったら、手をつないで歩きなさい」では、Aの類「て」はBの類「た

ら」を含むことはできず、命令の内容は「手をつないで歩く」ことのみと解釈される。こうした分類の明確なテスト・フレームもその後の議論に受け継がれていく。

### 3. 2 田窪 (1987)

田窪 (1987) はこの分類を修正し、統語構造を文脈情報と関連付けて発展させた。

(2) 田窪 (1987) による階層的統語表示と対応する接続助詞

【階層的統語表示】

A類 1=様態・頻度の副詞+動詞

A類 2=頻度の副詞+対象主格<sup>2</sup>+動詞 (+否定)

B類 =制限的修飾句+動作主格+A+(否定)+時制

C類 =非制限的修飾句+主題+B類+モーダル

D類 =呼掛け+C類+終助詞

【それぞれの類の接続助詞】

A類一て(様態)、ながら(同時動作)、つつ、ために(目的)、まま、ように(目的)……

B類一て(理由、時間)、れば、たら、から(行動の理由)、ために(理由)、ので(?)<sup>3</sup>、ように(比況)……

C類一から(判断の根拠)、ので、が、けれど、し、て(並列)……

D類一と(引用)、という……

田窪による修正点は、まず、南(1974)でA類とされていた階層をA類1「動作の命名」とA類2「過程・状態」に分けたこと、「やはり」のような文副詞をB類からC類に位置付けたこと、理由を表す「から」「ので」はB類とC類の2種類の用法をもっていることを指摘したことである。とくに、統語構造が焦点構造と関係しているという指摘は、従来の構造的な研究が意味や情報構造とも関連付けられることを示したものである。また、名詞節と主題に関しても階層構造に位置付けられることを示し、英語との共通点<sup>4</sup>も指摘している。

### 3. 3 野田 (2003)

野田尚史(2003)は、上述のような複文に関する研究の流れを統合し、新たに主文述語の階層構造という観点を取り入れ、従属節そのものに研究の比重が置かれていた従来の研究を進展させ、従属節と主文との関わりや、従属節だけでなく主文の階層構造という観点を取り入れた。野田は複文を構成する節を3つの観点—主文に対する機能、主文の述語の階層構造、節の内部構造—から分類する。

まず、主文に対する機能から、複文を構成する節を連用節、名詞節、連体節に分け、次に、連用節が主文述語のどの階層と呼応するかという観点から以下のように分類する。

【表1：主文述語の階層構造からみた節の種類】(野田尚史, 2003, p.13)

節の種類	節の例
語幹階層節 (ヴォイス階層成分)	早く逃げろと叫んだ。 喜んで資金の援助をした。
アスペクト階層節	テレビを見ながらごはんを食べている。
肯定否定階層節	よく見ずに買った。
テンス階層節	ぼくは生まれたとき、体重が少なかった。
対事的ムード階層節	安いので買った。
対他的ムード階層節	環境はいいけれど、不便です。

<sup>2</sup> 「対象主格」は非意志的な動作・過程の主体で、意志的動作の主体である「動作主格」と区別される。例「氷が解けるように冷蔵庫の外に出しておいた」の「氷が」に当たる。(田窪, 1987)

<sup>3</sup> 「ので」のB類の用法は「から」ほど明確ではない。

<sup>4</sup> 英語では主格名詞は定形節(時制のある節)にしか現れず、不定詞や動名詞の主語はPRO(統制指示的代名詞)が来るか、forを付れたり、所有格でマークする必要がある(田窪, 1987)。

なお、野田の提示する述語の内部構造は以下の通りである。

(3) 野田尚史 (2003) (55)

述語の語幹	ヴォイス	アスペクト	肯定否定	テンス	対事的モード <sup>5</sup>	対他的モード
閉め	られ	てい	なかつ	た	ようだ	ね

たとえば、表1の「テンス階層節」の例として「とき」節について見てみると、「ぼくは生まれたとき、体重が少なかった」とは言えるが、「\*ぼくは生まれたとき、体重が少ない」とは言えないので、主文の述語のテンスと呼応しており<sup>6</sup>、「テンス階層節」に位置付けられる。同様に、「ので」節は「?安いので買おう」とは言いにくく、意志という対事的モードと呼応する。「けれど」節は「\*環境はいいけれど、不便ですか?」とは言えず、疑問という対他的モードと呼応する。

このような観点は、述語の内部のもつ階層構造に連用成分がどう関わるかという意味・構造的関係を捉えたもので、かつて野田尚史 (1984) が指摘した、副詞の分類と共通する文構造の捉え方である。連用成分である副詞が文の中のどの部分と対応するかという観点からの分類は、連用節の分類にも関係がある。以下の表は、野田 (1984) の (2) と (6) を筆者がまとめたものである。表の上ほど階層構造の外側に位置付けられる。

【表2：副詞の種類と述語付加要素の対応関係】(野田尚史, 1984, p. 80-81 を筆者がまとめた)

副詞の種類	述語付加要素	格成分	例
陳述の副詞	モードの要素	他動詞主語 他動詞目的語, 自動詞主語	たぶん、あいにく、要するに
時点の副詞	テンスの要素		来年、昔、2, 3日前
時相の副詞	アスペクトの要素		もう、ときどき、だんだん
能動者の副詞	ヴォイスの要素		わざと、楽しそうに、大声で
対象物の副詞			ガタガタ、きれいに、まるまると

この表のように、連用成分である副詞は述語の内部構造と対応し、副詞相互の階層構造をもつことから、連用節も主文述語の内部構造と対応していると考えられる。

最後に、節の内部構造という観点からの分類は、以下のようにまとめられている。

【表3：節の内部構造からみた節の種類】(野田尚史, 2003, p. 15)

節の内部に現れる要素		ヴォイス	アスペクト	肯定否定	テンス	対事的モード	対他的モード
節の種類		(ら)れる	ている	ない	た	だろう	ね
(節ではない)	喜んで	×	×	×	×	×	×
ヴォイス分化節	～ながら (同時)	○	×	×	×	×	×
アスペクト分化節	～ずに	○	○	×	×	×	×
肯定否定分化節	～とき	○	○	○	△	×	×
テンス分化節	～ので	○	○	○	○	×	×
対事的モード分化節	～けれど	○	○	○	○	○	×
対他的モード分化節	～と (発言引用)	○	○	○	○	○	○

上の表で、たとえば、ヴォイス分化節「ながら」(同時動作を表す)は、内部にヴォイスの「(ら)れる」は現れる(例「怒られながら」)ので○、アスペクトの「ている」やテン

<sup>5</sup> 「モード」という用語は階層構造に関する議論では、野田尚史 (2003) の節を用いているのでこの章でもこの用語を用いるが、本研究全体では「モダリティ」を用いている。

<sup>6</sup> ここでの「呼応」という表現は野田 (2003) によるもので、反応に近い意味であるため共起しない場合を「呼応する」としている。

スの「た」は現れない（「\*怒られていながら」は逆接の「ながら」なら可能だが、同時動作の「ながら」はできない。「\*怒られたながら」のように過去も表せない）ので×になる。

「とき」節でテンスとの交点が△となっているのは、「とき」節の内部に現れる「た」という要素は、「困ったときは相談してくれ」のように、発話時を基準とした過去を表すわけではなく、「とき」節はテンスより外側の要素の分化・対立はもたないためである。

表1と表3を合わせたものが、次の表4である。

【表4：階層からみた節と内部構造からみた節の相関関係】（野田尚史，2003，p.16）

節の例	階層からみた節	内部構造からみた節	南の分類
～ながら	アスペクト階層節	ヴォイス分化節	A類
～ずに	肯定否定階層節	アスペクト分化節	B類
～とき	テンス階層節	肯定否定分化節	B類
～ので	対事的ムード階層節	テンス分化節	B類
～けれど	対他のムード階層節	対事的ムード分化節	C類

野田の分類は、連用節が主文述語のどの層に呼応するかという新たな観点を取り入れ、従来のB類を3種に分け、従属節の階層構造をより精密化したものである。また、連用節と主文述語の呼応関係という観点は、副詞と主文述語の呼応関係の延長として捉えることが可能であり、複文と単文を連続的に捉えるという連続性を強調した複文の規定からも、合理的な分類基準であると思われる。

#### 4. まとめ

以上、ここでは複文に関する先行研究を、従属の認定と陳述性、主従的關係の下位分類、従属節の階層構造という3つの観点から概観した。

まず、従属の認定と陳述性に関しては、松下（1930）による西洋文法の批判に始まる文の認定に関する立場、それに続く三上（1953）と渡辺（1971）の陳述度あるいは独立性に関わる立場を概観し、節の独立度を決定するための構文的な方法についての議論を見た。

次に、従属節の個々の形式の意味・用法に重きを置く、主従的關係の下位分類についての先行研究を概観し、代表的なものとして、鈴木（1972）、寺村（1981）、仁田（1987）、益岡・田窪（1992）、高橋ほか（2003）、前田（2009）による分類を挙げた。これらの分類に共通する特徴は、連体と連用という大きな分類を基本とすることと、連用節の中では条件節と原因・理由節が代表的なものとしてされていることである。

最後に、従属節の階層構造をめぐる議論は、南（1974）、田窪（1987）、野田尚史（2003）に至る過程において、文脈情報との関係や主文との呼応関係などの観点が加えられ、発展していることを見た。

従属節の階層構造という観点は、日本語研究において重要な構造的説明の1つであるとともに、序章でも指摘したように、言語普遍的な概念でもあるが、これまで論じられてきた議論のほとんどが動きを表す文と連用節を中心に扱っており、状態や属性を表す文に現れる従属節の階層構造が問題にされることはほとんどなかったと言ってもよい。

## 第2章 文の類型に関する先行研究

1. 発話機能による類型
2. 演述の分類
  2. 1 佐久間 (1941) から益岡 (1987) まで
  2. 2 奥田 (1988a) から仁田 (2012) まで
  2. 3 影山 (2008)
3. まとめ

### 1. 発話機能による類型

序章で挙げた (1) の例に戻ると、学習者にとっての従属節の選択は、連用だけでなく連体も含めた広い範囲での選択であった。すなわち、日本語学習者が連用節の形式を選択する際は、連用節相互の相違だけでなく、「の/こと」+「は」のような名詞節と連用節の相違も問題になってくるため、名詞節と連用節を共に扱う説明が必要になってくる。

従来の階層構造という考え方は、動詞述語文のような事象を述べる文を中心に議論が進んできており、状態や属性を述べる文については、益岡 (2008) まであまり議論されていなかった。ただし、南 (1974) と田窪 (1987) はいずれも、名詞+「は」という主題をC類に入る要素としており、田窪 (1987) は名詞節についても2つのレベルに分類している。

そこで、階層構造という有益な観点を活かしつつ、従属節全体を視野に入れた観点からの位置付けを行うには、連用節以外の従属節をも含めて説明できるような理論が必要であると考えられるが、その1つとして本研究で取り上げるのが文の類型という考え方である。

文の類型、あるいは文のタイプと言え、英文法等における「平叙文」「疑問文」「感嘆文」「疑問文」などに文を分ける考え方が広く知られている。日本語研究においては、佐久間鼎 (1941) が Bühler の言語機能論を応用し、「発話機能」<sup>7</sup>について論じ (山岡政紀, 1999)、Bühler の提出した「言語の3機能」にそれぞれ「表出」(感じたことが自然に現れる)、「うったへ」(話し相手に対する態度を表す)、「演述」(叙事。見聞した物事の様子やそれについての考えを述べる) という訳を付けた。

この発話機能という考え方は、山岡 (1999) によれば、仁田義雄 (1979) (1985) のモダリティ研究や Searle の「発話行為論 (speech act theory)」にも影響を与えているという。

【表1】発話機能論と日本語モダリティ論と発話行為論の対応関係 (山岡, 1999, p.137)

発話機能論		日本語モダリティ論		発話行為論
Bühler 1934	佐久間 1941	仁田 1979, 1985		Searle 1979
Ausdruck	表出	表出型	～タイ, ～ヨウ	expressives
Appell	うったへ	訴え型	～シロ, ～スルナ	directives
Darstellung	演述	演述型	状況描写文, 判断文	assertives
				declarations
				commissives

表1に見られるような発話機能に基づく文の類型は、話し手の主観であるモダリティに基づく意味による類型とも言える。他にも、このような観点からの文の類型を行っているものとして、奥田靖雄 (1996) の「平叙文 (ものがたり文)」「命令文 (はたらきかけ文)」「希求文 (まちのぞみ文)」「疑問文 (といかけ文)」が挙げられる。発話機能という観点は個別

<sup>7</sup> 発話機能は山岡 (1999) において「人間が生きる営みの中で言語を用いて何かの行為を行おうとするときに、その目的達成のために、言語活動の素材である個々の文に対して話者が託す機能」と定義されている。

言語の枠を越えた普遍的なものであり、文の種類という観点が普遍的なものであることを示している。

## 2. 演述の分類

### 2. 1 佐久間 (1941) から益岡 (1987) まで

Bühler の提出した「演述」は、さらにいくつかの文のタイプに分類することができる。佐久間鼎 (1941) は演述の機能をもつ文を「いひたて文」とし、これを「物がたり文」(事件の成り行きを述べる) と「品さだめ文」(物事の性質、状態や判断を表す) に分け、さらに、品さだめ文を「性状の表現」と「判断の表現」に分けた。また、「物がたり文」には「時所的限定」が必要だと述べ、後に文の種類の中心的概念となる時間的な限定性について、すでに言及している。

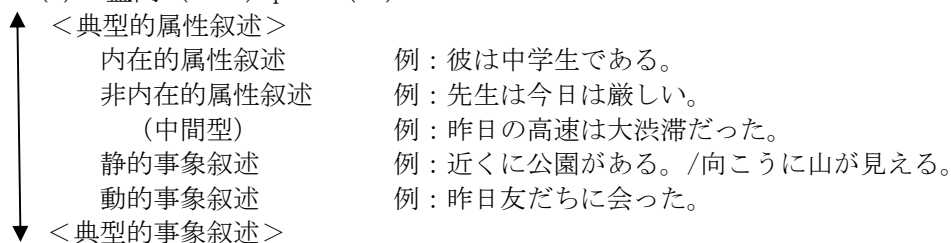
三上 (1953) は佐久間の「いひたて文」を、形式を重視して再定義し、「動詞文」と「名詞文」に分け、さらに名詞文を「形容詞文」「準詞文」に下位分類した。また、動詞文は事象の経過 (process) を、名詞文は事象の性質 (quality) を表すとし、この分類が多くの言語に普遍的に見られるものであろうと述べている。

寺村 (1982) も、「コト」(命題) の類型として、「動的事象の描写」と「性状規定」「判断措定」に分け、その中間に「感情の表現」と「存在の表現」を位置付けている。

益岡 (1987) は基本的には佐久間、三上の分類方針を受け継ぎ、さらに詳しい規定と考察を進めている。まず、命題により表される「叙述<sup>8</sup>」の類型として「属性叙述 (property predication)」(対象の属性を叙述する) と「事象叙述 (event predication)」(現実世界の或る時空間に実現・存在する事象を叙述する) に分ける。「叙述 (predication)」とは「現実世界を対象として表現者がおこなう概念化」、「命題 (proposition)」は叙述を表現する形式である (益岡, 1987)。前者は後者より機能的な概念であると考えられる。

属性叙述命題の構造の特徴は「主語・述語句構造」であり、主語と述語句が相互依存的な関係にあるのに対し、事象叙述命題の構造の特徴は「述語・補足語構造」であり、述語中心の構造である。益岡 (1987) はさらに、「属性叙述」と「事象叙述」を連続体として捉え、その典型から中間のものまでを (1) のように位置付けている (例文は筆者による)。

(1) 益岡 (1987) p. 35 (37)



益岡 (1987) (2000) は、こうした連続体上の分類の基準として、時間的・空間的な限定の有無を挙げている。(1) の「(中間型)」は特定の時間的・空間的な限定のある文であり、その上の「非内在的 (可變的) 属性叙述」は時間的な限定のみがあり、その上の、属性叙述の典型である「内在的属性叙述」は時間的・空間的な限定がない。一方、動的事象叙述の典型である「動的事象叙述」は時間的・空間的な限定のある命題で、存在動詞は静的事象とされる。

さらに益岡 (1991) (2004) は、主題の問題を叙述の種類から捉え、日本語の事象叙述文に有題文が多いのは、属性叙述文の「主題—解説」という文構成が事象叙述文の文構成にも投影されているためであると述べ、主題と叙述の種類との関わりも指摘している。

<sup>8</sup> 「叙述」とは「現実世界を対象として表現者がおこなう概念化」であり、「命題」は叙述を表現する形式である (益岡, 1987)。

益岡の一連の研究に至って、文の類型は「叙述」という機能的な範囲に拡大されたことにより、述語の品詞や意味というより文の意味解釈であるという考えが示され、また、主題という概念との関連も考察が可能になったと言えるだろう。

## 2.2 奥田 (1988a) から仁田 (2012) まで

序章で述べたように、欧米の言語研究における文の類型という概念に近い研究には、名詞句の解釈に関わる研究と、述語の時間的な限定性に関わる研究という2つの流れがある。

文の類型の基準を考える際、時間的・空間的な限定、とくに時間的な限定の有無が重要となる。それは、時間的な限定の有無が、動きや状態をどう規定するかに関わってくるためである。日本語研究における文の類型をめぐる議論の1つは、この時間的な限定が述語にどう現れるかという観点からのものである。

奥田 (1988a) による状態の規定を受け、これをさらに発展させた工藤真由美 (2002) (2012) は、コミュニケーション活動において知覚・体験できる一時的現象と、思考により一般化された恒常の特徴との違いを「時間的限定性 (temporal localization)」と呼び、これに動的な時間的展開性を加え、「運動」「状態」「特性」を区別した。

【表2：工藤，2012，(p. 156)】

	時間的限定性	動的な時間的展開性
運動 (動作・変化)	+	+
状態	+	-
特性	-	-

工藤 (2002) (2012) は Givón, Talmy (1984) の「時間的安定性 (temporal stability)」のスケールを参考にしながら、その上に「運動」から「質」までを位置付けている。工藤は時間的限定性が述語のムード・アスペクト・テンスのありようを規定するとともに、主語における「は」と「が」の使い分けも規定していると述べ、以下のようなスケールにまとめている。

(2) 工藤 (2002) (2012)

	時間的限定性有		時間的限定性無	
	<運動>	<状態>	<特性>	<質>
	<動詞>	<形容詞>		<名詞>
	←		→	
【述語】	ムード	知覚・体験 (描写)	判断 (思考による一般化)	
	テンス	○ ○	△ △/×	△/×
	アスペクト	○ △/×	×	×
【主語】		ガ/ハ		ハ

仁田 (2012) は、文の意味的類型として「動き」「状態」「属性」を挙げ、「動き」と「状態」を「事態 (出来事)」として「時間的限定性」により「属性」から区別し、さらに「動き」と「状態」を「時間的展開性」により区別する。この点では表2の工藤 (2012) による分類と似ているが、「時間的展開性」の認定に、事態の発生・終焉の端緒が取り出せるか否か (「(し) はじめる/だす」「(し) てくる」などのアクチオンスアルト<sup>9</sup>の形式を取り得るか否か) という統語的証左を導入することにより、「状態」をより明確化した。これにより、

<sup>9</sup> アクチオンスアルト (aktionsart) はアクチオンザルトとも言われ、アスペクト特性と訳されることもある。アスペクトの形式として「スル/ (シ) テイル」という動きと状態を表す基本的な対立があるが、これを言語的に表す形式を狭義アスペクト形式、その文法的なカテゴリーを狭義アスペクトと呼ぶ。一方、始まり、終わりなどの局面はアクチオンスアルト (アクチオンザルト) と言われる。(参考：森山卓郎，1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院)



「戸が開いている」のような持続相は「戸が開き始める」のように動きが発生を取り出すことができるため「動き」に分類されるほか、生理動詞（「痛む」「ぞくぞくする」等）・心理動詞（「悩む」「いらいらする」）も動きに分類されている。後述するが、「状態」に関する意味的特徴の明確化は、複数事態の述語の中に心理動詞が多く含まれることから、本稿にとって重要である。それぞれの類型に属する例文は、次の通りである。例文は仁田（2012）より引用した。

(3) 【動き】

- a. あっ、男が手紙を破く。/さっき男が手紙を破いた。/男が部屋で本を読んでいる。(主体運動)
- b. ここの桜は4月の初めには開花するでしょう。/あそこの桜も4月の初めには開花したでしょう。/あれ、戸が開いている。(主体変化)
- c. あっ、手が震える。/あっ、手が震えた。
- d. もうすぐお湯が沸く。/今しがたお湯が沸いた。

(4) 【状態】

- a. 今この部屋に人がたくさんいる。/先ほどまでこの部屋に人がたくさんいた。
- b. 今も彼は少し熱がある。/先ほど彼は少し熱があった。
- c. このところなんだか寂しい。/最近なんだか寂しかった。
- d. 海は荒れ模様です。/その時海は荒れ模様でした。

(5) 【属性】

- a. あの崖は切り立っている。
- b. A先生はとても厳しい。
- c. 彼は北海道生まれだ。
- d. くじらは哺乳類だ。

### 2.3 影山 (2008)

益岡による事象叙述と属性叙述に関する議論を英語における研究と関連させ、さらに進めたのが、影山 (2008) (2009) である。事象叙述と属性叙述という区別に対し、影山 (2009) では、Carlson, Gregory (1980) による「一時的状態を表す述語/恒常的属性を表す述語 (stage level predicates /individual-level predicates)」の区別を表3のように示している。

【表3：叙述のタイプ】(影山, 2009)

事象叙述		属性叙述
出来事	(一時的) 状態	(恒常的) 属性
events	stage-level states	individual-level states

影山 (2008) は属性叙述をさらに「準属性」と属性に分け、純然たる属性が語彙的に指定された性質であるのに対し、準属性は事象叙述の「事象項」を統語的または形態的手段で抑制 (不活性化) することで派生的に生じることを主張した。

「事象項 (event variable/event argument)」は、形式意味論において Davidson, Donald (1967) が提案したもので、「出来事のための座 (event place)」とも言われる。行為を表す動詞は非明示的な「出来事のための座」をもっている。たとえば、「蹴る」は通常二項述語と考えられるが、「出来事のための座」を加えた三項述語と考える。

「出来事のための座」または「事象項」は、文を出来事と恒常的状态に二分する概念であるが、影山 (2008) はその中間に不活性の事象項というものを仮定し、時間副詞がないときは固定的な属性を示すが、時間副詞が付くと不活性の事象項が活性化され、事象叙述の意味が顕現すると述べている。

【表 4：叙述のタイプ】（影山，2008，p. 27）

叙述のタイプ	事象叙述 開始・終了の時間を明示できる		属性叙述 開始・終了の時間を明確にできない	
	出来事	状態	準属性	(内在的) 属性
例示	彼は 2003 年に大学を卒業した。 彼女は 5 年間その会社で働いた。	彼は 1997 年から 2005 年まで学生/高校教師/弁護士だった。 彼は、学生/高校教師/弁護士をしていた。 彼は病気だ/裸足だ。	彼は（ふだんは）愛想がよい。 彼は（ふだんは）善人だが… うちの息子はよい子です。	彼は（*ふだんは）長身だ。 彼は天然ボケだ。 ゾウは鼻が長い。
事象項	e (event)	e (state)	e <sup>10</sup>	p (property)
「一化」 接尾辞	付かない *卒業化 *労働化	基本的に付かない *身重化/*病気化 *息子が大学を卒業して弁護士化した。	付かない *早起き化 *ふとんがフカフカ化した。 *善人化	付く 近頃の高校生は長身化/幼児化している。 アルコールが気化した。

上の表で、まず、「事象叙述」と「属性叙述」は、一時点あるいは開始時・終了時を明示できるものが事象叙述、できないものが属性叙述となる。次に、属性叙述のうち、「ふだんは」という副詞が付くものが「準属性 (quasi-property)」、付かないものが「(内在的) 属性 ((intrinsic) property)」となる。また、「一化」という接尾辞は当該の名詞の内在的な属性が変化することを示すため、属性叙述の中でも内在的属性的の場合にしか付かない。

こうした時間的な限定による可変性の有無という準属性という領域の提案により、属性の記述がより精密化されたと言える。ただ、ここでもやはり状態をどう規定するかが問題になる。影山の「開始・終了の時間を明示できる」というのは、上述の工藤 (2012)、仁田 (2012) の「時間的限定性」の統語的証左ではあるが、仁田 (2012) の「時間的展開性」の有無とは異なっており、動きと状態の境界をどう規定するか、特に開始・終了の時間を明示しにくい心理動詞や状態形容詞をどう扱うのかという疑問も残る。

### 3. まとめ

日本語研究においては、佐久間 (1941) 以来、発話機能という普遍的な概念を用いた文の類型に関する研究が積み重ねられて現在に至っている。その議論の流れの中で終始一貫して問題となってきたのは、時間的な限定に関する考え方である。それは、動きや状態をどう規定するかということに関わる。動きと属性という二極を設定することでどの先行研究も一致しているが、その間に位置する状態の位置付けについては議論の分かれるところである。

一方、英語の研究においても、序章で挙げたような形式意味論における議論、動詞の分類、品詞の連続性、名詞句の総称性など、文の類型に関係する議論は多く存在するが、ここでは日本語研究に主に関わるもののみを適宜引用するにとどめた。文の類型あるいは叙述の類型という概念は、言語類型論的な立場からも共通して議論することが可能な点を多く含んでいる。たとえば、文の恒常性を解釈する場合、定・不定冠詞をもつ言語では名詞句の意味解釈が問題になり、日本語は主題を示す「は」の付加や述語のあり方が問題になるといった違いは存在するが、文の個別性や一般性、時間的限定性といった観点は、どの言語においても文を大きく分ける普遍的な基準であると言えるだろう。

最後に、ここまでの研究の流れから、単文レベルでの多くの成果の次に必要なのは、複文レベルの文型をどう捉えるのかということで、これについてはまだ十分議論されていないということが言えそうである。

<sup>10</sup>  $\wedge$  は抑制 (不活性) を表す (影山, 2008)

## 第3章 学習者の母語を考慮した研究

1. 学習者の母語を考慮した研究の必要性
2. 学習者コーパスと対訳コーパス
  2. 1 学習者コーパス
  2. 2 対訳コーパス
3. 複文に関する中国語母語話者の誤用分析と日中対照研究
  3. 1 日本語教育における誤用分析
  3. 2 時間節と条件節に関する日中対照研究
  3. 3 条件節に関する日中対照研究
  3. 4 「の/こと」節と条件節・中止節に関する調査
4. まとめ

### 1. 学習者の母語を考慮した研究の必要性

日本語教育文法における学習者の母語を考慮した必要性については、井上優（2005）が具体例を挙げながら以下の2点を主張している。

- (1) a. 学習者の母語を問わない一律の文法は、学習者のための文法ではない。少ない労力で大きな成果が得られ、学習者にわかりやすい日本語教育文法を考えるためには、学習者の母語を基準にして日本語の文法を考える必要がある。
- b. 母語別の日本語教育文法は、「言語の対照研究の成果を日本語教育に生かす」という観点からではなく、「学習目的の実現のために学習者の母語をどう考慮するか」という観点から考えるべきである。（井上, 2005, p. 101）

井上のこうした主張は、現在も用いられている多くの日本語教科書における文法項目が学習者の母語を考慮しておらず非効率的になっていることや、本来その文法項目が何のためのものなのかという根本的な疑問を投げかけている。

また、日本語教育における誤用分析、母語転移、対照研究の進展については、張麟声（2011）が総括的な議論と提言を行っている。それによれば、1970年代に文化庁の主導で国立国語研究所において対照言語学研究が始まり、1990年には学会誌『日本語教育』において「日本語教育のための対照研究」という特集が組まれるなど、徐々にではあるが日本語教育研究においても対照研究が議論されるようになった。2000年代に入ると第二言語習得研究の流れの中で誤用分析という用語は母語転移へと変化し、現在では日本語学習者の文法に関する習得研究において学習者の母語を考慮した研究も進められつつある。

こうした研究の流れを踏まえ、張は習得・対照・類義表現の三位一体の研究を提唱し、学習者の誤用に転移の痕跡を見つけていくという母語転移研究の大半が取っている手続きを批判し、習得のプロセスにおいて母語の知識がどのように活用され得るかを検討し、それに対する方策を考えることを提案している。張の指摘するように、学習者の母語を考慮した研究において最も困難なのは、習得のプロセスを視野に入れるということである。習得のプロセスを考慮した研究では作文教育などですでに多くの教室活動の試みもあるが、今後まだ発展の余地の大きい分野である。

いずれにせよ、学習者の母語を考慮した研究の進展は今後の日本語教育における文法記述の進展には不可欠であると考えられる。とくに海外の日本語教育においては、効率的な言語教育のために、初級から上級までどのレベルの教授過程においても学習者の母語との対照の必要性が高いことは、海外で日本語を教えた経験のある者なら誰も痛感するところである。

本研究もこうした日本語教育に有益な文法を志向してはいるが、学習者がなぜ間違えたのかという誤用の要因の追求が目的というわけではない。学習者の母語を考慮した記述を行うことで、これまで見えてこなかった日本語の側面が明らかになることを最終的な目標

としており、いわば学習者の母語を考慮した日本語文法研究という立場を取っている。

本研究はまた、日本語研究における記述文法の方法を用いているが、帰納的な考察の過程において、日本語の実例のみならず、対訳付き学習者コーパスなど他言語、とくに中国語の観点を取り入れた考察を行っている。

では、学習者の母語を考慮した日本語文法研究においては、現在具体的にどのような研究のデータが考えられるだろうか。ここでは本研究に関連する、学習者コーパスと対訳コーパスの問題、そして、複文に関する日中対照研究について、時間節と条件節に焦点を絞って述べたいと思う。

## 2. 学習者コーパスと対訳コーパス

### 2. 1 学習者コーパス

日本語コーパスは英語コーパスに比べ、まだ数量や使用の歴史は不足しているものの、近年は国立国語研究所による大規模コーパス『現代日本語書き言葉均衡コーパス』や、インタビューデータである KY コーパス等が構築、公開されており、コーパスの種類や数、そしてそれを使用した語学研究や習得研究も急増している。

日本語コーパスのうち、日本語学習者の日本語作文やインタビュー等、アウトプットのデータを集めた「学習者コーパス (learner corpus)」は、1990 年代から注目されるようになった。学習者コーパスは、宇佐美洋 (2006) が指摘するように、数量的に信頼性の高い分析を可能にするとともに、研究者や教育者の主観的経験から得られる知見とは異なった知見を提供できるという意義をもっており、多方面での利用が期待される。

日本語の学習者コーパスは、データの種類から見て、まず話し言葉を対象としたものと書き言葉を対象としたものとに分けられる。上述の KY コーパスは ACTFL の Proficiency ガイドラインに基づいてレベル分けされた 90 名の学習者のインタビューデータであり、話し言葉の学習者コーパスとして活用されている。

本稿で扱うデータの 1 つである、『日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース (ver.2)』(以下作文対訳 DB と呼ぶ) (国立国語研究所, 2001) は、日本語の書き言葉の代表的な学習者コーパスとして、すでに言語研究や言語教育研究において活用されているが、宇佐美 (2006) によれば、それまでの学習者コーパスにはない 2 つの特徴をもっている。1 つは学習者本人による母語訳が付いていること、2 つ目は添削者による添削情報が付いていることである。これにより、学習者の母語と日本語との対照研究はもちろんのこと、習得研究における母語の干渉、さらには添削に関する研究など、様々な研究での利用が可能になっている。

### 2. 2 対訳コーパス

徐一平 (2007) はコーパス言語学の発展、さらに日本と中国における単一コーパスの構築について概観し、本研究でも用いている『中日対訳コーパス』(北京日本学研究中心, 2003) の意義について、二言語対訳あるいは多言語対訳の平行コーパスの重要性に関する観点から説明している。

それによれば、コーパス言語学は初期の先駆的なものから大型コーパスの時代を経て、現在は大規模化、情報付与の再加工・多様化、そして複数言語化の時代を迎えているという。日本語においても作文対訳 DB など学習者コーパスの構築も徐々に進み、また、1990 年代後半より、既成のコーパスや自家製コーパスを用いた研究も増え、中日対訳コーパスへの需要が高まっていたという。

二言語対訳の平行コーパスは、理論的にも実践的にも、言語学のみならず教育学や情報工学等多くの分野への貢献が期待されるが、第二言語習得など言語教育の分野での意義はとくに大きいと考えられる。

徐 (2007) は中日対訳コーパスを用いた研究として、中国語の「吧」と日本語の「だろ

う」の対照研究例、アスペクトに関する中日対照研究例などを挙げ、いずれもコーパスを用いることで得られた新たな知見を紹介し、コーパスが対照研究に果たす役割の大きさを示している。

### 3. 複文に関する中国語母語話者の誤用分析と日中対照研究

#### 3. 1 日本語教育における誤用分析

水谷信子(1997)によれば、日本語教育関係の作文に関する論文のうち、それまで大半を占めていたのが誤用分析の研究であったが、90年代当時教育活動における作文教育の位置付けや利用法を問うものが増えていたという。

現在では、中間言語研究の視点から、作文により学習者の文法修正能力や言語干渉を捉えるといったものも増えている。いずれの方向にせよ、学習者の産出した文は外国語教育の研究において非常に有益な資料となることは事実であるが、学習者の母語別の誤用に関する議論はまだ十分とは言えないのが現状である。

90年代の研究の中で、寺村(1990)、市川保子(1997)は、日本語学習者の母語話者別誤用を整理した資料であるが、このような資料は現在でも決して多いとは言えない。では、本稿で扱うような誤用は、従来の研究でどう扱われてきたのであろうか。

寺村(1988)は本稿で取り上げるような誤用を「文型にからむ誤用—連体修飾するか、文修飾<sup>11</sup>するか/並列な文にするか、文修飾するか—」と分類している。これにはたとえば以下のような例がある。

(2) 台湾は日本と同じような資源不足の国なのです。(寺村, 1988—例 613 台湾)

この例は「同じような」と「同じように」の違いを示している。本来「同じ」なのは「資源不足の国であること」であり、「同じように」とすると、連用修飾として文全体を修飾する。しかし、「同じような」とすると連体修飾として「同じような資源不足の国」までの修飾となり、「同じような資源不足」あるいは「同じような国」という誤った修飾になってしまう。

この種の誤用は中国語の「一样(同じ)」を日本語に訳す時にしばしば見られる。寺村(1988)はこのタイプの誤用について、「文型がらみのものは単語レベルでは解決しない。文のどの部分が先に結合するか、名詞句を連体修飾するか、それとも述部を連用修飾するか、各人の母語の干渉もあって、難しいのではないだろうか」と述べ、母語干渉についても指摘している。

また、中国語話者の誤用研究には、「て」形の誤用分析を通じ、因果関係の表し方を考察したものとして、吉田妙子(1994)がある。吉田は中国語学習者が接続の形として安易に「て」形を用いる傾向を明らかにし、最終的には「て」形の接続における因果関係の表され方にも及んでいる。

塩入(2002)は日本語と中国語の対照研究ではないが、中国語話者の誤用という視点から、日本語において「の/こと」節がどのような従属節とどのような条件下で意味的に近付いているのか、そしてどう使い分けがされるのかを考察した。詳細は第3部第9章4. 3. 1で説明している。

対照研究ではないが、田中寛(2004)は、日本語教育における知見を活かした複文研究として、連用と連体の境界線の問題にも言及している。田中(2004)については、第3部第9章4. 2. 2で詳しく述べたいと思う。

近年は日中対照研究も進み、指示詞、アスペクト、副詞、助詞など、各形式に関する対照研究も増えている。複文に関するものも多くあるが、ここでは主に時間節と条件節に関わる王崗(2001)(2003)と、条件節に関する李光赫(2011)を取り上げ、本研究の参考となる観点を指摘したい。

<sup>11</sup> 寺村(1988)の「文修飾」は本稿では連用修飾を指す。

### 3. 2 時間節と条件節に関する日中対照研究

王 (2003) は日本語の時間関係を表す「たら」と「とき」「てから」との間に見られる異同を、中国語の「时候 (とき)」、「以后 (あと)」との対応と関係付けて考察している。

まず、「たら」「とき」と「时候 (とき)」についての考察の結果は以下の通りである。

【表 1: 「たら」・「とき」・「时候 (とき)」についての考察の結果】

(王, 2003 p.144) (右端例文の番号は塩入による)

考察の範囲	項目	使用可否	“时候”との対応関係	例文
前後件に意図的時間関係がある場合	たら	困難	無	/ (3)
	とき	可能	有	
前後件動作が同時に発生する場合	たら	困難	無	/ (4)
	とき	可能	有	
前後件動作が前後的に発生する場合	たら	可能	無	/ (5)
	とき	困難	有	

それぞれの例文を見ると、まず、前件と後件<sup>12</sup>に意図的な時間関係がある場合、日本語で「たら」は用いず「とき」を用いる。中国語でも「时候 (とき)」が用いられる。

(3) a. アメリカへ行った時に、昔の友人の家に泊めてもらった。

(グループ・ジャマシイ編, 1998, p. 323—王, 2003— (5))

b. \*アメリカに行ったら、昔の友人の家に泊めてもらった。 (筆者による)

次に、前件と後件の動作が同時に発生する場合、日本語では「たら」より「とき」が用いられる。この場合中国語も「时候 (とき)」が用いられる。

(4) a. ……そのために彼が生れ落ちたときに、彼の運命は決定してしまっていたのである。 (巴<<家>>和訳本・上 p. 42—王, 2003, - (7), 下線は王)

b. Jiù yīnwèi zhège yuángù, zài tā chūshì de shíhòu, tā de mìng yùn biàn juéding le.

就因为这个缘故，在他出世的时候，他的命运便决定了。

(巴<<家>>原著 p. 36—王, 2003— (8), 漢字の例文及びその下線は王, 発音記号は筆者)

また、前件と後件の動作が時間的に前後して発生する場合、日本語の「とき」は前件と後件の動作の時間的間隔があまり長くない場合に限られる。この場合、中国語も「时候 (とき)」を用いることができる。

(5) 家を出たときに、忘れ物に気がついた。

(グループ・ジャマシイ編, 1998, 一王, 2003— (9))

一方、前件と後件の事態の生起する時間的間隔が比較的長い場合、たとえば、「薬を飲んだら熱が下がった」のような場合は「とき」は用いられない。この例の場合は中国語も「时候 (とき)」ではなく、専ら時間的前後関係を表す「以后 (あと)」が用いられるという。

次に、「たら」「てから」「以后 (あと)」についての考察の結果は以下の通りである。

【表 2: 「たら」「てから」「以后」についての考察の結果】

(王, 2003 p.144) (右端例文の番号は塩入による)

考察の範囲	項目	使用可否	“以后”との対応関係	例文
前後件が連続的動作を表す場合	たら	困難	無	/ (6)
	てから	可能	有	
前件事態発生「後」を強調する場合	たら	困難	無	/ (7)
	てから	可能	有 (“再”等表現必要)	
条件的表現が成立する場合	たら	可能	有	(8)
	てから	困難	無	

<sup>12</sup> 「前件」は従属節の事態、「後件」は主文の事態を指す。

それぞれの例文を見ると、まず、前件と後件が連続的な動作である場合、「てから」は現れるが、「たら」は現れにくく、中国語は「以后（あと）」を用いる。

- (6) a. 祖父は冷ややかに笑って、そのきびしい眼で、彼の顔をじろじろと眺めててから いった。 (巴<<家>>和訳本・上 p. 83—王, 2003, - (13), 下線も王)  
b. ?……彼の顔をじろじろと眺めたら、いった。 (筆者による)

次に、前件と後件の時間的前後関係を強調する場合、「てから」が用いられ、「たら」は現れにくい。中国語も「以后（あと）」を用いるが、ただし、「再」「才」などの副詞を共に用いて後の意味を強調する。

- (7) a. はっきりと調べててから結論を下す。  
b. Diàochá qīngchū yǐhòu zài xià jiélùn.

調査清楚以后再下结论。

(a 及び b の漢字例文は輿水優他 (2000)<sup>13</sup>を王 (2003) より引用、発音記号は筆者)

最後に、条件的な意味も含むような時間関係を表す場合、日本語では「たら」が用いられ、中国語は「以后（あと）」を用いる。

- (8) a. 这里的工程完成以后，我们还要到另一个工地去。

Zhèlì de gōngchéng wánchéng yǐhòu, wǒmen hái yào dào líng yí gè gōngdì qù.

- b. この工事が完成したら、私たちはまた別の工事現場へ行かなければならない。

(a 及び b の漢字例文は呂叔湘 (1992)<sup>14</sup>を王 (2003) より引用、発音記号は筆者)

王の考察は、日本語の時間節と条件節の錯綜する部分に焦点を当て、さらに中国語の時間表現と照らし合わせることにより日本語の時間節の特徴をも明らかにしており、本研究でもこれを参考としている。

ただ、王も指摘するように、「たら」が過去の事態に用いられるとき、中国語は「时候（とき）」を使える場合と使えない場合があり、「たら」と「时候（とき）」、または「たら」と「以后（あと）」の接点の問題になるという。

また、もう 1 つの問題は、日本語と中国語の従属節の対応関係を考える際、中国語では副詞の存在も影響が大きいことである。たとえば、次の翻訳でも「…时候才（…てやっと）」という、時間節に強調の副詞を加えた表現は、「夕方になってやっと」「夕方になったらやっと」のように「たら」節や「て」節を用いることが可能である。

- (9) a. Chén Èr nǎinai dài zhe “tóng ér”—— shí lái suì de yí wèi huáng liǎn dàhàn  
—— kuài dào zhǎng dēng de shíhou cái lái dào.

陈二奶奶带着“童儿”—— 十来岁的一位黄脸大汉 —— 快到掌灯的时候才来到。

(駱駝祥子④)

- b. 陳二は、黄色い顔をした四十がらみの大男の「侍童」をつれ、日暮がたになってやっとやってきた。 (④-129)

このように日本語と中国語の従属節を対照するには副詞まで考慮しなければならないことも多々あり、このことは、日中の従属節の対照分析が、当該の接続形式だけでなく広い範囲で行われなければならないことを示している。

### 3. 3 条件節に関する日中対照研究

条件節に関する日中対照には多くの研究があるが、日本語教育の立場から、「と」「ば」「たら」「なら」の各節を用いた文と、それに対応する中国語を考察したものに、鈴木義昭 (1990) がある。これらの日本語の 4 形式に対応する中国語文の特徴は以下 (10) の通りである。なお、(10) の例と日本語訳も鈴木 (1990) によるが、筆者が要約した部分もある。

- (10) 日本語の条件節に対応する中国語文の 4 種；鈴木 (1990)

<sup>13</sup> 輿水優監修、康玉華・許秋寒・鐘清著 (2000) 『中国語基本語辞典』東方書店

<sup>14</sup> 呂叔湘著・牛島徳次監訳、菱沼透・伊藤真佐子 (他) 訳 (1992) 『中国語用例辞典』東方書店

- A 关联词语（接続詞、副詞ならびにその複合語、「就」等）が何も用いられていないもの  
 例：Nǐ qù, wǒ bú qù.  
 你去，我不去。  
 （君が行けば、ぼくは行きません。）
- B 关联词语が用いられているもの  
 i 後件に「就」が用いられているもの  
 例：Míngtiān xià yǔ, jiù bǎ huìchǎng bān dào shì nèi.  
 明天下雨，就把会场搬到室内。  
 （明日雨なら、会場を室内に移そう。）  
 ii 「一～就～」・「如果/要是～就～」・「假如～就～」等が用いられているもの  
 例：Yī dào chūntiān, jiù kāihuā.  
 一到春天，就开花。  
 （春が来ると、花が咲きます。）
- C 假説助詞（「的话」等）が用いられているもの  
 例：Juéde lěng de huà, chuān duō xiē ba.  
 觉得冷的话，穿多些吧。  
 （寒かったら、もっと着なさい。）
- D 前件の動詞の後ろに他の成分（「了」等）が付加されているもの  
 例：Dào le qī diǎn, wǒmen jiù chūfā ba.  
 到了七点，我们就出发吧。  
 （七時になったら、出発しましょう。）

この4種の分類は日本語でいわゆる仮定条件を表す中国語の形式を中心としており、時間的な用法については含まれていない。

李光赫（2005）は条件表現の日中対照を行い、日中の条件表現の形式の不一致に焦点を当てるとともに、従来の日本語の条件文研究の問題点を指摘した。とくに前提条件と必修条件に関する日中の条件表現の形式の不一致についての考察は、日本語の条件文だけを見ているとはわからない側面を明らかにしており、言語教育上も有益な記述を行っている。

李（2007）（2011）は、中国語では前提条件と必須条件の形式がそれぞれ、「(只要) p, 就 q<sup>15</sup> (p サエならば q)」、「(只有) p, 才 q (p てこそ q)」の2つに明確に分かれているのに対し、日本語の「たら」「と」などの条件の形式は前提条件しか表せず、どちらも表せる「ば」においても前提条件と必須条件の関係が曖昧で、前提という情報構造を表示する標識がないことを指摘している。そのために日本語では、表3のように、必須条件を表すために「てこそ」「てはじめて」「時だけ」のような形式を用いていることも指摘している。

【表3：日中両語の形式的対応関係】（李，2007）（右端例文の番号は塩入による）

	誘導推論	日本語		中国語	例文
前提条件 最低前提条件	不可	p (サエ) ならば q	p ならば q	p、就 q	(11)
		p サエならば q		只要 p、就 q	(12)
必須条件 最低必須条件 唯一必須条件	可	p (wh) ならば q		p、才 q	(13)
		p てこそ q		(只有) p、才 q	(14)
		p 時 (場合) ダケ q		只有 p、才 q	(15)

それぞれの例文は以下の通りである。なお、ピンインは筆者による。

まず、前提条件を表す構文は、日本語では「と」「ば」「たら」を用い、最低必須条件は「さえ」のような取り立てにより表される。中国語では前提条件を表すのに「就」を用い、

<sup>15</sup> p は前件、q は後件を表す。



最低前提条件を表すには「(只要) p, 就 q (p サエならば q)」という構文を用いる。いずれの場合も誘導推論「p でなければ q でない」は含意されない。

- (11) a. 二十になれば、当然ながらタバコは吸える。  
 b. **Dàole èr shí suì jiù chōuyān.**  
 到了二十岁就抽烟。 (李, 2007- (02))

- (12) a. 努力さえすれば、君は必ず習得できる。  
 b. **Zhǐyào xià gōngfu , nǐ jiù yīdìng néng xuéhuì.**  
 只要下功夫，你就一定能学会。 (『日中・中日辞書』李, 2011- (567))

次に、必須条件を表す形式は、中国語はいずれも「才」を用いているのに対し、日本語は次の例のように「ば」「てこそ」「ときだけ」などを用い、特定の構文がない。必須条件の場合は誘導推論が生まれる。たとえば、例 (14) では「二十歳にならないとタバコは吸えない」、例 (15) には「虎穴に入らないと虎子は得られない」という含意がある。

- (13) a. どうすれば、日中関係を改善できるのか？  
 b. **Zěnyàng cái néng gǎishàn Zhōng Rì guānxi ?**  
 怎样才能改善中日关系？ (李, 2007- (03))

- (14) a. 二十になってこそ、タバコは吸える。  
 b. **Dào le èr shí suì cái néng chōu yān.**  
 到了二十岁才能抽烟。 (李, 2007- (02))

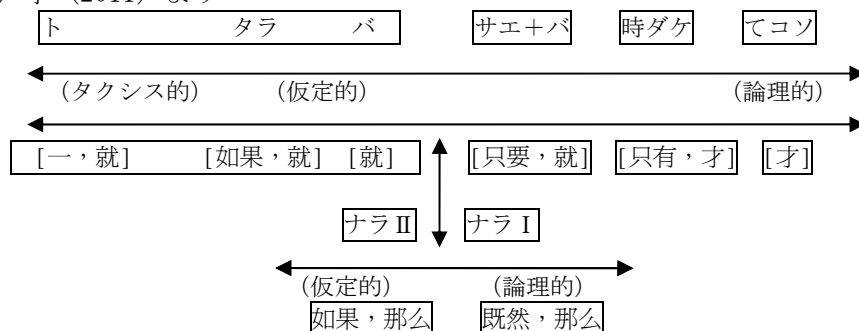
- (15) a. 虎穴に入った時だけ虎子を得る。  
 b. **Zhǐ jìn rù lǎo hǔ dòng , cái néng zhuō dào xiǎo lǎo hǔ.**  
 只进入老虎洞，才能捉到小老虎。 (李, 2007- (572))

李の指摘は、中国語の条件文が日本語では時間表現の形式にも及んでいることを示し、このような意味と形式のずれが、日本語学習者にとっても中国語学習者にとっても困難となることを予測させる。

たとえば、中国語話者が日本語で「最低必須条件」を表そうとすれば、「てこそ」「てはじめて」「時だけ」「場合だけ」のような表現か、あるいは誘導推論を用いて「二十にならないとタバコは吸えない」のようにするかである。日本語教育において必須条件を表す表現を明確に学習することは極めて少ない。こうした必須条件に関する翻訳の問題は本研究第2部の調査の結果のうち、データ②に関する分析でも取り上げている。

李 (2011) はさらに、日中両語の条件文研究の問題点として、従来の研究が「仮定一確定 (非仮定)」という分類からの枠を超えておらず、「仮定的」を「事實的」と対立的に捉えたと、事実であることが明らかな場合でも仮定条件として表されることがあることを説明できないと指摘している。李が提案するのは、前件と後件の関係を「論理的・仮定的・タクシスの」の3つの観点から捉え、論理的な関係は「ポテンシャル」、タクシスの関係は「アクチュアル」のスケール上に位置付けるということである。ここでは「仮定的」は「論理的」と「タクシスの」な中間に位置付けられ、ポテンシャルでもアクチュアルでもあり得るとされる。このスケールに、「前提条件」「必須条件」、そして「なら」を加えてまとめたのが次の図である。

(16) 李 (2011) より



これは、上述したような中国語と日本語の条件表現の形式のずれという観点からの発想によるものであり、日本語の条件形式だけを見ていたのでは、(16)のスケールの左半分しか含まれないので、タクシス的と仮定的という対立しか視野に入っていないのである。

李の分析は、他の言語と対照することで日本語の条件表現の特徴が明らかになった例であり、また、こうした意味的なスケールで複文の主従関係を捉えることにより他言語との対照がしやすくなり、言語類型的な考察も可能になるものと思われる。

### 3. 4 「の/こと」節と条件節・中止節に関する調査

塩入(2002)は台湾の東呉大学日本語学科3年生、延べ学習者数47名による1999年9月より2000年5月までの作文696編を対象としたもので、様々な誤用のうち、他の従属節との選択に関する誤用を中心に、誤用例815例について考察した。

学習者のレベルは、大学の日本語専攻の3年生ということで、今回調査した対訳DBの被験者よりやや上のレベルであると考えられる。調査の方法で異なるのは、塩入(2002)には対訳がないことと、延べ学習者数が少ないこと、活用や接続のミスは数えず、他の従属節との選択に関する誤用を中心に扱っていること、テーマが多様であることなどである。

調査の結果のうち、とくに「の/こと」節と「中止節」「条件節」の間に見られる誤用を分析することにより、以下のような結論を得ている。

「の/こと」節と「中止節」「条件節」の間での選択を決める基本的な要因は主文の述語であり、以下の4種に分けられる。

①主として「の/こと」節が現れ、他の節は現れにくいもの

ここには、当為、必要、真偽、重要性を表す述語(当然だ、必要だ、本当だ、大切だ)が含まれる。ただし「当然だ」は「て」節が現れる。

②「の/こと」節のほか引用節「とは」や「なんて」などの節が現れるが、中止節や条件節は現れないもの

ここには、原因格をとる動詞の名詞化したもの(驚きだ、喜びだ)、または「ことだ」により名詞文化した述語(いいことだ、ありがたいことだ)が含まれる。

③「の/こと」節が現れにくく、他の節が現れるもの

ここには、充足(不足)を表す語(充分だ、足りる、不足だ、満足だ)が含まれる。

④「の/こと」節が現れにくく、評価を表す固定的表現が現れるもの

ここには、「すればいい」「したらいい」「してもいい」等、条件節の形式との組み合わせで固定的なものが含まれる。

本研究では、この調査の結果を発展させ、文の種類において状態や属性を中心とした複文に現れる従属節について、第3部第9章と第10章で考察する。

## 4. まとめ

ここでは、まず、学習者の母語との対照研究が、日本語教育における効率的な学習のためにも、また、日本語学における言語普遍性の議論のためにも必要であることを述べ、データとして有益な学習者コーパスと対訳コーパスについて概観した。

次に、複文に関する中国語母語話者の誤用研究のうち、時間節、条件節、中止節、「の/こと」節について述べた。時間節に関しては王崗、条件節に関しては李光赫の一連の研究を概観した。両者の研究はいずれも、他言語と照らすことで日本語の文法記述における新たな知見を示している。

さらに、誤用分析を用いた研究として、塩入(2002)による作文の誤用調査の結果の概略を説明し、「の/こと」節、中止節、条件節の間の選択を決める主な要因は主文の述語であり、「の/こと」節の現れやすさによりいくつかに分類できる可能性を示した。

## 第4章 本研究の立場

1. 複文の定義と種類
  1. 1 複文の定義
  1. 2 複文の種類
2. 各節の概観
  2. 1 連体節
  2. 2 補足節
  2. 3 連用節

### 1. 複文の定義と種類

#### 1. 1 複文の定義

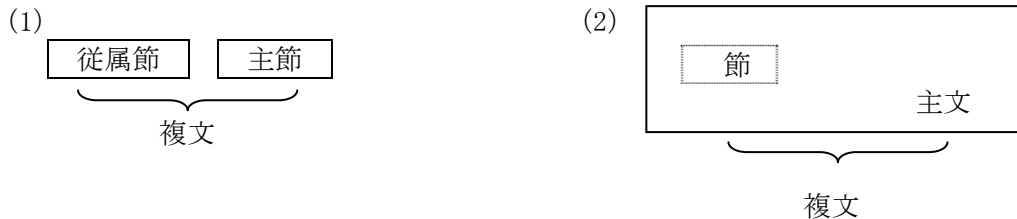
第1部第1章及び2章では、日本語文法の記述的研究の中で議論が積み重ねられてきた、従属節の階層構造及び文の種類という構造的・意味的な観点について、ほぼ時間軸に沿って先行研究を概観した。

まず、従属節の階層構造に関する研究について、従属の認定と陳述性、主従的關係の下位分類、従属節の階層構造という3つの観点から概観した。

次に、文の種類に関する研究について、動きと状態・属性という分類基準が時間的な限定を中心的な基準として論じられ、さらに動きと状態に関しては動き内部の時間的展開の有無が分類基準として提案されていること、文の種類のうち属性についてはさらに内在的属性と準属性といった下位分類がなされていることを見た。

本章では、これら2種の先行研究の成果を合わせ、複文のレベルに応用する本研究の立場を述べるが、その前に複文の定義とその類型について基本的な概念を確認しておきたい。

複文の定義としては、先に引用した、野田尚史(2003)による定義を用いたいと思う。野田は複文を「単文の中の一部分が拡張するとき、それが節になった文」と定義しており、この定義は単文と複文の連続性を反映していると考えられる。複文は2つ以上の述語から成るとする考え方を(1)とすると、野田のような考え方は(2)のように図示される。本研究では(2)のような複文の考え方を採用し、「節」を従属節と呼んでいる。



連続性を重視した定義を採用するのは、本研究で扱う従属節の主題化といった現象の考察は、とくに感情を表す述語の用法記述において、単文における文の種類を複文に拡張した説明が有効であると考えられるためである。次の例で、(3a) (3b) のそれぞれの左右の文は複文と単文だが、下線部は意味的にほぼ等しく、複文は単文の拡張したものとして解釈することができる。

- (3) a. 新しい料理を試してみることは楽しい。 / 新しい料理の試作は楽しい。  
b. 彼が合格したのには驚いた。 / 彼の合格には驚いた。

#### 1. 2 複文の種類

本研究で用いる複文の種類—複文を構成する従属節の種類—については、野田尚史(2003)の第1章3. 3表1の分類、下位の意味的分類に関しては前田直子(2009)の分類を参考として、下の図1のように規定する。ただし、本研究では補足節を連体節と連用

節の間に位置付けているほか、野田尚史（2009）の「ムード」という名称をすべて「モダリティ」で統一して呼んでいる。

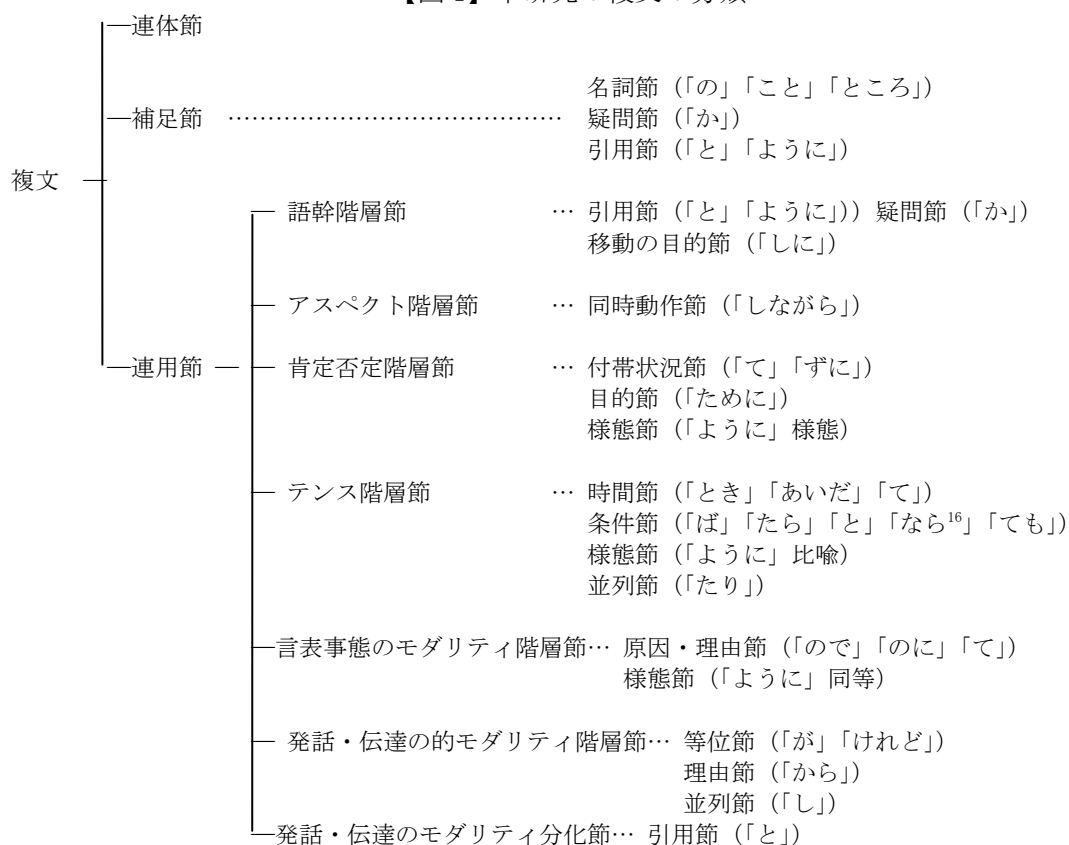
まず、従属節は主文に対してどのような機能をもっているかにより、連体節、補足節、連用節に大きく分類している。

次に、連用節は主文の述語のどこに係るかにより、語幹階層節、アスペクト階層節、肯定否定階層節、テンス階層節、言表事態のモダリティ階層節、発話・伝達のモダリティ階層節、そして発話・伝達のモダリティ分化節に分けられる。最も大きな従属節である発話・伝達のモダリティ分化節の名称のみが、従属節内部に対他的モダリティ形式（「ね」などの終助詞）を含むことができることを示している（例：晴れるだろうねと言った）。この節は主文に極めて近い存在である。

最後に、補足節は、従属節の形式により名詞節、疑問節、引用節にさらに分類し、連用節は、主に従属節の意味により同時動作節、目的節、様態節などに分類した。

本研究で補足節をとくに連用節と連体節の間に位置付けたのは、まず、本研究で扱う連用と連体が交錯するような事例の考察には、その中間的な存在である補足節が大きく関わってくるため、その重要性を表したかったことと、また、補足節を独立させることで補足節と連用節の両方に位置付けられる引用節の存在もより明確になるという理由による。

【図 1】 本研究の複文の分類



この図では、引用節「と」が 3 箇所存在している。引用節について説明を加えておくと、野田尚史（2003）の分類では引用節が最も内側の語幹の階層にありながら、最も外側にも位置している。たとえば、「合格してくれと言った」という文は「?合格してくれと見た」のように言えず、主文は引用節をとる動詞に限られるという制限があるので、語幹

16 「なら」の条件的用法のみ。非条件（提題的）用法（前田，2006）は除く。

階層節に位置付けられる。また、「と」節は従属節相互の包含関係を見ても「…と言いながら、…」のように語幹階層節である「ながら」節にも含まれることから語幹階層節であると言える。疑問節も同様である。一方で、引用は「所与と見なされるコトバを再現しようとする表現意図・姿勢によるものである」ため、引用節は「文の形ある構成要素のどのレベルまでも、とり込みに制約がない」（藤田保幸，2000）。したがって、節の内側に分化する成分から見れば最も外側の階層に位置する連用節でもある。

階層構造の基準として主従のかかり方と従属節内の分化という 2 つの基準を用いることは、引用節のこうした二面的な特徴を説明するのに適していると思われる<sup>17</sup>。

以下では、この分類の各節について具体例を見ていく。

## 2 各節の概観

### 2.1 連体節

連体節には、名詞修飾節、連体修飾節、関係節などの名称があり、名詞を修飾する。名詞修飾には、「その男」のような連体詞によるものや「やせた男」のように動詞でも形容詞的な修飾をしているものなどがあるが、節と言えるものは述語を中心とした成分を含むものから成る。下の例の下線部はいずれも名詞「男」の修飾をしているが、例 (4c) のみが連体節で、(4a) は連体詞「その」による名詞修飾、(4b) は主格に位置する連体節（または名詞修飾節）である。

(4) a. その男が本当に医者なのかどうか僕はますますわからなくなってしまった。

(『ノルウェイの森』BCCWJ)

b. ウッドストック通りからこちらに向って、かなり年輩の異常にやせた男が、自転車で走ってくるのだ。

(『英国ミステリ道中ひざくりげ』BCCWJ)

c. 腰を降ろそうとした時、通路の反対側の席で新聞を見ていた男がいきなり立って、彼を突き飛ばし、… (略) …

(『バビロンに行きて歌え』BCCWJ)

連体節は主文の成分となる名詞を修飾、拡張するもので、連用節が主文の述語を修飾するのと対照的であるが、野田尚史 (2003) の指摘するように、連用節は副詞的成分として述語にかかるのに対し、連体節は成分の中にある名詞を修飾するため、述語的成分より下のレベルではたらくと考えられる。

これに対し、補足節は、「男が彼を突き飛ばしたのを見た」のように、主文の述語の対象格としてはたらいっており、主文に対するはたらきの面から見れば、連体節より上のレベルで作用している。

したがって、日本語学習者の従属節選択の誤用においても、連用節と名詞節が問題になることはあるが、連用節と連体節の間での選択の問題は少ないと考えられる。ただ、日本語の従属節には名詞出自のものが多く、時を表す名詞による連体節も多く存在し (日本語記述文法研究会, 2008)、その境界が問題になることもある。連体節と連用節の選択の問題については、第3部第10章7. 4で論じている。

### 2.2 補足節

補足節は、「述語に対して主語や補語の関係にある節」(日本語記述文法研究会, 2008)で、名詞節、疑問節、引用節がある。以下にそれぞれの例を挙げる。

(5) a. 【名詞節】

それで、消化が悪いコンニャクを食べさせて、以後その時一緒にいた男と行動を共にしたということを強調しようと計ったんだ。

(『解剖結果』BCCWJ)

<sup>17</sup> 引用の成分は前田 (2009) の指摘するように名詞節とする立場と副詞節とする立場がある。ここでは補足節を連用節と連体節の間に位置付け、補足節である引用節も連用と連体の中間的な存在であると見なす。ただし引用節「ように」は終助詞を含まないので発話・伝達のモダリティ分化節の用法はない。

b. 【疑問節】  
貴方の隣に座っていた男が誰だか知っていますか。 (『渡り鳥』BCCWJ)

c. 【引用節】  
弘崎は、「先日、刑事が来まして、家内に生前つき合っていた男がいなかったかと聴かれました」と言った。 (『レッドライト』BCCWJ)

従属節内部に含まれるものから見ると、名詞節、疑問節は引用節より制限がある。下の例は従属節内部に認識のモダリティ形式「だろう」と主題の「は」が現れている例であるが、名詞節と疑問節の場合は引用節に比べ現れにくい。

(6) a. 【名詞節】  
二等車から出て来る僕を見つけでもすれば、彼女は自分が辱められた気持ちになっただろうことは確かだった。 (『友達』BCCWJ)

b. 【疑問節】  
けれど、このお父さんによく似た五人の男の子はしのぶのことをどう思っているだろうか、それがわからない。 (『優しい男』BCCWJ)

c. 【引用節】  
宏はきっと行かないだろうと思っただが、話してみると即座に「行ってみたい」と答えたので驚いたとのこと。 (『臨床心理学の世界』BCCWJ)

とくに疑問節には「だろう」が現れにくい。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』において「だろうか」を含む170例のうち、主文に「わからない」「知る」がきて複文を構成するものはわずか3例で、他はほとんど「だろうか」で文が終わる例である。上の例(6b)も主文の「それが」が前の部分を指示する形になっており、「だろうか」の後で文が終わっているのにはほぼ等しく、野田尚史(1989)の「真性モダリティをもたない文」に近い<sup>18</sup>。南(1974)はこうした例を提示の用法としてC類の用法に挙げている。一方、名詞節「だろうこと」が複文を構成する例は96例中96例で、疑問節より名詞節の方が「だろう」が現れやすいことを示している。

こうした個々の違いはあるものの、名詞節、疑問節、引用節はいずれも主文の述語の補語としてはたらいっており、そのために主文の述語にも制限がある。

## 2. 3 連用節

ここでは、図1にしたがい、連用節の下位分類を見ていく。

### 【語幹階層節】

語幹階層節には、引用節(例(7a))のほか、移動動詞の目的を表す「しに」がある(例(7b))。主文の動詞が制限されているのが特徴である。

(7) a. 今もなおこのありさまで浮ぶことが出来ないから、どうぞ亡きあとを弔ってくれと言った。 (『夢のお七』)

b. 学校はお休みだし、遊びに行くアテがないって、あなたぼやいていたじゃない。 (『四国殺人Vルート』BCCWJ)

### 【ヴォイス階層成分】

野田尚史(2003)ではヴォイス階層成分は節とされていない。本稿ではこれも誤用が多いことから誤用として形容詞の連用形等を含めて調査しているが、やはり従属節には入れない。ヴォイス階層成分は、動きの様態を修飾する様態副詞に近い。

(8) a. 幸太郎は大急ぎで、横町の角まできたが、帽子は見つかりません。 (『風』)

b. 美食、偏食をせず、妻の作る料理はすべておいしくいただきます。 (『焦らず休まず』BCCWJ)

<sup>18</sup> 千田俊太郎先生の御指摘による。

### 【アスペクト階層節】

アスペクト階層節には、同時動作を表す「ながら」や「つつ」、「しいしい」などが含まれる。従属節の事態は動詞に限られ、形も連用形のみが可能である。

(9) a. 日没と共に生じた微風は、その麦の葉を渡りながら、静に土の匂を運んで来た。  
(『山鴨』)

b. フランスパンをかかえた駿が、汗をふきふきやってきた。  
(『ちゃぐりん』2002/8BCCWJ)

### 【肯定否定階層節】

肯定否定階層節には、付帯状況を表す「て」「ずに」、目的を表す「ために」、様態を表す「ように」が含まれる。主文述語の肯定否定と呼応するのが特徴で、「?眼鏡をかけて本を読まない」のように、そのままでは主文述語が否定になりにくいという特徴がある。

(10) a. 紫外線ボックスの前に紫外線を通さないアクリル板を置き、紫外線防御用眼鏡をかけて操作する。  
(『高等学校生物Ⅱ』BCCWJ)

b. 何故、私共にことわらずに行ったのだ。  
(『耳無芳一の話』)

### 【テンス階層節】

テンス階層節には、「とき」などの時間節、「と」「ば」「ても」などの条件節や逆条件節、比喩を表す様態節「ように」、並列節「たり」などが含まれる。「とき」節は述語の過去形を含むことができるが、テンスは相対テンスであり、主文のテンスに従う(例(11a))。

条件節は過去形を含むことができず、やはり主文のテンスに従う。また、「たり」節も述語の過去形には接続するもののテンスを表せず、やはり主文がテンスを決定する。このように、テンス階層節の従属節のテンスは主文により決まり、対応関係にある。

(11) a. それは子どもの創作を、大人がまじめな文学に対して持つような視点から検討したときわかるのです。  
(『子どもの想像力と創造』BCCWJ)

b. 手に持ってみれば、どれくらい中身を食べたかがすぐにわかったものである。  
(『「食」器公害』BCCWJ)

上の例(11a)で「……したとき」は主文が非過去であるために過去を表さない。例(11b)の「……持ってみれば」は主文が過去であるため、意味的には過去の事態を表している。

### 【対事的モダリティ階層節】

ここには、理由節「ので」、逆理由節「のに」、動きの理由を表す「から」、様態で同等を表す「ように」などが含まれる。いわゆるB類の階層では最も高く、C類に近い。

これらは従属節内にはテンスや丁寧さなどを含むことはできるが、主文の意志のモダリティと対応し、「?雨が降るので、傘を持っていこう」「\*雨が降るのに、出かけよう」のように共起しにくい<sup>19</sup>。

また、様態節「ように」は「あの会社が決定したように、我々も決定しよう」のように主文に意志が現れるが、[[あの会社が決定したように、我々も決定し]よう]という構造となり、主文の動きの様態を表す用法になる。以下は、「ので」「のに」「ように」の例である。

(12) a. カプサイシンには食欲を刺激する作用もあるので、食事量が増えないように注意したい。  
(『お腹を凹ませる1日15分スロートレーニング』BCCWJ)

b. 京子と二人して宮崎家の掛人になるさえ気の重いことであるのに、カツは山本宅を捨てて節子に密着しようというのである。  
(『石川節子』BCCWJ)

c. 言葉に魂を込めて「言霊」を発するように、税理士は数字の中に本気の魂を込めて「数霊」にしなければならない。  
(『「ありがとう」戦略』BCCWJ)

<sup>19</sup> ただし、不特定の聞き手に呼び掛ける意味を表す意志形の用法は「ので」と共起する。例：「パチカンの中でも、撮影禁止と可能な場所があるので、入口でチェックしよう。」(『現地危険情報』BCCWJ)

### 【対他的モダリティ階層節】

ここには、等位節「けれど」、判断の根拠を表す「から」、並列節「し」が含まれる。従属節内には推量のモダリティ形式「だろう」が現れる（例（13a））ほか、主文には対事的モダリティである意志も現れる（例（13b））。

- (13) a. 本人は一生懸命なんだろうけど、気難しい印象も受けます。  
(Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ)
- b. いろんな疑問が頭の中に渦巻いたけど、またの機会に聞くことにしよう。  
(Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ)

対他的モダリティである疑問は、「?雨が降るけど、出かけますか」のように制限がある。ただ、「けれど」は逆接の意味をもたない等位の用法の場合に疑問文も現れる（例（14a））ほか、主文の事態が可能表現の場合、能力を問いかけることができる（例（14b））。

- (14) a. メーカーによって特典がいろいろあるけど、それらを比較するサイトってありますか？  
(『Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ])
- b. こんなにたくさんいるけど、行けますか？  
(Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ)

以上、ここまでは、従来の研究における構造的・意味的な分類を合わせ、本研究における複文の定義と種類、そしてそれぞれの従属節の用法を確認した。



## 第2部 対訳付作文の調査と結果

## 第5章 調査の方法

### 1. データの種類

1. 1 作文対訳データベース
1. 2 中日翻訳問題
1. 3 深圳・熊本作文対訳データ
1. 4 中日対訳コーパス

### 2. データの分析方法と限界

#### 1. データの種類

##### 1. 1 作文対訳データベース

第1部の序章で述べたように、本研究の背景は中国語母語話者の誤用に関係していることから、今回の調査の方法にも、誤用分析、対訳付作文、翻訳データなど、中国語を視野に入れたものを取り入れた。

本研究では、対訳付データとして、主に以下の4種のデータを用いている。また、以下では、それぞれのデータによる例を、例文末尾に(①-1)……(④-1)のように示す。

①『日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース』(国立国語研究所、2001年)(以下、「作文対訳DB」)のうち中国語話者89名のもの。

これは国立国語研究所が1999年度から2000年度にかけて、アジア10カ国(中国・インド・カンボジア・韓国・マレーシア・モンゴル・シンガポール・タイ・ヴェトナム・日本)から約1,100編の日本語による作文のデータを集めたものである。以下、宇佐美(2006)、井上(2006)により、このデータベースについて概観する。

ここに収められているデータは以下のものである。

- I 日本語学習者による日本語作文
- II Iの執筆者による母語訳
- III 日本語教師によるIの作文の添削
- IV 作文執筆者及び添削者に関する情報

作文対訳DBのデータの収集は、国立国語研究所より日本国内外の日本語教育機関に協力を依頼して行われた。該当する日本語教育機関は大学を主としており、日本の日本語学校等の学習者も少数含まれるものの、全体としては日本語学習歴や年代のレベルがかなり統一されたデータと言ってよい。

データ収集の手順は以下の通りである。

#### 1) 作文課題の選択

作文の課題は、「あなたの国の行事について」「たばこについてのあなたの意見」の2つである。ただし、教師が選択した場合もある。カンボジアについては、喫煙者が極めて少ないという事情から、「外国からの援助について」という課題を与えている。また、執筆の際には辞書を使用することもでき、辞書を使用する際は申告することとした。

#### 2) 日本語作文の執筆と母語への翻訳

日本語の作文を執筆後、本人がその作文を見ながら母語への翻訳を行った。翻訳は大幅な意識を避けるようにした。また、自宅で行ってもよいこととした。

#### 3) 作文の添削と電子化

基本的に1編の作文に対し12名の添削者が添削を行い、添削情報も合わせて電子化した。

以上のような手順により収集されたデータのうち、本稿ではIとIIの中国語母語話者名の作文のデータ89編を対象としている。中国語母語話者の被験者89名のうち台湾出身者3名以外は中国国籍である。日本語学習歴は、台湾出身者の3名及び中国国籍の者の大多数

が、台湾及び中国の大学または学院で日本語を2年から3年程度専門として学んだ大学生である。被験者の条件としては、「日本語で原稿用紙2枚程度の分量の文章を自力で書くこと」というもので、結果として大学2年次後半以降の学生を被験者としている（宇佐美，2006）。被験者の日本語学習歴は自分で記録しているものがあるが、おおよそ中級以上の学習者である。

## 1. 2 中日翻訳問題

### ②筆者による中日翻訳問題

2011年11月から2012年1月にかけて筆者が収集した2種類のデータで、条件節や時間節、時間副詞などに関する中日翻訳の問題で、中国話話者70名を対象としたものである。

これは、データ①のうち、時間表現を中心とした日本語の誤用例とその中国語訳20余りの文を筆者が選び、さらに深圳大学日本語日本文学科王崗教授の助言により選択を行った後、最終的に15の中国語の文を選び、作成したものである。

回答を依頼したのは、中国深圳大学日本語日本文学科3年生61名、熊本大学の中国語を母語とする留学生9名の計70名である。回答は回収後、全て電子化し、使用した形式別に分類した。

調査した文は(1)～(15)、それぞれの出題意図は以下のとおりである。なお、調査した文の下の発音記号と( )の日本語は筆者による翻訳である。調査の際は発音記号は付けていない。

- (1) Xīyān hòu, nǎozǐ mǎshàng jiù néng xiǎngchū hǎo diǎnzi de qíngkuàng yě bùshǎo ne.

吸烟后，脑子马上就能想出好点子的情况也不少呢。

(たばこを吸うと、いい考えを思いつくということもよくある。)

【出題意図】

「后(あと)」を用いた表現をどう訳すかを知る。

- (2) Chūnjié duì yú Zhōngguó rén lái shuō, shì zuì zhòngyào de jiérì, suǒyǐ, měijiā měihù dōu zài yī gè yuè qián jiù kāishǐ zhǔnbèi le.

春节对于中国人来说，是最重要的节日，所以，每家每户都在一个月前就开始准备了。

(春節は中国人にとって最も重要な節句なので、どの家でも1か月前には準備を始める。)

【出題意図】 「(時間) 就…了」をどう訳すかを知る。

- (3) Chūnjié dàgài zài zhēngyuè chūshí zuǒyòu jiù jiéshù le.

春节大概在正月初十左右就结束了。

(春節はだいたい正月の10日くらいには終わる。)

【出題意図】 「左右(くらい)」を従属節に「くらい」のまま用いる誤用が多いため「(時間) 左右就…了」をどう訳すかを知る。

- (4) Xiāngyān zìcóng dànshēng yǐlái, jiù yǒuzhe xǔduō zhēngyì. Jiūjìng shì hǎo háishi huài zhìjīn méiyǒu jiélùn.

香烟自从诞生以来，就有着许多争议。究竟是好还是坏至今没有结论。

(たばこは誕生してからずっと多くの論争があるが、いい物か悪い物かいまだに結論は出ていない。)

【出題意図】 「…以来，就…(てから)」 「至今…(今に至るまで)」をどう訳すかを知る。

- (5) Gēge yě chōu yān, dànshì yīnwèi bèigào zhī “ bù néng zài wū nèi chōuyān ”, suǒyǐ xiǎng chōu de shíhou bùdébù qù wàimian.  
哥哥也抽烟，但是因为被告之“不能在屋内抽烟”，所以想抽的时候不得不去外面。  
(兄もたばこを吸うが、「家の中では禁煙」と言われているので、吸いたいときは外へ出なければならない。)  
【出題意図】「想抽的时候(たばこを吸いたいとき)」の日本語訳として「とき」「と」などのどれを選ぶかを知る。
- (6) Měicì dào le shí yuè yī rì, jiù huì yǒu hěn duō cóng zǔguó gèdì ér lái de yóukè.  
每次到了十月一日，就会有很多从祖国各地而来的游客。  
(毎年10月1日になると、全国各地から大勢の観光客がやって来る。)  
【出題意図】「到了…(時間)…，就会…(になると、)」をどう訳すかを知る。
- (7) Chūnjié li rúguǒ yùdào péngyou huò zhù zài fùjìn de rén, yào shuō “ xīnnián hǎo ”.  
春节里如果遇到朋友或住在附近的人，要说“新年好”。  
(春節に友達や近所の人に会ったら、「新年おめでとう」と挨拶する。)  
【出題意図】「如果…，要…(…たら、…する)」をどう訳すかを知る。
- (8) Dāng wèndào nǚxìng “ wèishénme yào xīyān ne? ” Tāmen zǒngshì huì huídá “ jiěchú fánnǎo ”.  
当问道女性“为什么要吸烟呢？”她们总是会回答“解除烦恼”。  
(女性に「なぜたばこを吸うの？」と聞くと、多くの女性は「ストレス解消」と答える。)  
【出題意図】「当…，…总是…(…とき、いつも…)」をどう訳すかを知る。
- (9) Rénmen cóng bīngfēng de héli qǔchū dàkuài de bīng, ránhòu yóu yìshùjiā diāochéng gèshìgèyàng de dōngxì, zuìhòu zài bīngli wāchū dòng lái, bǎ cǎisè de dēng zhuāng jìnqù.  
人们从冰封的河里取出大块的冰，然后由艺术家雕成各式各样的东西，最后在冰里挖出洞来，把彩色的灯装进去。  
(人々は氷河から大きな氷を取り出し、芸術家はそれをいろいろな物を彫り、最後に氷に穴を掘って色のついた電灯を入れる。)  
【出題意図】「然后(それから)」「最后(最後に)」をどう訳すかを知る。とくに日本語で「最後」のように「に」のないまま用いる誤用が多いため。
- (10) Xīnláng bìxū jū sān gè gōng bìng wǎng ménli sāi yīxiē “ hóng bāo ”, mén cái dǎkāi.  
新郎必须鞠三个躬并往门里塞一些“红包”，门才打开。  
(新郎が三回御辞儀をして扉に御祝儀を挟まないと扉は開かない。)  
【出題意図】「…必須…，…才…(てはじめて)」をどう訳すかを知る。日本語の条件形式では表しにくい最低必須条件をどう訳すかを知る<sup>1)</sup>。
- (11) Dào wǎnshang shíèr diǎn de shíhou, quánjiārén wéizuò zài yī zhāng zhuōzi qián chī jiǎozǐ.

<sup>1)</sup> 日本語では最低必須条件が通常の条件節の形式ではカバーできていないことは李光赫(2011)が指摘している(第1部第3章3.3)。

到晚上十二点的时候，全家人围坐在一张桌子前吃饺子。

(夜中の12時になったら、一家で食卓を囲んで餃子を食べる。)

【出題意図】「到(時間)的时候，…(になると)」を訳す際、時間節と条件節のいずれを選ぶかを知る。

- (12) Chūnjié zuòwéi Zhōngguó zuìdà de chuántǒng jiérì, guò chūnjié de shíhou shì Zhōngguó rén yī nián dāngzhōng zuì kuàilè de shíhou.

春节作为中国最大的传统节日，过春节的时候是中国人一年当中最快乐的时候。

(春節は中国最大の伝統行事であり、春節を過ごす時は中国人にとって一年で一番楽しい時である。)

【出題意図】「…时候是…的时候。(…ときは…ときだ)」をどう訳すかを知る。

- (13) Shí èr diǎn dào lái, zài yān pào shēng zhōng, rén men hù xiāng zhù fú “xīn nián hǎo”. Zhè shí, dà rén men huì gěi xiǎo hái zǐ yā suì qián.

十二点到来，在鞭炮声中，人们互相祝福“新年好”。这时，大人们会给小孩子压岁钱。

(12時になると、爆竹の音の中で、人々はお互いに「新年おめでとう」と祝う。

この時に大人は子供にお年玉をあげる。)

【出題意図】「(時間)到来，…(になると)」「这时(このとき)」をどう訳すかを知る。

- (14) Háizi yīn mó fǎng dà rén ér xī yān de kě néng xìng hěn dà. Dāng tā men míng bái de shí hou, wéi shí yǐ wǎn.

孩子因模仿大人而吸烟的可能性很大。当他们明白的时候，为时已晚。

(子供は大人をまねて喫煙する可能性が大きい。物事がわかるようになったときにはもう間に合わない。)

【出題意図】「当…的时候、为时已晚(たときはもう間に合わない)」をどう訳すか、とくに「ときは」を使用するかを知る。

- (15) Hěn jiǔ hěn jiǔ yǐ qián, rén men zhù zài yí gè cūn zhuāng lǐ, cūn zhuāng de fù jìn zhù zhe yī zhī jiào “nián” de guài wu, yí dào chú xī zhī yè, “nián” jiù chū lái bǔ shí cūn zhuāng lǐ de hái zǐ.

很久很久以前，人们住在一个村庄里，村庄的附近住着一只叫“年”的怪物，一到除夕之夜，“年”就出来捕食村庄里的孩子。

(昔々、人々はある村に住んでいた。村の近くには「年」

というお化けが住んでいて、「年」は除夜になると出て来て村の子供を捕まえて食べるのだった。)

【出題意図】「一到(時間)，…就…(になると…)」をどう訳すかを知る。

### 1. 3 深圳・熊本作文対訳データ

このデータは、②と同様、2011年11月から2012年1月にかけて筆者が収集したデータで、「夏休みの一日」をテーマにした日本語作文と、それに対する本人による中国語訳で、62名のものである。対象は深圳大学日本語日本文学科2年生62名で、400～600字程度の日本語作文とその中国語訳を依頼した。テーマはできるだけ接続表現が多用される作文を集めたいという筆者の意図の下に、深圳大学日本語日本文学科の作文を担当する先生方の提案を参考に設定した。

対訳の仕方については、基本的に日本語で作文を書いた後でその中国語訳を行うという

方法をとったが、中にはその逆の手順で行っている者もいた。集めた作文はすべて文字化した後、従属節の誤用のみ取り出して、形式別に分類した。

以下に作文の一例を挙げる。日本語の下線は複文に関する誤用、中国語訳の下線はそれに対応する部分を表す。中国語訳の発音記号は筆者による。

(16) 日本語作文 女 二年生

私の夏休みはとても忙しくて、たのしかった。まず、私は世界大学生運動会のボランティアになった。思ったよりかんたんなのに、ボランティアの活動は時間がかかった。私たちはいろいろな訓練があった。おもしろいのもあれば、つまらないのもあった。ある日、訓練の内容はボランティア同士と一緒に遊んだ。みんなは朝六時におきることになった。初めのころは、何か大切で、難しい活動があると思った。約束した場合についてあとで、みんなは驚いた。「今日の内容は一緒に遊びましょう」って先生は元気なこえを出した。私たちはそのひ、ただいろいろなゲームをしたのに、みんなはたのしそうな顔をした。実は、訓練の内容は遊びだけではなく、協力の意識とか、お互いの助け合う意識とか、深刻的な意味がある訓練である。ボランティアたちもゲームを通じて、友達ができた。私もそれから、もっと力を入れるという決心ができた。

#### 【本人による中国語訳】

Wǒ de shǔjià fēicháng mǎnglè, dàn yě hěn yúkuài. Shǒuxiān, wǒ chéngwéile shìjiè dàxuéshēng yùndòng huì de zhìyuànzhě de huódòng què huāle wǒ bùshǎo shíjiān.

Wǒmen yǒu gèzhǒng gèyàng de xùnliàn, yǒuqù de fáwèi de dōu yǒu. Xùnliàn de nèiróng shì hé qítā zhìyuànzhě yìqǐ wán yóuxì. Yīnwèi yāoqiú dàjiā liù diǎn qǐchuáng, wǒmen yīwéi yǒu zhòngyào de shìqing, jiéguǒ búshì. Qù dào yuēdìng dìdìǎn dàjiā ōu xiàle yī tiào, lǎoshī xiàn zhǐshì wán yóuxì. Tōngguò yóuxì wǒmen xué dào le bùshǎo dōngxi, bǐrú yìqǐ hézuò, xiānghù bāngzhù. Wǒ yě cóng nà tiān qǐ juéding yào nǔlì le.

我的暑假非常忙碌，但也很愉快。首先，我成为了世界大学生运动会的志愿者的活动却花了我不少时间。我们有各种各样的训练，有趣的乏味的都有。训练的内容是和其他志愿者一起玩游戏。因为要求大家六点起床，我们以为有重要的事情，结果不是。去到约定地点大家偶下了一跳，老师现只是玩游戏。通过游戏我们学到了不少东西，比如一起合作，相互帮助。我也从那天起 决定要努力了。

以上のような作文対訳データから以下のようなことがわかる。

#### ① 【学習者の日本語能力】

学習者の日本語能力は、上級の複文（例「おもしろいのもあれば、つまらないのもあった」）を産出できる上級レベルから、中級レベルである。

#### ② 【従属節の誤用】

使用された従属節のうち、初級のもの（例「とき」）でも習得が不十分なものも少なくない。とくに、一見すると同形同意である日本語の「後」「前」「最後」のような表現は、日本語における用法が却って正確に習得されていないことが多い。

#### ③ 【日本語と中国語の対応の問題】

日本語の文と中国語の文は、必ずしも対応していないこともある。たとえば、例（16）の日本語訳 2 行目の「簡単なのに」は中国語訳では見当たらない。その逆はほとんどないので、日本語作文を先に書き、その対訳を付けるという順序のためかと思われる。

#### ④ 【複文の誤用数】

正確な数は数えていないが、複文の接続における誤用は文全体の半数近くを占めることもあり、誤用の中でも高い割合を占めているようである。

以上のように、中上級レベルで複文を多用するようになると、その正確な使用が問われてくる。たとえば、従属節の形式の選択、共に用いる副詞の適切性などである。

## 1, 4 中日対訳コーパス

次に、北京日本学研究中心により 2003 年 7 月に公開された『中日対訳コーパス』について

で説明する。このコーパスは、文学作品から白書まで様々なジャンルの作品の対訳のデータであり、文学作品は、中国 23 篇、日本 22 篇とその訳本（合計 105 件、約 1130.3 万字）、文学以外は、中国 14 篇、日本 14 篇、日中共同 2 篇とその訳本（合計 45 件、約 574.6 万字）が収録されている（曹大峰・千葉庄寿，2007）。

曹（2007）によれば、多言語コーパスはこれまでの並列コーパスと類似コーパスだけでは収まらず、その特徴分析と使い分けが必要となってきたという。次の表は、これまでの対訳コーパスの特徴を、対応、意味、語族、時代、地域、習得といった面から比較した表である。

【表 1：対訳コーパスとその特徴】（曹，2007 発表資料より引用）

種類	関係特性											
	対応		意味		語族		時代		地域		習得	
	並列	包括	同一	類似	同属	類縁	同代	異代	内圏	外圏	前後	内外
中日対訳コーパス	○		○	△			○	△				
「西京雜記」対訳コーパス	○		○		△		○	○				
全国方言談話 DB	△		△	○	○		○		○			
BTS 多言語話し言葉コーパス				△	○	○	○		△	△	△	○
日本語学習者作文対訳 DB	△		○				○				△	○
IEC コーパス				○		○	○			○		
中国語共時コーパス				○	○		○		○			
中国語換言コーパス	△	△	○		○		○					

この表からわかるように、中日対訳コーパスは 2 言語並列型の対訳コーパスで、意味的同一性が高く、時代的にはほぼ同時代の 2 言語を比較したものである。

なお、本研究で用いているもう 1 つのデータ、日本語学習者作文対訳 DB（本稿では作文対訳 DB）は、この比較表によれば並列型とは言えないが、意味的同一性が高く、習得研究に寄与できるという特徴をもつことがわかる。

また、中日対訳コーパスの内訳は小説が最も多く 58.0%、次いで正論・白書が 22.9%、伝記 17.0%と、小説を中心とした書き言葉の資料である。本研究で扱う複文のうちかなりの形式が書き言葉で多く用いられるものであるので、有効な資料であると言える。

以上が本研究で用いた対訳コーパスである。これ以外に日本語の単言語コーパスとしては、以下のものを用いている。

- ⑤『青空文庫』；（ ）内に作品名を記し、文末に著者を示す。
- ⑥『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）国立国語研究所（2011）
- ⑦『CD-毎日新聞 2010』毎日新聞社

## 2. データの分析方法と限界

データの分析は、まず、①と③の対訳付き作文データについては、従属節全体に関する誤用例の抽出と誤用傾向の分類、誤用の各形式に関する分析、さらにこれまでの成果との比較を行った。②と③のデータについては、中国語の接続表現に相当する日本語訳を分類し、分析した。④⑤⑥⑦については、分析結果の説明において適宜引用している。

井上（2006）は作文対訳 DB で可能な対照研究について論じ、対訳資料としての対訳データベースの位置付けを明らかにしている。さらに、「作文対訳 DB を利用する場合、「学習者は日本語作文を自分の言語でこのように訳している」ということが言語学的にどのような意味を持つかについて、十分な検討が必要である」（井上、2006）と指摘している。つまり、文学作品等の対訳とは異なり、対訳が最初から学習者が母語で書いた文章ではないため、対訳の言語（ここでは中国語）の文章としては必ずしも自然ではないところや、日本語作文の影響が見られるところがあり、日本語作文とその対訳を比較するだけでは対照研究としては成立しにくいということである。

このような対照研究に用いる場合の問題や限界について留意しつつ、改めて作文対訳 DB の日本語作文とその対訳から何がわかるのかについて確認しておきたい。

学習者による日本語作文はいわゆる中間言語であり、母語話者の日本語に比べれば不自然な点をもっている。一方、その対訳も日本語を翻訳した不自然な言語ではあるが、学習者の言語形式の習得を観察する場合に重要なのは、寧ろその不自然な、中間言語的な母語である。井上（2006）の言うところの「学習者は日本語作文を自分の言語でこのように訳している」ということが、「学習者は日本語の言語形式をこう理解している」ということの現れであり、対訳は習得の過程を観察することのできる貴重なアウトプットであると考えられる。したがって、作文対訳 DB は、対照研究に利用するには多くの問題を含んでいるが、言語の習得過程を考察するには非常に有益な資料であると考えられる。

一方では、作文対訳 DB は学習者がどのような意図で当該の日本語を産出したのかという習得の状況や理由を観察するのに参考とはなるものの、井上（2006）の指摘するように、対訳の中国語は学習者が産出した日本語に対する中国語であり自然な中国語ではないため、対照研究としては成立しにくいという問題もある。本研究の最終的な目的は、学習者の母語を視野に入れた日本語の記述であり、対照研究として適切なデータ処理や分析を行っているのではないところに本研究の限界もあると考える。



## 第6章 調査の結果

1. ①作文対訳データベース
  1. 1 従属節の誤用
  1. 2 中止節選択の問題
  1. 3 時間節の問題
  1. 4 基本形の問題
  1. 5 理由節の問題
  1. 6 条件節の問題
  1. 7 引用節の問題
  1. 8 「の/こと」節の問題
  1. 9 その他
  1. 10 まとめ
2. ②中日翻訳問題
3. ③深圳・熊本作文対訳データ

### 1. ①作文対訳データベース 1. 1 従属節の誤用

まず、データ①の作文対訳 DB について、従属節の形式別に数えた誤用数をまとめたものが次の表である。

【表1：作文対訳 DB における中国語母語話者による従属節の誤用】

従属節のタイプ/誤用数	従属節のタイプ/誤用数	従属節のタイプ/誤用数
<中止節> 53例 (28.6%) <sup>2</sup>	<基本形> 21例 (11.4%)	<の/こと> 10例 (5.4%)
活用形 25	動詞辞書形→の/こと 4	のは→かは 2
テ形→ <sup>3</sup> 辞書形 9	→「て」節 3	の 1
→条件節 8	→並列節 3	の→こと 1
→理由節 2	→条件節 2	のが→なら 1
→並列節 2	動詞否定形→なくて/ず 3	のを→ように 1
→の/こと 2	動詞辞書形→逆接節 2	こと→ $\phi$ <sup>4</sup> 1
→連用形 1	形容詞辞書形→条件節 2	こと→引用(と) 1
→辞書形 1	動詞辞書形→様態節 1	ことや→したり 1
連用形 1	形容詞辞書形→連用形 1	こと→の 1
なくて→ないで 1	<条件節> 11例 (5.9%)	<逆接節> 8例 (4.3%)
ないで→なくていい 1	ては→たら/ば 2	が 6
<時間節> 32例 (17.1%)	と→ので 1	けれど 1
にしたがい 5	→ば 1	のに 1
とき(に)→とき(に)は 4	→ても 1	
につれて 4	とすぐ→と 1	<並列節> 7例 (3.8%)
とき(は) 4	なら→と 1	たり 4
あと 3	ば→のは 1	とか 1
同時に 3	→のだから 1	一方で 1
とともに 2	→ても 1	し 1
てから 2	だけで→さえ～ば 1	

<sup>2</sup> %は DB のうち中国語話者による従属節の誤用総数 185 に対する割合を示す。

<sup>3</sup> →は他の適切な形式を表す。

<sup>4</sup> こと→ $\phi$ は「こと」を削除した形式が適切であることを表す。

ところ	2	<引用節>	11例	<様態>	1例
あいだ	1		(5.9%)	同じ	(0.5%)
うちに	1	と	7		
次第	1	とは	2	<同時動作>	1例
		とは/というのは	2	ながら	(0.5%)
<理由節>	15例	<目的節>	10例		
	(8.1%)		(5.4%)		
から	5	ように	5		
せい	3	しに	3		
から→て/ので	1	ために	2		
から→ために/せいで	1	<疑問節>	5例		
から→てから	1		(2.7%)		
結果	1	接続	2		
で	1	何を→どう	1		
以上	1	どうするか→どうすれば	1		
ので→せいで/ために	1	するかしないか→			
		してもしなくても	1		

この調査の結果、誤用の多かったものから順に、中止節、時間節、基本形、理由節となる。一方、塩入（2002）の調査では多い順に、中止節、名詞節（「の/こと」節）、条件節、基本形となっており、中止節、基本形は2回の調査とも多くの誤用数を示した。

前回と今回の調査での誤用数の順位を比較して大きく異なるのは、今回の調査で多かった時間節、また今回の調査では少なかった条件節である。

この順位には、作文のテーマや学習者のレベル等が影響していると考えられる。まず、今回のテーマは「夏休みの一日」という時系列の説明が現れやすい設定であり、時間節の使用が多かったものと思われる。次に、前回の調査は日本語専攻の大学3年生を対象とし、期間も1年間と長く、後半のデータは上級の者も多かったと思われるが、今回の対象の中心（70名中62名）は日本語専攻の大学2年生で、調査の期間も新学年前期の1日であり、初級後半から中級というレベルの者が多く、明らかに前回よりは全体の日本語能力のレベルは低かったため、多様な条件節を使い分ける能力がなかったとも考えられる。

しかしながら、中国語母語話者の複文習得過程を考察した原やす江（2008）によれば、「て」節、「時」節、理由節は、初級終了時から使用される形式であり、逆接節や条件節は中級後半になると使用が多くなるという。今回の筆者による調査の対象が中級前期程度の学習者であったことを考えれば、「て」節、時間節の誤用が多かったのも、作文のテーマの影響だけでなく、この学習段階の学習者にとって使用頻度が高いからであるとも考えられる。

いずれにせよ、中止節と基本形の誤用が多いことは、中国語を母語とする日本語学習者が接続表現を選択する場合、中止節と基本形は選択しやすいことを物語っている。以下では、今回誤用の多かった順に例を見ていく。

## 1. 2 中止節選択の問題<sup>5</sup>

中止節（て）形、連用形）の誤用について見ると、53例のうち9例は活用に関する誤りであるが、それを除いてもやはり従属節選択においては最も誤りの多い形式と言える。とくに「て」形は日本語の文接続の際にとりあえず学習者が選択する最も安易な形式であり、誤りも多くなっている。

以下、誤用の多い2つのタイプ【条件節との間の選択の誤用】と【文終了の誤用】について例を見る。なお、以下ではa.は誤用例、b.はその本人による対訳、c.は筆者によるb.の日本語訳を示す。

<sup>5</sup> 以下、作文対訳DBの分析は、塩入（2012a）を加筆修正した。

### 【条件節との間の選択の誤用】

以下の例は、いずれも条件節とすべきところを「て」節を用いた例である。

- (1) a. もしある人はたばこを吸いたくて、彼は専門の地方へ行くはずです。(①085j)  
b. Rúguǒ yǒu rén xiǎng xīyān, nàme qǐng dào zhuān wèi xīyānzhě shèzhì de dìfang qù.  
如果有人想吸烟, 那么请到专为吸烟者设置的地方去。(①085c)  
c. もしタバコを吸いたい人がいれば、喫煙者専用の場所に行ってください。
- (2) a. パーティに参加する人々は、いつもパーティのため、「どんなプレゼントをあげていいですか」と言うことを考えています。(①081j)  
b. Bèi yāoqǐng de rén jīngcháng wèi sòng shénme lǐwù ér gǎndào fánnǎo.  
被邀请的人经常为送什么礼物而感到烦恼。(①081c)  
c. パーティに招待された人は、いつもどんなプレゼントをするか悩みます。
- (3) a. 人々ははたしい関係を表しに、いつも高いプレゼントをあたえます。そして、プレゼントの値段はだんだん高くなりました。でも、プレゼントが高くて、関係ははたしいですか。(①081j)  
b. Érqiě rénmen yě zhújiàn xíngchéng yì zhǒng guānniàn, juéde lǐwù de jiàqián yuè gāo, jiù yuè biǎoshì liǎng gè rén de guānxi qīnmì.  
而且人们也逐渐形成一种观念, 觉得礼物的价钱越高, 就越表示两个人的关系亲密。(①081c)  
c. でも、プレゼントが高いほど関係は親しいのでしょうか<sup>6</sup>。

例 (1) のように、仮定条件節「吸いたかったら」「吸いたければ」を選択すべきところを「て」節にした誤用は、前回の調査でも多かった。

例 (2) は条件節を用いて評価を表す固定した表現<sup>7</sup>「あげたらいい」「あげればいい」「あげるといい」などが適切であるが、「あげて」あるいは「あげるのは」のように名詞節や「て」節を選んだ誤用が見られた。

例 (3) は比況の形式「高ければ高いほど」を用いたり、条件節「高かったら」「高ければ」あるいは名詞節「高いのは」などを用いたりするところであるが、接続の形がわからず「て」節を選択したものと思われる。

このように、「て」節を含む中止節の誤用に関しては、条件節との間の選択に関わる誤用が多数見られる。例 (2) と (3) の誤用は、主文の事態評価の述語「いい」「親しい」がとる従属節に関する誤用と言える。とくに例 (3) は「親しい」が従属節に名詞節、条件節、理由節などをとるために選択が難しい。

- (4) a. 贈り物を {するのは/すれば/するので/?して}、親しいと言える。  
b. ある人があなたの名前を用いようとしないなら、その人は親しい友と言えるでしょうか。

### 【文終了の誤用】

次の例は、日本語では文を終わらせるべきところを、「て」を用いて接続した例である。

- (5) a. 赤ちゃんが生まれた後に赤い枕をおばあちゃんからもらって、それは子供が元気に育てられるようにお祈りすると言う意味だ。(①017j)  
b. Yīngér chūshēng hòu cóng wàipó nàr dédào hóngsè de xiǎo zhěntou. Yisi shì zhùfú háizi nénggòu jiànkāng chéngzhǎng.

<sup>6</sup> 例 (3) は日本語作文とその中国語訳が対応していないため、(3c) は (3a) の日本語を訂正したものである。

<sup>7</sup> 高梨信乃 (2010) では「- いい/いけない」型複合形式と呼び評価のモダリティに位置付ける。

婴儿出生后从外婆那儿得到红色的小枕头。意思是祝福孩子能够健康成长。

(①017c)

- c. 赤ちゃんが生まれるとおばあちゃんから赤い枕をもらいますが、それは子供が元気に育てられるようにお祈りするという意味です。
- (6) a. テレビからパレードでの新型の武器をみたことがあります。今の世界はやはり不安定で、侵略戦争は常ねにあって、毎日地球で銃声が絶えなくて、こういう情勢で、強大な軍隊を建てる必要はあります。(①026j)
- b. Hái zài diànshì shàng kànjiànle yóuxíng zhōng de xīnshì wǔqì. Dāngjīn shìjiè réng bù āndìng, qīnlüè zhànzhēng shíyǒu fāshēng, měirì qiāngshēng bùjué yú ěr. Dāng cǐ xíngshì, yǒu bìyào jiànli yì zhī qiángdà jūnduì.  
还在电视上看见了游行中的新式武器。当今世界仍不安定，侵略战争时有发生，每日枪声不绝于耳。当此形势，有必要建立一支强大军队。(①026c)
- c. テレビでパレードの中の新型武器を見ました。今、世界はまだ不安定な状態で、時には侵略戦争もあり、毎日銃声が絶えません。こういう状況からみると、強大な軍隊を打ち立てる必要があります。
- (7) a. 新年は一年中の一番重要なお祭りで中国人に「春節」と言う美しい名前を呼ばれて、農歴の二日に春になるとき過こすからです。(①073j)
- b. Xīnnián shì yì nián zhōng zuì zhòngyào de jiérì, Zhōngguó rén yīnwèi tā zǒng zài chūntiān dàolái de èryuèfèn dàolái ér gěi tā qǐ le yí gè hǎotīng de míngzi jiào “chūnjié”.  
新年是一年中最重要的节日，中国人因为它总在春天到来的二月份到来而给它起了一个好听的名字叫“春节”。(①073c)
- c. お正月は一年で一番重要な祝日で、いつも春が間もない二月にあるので、中国人は「春節」という美しい名前をつけました。

例 (5) ~ (7) はそれぞれ「もらいます」「絶えません」「呼ばれています」のように、そこで文を終了するか、例 (5) の「もらいますが」のように独立度の高い節で接続するのが適切であると考えられる。あるいは、例 (7) は「春が間もない二月にあるので、春節という美しい名前をつけた」という因果関係を倒置してもよい。

例 (5) (6) はいずれも中国語の対訳でも文を終わらせているのだが、日本語では「て」形で接続している。これはいずれも、後続する文に前の文の一部を指すことばが存在し、2文の意味的な関係が比較的強いものであることがわかる。たとえば、例 (5) では2つ目の文は1つ目の文を指し、「それは……という意味です」という文になっている。例 (6) も、後続の文が「こういう状況からみると」のように前の文を指している。したがって、中国語では2文に分かれていても、前後の文の意味的な関係が強いために接続したのだろうと考えられる。この例からも、独立度の高い2文を接続する際も、やはり「て」節が最も容易に選択されていることがわかる。

### 1. 3 時間節の問題

今回の調査の結果で特徴的だったのは、時間節の誤用が多かったことである。これは、先に述べたように、与えられた作文のテーマが時系列で説明するものが多かったためと、被験者の日本語のレベルが初中級であったことなどにより使用数が多かったものと考えられる。

このことは、今後学習者コーパスを構築していく際に1つの課題を示している。すなわち、単文よりも複文の場合はその接続関係に、前件と後件の論理関係や時間関係といった

意味関係を含んでいるため、産出される言語データは、課題となる作文のテーマに左右されやすいと考えられる。「て」節、基本形、「の/こと」節といった多様な意味関係に用いられる従属節とは異なり、時間節や理由節のような、状況によって論理や時間を表し分ける形式の場合、文章のテーマや内容により使用頻度がかかなり異なるものと考えられる。

以下では、時間節の誤用のなかで多く見られた、【主文に制約のある従属節の誤用】【従属節に付く助詞に関する誤用】【必須条件に関する誤用】の3種の誤用について見ていく。

### 【主文に制約のある従属節の誤用】

時間節に関する誤用では、とくに中上級レベルの時間表現を用いる場合に主文末の制約などについて完全に習得できていない例が見られた。

- (8) a. 中国は改革開放後、西洋と交流の機会がだんだん多くなったことに従って西洋式の結婚式典を行う若者も多くなっている。(①040j)
- b. Suǐzhe gǎigé kāifàng de dàolái, Zhōngguó jiēchù xīfāng de jīhuì jiànjian biàn duō le, cǎiqǔ xīfāng jiéhūn yíshì de niánqīngrén yě jiànjian duō le qǐlái. 随着改革开放的到来，中国接触西方的机会渐渐变多了，采取西方结婚仪式的年青人也渐渐多了起来。(①040c)
- c. 中国は改革開放後、西洋と交流の機会が徐々に多くなるにつれ、西洋式の結婚式を行う若者も増えつつある。
- (9) a. ところで最近、たばこを吸う人が段段増えるにつれて、この要求はもっと厳しく見える。(①063j)
- b. Dàn suǐzhe yān mǐn de jiànshēng, zhè zhǒng yāoqiú jiù gèng xiǎnde kēkè le. Zěnmē bàn hǎo ne? 但随着烟民的渐升，这种要求就更显得苛刻了。怎么办好呢？(①063c)
- c. ところで、最近、喫煙者の数が増えるにともない、この要求はもっと深刻になっているようである。どうすればいいのだろうか。

例(8)(9)の例はそれぞれ、時間節のうち最も誤用の多かった「にしたがい」「につれ」という変化の連動を表す形式の誤用例である。これらはいずれも従属節内の動詞の形だけでなく、主文の文末表現にも制約がある。例(7)は「多くなるに従って」のように、従属節自体の形を直す必要があり、一方、例(8)は主文を「厳しくなっているように見える」のように、変化の意味を表したいところである。学習者はこれらの従属節の意味に対応する中国語が「随着（につれ）」であるということは理解していても、日本語の個々の形式の用法を完全には理解、習得できていないと考えられる。

また、「にしたがい」「につれ」と似た用法の従属節として、「と同時に」もやはり使用数が多いにもかかわらず誤用の多い形式である。

- (10) a. だから、基本的な権利をもらった同時に「別の人の健康のため」と言う義務はあるべきだ。(①051j)
- b. Suǒyǐ zài dédào le jīběn de quánlì tóngshí, yě yīngyǒu “Wèile tārén jiànkāng” zhuó xiǎng de yìwù. 所以在得到了基本的权利同时，也应有“为了他人健康”着想的义务。(①051c)
- c. だから、基本的な権利を得ると同時に、「他人の健康のため」を考える義務も担うべきだ。

中国語の「同時（同時に）」は日本語の「と同時に」と、意味的にも形態的にも近く、却って丁寧に習得されていない傾向の強い語の1つである。時間節にはこうした形式が多く存在する。

### 【従属節に付く助詞に関する誤用】

時間節の誤用には、例(11)のように「とき」と「ときに」「とき（に）は」との違いを

理解していない例も多く見られる。これは、初中級ではまだ助詞の有無による意味・用法の違いが未習得であることと、上述したように一見して同形同意と思われる語の1つであるということなどによるだろう。

- (11) a. 春節は中国の最大伝統行事として中国人が春節を過ごす時一年中の中で一番嬉しい時です。 (①067j)
- b. Chūnjié zuòwéi Zhōngguó zuìdà de chuántǒng jiérì, guò chūnjié de shíhou shì Zhōngguó rén yī nián dāngzhōng zuì kuàilè de shíhou.  
 春节作为中国最大的传统节日，过春节的时候是中国人一年当中最快乐的时候。 (①067c)
- c. 春節は中国の最大の伝統行事であり、春節を過ごすときは中国人が一年で一番楽しい時です。
- (12) a. 子だちは道理をわかっていた時手おくれになったほうです。 (①085j)
- b. Dāng tāmen míngbai de shíhou, wéi shí yǐ wǎn.  
 当他们明白的时候，为时已晚。 (①085c)
- c. 子供たちがわかったときにはもう遅いです。

例 (11) (12) は、いずれも理由は異なるが、「ときは」が適切である。例 (11) の中国語は「过春节的时候是…的时候 (春節を過ごすときは…ときだ)」という文型になっており、「とき」は実質名詞に近く、日本語では「ときは」を用いる。一方、例 (12) は主文が事態評価の述語「楽しい」を用いた属性を表す文で、時間節は主題化して設定時 (reference time) を表し、主文の事態のアスペクトも「もう…していた」のような継続相となる。

### 【必須条件に関する誤用】

第1部第3章3. 3で述べたように、日本語では時間節と条件節の形式が混在する、必須条件 (李, 2011) を表す日本語は、誤用が非常に多い。

- (13) a. 花婿は友達たちと花嫁の家へ行って、花嫁の姉妹や友達に何回も頼んで、「紅包」(お金が入る赤い紙封筒)を出してからさえ花嫁を連れて行ける。 (①019j)
- b. Xīnláng hé péngyou dào xīnniáng jiā, kǔkǔ bàituō xīnniáng de péngyou jiěmèi, bìng fā gěi “hóng bāo” zhī hòu cái néng dài zǒu xīnniáng.  
 新郎和朋友到新娘家，苦苦拜托新娘的朋友姐妹，并发给“红包”之后才能带走新娘。 (①019c)
- c. 花婿は友人とともに花嫁の実家に行き、花嫁の姉妹と友人に何回も頼んで、「紅包」を出してはじめて花嫁を連れて行ける。

例 (13a) は、中国語の最低必須条件の構文「…之后才… (…てはじめて…)」を日本語に翻訳した誤用例である。この構文の翻訳は、この調査とは別途行った翻訳の調査でも、中級程度の学習者でも正答率が極めて少なく、「出してはじめて」「出さないと…ない」のような必須条件を日本語で適切に表すことができたのは、一部の上級の学習者のみであった。こうした例は、学習者に対して中国語と対照した説明が有効であると考えられる。

## 1. 4 基本形の問題

述語を接続する際に「する」「した」「大きい」など、述語の基本形を選択してしまう誤用は塩入 (2002) の調査でも多く見られ、中国語母語話者に多く見られる誤りである。これは中国語の文接続をそのままあてはめようとすることによると考えられる例が多く、「て」節を安易に選択する誤用と似ている。

以下では、基本形に関する問題を【形容詞の接続に関する誤用】、【中止節に関する誤用】に分けて見ていく。

### 【形容詞の接続に関する誤用】

動詞の接続に「て」を用いるのが定着しているのに比べ、形容詞を接続する際の活用は比較的定着しておらず、そのまま用いてしまう例が見られた。

- (14) a. しかし、たばこを吸うことに慣れやすい、悪いと分かっても、やめにくくなった。 (①046j)  
b. Dàn xīyān yīdàn chéngwéi xíguàn, xiǎng jiè jiù nán le.  
但吸烟一旦成为习惯，想戒就难了。 (①046c)  
c. しかし、喫煙が一旦習慣になったら、やめにくくなりました。
- (15) a. 人間の権利として、たばこを禁止することがおかしい、合理ではないのですが、「別の人と関係がない」言方がありますし、実は別の人と関係が本当に全然ありませんか？ (①051j)  
b. Zuòwéi rénquán, jìnzhǐ xīyān bú shì yǒudiǎn kěxiào, bù tài hélǐ ma? Suīrán “xīyān shì zìjǐ de shì, hé biérén wúguān ” zhèzhǒng shuōfǎ yě yǒu, dànshì zhēn de wánquán yǔ tārén wúguān ma?  
作为人权，禁止吸烟不是有点可笑，不太合理吗？虽然“吸烟是自己的事、和别人无关”这种说法也有，但是真的完全与他人无关吗？ (①051c)  
c. 人間の権利として喫煙を禁止することは、おかしくて理不尽なことだと思いませんか。「他人と関係ない」という言い方もありますが、本当に他の人に全然関係ないのでしょいか。

例 (14a) (15a) は、下線部の接続部分が形容詞で、本来「慣れやすく」「おかしく」のような連用で接続したり、「…やすい」「おかしい」のような並列節などにするのが適切であり、いずれにせよ基本形のままでは不適切と考えられる。

### 【中止節に関する誤用】

「て」形と同様に基本形も、文を接続する際に安易に選択しやすい形式の1つである。以下の例は、いずれも中止節を用いるところを基本形にした例である。

- (16) a. だから、全社会がこの問題を重視しなければならない、公共の場所ではたばこを吸わないべきです。 (①031j)  
b. Suǒyǐ , quán shèhuì dōu yīnggāi zhòngshì zhège wèntí, bú zài gōnggòng chǎngsuǒ xīyān.  
所以，全社会都应该重视这个问题，不在公共场所吸烟。 (①031c)  
c. だから、社会全体がこの問題を重視し、公共の場所ではタバコを吸うべきではない。
- (17) a. 神様を迎えに人々は花竹につける、たいへん美しいです。 (①083j)  
b. Wèile “yíngshén ” rénmen fàng qǐ le biānpào, fēicháng piàoliang.  
为了“迎神”人们放起了鞭炮，非常漂亮。 (①083c)  
c. 神様を迎えるために、人々が爆竹に火をつけて、とてもきれいです。

例 (16a) (17a) はいずれも中国語の対訳では文を終わらせずに続けている。日本語では例 (16c) (17c) のように「て」節など中止節で接続するか、文を終わらせる。

## 1. 5 理由節の問題

理由節についての誤用は、他の従属節との選択の誤りというより、理由節相互の選択での誤用が多いのが特徴的であった。また、「以上」「結果」のような中上級以上の従属節を用いた際に不完全な文を産出しやすいのは、時間節と同様の傾向である。以下では、理由節で多く見られた誤用の問題を、【理由節相互の選択の誤用】と【同形の従属節を用いる場合の誤用】に分けて見ていく。

### 【理由節相互の選択の誤用】

以下の例はいずれも理由節「から」を用いた例である。

- (18) a. しかし、まだ千万の人は職業が特殊から、一家だんらんできない。 (①075j)  
b. Dàn réng yǒu hěn duō rén yóu yú gōngzuò, wúfǎ yǔ jiārén tuányuán.  
但仍有很多人由于工作，无法与家人团圆。 (①075c)  
c. しかし、まだ多くの人は仕事のせいで一家団欒ができない。
- (19) a. 「中秋」と言うのは、秋の3ヶ月の真ん中にあたる月からです。 (①043j)  
b. Suǒwèi zhōngqiūjié yě jiùshì chūyú qiūtiān dì sān gè yuè zhōng de nà tiān.  
所谓中秋节也就是处于秋天第三个月中的那天。 (①043c)  
c. 「中秋節」というのは、秋の三ヶ月の真ん中に当たる日だからです。

例(18)は語彙をそのまま用いるとすれば、「特殊だから」、例(19)も「月だから」のようにすべき例であり、名詞に直接接続してしまう誤用が多く見られた。これらは接続の形のミスでもあるが、例(18)は一般的な理由を述べており、個別の事実を述べる「から」より「ために」「せいで」のような他の理由の形式が適切な例でもある。

- (20) a. 子供は両親を失うとか、たばこを吸う人は生殖できないとか、実は、たばこを吸うから引いた悲しい事件はもうたくさんだった。 (①063j)  
b. Shíjìshàng, yóu xīyān yīnqǐ de bēijù shìjiàn yǐjīng yǒu xǔduō le.  
实际上，由吸烟引起的悲劇事件已经有许多了。 (①063c)  
c. 実際、たばこを吸うことで引き起こされた悲劇はこれまでに多くある。

例(20)は「ために」あるいは「ことで」「ことにより」のように、上級の理由の形式を用いる例である。

### 【同形同意に関する誤用】

「以上」「結果」といった接続形式は、中国語にも同じ意味の語彙があり、用法の違いが未習得である例が多い。

- (21) a. しかし、誰にもたばこを吸う権利がある以上、誰にもほかの人にたばこを吸われない権利もあるべきです。 (①054j)  
b. Dànshì, jìrán wúlùn shuí dōu yǒu xīyān de quánlì, nà wúlùn shuí yě dōu yǒu bù xīyān de quánlì.  
但是，既然无论谁都有吸烟的权利，那无论谁也都有不吸烟的权利。 (①054c)  
c. しかし、誰にもタバコを吸う権利がある以上、誰にもタバコを吸わない権利もあるはずだ。
- (22) a. たばこをよく吸うことの結果、人はたばこを依頼する。 (①014j)  
b. Jīngcháng xīyān de jiéguǒ shǐ rén duì yāncǎo chǎnshēng yīlài gǎn.  
经常吸烟的结果使人对烟草产生依赖感。 (①014c)  
c. タバコを常に吸うと、結果的にタバコに頼るようになる。

例(21)は理由節「以上」を用いて理由を強調しているが、主文の文末において蓋然性の高さを表すモダリティ形式「はずです」とすべきところを、当為を表す「べきです」を用いた例である。これは「以上」の用法の誤りと言うより、類義のモダリティ形式間の選択のミスによるものかもしれない。

例(22)の「結果」も、中国語と同形同義語とみなされやすいが、日本語の「結果」は「吸った結果」のように過去形に接続する用法があることと、主文も「…ようになる」のように結果として生じた変化を表す必要がある。

## 1. 6 条件節の問題

条件節は前回の調査でも誤用の多い形式であったが、今回の調査でも多く見られた。こ



ここでは、【条件節・時間節の選択の誤用】【「ては」の誤用】【必須条件に関する誤用】の3種の誤用について考察する。

### 【条件節・時間節の選択の誤用】

以下の例はいずれも条件節を用いているが、他の条件節や時間節が適切な例である。

(23) a. 除夜は中国人にとって、旧暦新年よりも大切だと言えばいい。 (①011j)

b. Chúxīyè duì Zhōngguó rén lái shuō, shènzhì bǐ dànián chūyī hái yào Zhòngyào.

除夕夜对中国人来说,甚至比大年初一还要重要。 (①011c)

c. 除夜は、中国人にとって、元旦より大切であると言ってもよい。

(24) a. 兄もたばこをすっていますが、「部屋の中ではだめ」と言われましたから、すいたいと、外へ出なければなりません。 (①034j)

b. Gēgē yě chōu yān, dànshì yīnwèi bèigào zhī “ bù néng zài wū nèi chōuyān ”, suǒyǐ xiǎng chōu de shíhòu bùdébù qù wàimian.

哥哥也抽烟,但是因为被告之“不能在屋内抽烟”,所以想抽的时候不得不去外面。 (①034c)

c. 兄もたばこを吸いますが、「部屋の中ではだめ」と言われましたから、吸いたい時は外へ出なければなりません。

例(23)は「言って」「言っても」、例(24)は「吸いたかったら」「吸いたいときは」などが適切で、条件節と他の条件節や譲歩節、時間節との違いに関する誤用である。

### 【「ては」の誤用】

今回条件節の誤用で見られた傾向として、「ては」「かぎり」のような中上級以上の条件節の形式は、調査した学習者の日本語能力のレベルでは使用が難しかった。

(25) a. 実は誰でも「タバコを吸っては健康に悪い」という一般的知識を分かっています。 (①018j)

b. Qíshí, shuí dōu zhīdào xīyān yǒuhài jiànkāng.

其实,谁都知道吸烟有害健康。 (①018c)

c. 実は、誰でも、喫煙が健康に害があるという常識はわかっている。

まず、例(25a)の例では、この学習者は「ては」節の主文が一般的に望ましくないことを表すことが多いという意味・用法を学んでいると思われる。この誤用の説明にはいくつかの可能性がある。1つは、恒常的な因果関係には名詞節を用いるのが適切であるというものである。「一般に」を用いた以下の例で「ては」節は用いにくい。

(26) 一般に、パソコンを{見続けるのは/?見続けては}眼に悪い。

もう1つの説明は、例(25a)の「ては」節の述語の形に関するもので、「タバコばかり吸っては健康に悪い」とすると許容度が高くなる。「ては」節が一般条件を表すことができ、その場合主文に可能(不可能)の表現が多いことは塩入(1993)、前田(2009)で指摘されているが、主文だけでなく従属節の述語の種類により一般条件の表しやすさに違いがあるものと考えられる。以下の例(27a)では、「ては」節の述語が状態であり、複文が一般条件文を表しているのに対し、例(27b)の「食べては」という形の場合、従属節が個別の事態と解釈されやすいことを示している。

(27) a. ジャンクフードばかり食べては、ビタミン不足を起こし、太りやすくなります。 (『美脚づくり』ストレッチ』BCCWJ)

b. ジャンクフードを食べては、ビタミン不足を起こします。

「ては」節による条件文は「てはいけない」という禁止表現に繋がっており、禁止という行為が对人的なものであるために、個別の事態と解釈されやすいのであろう。

## 【必須条件に関する誤用】

次に、必須条件に関する誤用を見る。

(28) a. たとえば、作家、詩人などはタバコを吸うかぎり靈感を受けます。(018j)

b. Yān duì yǒuxiē rén lái shì gè hǎo dōngxī, bǐrú zuòjiā, duì tāmen lái shì zhǐyǒu yān cái néng gěi tāmen dài lái línggǎn.

烟对有些人来说是个好东西，比如作家，对他们来说只有烟才能给他们带来灵感。

(018c)

c. たとえば、作家などはタバコを吸わないといい考えが浮かばない。

上の例では、中国語の対訳「只有…才能… (…てこそ…)」は必須条件を表し、学習者はそれを表すために「かぎり」を用いたものと考えられる。この場合の日本語訳としては、「タバコを吸わないといい考えが浮かばない」のように二重否定を用いたり、「タバコを吸ってこそ」「タバコを吸って初めて」のように「て」節を用いた表現があるが、いずれの表現も中級以下のレベルの学習者には難易度が高い。こうした必須条件を表す条件文については、第1部第3章3.3において李(2007)(2011)の一連の研究により説明した通りである。必須条件を日本語で表そうとして様々な誤用が発生することは、中上級以上の中国語母語話者にしばしば見られる。李(2007)(2011)の結論を支持する結果となった。

## 1.7 引用節の問題

引用節の誤用の中では、例(29)(30)のように、初級で学ぶ接続の形に関する誤用が多いのが目立った。

(29) a. また、たばこの匂いが吸う人が慣れているので、違和感が感じないかもしれないが、その匂いに慣れない、あるいは、匂うと気持ちが悪くなる人も多いと思う。(003j)

b. Érqiě, wǒ rènwéi xīyān de rén huòxǔ shì yīnwèi yǐjīng xíguàn le yān wèi, suǒyǐ bú huì gǎndào rènhé bú shì, dànshì bù xíguàn yānwèi huòshì wéndào yānwèi huì bù shūfu de rén zéshì dàiyǒu rén zài.

而且，我认为吸烟的人或许是因为已经习惯了烟味，所以不会感到任何不适，但是不习惯烟味或是闻到烟味会不舒服的人则是大有人在。(003c)

c. また、吸う人はタバコの匂いに慣れているので、違和感がないかも知れないが、その匂いに慣れないとか、嗅ぐと気持ちが悪くなる人も多いと思う。

(30) a. 子供がたばこを吸うとどうなるでしょうという考えで一度吸って、また二度三度、それからたばこを吸うことが習慣になる。(029j)

b. Tāmen jiù yǒu shì de xiǎngfǎ, zuìhòu, xīyān huì chéngwéi tāmen de xíguàn, zhè huì yǐngxiǎng dào tāmen de jiānglái.

他们就有试的想法，最后，吸烟会成为他们的习惯，这会影响到他们的将来。

(029c)

c. 子供がタバコを試しにと思って一度吸って、その結果、喫煙が習慣になる。これは彼らの将来に影響する。

また、「とは」と「というのは」の違いに関する誤用も見られた。

(31) a. 「たばこをやめよう」とは無理ですけど、「公共の場所で吸わないよう」とは筋が通るはず。(034j)

b. “Bǎ yān jiè diào” suīrán yǒuxiē guòfèn, dàn “bié zài gōnggòng chǎngsuǒ xīyān” yīnggāi héhū dàolǐ.

“把烟戒掉”虽然有些过分，但“别在公共场所吸烟”应该合乎道理。(034c)

c. 「タバコをやめよう」というのはちよっと無理なことだが、「公共の場所ですわないように」というのは筋が通るはずだ。

例 (31) の対訳を見てわかるように、中国語では「把烟戒掉 (たばこをやめよう)」と「虽然有些过分 (ちょっと無理なことだが)」との間に接続の表現はなく、このような場合に引用節を用いたのは適切な選択ではあったが、「とは」と「というのは」との違いが未習得であったために誤用となったものと考えられる。

## 1. 8 「の/こと」節の問題

「の/こと」節の用法は多岐にわたるため、誤用の種類も範囲が広い。今回の調査では、とくに顕著な誤用のパターンというのは見られなかったが、接続の誤り (例 (32))、「の」「こと」相互の選択の問題 (例 (33))、条件節や疑問節など他の形式との間での選択の問題 (例 (34)) が見られた。

(32) a. 結婚の方式を別にして、どこでも同じのは今後二人の世界になります。(①028j)

b. Bù tí jiéhūn de fāngshì, zài nǎlǐ dōu yī yàng de shì jīnhòu de shēnghuó shì èr rén shìjiè le.

不提结婚的方式，在哪里都是一样的今后的生活是二人世界了。(①028c)

c. 結婚の方法を除けば、どこでも同じなのは、以後の生活は2人の世界になるということだ。

(33) a. まず、一番大切なのは人人のからだ。たばこを吸うひとがほとんど男の人です、ところが、女の人と子どもは男の人より悪い影響をうけるのは、ずっとおおいです。(①086j)

b. Shǒuxiān, zuì zhǔyào de shì duì rén de shēntǐ, xīyān zhě duō wéi nánxìng, dàn tā duì nǚxìng hé xiǎohái de yǐngxiǎng yuǎndà yú duì nánxìng de.

首先，最主要的是对人的身体，吸烟者多为男性，但它对女性和小孩的影响远大于对男性的。(①086c)

c. まず、一番大切なのは人のからだです。タバコを吸う人はほとんど男性ですが、女性と子供に対する男性の影響は、男性自身より大きいです。

(34) a. どううまくやって、ふたりの権利を守るのは、今の課題である。(①006j)

b. Zěnyàng néng èrrén de quánlì dōu dédào bǎozhàng, zhè jiùshì xiànzài yào jiějué de wèntí.

怎样能二人的权利都得到保障，这就是现在要解决的问题。(①006c)

c. どうしたら二人の権利を守る(の)かは、現在解決すべき問題である。

例 (32) では、「同じなのは」という接続のミスだけでなく、文末の名詞化が行われていないことも誤用となっており、これも頻繁に目にする誤用である。

例 (33) は、「多い」のとり名詞節として「ことが」が適切であることによる誤用である。

例 (34) は、「疑問詞…(の)か」のように疑問節を用いる際の誤用であり、誤用に「の」節が用いられていたために「の/こと」節の誤用に分類されているが、実際は疑問節の使用に関する誤用とも言えるだろう。

## 1. 9 その他

ここでは以上の分類に入らないものをいくつか取り上げる。

### 【比況に関する誤用】

比況を表す「と同じ(ように)」の誤用に多く見られるのが、「同じ」だけで接続してしまう例 (35) のような誤用である。

(35) a. ……おたばこを吸う権利と同じ別の人のたばこを吸われない権利を邪魔してはいけなんでしょうか。(①056j)

- b. Suǒyǐ, cóng língyī fāngmiàn lái shuō, qítā rén yě yǒu bù xīyān de quánlì ( bù shòu tārén xiāngyān wēihài), zài nín xiǎngshòu yǒu gèrén xīyān quánlì de tóngshí yě bùnéng yǐngxiǎng tārén xiǎngyǒu de bù xīyān de quánlì.

所以, 从另一方面来说, 其他人也有不吸烟的权利 (不受他人香烟危害), 在您享受有个人吸烟权利的同时也不能影响他人享有的不吸烟的权利。 (①056c)

- c. ……タバコを吸う権利があるのと同じように、他人のタバコを吸わない権利があるのを邪魔してはいけないのではないのでしょうか。

日本語の「同じ」は「同じように」「同じくらい」「同じに」のように様々な形式を付随させて連用節として用いられるので、学習者にとってこのような1つの語彙の多様な形式の習得が困難な点になっていると考えられる。

### 【等位節に関する誤用】

「が」のように独立度の高い等位節を用いる際には、次のように、逆接以外の用法での誤用が多い。

- (36) a. 私は前の方が賛成しますが、つぎのように自分の見方を述べます。 (①015j)

- b. Wǒ shì zànchéng qiánzhě de, xiàmiàn xiǎng jiù zìjǐ de yìjiàn chǎnshù yíxià.  
我是赞成前者的, 下面想就自己的意见阐述一下。 (①015c)

- c. 私は前の方に賛成です。次のように意見を述べたいと思います。

この例は会話であればさほど不自然ではないかもしれないが、文章では不相当と見なされやすい。あえて「が」を用いるなら、「前置き」<sup>8</sup>的に「私は前の方に賛成なんですが」のように、前件が後件の説明であることを明示すると許容度が上がる。

## 1. 10 まとめ

ここでは、作文対訳 DB を用いて、中国語母語話者による日本語従属節選択の誤用傾向を分析した。その結果、従属節の選択と文の類型に関わる誤用については以下のようなことが明らかになった。

- ①【**全体の傾向**】学習者コーパスを用いて従属節使用の傾向を考察すると、常に誤用として現れることが多いのは、「て」形、基本形、「の/こと」節である。
- ②【**中止節の誤用**】中止節の誤用には、条件節や名詞節との間の選択に関わるもの、文終了に関するものが多く見られ、「て」節は比較的安易に選択されている。
- ③【**時間節の誤用**】時間節の誤用には、主文に制約のある従属節に関するもの（「につれ」「と同時に」等）、従属節に付く助詞に関するもの（「とき」「とき (に) は」等）、必須条件に関するもの（「てはじめて」等）がある。
- ④【**基本形の誤用**】基本形の誤用には、形容詞の接続に関するもの、文終了に関するものが多く、基本形も「て」節と同様に、安易に選択しやすい接続の形式である。
- ⑤【**理由節の誤用**】理由節の誤用には、理由節相互の選択に関するもの（「から」と「せいで」「ことで」「(た) ために」等）、同形同意の従属節を用いる場合の誤用（「以上」「結果」等）がある。

## 2. ②中日翻訳問題

### 2. 1 調査の結果

②の資料については、それぞれについて使用傾向の多い表現をまとめた。以下、次のような順でそれぞれの問題の回答結果を示す。

- (1) ~ (15) : 翻訳問題文の発音記号と問題文 (調査では発音記号は用いていない)。

( ) : 筆者による翻訳例。

<sup>8</sup> 日本語記述文法研究会 (2008) は等位節の用法に、対比、逆接、譲歩、前置きを挙げている。

a. b. : 比較的多い使用例。

【結果】 : 結果についての解説

【表 2】 : 使用例とその数

なお、下線は分析対象となる部分を示す。

(1) Xīyān hòu, nǎozǐ mǎshàng jiù néng xiǎngchū hǎo diǎnzi de qíngkuàng yě bùshǎo ne.

吸烟后，腦子馬上就能想出好点子的情況也不少呢。

(たばこを吸うと、いい考えを思いつくということもよくある。)

a. たばこを吸ったあと、頭の中にすぐいいアイデアを思いつくことも少なくないですよ。(②-21)

b. しかし、たばこを吸ってから、頭がよく働けると、いいアイデアを考えて来たこともよくあるだもん。<sup>9</sup>(②-022)

【結果】 中国語の問題文に「后(あと)」があるため「あと」「てから」を使った例が多かったが、予想より「たら」も多かった。「と」の使用はやや少なかった。

【表 2-1】

使用例	数
あと(で)	20
たら	18
てから	16
と	9
て	4
その他	3
計	70

(2) Chūnjié duì yú Zhōngguó rén lái shuō, shì zuì zhòngyào de jiérì, suǒyǐ, měijiā měihù dōu zài yī gè yuè qián jiù kāishǐ zhǔnbèi le.

春節對於中國人來說，是最重要的節日，所以，每家每戶都在一個月前就開始準備了。

(春節は中国人にとって最も重要な節句なので、どの家でも1か月前には準備を始める。)

a. 春節は中国人にとって、一番重要な祭りですから、各家庭はみんな春節の一ヶ月まえも準備しはじめます。(②-023)

b. 春節は中国人にとって、一番大切な祝日です。ですから、すべての家族は一ヶ月前からもう準備して始めます。(②-57)

【結果】 継続の意味を「から」で表している誤用や、「もう」などを用いて時間的な早さを強調する例もいくつか見られたが、「前に」「前」の使用例はあっても「前には」のように「は」を用いた例は1つも見られなかった。

【表 2-2】

使用例	数
前から	35
前に	25
前	3
その他	7
計	70

(3) Chūnjié dàgài zài zhēngyuè chūshí zuǒyòu jiù jiéshù le.

春節大概在正月初十左右就結束了。

<sup>9</sup>作文対訳 DB では「吸烟后，腦子一灵光，想出好点子的情況也不少呢。」(①022) となっている例を、調査では少し直して用いている。

(春節はだいたい正月の10日くらいには終わる。)

- a. 春節は正月十日ぐらい終わります。 (2-4)  
 b. 春節はお正月の十日ぐらいまで終わります。 (4-025)

【結果】「ごろ」と「くらい」を動詞の完成相とともに用いる場合の用法の誤用例が多く、また、限度を表す「くらいには」という例は1つも見られなかった。

【表2-3】

使用例	数
ごろ/ごろに/ごろで/ごろまで	28
ぐらいまで/ぐらい/ぐらいで/ぐらいに	19
φ/に	9
その他	14
計	70

(4) Xiāngyān zìcóng dànshēng yǐlái, jiù yǒuzhe xǔduō zhēngyì. Jiūjīng shì hǎo háishi huài zhìjīn méiyǒu jiélùn.

香烟自从诞生以来，就有着许多争议。究竟是好还是坏至今没有结论。

(たばこは誕生してからずっと多くの論争があるが、いい物か悪い物かいまだに結論は出ていない。)

- a. たばこは生まれてから、いろいろな議論があります。いいことか悪いことかいままでも結論がない。 (2-42)  
 b. たばこがあるからいろいろな争論が起きました。いったいいいか悪いかいままでも結論はないです。 (2-15)

【結果】「いまでも」「いままで」「いまだに」「いままでも」「いまだに」「まだ」など、形式的に類似した時間表現の使い分けが不正確な例が目立った。

【表 15-4】

使用例	数
いままでも	23
いままでも/いままでも/いまだにも	14
いまでも/いまにも	14
まだ	8
いまだに	4
今に至っても/今になっても	2
その他	5
計	70

(5) Gēge yě chōu yān, dànshì yīnwèi bèigào zhī “ bù néng zài wū nèi chōuyān ”, suǒyǐ xiǎng chōu de shíhòu bùdébù qù wàimian.

哥哥也抽烟，但是因为被告之“不能在屋内抽烟”，所以想抽的时候不得不去外面。

(兄もたばこを吸うが、「家の中では禁煙」と言われているので、吸いたいときは外へ出なければならない。)

- a. 兄もたばこをすっていますが、「部屋の中ではだめ」と言われましたから、すいたいと、外へ出なければなりません。 (4-034)  
 b. 兄もたばこを吸いますが、「室内ではたばこは禁止だ」と言われたから、吸いたい時、外へ出なくてはいけない。 (2-42)

【結果】「時候(とき)」を「とき」と訳した例が多かったが、「ときは」を使っている例は予想より多かった。「と」などの条件節を使ったのはいずれも上級の学生であった。

【表 2-5】

使用例	数
とき	28
ときは	21
ときに	14
なら	4

たら/と	2
その他	1
計	70

(6) Měicì dào le shí yuè yī rì, jiù huì yǒu hěn duō cóng zǔguó gèdì ér lái de yóukè.  
 每次到了十月一日，就会有很多从祖国各地而来的游客。

(毎年10月1日になると、全国各地から大勢の観光客がやって来る。)

- a. 毎年10月1日になると、たくさんの観光客は全国の各地からここに来ます。(②-1)  
 b. 10月1日になると、たくさんの各地からの観光客がここに来ます。(②-33)

【結果】「と」と並んで「たびに」の使用が多かった。「毎次」の日本語訳として「たびに」がかなり定着しているようであるが、b.の「10月1日」のような必ず巡ってくる時の場合に「たび」を使用するのは、やや不自然であるという作文担当教師の意見もあった。

【表2-6】

使用例	数
と	35
たびに	20
たら	6
名詞止め	3
て	2
その他	4
計	70

(7) Chūnjié li rúguǒ yù dào péngyou huò zhù zài fùjìn de rén, yào shuō “xīnnián hǎo”.

春節里如果遇到朋友或住在附近的人，要说“新年好”。

(春節に友達や近所の人に会ったら、「新年おめでとう」と挨拶する。)

- a. 春節に友達や近所の人が顔を合わせると、すぐ「新年おめでとう」とあいさつする。(④-045)  
 b. 春節に友達または近所に住んでいる人に出会ったら、「あけましておめでとうございます」と言わなければなりません。(②-58)

【結果】「如果」(もし……)の翻訳として、条件節のうちでも「たら」を用いた例が多かった。主文の翻訳では、a.のように「すぐ」を用いて即時性を表した例と、b.のように「なければならぬ」など当為表現を用いた例に分かれた。

【表2-7】

使用例	数
たら	43
と	12
とき	4
ば	3
なら	3
て	2
その他	3
計	70

(8) Dāng wèndào nǚxìng “wèishénme yào xīyān ne?” Tāmen zǒngshì huì huídá “jiěchú fánnǎo”.

当问道女性“为什么要吸烟呢？”她们总是会回答“解除烦恼”。

(女性に「なぜたばこを吸うの？」と聞くと、多くの女性は「ストレス解消」と答える。)

- a. 女性にどうしてタバコを吸うのと聞いたら、彼女たちはいつでも悩みを解消したいとこたえます。(②-025)  
 b. 「どうしてたばこを吸いますか」と彼女たちに聞いた時、よく「屈託した気持ちを慰め

るため」と答えました……

(②-048)

【結果】条件節「たら」「と」を用いた例が多く、主文には「いつも」を用いた例が多かった。条件節と頻度や一般性について意識している例は少ないようである。

【表 2-8】

使用例	数
たら	27
と	22
とき	14
ときに	3
て	3
その他	1
計	70

- (9) Rénmen cóng bīngfēng de héli qǔchū dàkuài de bīng, ránhòu yóu yìshùjiā diāochéng gèshìgèyàng de dōngxi, zuihòu zài bīngli wāchū dòng lái, bǎ cǎisè de dēng zhuāng jìnqù.

人们从冰封的河里取出大块的冰，然后由艺术家雕成各式各样的东西，最后在冰里挖出洞来，把彩色的灯装进去。

(人々は氷河から大きな氷を取り出し、芸術家はそれをいろいろな物を彫り、最後に氷に穴を掘って色のついた電灯を入れる。)

- a. 人間はこおた川から大きな氷のかたまりを取って美術家はさまざまな彫像を作ります。最後に氷から穴を掘って、カラーの電灯を入れます。(②-14)
- b. 人々は氷結する川から大きな氷を取り出してから、芸術家によってさまざまなものが彫られて、最後氷の中で穴を掘って、飾りちょういちんを入れる。(④-64)

【結果】日本語の「最後」という副詞について、「に」「は」といった助詞の有無による用法の違いは意識されていないようである。

【表2-9】

使用例	数
最後に	18
最後は	17
最後	15
それから	11
φ	5
その他	3
計	70

- (10) Xīnláng bìxū jū sān gè gōng bīng wǎng mén li sāi yīxiē “hóng bāo”, mén cái dǎkāi.

新郎必须鞠三个躬并往门里塞一些“红包”，门才打开。

(新郎が三回御辞儀をして扉に御祝儀を挟まないと扉は開かない。)

- a. 新郎は3つのおじぎをして、ドアの内に御祝儀袋を入れて、ドアを開けます。(②-7)
- b. 新郎は必ず三回おじぎをして戸のすきまに「御祝儀袋」を入れてから、ドアが開ける。(②-64)

【結果】「て」「てから」を用いた例が多かったが、「…ないと…ない」のような二重否定を用いて必然条件を表した例も予想より多かった。「てはじめて」を用いたのは上級の学生であった。



【表 2-10】

使用例	数
…て、…開けます/開ける/ひらきます/あけられます/開かれます	18
…て、…やっと…/…て、…そうしたら……	3
…てはじめて…	2
…てこそ、開かれます/…て、…こそ	2
…て、…ばかり	1
…てから、開けます/開く/開かれます/開けられます	10
…てから、ようやく/…たから、開けました/…てからこそ、開く	3
…なければ/…ないと…ない	12
(文末)。それから/そして/そうして/そうすると/すると/それで	6
…と、…開けます/開ける/開けられた	5
あと/あとは/あとで	4
…たら、開かれます/あけられる	2
その他	3
計	70

(11) Dào wǎnshàng shíèr diǎn de shíhòu, quánjiārén wéizuò zài yī zhāng zhuōzi qián chī jiǎozi.

到晚上十二点的时候，全家人围坐在一张桌子前吃饺子。

(夜中の12時になったら、一家で食卓を囲んで餃子を食べる。)

a. 夜12時になると、家族ごぞつて食卓を囲んで坐つて餃子を食べます。(②-10)

b. 夜十二時になる時、家族が全部で食卓を囲んですわつてギョーザを食べます。(②-53)

【結果】「(時間表現) になると」の使用が著しく多く、今回の被験者に定着していることがわかる。日本語の教科書に、「と」の例文として「春になると花が咲く」のような例が挙げられていることが多いためであるかもしれない。

【表 2-11】

使用例	数
12時になると/なつたと	33
12時に/12時ごろ/12時のころ	8
12時のとき/12時のときに/12時ごろのとき	6
12時になるとき/なつたとき	9
12時が来るとき/来たとき	2
12時になって	2
12時になったら/12時が来たら	5
12時になってから	2
その他	3
計	70

(12) Chūnjié zuòwéi Zhōngguó zuìdà de chuántǒng jiérì, guò chūnjié de shíhòu shì Zhōngguó rén yī nián dāngzhōng zuì kuàilè de shíhòu.

春节作为中国最大的传统节日，过春节的时候是中国人一年当中最快乐的时候。

(春節は中国最大の伝統行事であり、春節を過ごす時は中国人にとって一年で一番楽しい時である。)

a. 春節を過ごす時は中国人にとって一年中で一番楽しい時間です。(②-13)

b. 春節は中国はもっとも大事な伝統祭りとして、春節を過ごす時、中国にとって一年中一番楽しい時です。(②-24)

【結果】「时候是…的时候 (…ときは…ときだ)」の日本語訳として「ときは」を用いた例が多かった。こうした名詞節的な「ときは」の用法は定着率が高いようである。

【表 2-12】

使用例	数
動詞 ときは/ときが	27
春節のときは/ころは/あいだは	10
そのときは/そのころは/そのとき	9
動詞 とき/春節のとき	4
動詞 のが/のは	4
春節は/正月は	3
(無回答)	13
計	70

- (13) Shí èr diǎn dào lái, zài yān pào shēng zhōng, rén men hù xiāng zhù fú “xīn nián hǎo”. Zhè shí, dà rén men huì gěi xiǎo hái zǐ yā suì qián.  
十二点到来，在鞭炮声中，人们互相祝福“新年好”。这时，大人们会给小孩子压岁钱。

(12時になると、爆竹の音の中で、人々はお互いに「新年おめでとう」と祝う。この時に大人は子供にお年玉をあげる。)

- a. 十二時になると、爆竹の音の中で、人々はお互いに新年を祈ります。この時、大人たちは子供たちにお年玉をあげます。(②-29)
- b. 十二時になって、爆竹の音の中で、人々はお互いに「あけまして、おめでとう」と祝福する。その時、大人たちは子供たちにお年玉をあげる。(②-19)

【結果】これも (11) 同様、「(時間) になると」の使用が多く、中国語の「到 (時間) 的时候 ( (時間) になったとき ) 」や「 (時間) 到来 ( (時間) がくると ) 」の翻訳として、「になると」の使用がかなり定着していることを伺わせた。

【表 2-13】

使用例	数
十二時になると/十二時が来ると	32
十二時になって/十二時が来て	21
十二時になったら	4
十二時になった	2
十二時は来ます/十二時に来た	2
十二時に	2
十二時の時	2
その他	5
計	70

- (14) Háizi yīn mó fǎng dà rén ér xī yān de kě néng xìng hěn dà. Dāng tā men míng bái de shí hou, wéi shí yǐ wǎn.

孩子因模仿大人而吸烟的可能性很大。当他们明白的时候，为时已晚。

(子供は大人をまねて喫煙する可能性が大きい。物事がわかるようになったときにはもう間に合わない。)

- a. 子供が大人に模倣するのにタバコを吸う可能性は大きいです。彼らが分かる時、もう遅れます。(②-47)
- b. 子供は大人たちをまねて、タバコを吸うことは可能性が大きいです。分かった時はもう何もならないのです。(②-56)

【結果】「たとき (に) は、もう」という従属節と主文のアスペクトが問題になる翻訳の例であるが、「とき」の使用例が多いことから、「とき (に) は」の主文のアスペクトに関する制約については未習得の学生が多いと考えられる。

【表 2-14】

使用例	数
とき	25
ときは	20
わかったら	7
わかると/わかるとなると/時になると	4
ときには	3
ときに/ときが	2
わかるようになって	2
まで/まであるあいだは	2
その他	5
計	70

- (15) Hěn jiǔ hěn jiǔ yǐqián, rénmen zhù zài yí gè cūnzhuāngli, cūnzhuāng de fùjìn zhù zhe yī zhī jiào “ nián ” de guàiwu, yí dào chùxī zhī yè, “ nián ” jiù chūlái bǔshí cūnzhuāngli de háiizi.

很久很久以前，人们住在一个村庄里，村庄的附近住着一只叫“年”的怪物，一到除夕之夜，“年”就出来捕食村庄里的孩子。

(昔々、人々はある村に住んでいた。村の近くには「年」というお化けが住んでいて、「年」は除夜になると出て来て村の子供を捕まえて食べるのだった。)

- a. 昔々、人々はある村に住んでいた。村の周り、年という化け物があって、大晦日になると、出て村の子どもを捕まえて食べます。(②-24)
- b. 昔昔、人たちは村に住んでいました。この村の近くに「年」と呼ばれた化け物が住んでいました。大晦日の夜になったら、年は出できて、村の子供たちを食いに来ました。(②-20)

【結果】これも「(時間)になると」という翻訳が定着している例である。

【表2-15】

使用例	数
になると となると	48
になったら が来たら	9
大みそかの夜・夜に・時、除夜の夜	5
になって	2
その他	6
計	70

## 2. 2 まとめ

以上の例から、従属節の選択と文の類型に関して明らかになったことは、以下のようにまとめられる。

- ①「后(あと)」と「あと」、「时候(とき)」と「とき」のように、中国語と日本語の形式が意味的にはほぼ等しく対応している場合、学習者はそのまま対応する日本語を用いることが多いが、その際に起きやすい誤用には、同形式内の問題と類義表現間の誤用がある。前者には「あとに」と「あとで」のように助詞の有無に伴う用法の異同に関するものなどがあり、後者には「后(あと)」の翻訳として「あと」と「てから」の用法の違いが十分習得されていないために生じるものなどがある。
- ②「一か月前」「十日ぐらい」のように名詞レベルでの時間表現は、文中で副詞的成分として用いる場合の用法の習得が不十分である。たとえば、「一か月前に」「一か月前には」の違いや、「\*十日ぐらい終わります」のような例である。時間節の助詞の有無と合わせて説明するのが効果的であると考えられる。

- ③中国語の「毎次」と日本語の「たびに」、「如果」と「もし」のように翻訳がかなり定着している表現もあるが、両者の意味が対応しない場合の誤用（例「\*10月1日のたびに」）も見られ、意味的には理解していても細部の用法の違いに関する習得が不十分な例も見られた。同様の例として、中国語の「时候是…的时候」の日本語訳として「ときは」が比較的定着しているにも関わらず「とき（に）は」の主文のアスペクトに関する制約については誤用が多いことも挙げられる。
- ④中国語の「到（時間）的时候/（時間）到来」の翻訳として「になると」の使用はかなり定着しており、教材などの要因が考えられる。

### 3. ③深圳・熊本作文対訳データ

#### 3. 1 調査の結果

③の資料「深圳・熊本作文対訳データ」について、従属節の種類別に誤用をまとめたものが次の表である。表の左から、当該の誤用の種類、適切と考えられる形式、誤用の数、そして各従属節の誤用数が従属節全体の誤用数に占める割合と誤用例を示している。

【表3：深圳・熊本作文対訳データにおける中国語母語話者による従属節の誤用】

従属節	適切な形式	数	誤用例
<b>中止節</b>		<b>51</b>	<b>21.8%<sup>10</sup></b>
動詞・イ形容詞活用	(活用ミス)	15	真相が <u>見つか</u> て、…… (30) <sup>11</sup>
動詞 テ形	基本形	5	夢の中のほかのことを忘れて、多分夏休みの一日だね。(30)
	条件節	7	一時間して友達がまた来なかった。(56)
	理由節	2	いい友達になって、彼女はもう一度遊に行くのを楽しみする。(38)
	逆接節	1	兄と連絡して、電話を出なかった。(33)
	目的節	2	友達と一緒に遊んで出かけられた。(46)
	連用節	5	会いてできて嬉しかった(23)
	てくれて/てくれたので	1	外国人はありがとうございますと言って、うれしかったです。(49)
なくて	ないで	2	夏休みに何もしなくてこのままで駄目なんだなと思って…… (18)
動詞 連用形	(活用ミス)	1	活動が始まってからすぐアンケートを配い、(13)
	て	1	疲れに家へ帰りました。(10)
	基本形	2	眠くことはありませんでした。(27)
イ形容詞	逆接節	1	忙しくて楽しかったです。(49)
	理由節	1	もう遅くて、疲れた私たちはまたこんどと約束して、家へ帰りました。(54)
ナ形容詞	に	1	まじめで宿題をしました。(32)
名詞	基本形	1	それは僕の夏休みの <u>一日</u> で、普通に楽しかったです。(32)
	逆接節	2	とても <u>疲れ</u> で、有意義でした。(51)
	動詞	1	私はとても緊張で心配でした。(45)
<b>時間節</b>		<b>31</b>	<b>13.2%</b>
てから	(接続ミス)	1	大学に入ってから初めの夏休みがやっと来ました。(2)
	と	1	彼氏の家に着いてから、ご両親は迎えにきました。(23)
	て	1	御客さんがあったと言った、聞いてから私は速く出

<sup>10</sup> %は従属節の誤用総数 234 に対する割合を示す。

<sup>11</sup> 資料③の中での通し番号を示す。

			かけた。(38)
あと	(活用ミス)	2	飲茶する <u>後</u> 、金紫荆広場で散歩します。(20)
	てから	1	朝、八時半に <u>起きたあと</u> で、父と母と一緒に万緑湖へ行った。(42)
	(活用ミス)	1	その日、私たちはアルバムを <u>買ったあと</u> で……(61)
	と/て	1	約束した場合についた <u>あと</u> で、みんなは驚いた。(11)
	あとは	1	特に雨が降った <u>後</u> で、蒸し暑いです。(18)
	あとで	1	部屋を掃除した <u>後</u> に、彼女の歌を聴きました。(21)
とき	(接続ミス)	9	<u>寝る時</u> 、検事についての夢を見ました。(30)
	ときは	4	全部 <u>終わった時</u> 、11時になりました。(28)
	条件	1	どこへも <u>遊びに行くとき</u> 、……(61)
	(接続ミス)	1	<u>暇の時</u> 、海へ行くのは……(16)
	とき(に)は	2	家へ帰った <u>時に</u> 、とても疲れたんです。(28)
	するとき	1	彼氏のお宅に <u>出ようとした時</u> 「会えてできて嬉しかった」と言いました。(23)
まえ	(接続ミス)	2	ボランティアを <u>やった前</u> に、……(26)
ころ	(表記ミス)	1	始める <u>ころ</u> は、……(51)
<b>基本形</b>		<b>26</b>	<b>11.1%</b>
動詞基本形	て	11	お母さんは僕がそんなに早く起きるの <u>を見た</u> 、変と思いましたが、……(31)
	。	3	彼女たちに会って、そのお客さんは友達 <u>の</u> 大学のクラスメートだと <u>言われた</u> 、とてもいい女の子だねえ、と思っていた。……(38)
	過去形	1	すぐ <u>気</u> にいるスカトを <u>見つ</u> かしました。(4)
	の/こと節	3	私の仕事が大体国外の役人を <u>招待</u> する。(35)
	理由節(接続ミス)	1	九番の隊員さんは3ポイントを <u>取り</u> ます <u>だから</u> CCTVの記者は彼女 <u>に</u> インタビューを <u>したい</u> です。(19)
	並列節	1	私より <u>活気</u> がある、健康だね、(38)
形容詞基本形	で	1	おながが <u>いっぱい</u> だ、本当に御馳走になりました。(1)
	連用節	2	彼氏はコンフュータで写真を <u>きれい</u> になりました。(61)
名詞 接続	名詞+で	1	香港は <u>始めて</u> 、とても富裕な <u>ところ</u> です。(36)
	名詞されて	1	香港は <u>国際化</u> に、市民の素質が高い <u>方</u> です。(36)
	名詞+は	1	とくに私の友達林俊菲という人の <u>誕生日</u> だ <u>ほん</u> とに愉快だ。(55)
<b>名詞(の/こと)<sup>12</sup>節</b>		<b>23</b>	<b>9.8%</b>
の	(テンス)	3	あの山に <u>登</u> ったのは私に大変だった。(42)
	て	2	今年の夏休みは私は大学に <u>入</u> ったのは、初めてでした。(26)
	連用形	1	国旗を <u>掲</u> げるのは始まった。(7)
	とは	1	簡単に見えたのに、 <u>すぐ</u> できるのは限らなかった。(7)
	のか	1	いったい <u>ど</u> うやって <u>見</u> つかったのは、……(33)
	たら	1	もう少し <u>寝</u> るの <u>良</u> くないか。(31)
	て	1	<u>助</u> けるの <u>を</u> あけるのは一番楽しいです。(9)
こと	(接続ミス)	3	万緑湖に <u>一</u> 度 <u>い</u> く <u>こ</u> とがある。(42)
	の	6	夏休の生活に <u>慣</u> れる <u>こ</u> とはもう少し時間がかかるかもしれない……(31)
	ところ	1	ホンコンと広東の <u>違</u> い <u>こ</u> とを勉強します。(20)
	連用	2	<u>ず</u> っと <u>両</u> 親の <u>そば</u> に <u>い</u> るとい <u>こ</u> とが <u>ほ</u> う <u>し</u> いで

<sup>12</sup> 名詞節には「ところ」なども含まれるが、今回の調査は「の」「こと」のみとした。

			す。(44)
	あと/と	1	一月の勉強したと、私たちもステージで踊ります。(45)
<b>理由節</b>		<b>20</b>	<b>8.5%</b>
から	(接続ミス)	7	肖さんと林さんの中が <u>いいだから</u> 、…… (55)
ので	(テンス)	7	とても楽しい <u>一日なので</u> 、私に深刻な印象を残させました。(4)
	から/けれど	1	半年ぶりにふるさとに <u>帰るので</u> 、みんな変わりましたか。(44)
	て	1	(御両親は)お茶がテーブルにおいてあるので、「食べてください」と私に言いました (23)
で	て/ので	2	とても <u>込み合いたで</u> 、早く帰るといいだ (いい) と思いました。(10)
に	しに/で	1	よく <u>仕事に</u> 深圳湾体育センター体育館へ行いた (46)
のに	だけなのに	1	ちょっと <u>緊張なのに</u> 、ミスはだいぶおかした。(15)
<b>連体節</b>		<b>18</b>	<b>7.7%</b>
動詞	(活用ミス)	6	皆が読た本 (36) /彼氏と知り合う日 (61)
	φ	1	帰るの車 (16)
ナ形容詞	な/の	1	自分の体のサイズに <u>ぴったり</u> で白いズボン (4)
	(活用ミス)	4	<u>きれい</u> 都市 (40)
イ形容詞	φ	1	<u>楽しかった</u> の一日 (57)
名詞	に/の	2	<u>たくさん</u> 写真 (46) / <u>同じな</u> 料理 (35)
	動詞	2	<u>間違い</u> 道 (33)
べき	はず	1	とても <u>うれしい</u> をするべきの僕は、…… (30)
<b>条件節</b>		<b>16</b>	<b>6.8%</b>
と	φ	1	あるとき、道をたずれると聞かれました。(49)
	(接続ミス)	1	朝、10時に <u>起き</u> と、歯を磨いて… (28)
	て	2	お金が <u>ぜんぜん</u> かからないとよかった。(29)
	たら/てからは	1	ボランティアに <u>なると</u> 、先生から命令がきくと聞きました。(34)
	あと	1	一月の勉強したと、私たちもステージで踊ります。(45)
たら	(接続ミス)	2	時間が早いたら、…… (46)
	て/てから	3	朝の七時半ごろ、バスで卓球館へ <u>行いたら</u> 、朝ご飯を食べました。(52)
ば	(接続ミス)	1	友達と話れば、眠くことはありませんでした。(27)
	のは	1	車の行程は19時間で、ずっと <u>立てれば</u> 私にとって無理です。(9)
なら	たら	1	もしもこれからまた皆に <u>会えるなら</u> 、嬉しいと思う。(47)
ても	(接続ミス)	1	疲れでも楽しい夏休の一日でした。(10)
	けれど	1	私はあんまり上手じゃなくても、友達と一緒に時間をとても楽しみました。(54)
<b>引用節</b>		<b>15</b>	<b>6.4%</b>
と思う	φ	1	私たちはとても楽しかったと思いました。(4)
動詞	(接続ミス)	6	きっとよく片づけておいてと思います。(23)
ナ形容詞・名詞+と	(接続ミス)	4	疲れたがとても <u>有意義</u> と思います。(5)
イ形容詞	(接続ミス)	4	感動させることも <u>多いだ</u> とっていました。(21)
<b>等位節</b>		<b>13</b>	<b>5.6%</b>
けれども/けど/けれど	(テンス)	2	志願者の仕事は <u>疲れ</u> ますけど、本当に楽しかったです。(57)
	が	4	たとえば、杭州、 <u>ペキン</u> などですけど、一番…ホンコンです。(20)

	て	1	うつくしい景色も見ましたけど、皆は楽しかったです。(60)
が	ので	3	私の日本語はあまり <u>上手</u> ですが、通訳することをできません。
	て	1	プレゼントをあげたいと思っていますと <u>言</u> われましたが、 <u>彼氏は図書館の前で会うと約束</u> しました。(61)
	。	1	やっぱり <u>おいしい</u> でしたが、皆楽しく食べていました。(40)
	ながら/テンス	1	<u>残念</u> でしたが、私は彼のことが好きじゃありません。(50)
<b>並列節</b>		<b>9</b>	<b>3.8%</b>
たり	活用	5	インターネットを <u>楽し</u> みしたり、……(32)
	たりすることで	1	主要なことは <u>注意事項</u> を翻訳したり、道を尋ねる問題を <u>答</u> えたり、 <u>熱心</u> にした。(46)
し	(接続ミス)	3	道も <u>きれい</u> し、……(40)
<b>付帯状況節</b>		<b>5</b>	<b>2.1%</b>
ながら	(接続ミス)	3	<u>歩</u> いながら…(37)
	て/が	1	私は平常と同じように早く <u>起</u> きながら、早く朝ご飯を食べなければバスに <u>乗</u> らなかつたと思っていました。…(31)
まま	ながら	1	歌を流した <u>まま</u> 私は鼻歌を歌ったことがあります。(21)
<b>疑問節</b>		<b>4</b>	<b>1.7%</b>
どうして～か	(テンス)	1	<u>どうして</u> この仕事を選ぶのか？(2)
いいかなんか	よかったせいか	1	<u>気持ち</u> がいいかなんか、おなかがいっぱいだ、本当にご馳走になりました。(1)
どう～だ	どう～か	1	<u>どう通</u> すことが有意義だとよく思います。(36)
何をするか	したらいいか	1	長い暑休みには、 <u>何を</u> するかよく分かりません。(37)
<b>その他</b>		<b>3</b>	<b>1.3%</b>
ところは	ところに	1	あの日は、私はボランティアをしているところは、 <u>外国の</u> 教練がひとつは私に歩てきました。(3)
途中で	途中で	1	彼氏のお宅へ行く <u>途中</u> に、彼氏にいろいろな質問が聞きました。(22)
誤用総数		234	

### 3. 2 まとめ

次の章では3. 1の調査結果についての詳しい考察を行うが、おおよそ以下のような事項について行う。

① 従属節は、名詞節から連用節に至る広範囲な形式間で選択されている。たとえば、時間節と条件節のような連用節相互の選択の誤用のほか(例(37a))、基本形と名詞節(例(37b))、名詞節と連用節との間の誤用(例(37c))も多い。誤用例の下の( )は筆者が修正した文である。

- (37) a. 彼氏の家に着いてから、ご両親は迎えに出ました。(3-23)  
(彼氏の家に着くと、ご両親は迎えに出てくれました。)
- b. 私の仕事が大体国外の役人を招待する。(3-35)  
(私の仕事は、だいたい国外の役人を招待することです。)
- c. 「どうしてそんなに早くおきるの、もう少し寝るの良くないか。」お母さんは聞きました。(3-31)  
(「どうしてそんなに早く起きるの？もう少し寝たら？」と母は言った。)

なお、連体節と連用節の選択の誤用はなく、連体節の誤用はいずれも接続や活用に関する誤用(例「帰るの車」)であった。

② 従属節選択の誤用には、選択する形式の意味・構造的な類似性という観点から見て、おおよそ以下の3つのレベルの誤用がある。

**【比較的広範囲な形式間の誤用】**

意味・構造的に最も遠い関係にあるもの。例えば、理由の「て」節と名詞節など。

**【類似した意味・構造的階層にある形式間の誤用】**

例えば、条件の「ば」節と「たら」節など、類義表現と言われるもの。

**【同じ形式での助詞の有無や用法の違いによる誤用】**

例えば、「とき」節と「ときは」節。

従属節によりこの3種の誤用のいずれが多いかは異なる。たとえば、「て」節は様々な形式との間での選択の誤用が多いが、条件節「と」節や「たら」節は類似した形式間での誤用が多い。そして、時間節は助詞の有無に関する誤用が多くなっている。

③ 「て」節は用例が多く、従属節のうち最も安易に選択しやすい形式であると言える。従属節の選択に際しては、「て」節とその他の従属節の違いが問題になることが多い。次の章では、この①～③について詳しく述べていく。



## 第7章 考 察

1. 選択形式の近さから見た誤用のタイプ
  1. 1 比較的広範囲な形式間での選択
  1. 2 類義形式間での選択
  1. 3 助詞の有無に関する誤用
2. 「て」節の誤用例
  2. 1 「て」節の誤用例数と内訳
  2. 2 文の続け方に関する誤用
  2. 3 論理関係に関する誤用
  2. 4 日本語の従属節選択の誤用
3. 時間節の誤用例
  3. 1 時間節の誤用例数と内訳
  3. 2 助詞の有無に関する誤用
  3. 3 条件節に関する誤用
  3. 4 時間節相互の選択の誤用
4. まとめ

### 1. 選択形式の類似性から見た誤用のタイプ

#### 1. 1 比較的広範囲な形式間での選択

前章のまとめで述べたように、従属節選択の誤用には、選択する形式の意味・形態的な類似性という観点から見て、以下のようなほぼ 3 つのレベルの誤用があり、今回の調査でもそれぞれ誤用が見られた。

- ① 比較的広範囲な形式間での選択
- ② 類似した形式間での選択
- ③ 同じ形式での助詞の有無などの選択

まず、ここでは①の具体例を見ていく。①には、従属節の選択の際に、従属節の下位分類の種類異なるもの、たとえば、連用節と名詞節、連用節と基本形といった形式間での選択が問題になるものが含まれる。

そのうち、連用節とそれ以外の従属節に跨る誤用の種類をいくつか挙げる。それぞれの例文は、a. が作文の誤用例、b. が その対訳、c. が筆者による日本語の修正例である。

まず、名詞節と連用節の間での選択には以下のようなものが見られた。

#### 【名詞節と時間節/「て」節】

- (1) a. 今年の夏休みは私は大学に入ったのは、始めてでした。 (③-26)
- b. Jīnnián de shǔjià shì wǒ shàng dàxué hòu de dì yī gè shǔjià.  
今年の暑假是我上大学后的第一个暑假。 (③-26)
- c. 今年の夏休みは私が大学に入って初めての夏休みでした。

(1a) の例は、もし中国語の対訳 (1b) の「后 (あと)」を忠実に訳したとしても、「今年の夏休みは、私が大学に入った後の最初の夏休みでした。」となり、日本語としてはやや不自然である。適切な例としては、「大学に入って初めての」「大学入学後、初めての」「大学に入ってから初めての」などが挙げられる。

#### 【名詞節と条件節】

- (2) a. (=38c) 「どうしてそんなに早くおきるの、もう少し寝るの良くないか。」  
お母さんは聞きました。 (③-31)

- b. “Zěnmè nàme zǎo jiù qǐchuáng le, duō shuì huì bù hǎo ma?”  
 “怎么那么早就起床了，多睡会不好吗？” (③-31)

- c. 「どうしてそんなに早く起きるの？もう少し寝たら？」

例(2a)は、中国語(2b)の直訳のようであるが、日本語で忠告を表す表現<sup>13</sup>「たらどうか」などが条件節を用いることを十分に学習していないと難しく、中国語話者に限らず日本語学習者にとって誤りの多い表現である。

上の例(1a)(2a)では、いずれも学習者が「の」節を用いているが、その中国語の対訳(1b)(2b)の下線部分を見ると、いずれも名詞節としても解釈することができそうであり、中国語から考えれば日本語で「て」節や条件節のような連用節を用いるという発想は生まれにくいかもしれない。また、それぞれの日本語の主文の述語は、「…のは初めてだ」「…のはいい」のように、「の」節の対象に対する評価を表す述語であり、別の文脈では「の」節を用いることができるため、こうした誤用も生じやすいのであろう。

さらに、中国語は接続形式のない述語をコンマで接続することも多いため、日本語でも接続形式を用いないでそのまま接続する以下のような誤用も多い。

### 【名詞節と時間節】

- (3) a. 子供が大人に真似てたばこを吸う可能性が大きいです。分かるのがもう遅いです。(②14-40)  
 b. Háizi yīn mófǎng dàren ér xīyān de kěnéngxìng hěn dà. Dāng tāmen míngbai de shíhou, wéi shí yǐ wǎn. (②14-40)  
 孩子因模仿大人而吸烟的可能性很大。当他们明白的时候，为时已晚。  
 c. 子どもはおとなを真似て喫煙する可能性が大きい。子どもたちが分かったときは、もう遅い。

この例は、日本語で「わかったときはもう遅い」となるように、「遅い」という述語が評価の対象として名詞節も時間節もとれるために生じた誤用である。以下の例は、「遅い」のとり事態3種—名詞節、時間節、「ては」節—を示している。

- (4) a. 佐々木弥太夫の家を継いだのは、二十七、八歳のころというから、かなり遅い。 (『竜馬暗殺』BCCWJ)  
 b. いや、あのときそれをしておけばよかったじゃないかということを言ったときはもう遅いんですよ。(『国会会議録』第104回国会1986BCCWJ)  
 c. すべて滅びてからでは遅いのです。(『神の記録』BCCWJ)

このように、述語が複数の連用節をとる可能性がある場合、連用節と名詞節の間の選択において誤用が生じることになる。

### 【「て」節と基本形】

- (5) a. 僕がそんなに早く起きるのを見た、変と思いましたから、…(略)… (③-31)  
 b. Māma kàn wǒ zhème zǎo qǐchuáng, juéde hěn qíguài...  
 妈妈看我这么早起床，觉得很奇怪，…(略)… (③-31)  
 c. 母は私がそんなに早く起きるのを見て、おかしいと思ったので…

この例は、中国語では接続形式がないことによる誤用と考えられる。日本語では理由を表す「て」節を用いて「…起きるのを見て」、としたいところである。これは、主文に「うれしい」「悲しい」など感情を表す評価の述語がきて、その前の従属節で感情の対象、あるいは感情を引き起こした原因となる事態を表す場合で、中国語では接続表現を用いないために、誤用を引き起こしやすいと考えられる。

<sup>13</sup> 高梨(2010)で「勧め」もしくは「忠告」して機能する評価のモダリティとされる。

## 【「し」節と基本形】

(6) a. 私より活気がある、健康だね、 (③-38)

b. Nà wèi tóngxué zhēnshì gè huópo kāilǎng de nǚháizi ne.  
那位同学真是个活泼开朗的女孩子呢。 (③-38)

c. その子はほんとうに活発で明るい女の子だった。

例 (6b) の中国語は、「活泼 (活発な)」「开朗 (明るい)」という 2 つの形容詞が並ぶ構造で、日本語では等位節の「て」節か「し」節を用いて「活気があって」「活気があるし」となる。

中国語に接続表現がない場合の誤用について、跡上裕子 (2012) は対訳作文 DB を用い、中国語の「複句 (複文)」の類型別に、中国語と日本語の接続表現の不使用を調べている。それによれば、中国語・日本語とも接続表現が使用されない割合が最も高いのは複句の類型が並列関係の場合で、次が因果関係であった。上の例 (5) は因果関係、例 (6) は並列関係であり、跡上 (2012) の結果を支持する一例である。

## 【接続の形式を用いない例】

次の例は、日本語では連用節となることを、接続の形式を用いなかった例である。

(7) a. 毎度10月1日に着いた、たくさんの観光客は国の各地から来ました。 (②6-4)

b. Měicì dào le shí yuè yī rì, jiù huì yǒu hěn duō cóng zǔguó gèdì ér lái de yóukè.

毎度到了十月一日, 就会有很多从祖国各地而来的游客。 (②6-4)

c. 毎年10月1日になると、全国各地から大勢の観光客がやって来る。

c. 毎年10月1日になると、大勢の観光客が国の各地からやって来る。

例 (7a) は、中国語の「到了 (来る、来た)」を単文の文末のように翻訳したために生じた誤用と考えられ、中国語と日本語の文接続のあり方の違いが現れている例である。

同様の誤用は次の例にも見られ、学習者は「到来 (来る)」を接続せずに文を終わらせている。

(8) a. 十二時は来ます。爆竹の声を聞いて、人はお互いに「あけましておめでとう」を祝います。その時に、大人は子供にお年玉をあげます。 (②13-5)

b. Shí èr diǎn dào lái, zài yān pào shēng zhōng, rén men hù xiāng zhù fú “xīn nián hǎo”. Zhè shí, dà rén men huì gěi xiǎo hái zǐ yā suì qián.

十二点到来, 在鞭炮声中, 人们互相祝福“新年好”。这时, 大人们会给小孩子压岁钱。 (②13-5)

c. 十二時になると、爆竹の音の中で、人々は「新年おめでとう」と祝福し合う。このとき、おとなは子どもにお年玉をあげる。

例 (7) (8) の日本語はいずれも「(時間) になると/なったら」のように、時間を表す条件節の形式を用いるのが適切であると考えられるが、中国語では接続の形式を用いず、基本形を用いたり文を終わらせたりしており、この種の誤用は母語の影響が大きいものと考えられる。

これについて、跡上 (2012) を参考にすると、中国語の「複句 (複文)」で継起を表す場合、中国語では接続表現のないものが 55% とかなり高いことが指摘されており、例 (6) のような継起的時間関係を表す場合に接続表現を用いない要因となっていると考えられる。

## 1. 2 類義形式間の選択

データ②の中日翻訳問題では、とくに中国語の影響が大きいと思われる例が見られた。次の例は中国語では「如果 (もし…たら)」という仮定を表す形式を用いているので、70 名の被験者のうち 43 名は「たら」節、12 名は「と」節等と、条件節を用いた例が圧倒的に多かった。このような場合、同じ条件節である「たら」節と「と」節の間の選択が問題に

なる。

- (9) a. Chūnjié li rúguǒ yù dào péngyou huò zhù zài fùjìn de rén, yào shuō “xīnnián hǎo”.  
春節里如果遇到朋友或住在附近的人，要说“新年好”。 (②-7)
- b-1. 春節に友達あるいはあたりの人に合ったら、「あげましておめでとうございます。」と言なければならない。 (②7-3)
- b-2. 春節に友達あるいはそばに住んでいる人に会うと、「あげましておめでとう」と言うはずです。 (②7-13)
- c. 正月に友人や近所の人に会ったら、「新年おめでとう」と言います。

この例の場合は、「たら」節も「と」節も可能であるが、「たら」節を用いると仮定条件の意味がより強く、「と」節を用いると一般条件の意味が強くなる。

次の例も同様で、中国語の「时候（とき）」と日本語の「時」とは形も意味も類似しているので、日本語の使用例も「とき」「ときに」「ときは」など、「とき」を含む形式を用いた例が70名中63名であった。この場合、時間節の諸形式間の選択が問題になる。

- (10) a. Gēge yě chōuyān, dànshì yīnwèi bèigào zhī “bù néng zài wū nèi chōuyān”, suǒyǐ xiǎng chōu de shíhou bùdébù qù wàimian.  
哥哥也抽烟，但是因为被告之“不能在屋内抽烟”，所以想抽的时候不得不去外面。 (②-5)
- b-1. ……ほしい時外で出なければならない。 (②5-3)
- b-2. ……吸いたい時に、外へ行かなければならない。 (②5-4)
- b-3. ……吸おうと思う時は外でたばこを吸わざるをえません。 (②5-9)
- c. ……吸いたいときは、外で吸わなくてはならない。

ただし、中国語の「时候（とき）」が一律に日本語の「とき」節に訳されているわけではなく、下の例のように時間の自然な流れを表す場合には、「とき」節を用いたのは70名中11名、「と」節を用いたのは33名と、「と」節の方が定着していた。これは、調査地の担当教授によると「(時間)になると」という表現は初級教科書にも多く見られるためにかなり定着しているのではないかということであった。

- (11) a. Dào wǎnshàng shíèr diǎn de shíhou, quánjiārén wéizuò zài yī zhāng zhuōzi qián chī jiǎozi.  
到晚上十二点的时候，全家人围坐在一张桌子前吃饺子。 (②-11)
- b-1. 夜十二時になると、家族みんな食卓を囲んですわって餃子を食べます。 (②11-1)
- b-2. 夜12時になる時、家族のみんなは食卓を囲んですわてギョーザを食べます。 (②11-7)
- c. 夜12時になると、家族みんなで食卓を囲んで餃子を食べます。

以上のように、「とき」と「时候」のように日中の語彙の形と意味が近い場合や、「もし……たら/れば」と「如果」のように対応関係がわかりやすいものは、対応する日本語の従属節の形式が複数存在すると、形式間での選択が問題になりやすい。

### 1. 3 助詞の有無に関する誤用

時間節はとくに助詞の有無により用法が異なるが、今回の調査では、「あと」「とき」に助詞の有無に関わる誤用が多く見られた。

次の例はいずれも、助詞の有無や、異なる助詞による意味・用法の違いの習得が不十分であると考えられる例である。

- (12) a. この訓練は10時間に続けますから、寝へ帰た時にとっても疲れたんです。(③-28)
- b. Zhè cì xùnliàn chíxù 10 xiǎoshí, huí sùshè de shíhou yǐjīng hěn lèi le.  
这次训练持续10小时，回宿舍的时候已经很累了。(③-28)

c. 今度の訓練は10時間続いたので、寮に帰ったときはもうぐったりしていた。  
 ここでは「ときに」が選択されているが、「ときに」と「ときは」の意味・用法の違いの習得が不十分であると考えられる。

次の例は状況的な「ところ」の使用に関する誤用である。

(13) a. あの日は、私はボランティアをしているところは、外国の教練がひとつは私に歩てきました。(③-3)

b. Nà tiān, wǒ zài zìyuànzhě zhíbān de shíhòu, yí gè wàiguó jiàoliàn xiàng wǒ zǒu guòlái.

那天，我在自願者值班的時候，一個外國教練向我走過來，(③-3)

c. その日、私がボランティアをしているところへ、外国のコーチが私の方に歩いてきた。

この例は、「ところ」と「ところへ」「ところに」など、助詞の付加した形式の用法の習得が不十分と考えられる例である。

この種の誤用の要因は、母語干渉というよりも、日本語の類似する形式間の違いに関する学習及び習得の問題であると考えられる。

## 2. 「て」節の誤用例

### 2. 1 「て」節の誤用例数と内訳

吉田 (1994)、塩入 (2002) で指摘されているように、「て」節は日本語学習者にとって最も容易に選択しやすい従属節であり、今回のデータ①③のいずれにおいても再確認できた。データ①③における「て」節の誤用例数は次の表のようである。

【表1：データ①における従属節の誤用例数】

従属節の種類	誤用例数 (%)	従属節の種類	誤用例数 (%)
中止節	53 (28.6%)	の・こと節	10 (5.4%)
「て」節	<b>52</b>	目的節	10 (5.4%)
連用形	1	逆接節 <sup>14</sup>	8 (4.2%)
時間節	32 (17.1%)	並列節	7 (3.8%)
基本形	21 (11.4%)	疑問節	5 (2.7%)
理由節	15 (8.1%)	様態節	1 (0.5%)
条件節	11 (5.9%)	付帯状況節	1 (0.5%)
引用節	11 (5.9%)	合計	185 例

【表2：データ③における従属節の誤用例数】

従属節の種類	誤用例数 (%)	従属節の種類	誤用例数 (%)
中止節	51 (21.8%)	条件節	16 (6.8%)
「て」節	<b>46</b>	引用節	15 (6.4%)
連用形	4	等位節	13 (5.6%)
時間節	31 (13.2%)	並列節	9 (3.8%)
基本形	26 (11.1%)	付帯状況節	5 (2.1%)
名詞節	23 (9.8%)	疑問節	4 (1.7%)
理由節	20 (8.5%)	その他	3 (1.3%)
連体節	18 (7.7%)	合計	234 例

データ①と③を比べると、サンプル数はデータ①が89名による89編、データ③が62名による62編、従属節の誤用例数はデータ①が185、データ③が234、1編の作文に現れる従

<sup>14</sup> 「のに」はデータ①では逆接節としたが、データ③では理由節に分類している。各1例ずつある。

属節の誤用例数は、データ①で2.1、データ③で3.8となり、400字から600字の作文1編でおおよそ2~4個の割合で出現することになる。たとえば、以下のデータ③の作文例では、従属節以外の誤用例（波線部）は4、従属節の誤用例（下線部）は3、さらにその中で「て」節の誤用例は4つに1つ、つまり1つの作文で1つは出現していることになる。

【データ③作文例】

私は夏の暑さが好きではありません。深センの夏はとても暑いです。特に雨が降った後で、蒸し暑いです。

多くのクラスメートは今年の夏休みにユニバシアードのボランディアになりました。みんな忙しそうでした。私はボランディアに参加していませんでしたので、みんなより暇でした。ある日、私は夏休みに何もしなくてこのままで駄目なんだなと思って早く起きて朝ご飯を食べて出かけました。私は公園を通って年寄りたちが集まって踊りを踊っているのを見ました。ずいぶん元気そうでしたね。午前中、私は図書館で本を読んでいました。新しい本を三冊借りました。午後は近くのデパートへ行ったり、久しぶりな友達に合ったりして過ごしました。友達とお茶を飲みながら話し合うのは楽しかったです。夜、家族と一緒に料理を作って暖かい気がしました。とても有意義な一日だと思いました。(③-18)

次に、データ③における「て」節の誤用例の内訳を表3に示す。

【表3：データ③における「て」節の誤用例の内訳】

誤用例	訂正	数	例文番号
動詞・イ形容詞テ形活用ミス	活用形の訂正	15	(14)
動詞テ形	基本形	5	(15)
動詞テ形	条件節	7	(16)
動詞テ形	理由節	2	(17)
動詞テ形	逆接節	1	(18)
動詞テ形	目的節	2	(19)
動詞テ形	連用節	5	(20)
動詞テ形	てくれて	1	(21)
なくて	ないで	2	(22)
動詞連用形活用ミス	活用形の訂正	1	(23)
連用形	て	1	(24)
連用形	基本形	2	(25)
イ形容詞テ形	逆接節	1	(26)
イ形容詞テ形	理由節	1	(27)
ナ形容詞で	に	1	(28)
名詞で	基本形	1	(29)
名詞で	逆接節	2	(30)
名詞で	動詞	1	(31)
合計		51	

以下、表3のそれぞれの誤用例を挙げる。下線部が従属節の誤用、下の（ ）は訂正例を示す。

- (14) 我々の検事たちは被害者のところから真相が見つかる、…… (③-30)  
(被害者のところから真相を見つけて)
- (15) 夢の中のほかのことを忘れて、多分夏休みの一日だね。 (③-30)  
(夢の中のほかのことは忘れた)
- (16) 一時間して友達がまた来なかった。 (③-56)  
(一時間しても友だちがまだ来なかった)
- (17) いい友達になって、彼女はもう一度遊に行くのを楽しみする。 (③-38)

- (いい友だちになったので、彼女ともう一度遊びに行くのを楽しみにしている。)
- (18) 兄と連絡して、電話を出なかった。 (3-33)  
(兄と連絡したが、電話に出なかった)
- (19) 時間が早いたら、友達と一緒に遊んで出かけられた。 (3-46)  
(時間が早かったら、友だちと一緒に遊びに出かけられた。)
- (20) 忙しくて部屋を掃除した後に、…… (3-21)  
(急いで部屋を掃除した後で、……)
- (21) 外国人はありがとうございますと言って、うれしかったです。 (3-49)  
(外国人はありがとうございますと言ってくれたので、うれしかったです。)
- (22) 夏休みに何もしなくてこのままで駄目なんだなと思って…… (3-18)  
(夏休みに何もしなかったの/夏休みに何もしなくて、このままでは……)
- (23) すぐアンケートを配い、…… (3-13)  
(すぐアンケートを配り、……)
- (24) 疲れに家へ帰りました。 (3-10)  
(疲れて家へ帰りました。)
- (25) 眠くことはありませんでした。 (3-27)  
(眠いことはありませんでした。)
- (26) 忙しくて楽しかったです。 (3-49)  
(忙しかったけど、楽しかったです。)
- (27) もう遅くて、疲れた私たちはまたこんどと約束して、家へ帰りました。 (3-54)  
(もう遅かったの、……)
- (28) まじめで宿題をしました。 (3-32)  
(まじめに宿題をしました。)
- (29) それは僕の夏休みの一日で、普通で楽しかったです。 (3-32)  
(それは僕の夏休みの一日です。普通で楽しかったです。)
- (30) とても疲れで、有意義でした。 (3-51)  
(とても疲れたけど、有意義でした。)
- (31) 私はとても緊張で心配でした。 (3-45)  
(私はとても緊張して心配でした。)

以上の「て」節に関する誤用例の中で、活用形ミス(例(14)(23)(24)(25))や語彙・品詞的な間違い(例(28)(31))など、形を作る際のミスを除くと、残りの誤用は主に以下のタイプに分けられる。

- ① 中国語での文の続け方を日本語に直訳したと考えられるもの：例(15)(29)
- ② 中国語での2文の論理関係を日本語で表せなかったと考えられるもの：例(16)(26)(27)(30)
- ③ 日本語の従属節相互の選択に関するもの：例(19)(20)(22)
- 以下、それぞれについて見ていく。

## 2. 2 文の続け方に関する誤用

まず、中国語での文の続け方を日本語に直訳して「て」節で繋げた誤用を見ていく。例(15)(29)はいずれも中国語ではピリオドにしているところを、日本語では「て」節や連用形で接続した例である。以下に再掲する。

- (15) ' a. 夢の中のほかのことを忘れて、多分夏休みの一日だね。 (3-30)  
b. Mèng zhōng qítā de shì wǒ wàng le, zhè yě shì shǔjià de yìtiān ba.  
夢中其它的事我忘了，这也是暑假的一天吧。 (3-30)  
c. 夢の中の他のことは忘れた。これも夏休みの一日だ。
- (29) ' a. それは僕の夏休みの一日で、普通で楽しかったです。 (3-32)

- b. Zhè jiùshì wǒ shǔjià li de yìtiān, hěn pǔtōng dàn hěn gāoxìng.  
 这就是我暑假里的一天，很普通但很高兴。 (3-32)

- c. これが僕の夏休みの一日だ。ごく平凡だが楽しかった。

例 (15b) ' の中国語の主文には「这(これ)」という指示が用いられており、第2章1.2でも述べたように、主文の事態が先行する従属節の事態を指すような、主文と従属節の関係が意味的に緊密な場合には、中国語では接続形式が現れていなくても接続の役割を果たしているのではないかと考えられる。

例 (29b) ' は「これが……だ」で文を終わらせて、「……る楽しかった」とそれに対する評価を述べるのが適当であると考えられる。

以上のような例はいずれも中国語と日本語の文の続け方に関わる誤用であるが、ここで挙げたように、後文に前文を指す指示詞や評価の述語があるという程度の意味関係については、日本語は接続形式を用いないのに対し、中国語はピリオドで繋げることができるという違いがある。両言語のこうした接続の違いがどのような意味関係の場合に生じるのか更に調査する必要がある。

### 2. 3 論理関係に関する誤用

中国語での譲歩、逆説といった論理関係の表し方を日本語で表せなかったものとして、例 (16) (26) (27) (30) がある。いずれの場合も中国語では日本語ほど論理関係を表示しない例を日本語で「て」節を用いた誤用である。

例 (16) ' は「て」節にすると日本語では論理関係の明示が不足していると捉えられるので、譲歩節「ても」により通常想定される因果関係（「一時間もしたら来る」）を含意させるのが適切な例である。

- (16) ' a. 約束の時間はごご2時で、すこし早く映画館の前に着た。でも、一時間して友達がまた(まだの意)来なかった。 (3-56)

- b. Yuē dìng de shíjiān shì xiàwǔ de liǎng diǎn, wǒ tíqián jiù dào le diànyǐngyuàn de ménkǒu. Dànshì, yī gè xiǎoshí guòqù le, wǒ de péngyou hái méiyǒu lái.

約定的時間は下午の两点，我提前就到了电影院的门口。但是，一个小时过去了，我的朋友还没有来。 (3-56)

- c. 約束の時間は午後2時だった。私は早く映画館の入り口に着いた。でも1時間過ぎても、友人はまだ現れなかった。

次に、例 (26) (30) は中国語でも「也(も)」 「虽然…(…けれど)」を使って日本語の譲歩節「ても」や逆接節「が」などに相当する意味を表しているにも関わらず、日本語ではそれが表されていない例である。

- (26) ' a. 八月八日から、始め働きました。毎日は忙しくて楽しかったです。 (3-49)

- b. Bā yuè bā rì qǐ, wǒ kāishǐ tóurù dà yùn zhì yuàn zhě de fú wù gōng zuò, měi yī tiān dōu hěn máng lù yě hěn chōng shí.  
 八月八日起，我开始投入大运志愿者的服务工作，每一天都很忙碌也很充实。 (3-49)

- c. 8月8日から大会のボランティアの仕事を始めた。毎日忙しかったけれど、充実していた。

- (30) ' a. 夏休みの一日はとても疲れて、有意義でした。 (3-51)

- b. Suī rán hěn lèi, dàn hěn yǒu yì yì.  
虽然很累，但很有意义。 (3-51)

- c. 疲れたけれど、有意義だった。

また、例 (21) は、中国語訳がないので誤用の原因は推察できないが、日本語では「…と言ってくれたので」のように理由を表す形式に加え、「くれる」のような授受表現も加え、



因果関係を明示することが必要な例である。

(21) 外国人はありがとうございますと言って、うれしかったです。 (③-49)

例 (17) (18) も中国語訳がないが、日本語では理由や逆接といった関係を明示する必要がある。

(17) いい友達になって、彼女はもう一度遊に行くのを楽しみする。 (③-38)

(いい友だちになったので、)

(18) 兄と連絡して、電話を出なかった。 (③-33)

(兄と連絡したが)

例 (27) は、中国語の並列的關係を日本語に十分翻訳できなかった例である。

(27) ' a. 夜の海がとても静かで、風もやさしく吹いて、気持ちよかったです。もう遅くて、疲れた私たちはまたこんどと約束して、家へ帰りました。 (③-54)

b. Yèwǎn hǎifēng xúxú, wǒmen yě hěn píbèi, yuēdìng le xià cì zài lái jiù gè zì huí jiā le.

夜晚海风徐徐，我们也很疲惫，约定了下次再来就各自回家了。 (③-54)

c. 夜も更け海の風も静かになり、私たちも疲れたので、また今度と約束してそれぞれ家に帰った。

(27' b) の日本語訳としては「もう夜も更け、私達も疲れたので」と「も」を用いて並列表現にする翻訳が適切であると思われるが、(27a) では「も」の不使用により並列関係が十分に示されていない。

以上のように、ここに分類した誤用はいずれも日本語と中国語の論理関係の明示のし方が異なることを示しており、こうした用法の翻訳などの指導には、両言語の相違に言及することが効果的であると考えられる。

## 2. 4 日本語の従属節選択の誤用

日本語の従属節相互の選択を誤ったものには、例 (19) (20) (22) がある。次の例は、中国語「去玩 (遊びに行く)」の目的節「(し) に」と「て」節との間の誤用である。

(19) ' a. 一日の仕事終わった後で、もう一度ボランティア・バスに登って学校へ帰った。時間が早いたら、友達と一緒に遊んで出かけられた。 (③-46)

b. Yìtiān de gōngzuò jiéshù hòu biàn zài dēngshàng zhìyuànzhe dàbā huí dào xuéxiào. Shíjiān zǎo de huà hái kěyǐ gēn péngyou chūqù wán.

一天的工作结束后便再登上志愿者大巴回到学校。时间早的话还可以跟朋友出去玩。 (③-46)

c. 一日の仕事が終わると、またボランティア・バスに乗って学校へ帰った。時間が早ければ、友人と遊びに行けた。

次の例は、中国語の「忙碌地 (忙しく)」のような副詞的成分と「て」節との間の誤用である。形容詞の連用形を用いた「楽しく遊ぶ」「おいしく食べる」のような副詞的用法は中級でも誤用が多い。

(20) ' a. ある日、忙しくて部屋を掃除した後に、彼女の歌を聴きました。 (③-21)

b. Yìtiān, mánglùdì dǎsǎowán fángjiān hòu tīngqǐ tā de gē.

一天，忙碌地打扫完房间后听起她的歌。 (③-21)

c. ある日忙しく部屋を掃除したあとで、彼女の歌を聴いた。

例 (22) は、「て」節と他の従属節の選択に関するもので、誤用と言うほどではないかもしれないが、訂正の可能性のある例である。

(22) ' a. 私はボランティアに参加していませんでしたので、みんなより暇でした。

ある日、私は夏休みに何もしなくてこのままで駄目なんだなと思って早く起きて朝ご飯を食べて出かけました。 (③-18)

b. Yǒu yìtiān, wǒ xiǎng zhe shǔjià jiù zhèyàng shénme dōu bú zuò bù xíng a,

yúshì zǎo zǎo qǐchuáng, chī le zǎocān jiù chūmén le.

有一天，我想着暑假就这样什么都不做不行啊，于是早早起床，吃了早餐就出门了。 (3-18)

- c. 私はボランティアに参加してなかったので、皆より暇だった。ある日、私は夏休みにこんなに何もしないのはだめだと思い、早く起きて朝食を食べると出かけた。

上の例で、中国語は「这样什么都不做（こんなに何もしない（こと）」という従属部分が「不行（だめだ/いけない）」という評価の対象となっている。この誤用にはいくつかの要因が考えられる。

(32) うちの子は夏休みに何もしなくてだめだ。

(33) a. 今日は {暑くて/用があって/?財布を忘れて/財布を忘れていて} だめだ。

b. 夏休みに何も {?しなくては/?しないと/しないのは} だめだ。

まず、評価の対象の個別性の要因である。例 (32) のように「だめだ」という評価の対象が「うちの子」のような人や物であれば、「て」節はその評価の理由として適切である。

(22a) ' の例もまったく非文とは感じられないのは、「自分」に対する評価という解釈も感じられるためであろう。「こんなに何もしない（こと）」というものは個別のことではあるが一般的な事態の意味を含んでおり、個別の理由を表す「て」節より、一般的な事態を示す「のは」節の方がより適切に感じられる。

もう1つは、「て」節の事態の文のタイプの問題である。例 (33a) のように、形容詞（「暑い」）、存在動詞（「ある」）、動作動詞の「て」形（「忘れて」）、動詞の継続相の「て」形（「忘れていて」）を比べると、動作動詞の「て」形以外は適切である。「うれしい」などの感情表現がその対象・原因として動作動詞の「て」節をとることと比べると、「だめだ」という評価の意味自体が感情表現より時間的な幅をもった事態に対して下される評価であるという語彙的な意味が反映していると考えられる。

そのほか、「だめだ」のとり従属節について補足すると、「なくてはいけない」という形式との関連も問題になる。「だめだ」は評価の述語として、名詞節や「て」節のほかにも、「ては」節、条件を表す「と」「ば」「たら」節などをとることができるが、例 (33b) のように常にいずれもが可能というわけではない。「なくては」「しないと」などの条件節が不適切であるのは、これらが「なくてはいけない」という形式に近いためである。「なくてはいけない」は「当該事態が実現されないことが許容されないことを表す」形式として文法化が進んでおり（高梨，2010）、(33b) の例も「何も……ない」という呼応による全否定の解釈がなされにくい。

(22) ' の例は、主文が事態評価の述語である場合、従属節の選択はそれぞれの述語のもつ意味が関わっており、それぞれの述語がどのような従属節をとることが可能かを個別に記述する必要があることを示している。

なお、「て」節についての詳しい分析は第3部第8章1. で述べる。

### 3. 時間節の誤用例

#### 3. 1 時間節の誤用例数と内訳

ここでは、データ③について具体的に誤用の内訳とその例を見ていく。

【表4：データ③における時間節の誤用例の内訳】

誤用例	訂正	数	例文番号
とき	接続ミス	9	(34)
ときは	ときは	4	(35)
ときは	条件節	1	(36)
ときに	接続ミス	2	(37)
ときに	とき（に）は	1	(38)

まえに	接続ミス	2	(39)
あと	接続ミス	2	(40)
あと	てから	1	(41)
あとで	接続ミス	1	(42)
あとで	条件節「と」/「て」節	1	(43)
あとで	あとは	1	(44)
あとに	あとで	1	(45)
てから	接続ミス	1	(46)
てから	条件節「と」	1	(47)
てから	「て」節	1	(48)
ころは	接続ミス	1	(49)
しようとしたとき	するとき	1	(50)
合計		31	

それぞれの例は以下の通りである。下線部が従属節、( ) は筆者による訂正を示す。

- (34) 寝る時、検事についての夢を見ました。(3)-30  
(寝ている時)
- (35) 全部終わった時、11 時になりました。(3)-28  
(全部終わったときは)
- (36) どこへも遊びに行くとき、きれいな写真を撮ることがあります。(3)-61  
(どこへ遊びに行っても/行ったときも)
- (37) 彼は記者に訪わられた時に英語の通訳することをしました。(3)-17  
(インタビューされたときに)
- (38) 家へ帰った時に、とても疲れたんです。(3)-28  
(家に帰ったときは)
- (39) ボランティアをやった前に、私たちはいろいろな訓練をしました。(3)-26  
(ボランティアをする前に)
- (40) 私がおつりを返しあと、その夫婦は戻りました。(3)-39  
(私がおつりを返したあとで)
- (41) 朝、八時半に起きたあとで、父と母と一緒に万緑湖へ行った。(3)-42  
(朝八時半に起きて)
- (42) その日、私たちはアルバムを買ったあとでマクトナルトへ行ってきました。(3)-61  
(買った後で)
- (43) 約束した場合についたあとで、みんなは驚いた。(3)-11  
(着いて/着くと)
- (44) 特に雨が降った後で、蒸し暑いです。(3)-18  
(雨が降った後は)
- (45) ある日、忙しくて部屋を掃除した後に、彼女の歌を聴きました。(3)-21  
(急いで部屋を掃除した後で)
- (46) 大学に入ってから初めの夏休みがやっと来ました。(3)-2  
(入ってから)
- (47) 彼氏の家に着いてから、ご両親は迎えに出ました。(3)-23  
(着くと)
- (48) お客さんがあったと言った、聞いてから私は速く出かけた。(3)-38  
(お客さんがいると言うのを聞いて)
- (49) 始めるころは、私はいろいろ事がわかりませんでした。(3)-51  
(初めのころは)
- (50) 彼氏のお宅に出ようとした時、「会えてできて嬉しかった」と言いました。(3)-23  
(お宅を出るとき)

以上の節に関する誤用例の中で、活用や接続、表記のミスである例 (34) (37) (39) (40) (42) (46) (49) を除くと、残りの誤用は主に以下のタイプに分けられる。

- 1) 助詞の有無に関する誤用： (35) (38) (44) (45)
- 2) 条件節に関わる誤用： (36) (43) (47)
- 3) 時間節の間での選択に関わる誤用： (41) (48) (50)

以下では、それぞれについて説明する。

### 3. 2 助詞の有無に関する誤用

時間節の形式は適切だが、助詞の使用が不適切なものとして、例 (35) (38) (44) (45) が挙げられる。

ここに分類されるものの誤用には、主文のタイプに応じて助詞を使い分けることが未習得と考えられる例が多かった。

例 (35) ' は、主文が動きの継続相・過去（「もう 11 時になっていた」）の場合、設定時は「ときは」節で示されること、例 (38) ' も、主文が状態の場合、従属節は主題化された「ときは」であることに関する誤用である。

- (35) ' a. 朝、10 時に起きと、歯を磨いて、顔を洗って、お風呂に入りました。  
それで、全部終わった時、11 時になりました。 (3-23)
- b. Zǎoshàng shí diǎn qǐchuáng, shuāyá, xǐliǎn, xǐzǎo, zài quánbù nòngwán zhīhòu yǐjīng shí yī diǎn le.  
早上十点起床，刷牙，洗脸，洗澡，在全部弄完之后已经十一点了。 (3-23)
- c. ……全部終わったときは、もう 11 時になっていた。

- (38) ' a. この訓練は 10 時間に続けますから、寮へ帰った時にとっても疲れたんです。
- b. Zhè cì xùnlìan chíxù shí xiǎoshí, huí sùshè de shíhòu yǐjīng hěn lèile.  
这次训练持续十小时，回宿舍的时候已经很累了。 (3-28)
- c. 今回の訓練は 10 時間も続いたので、寮に帰るとぐったり疲れていた。

次の例 (44) ' も、主文が状態である場合の誤用である。

- (44) ' a. 深せんの夏はとても暑いです。特に雨が降った後で、蒸し暑いです。 (3-18)
- b. Shēnzhèn de xiàtiān fēicháng rè. yóuqí shì xià yǔ zhīhòu, hěn mēnrè.  
深圳的夏天非常热。尤其是下雨之后，很闷热。 (3-18)
- c. 深圳の夏はとても暑く、とくに雨の降ったあとは蒸し暑いです。

また、(45) ' のように「後に」「後で」の微妙な用法の差異を習得していないと考えられる例もある。

- (45) ' a. 忙しくて部屋を掃除した後に、彼女の歌を聴きました。 (3-21)
- b. Mánglùdì dǎsǎowán fángjiān hòu tīngqǐ tā de gē.  
忙碌地打扫完房间后听起她的歌。 (3-21)
- c. 忙しく/急いで部屋を相違したあとで、彼女の歌を聴きました。

翻訳データ②を見ると、今回の調査では「とき」節の助詞の有無による用法の違いはあまり定着していないようであった。たとえば、データ②の (5) の翻訳では、「想抽的时候（タバコを吸いたいとき）」の訳に「ときは」を用いた学習者は 21 人で、「とき」の 28 人には及ばず、また「ときに」を使用した学習者も 14 人おり、この 3 つの形式の使い分けはそれほど意識されているとは言えない。

時間表現に関わる助詞の有無の問題は、従属節だけでなく、時間副詞の用法にも見られる傾向である。データ②の (9) の例でも、「最后（最後）」という時間副詞は日本語でも同じ意味をもつことは理解されているが、「最後」「最後に」「最後は」の違いまでは未習得であることが多い。

以上のような例は、中国語からの影響と言うより、日本語の時間節の助詞の有無による意味・用法の違いを習得していないために生じた誤用であると考えられる。

### 3. 3 条件節に関する誤用

時間節より条件節を用いた方が適切なものとして、例 (36) (43) (47) が挙げられる。

ここに分類される例のうち、例 (36) ' は中国語の譲歩節「不管… (…にかかわらず)」を日本語でどう表すかについての習得が不十分と考えられるものである。

- (36) ' a. どこへも遊びに行くとき、きれいな写真を撮ることがあります。 (③-61)  
b. Bùguǎn qù nǎlǐ, wǒmen dōu pāile hǎo duō zhàopiàn.  
 不管去哪里，我们都拍了好多照片。 (③-61)  
c. どこに行っても、私たちはたくさん写真を撮った。

例 (43) ' は、中国語では時間節は用いておらず、日本語でも「て」節か「と」節で 2 つの事態の継起的関係を表すと適切になる。

- (43) ' a. 約束した場合についたあとで、みんなは驚いた。 (③-11)  
b. Qù dào yuēdìng dìdiǎn dàjiā ǒu xiàle yī tiào.  
 去到约定地点大家偶下了一跳， (③-11)  
c. 約束した場所に着くと、みんなびっくりして飛び上がった。

例 (47) ' は、中国語の「后 (あと)」節を日本語の「てから」節にすると、時間的連続性や即時性が表せず、不適切になる例である。「あと」節にしても同様である。

- (47) ' a. 彼氏の家に着いてから、ご両親は迎えに出ました。 (③-23)  
b. Dào le tā jiā hòu, tā de fùmǔ chūlái yíngjiē wǒ.  
 到了他家后，他的父母出来迎接我。 (③-23)  
c. 彼の家に着くと、彼のご両親が私を出迎えてくれた。

このような誤用例が示すのは、日本語で 2 つの事態の時間関係を表す従属節を選択する場合、2 つの事態の時間的な連続性が問題になることと、中国語の「后 (あと)」による連続性と「てから」「あと」による連続性は異なっているということである。

データ②で翻訳を見てみると、中国語の「后 (あと)」「时候 (とき)」はごく単純にそれぞれ「あと」「とき」と訳されやすいが、実際には日本語では条件節を用いた方が適切なことも少なくない。また、データ②の設問 (11) は「时候 (とき)」の用法で時点を表す数字と共に用いる用法を問うもので、日本語では「12 時になる (なった) とき」「12 時のとき」などはやや冗長で不自然であるが、かなり頻繁に見られる例である。ただし、先に述べたように、今回の調査では予想より「と」節を使っている例が多かった。

### 3. 4 時間節相互の選択の誤用

同じような意味の時間関係を表す時間節の間での選択が不適切なものとしては、例 (41) (48) が挙げられる。ここに分類されるのは、時間的前後関係を表す「あとで」と「てから」「て」(例 (41))、「てから」と「て」(例 (48)) のように、類似の時間関係を表す時間節の間での選択に問題があったものである。

- (41) ' a. 朝、八時半に起きたあとで、父と母と一緒に万緑湖へ行った。 (③-42)  
b. (この文の対訳なし)  
c. 朝八時半に {起きてから/起きて}、父と母と一緒に万緑湖へ行った。

上の例で、「起きたあとで」はやや不自然で、前後の事態の連続性の意味が欠けていると感じられる。「てから」「て」が適切な例と考えられる。

次の例は、「てから」でも事態の即時性や理由の意味が不十分で、「て」節が相応しい。

- (48) ' a. ある日高校時代の友達に遊に誘った。そして、お客さんがあったと言った、聞いてから私は速く出かけた。 (③-38)  
b. Gāozhōng tóngxué dǎ diànhuà jiào wǒ chūqu wán, hái shuō yǒu shénmì de kèren, yúshì wǒ mǎshàng jiù shōushi hǎole chūmén.  
 高中同学打电话叫我出去玩，还说有神秘的客人，于是我就收拾好了出门。 (③-38)

- c. 高校の同級生が電話で遊びに行こうと言ってきて、おまけに秘密のお客さんもいると言うのを聞いて、私は急いで支度して出かけた。

上の例の下線部は、「言うのを聞いたので」のように理由節も可能で、従属節の選択には時間関係だけでなく因果関係も関わってくるのがわかる。

以上のような例の場合、「てから」「あとで」「て」という3つの形式の意味・用法の違いが習得されていないと、選択は困難である。「てから」と「あとで」の意味・用法の違いは通常初級後半の学習項目になっているが、その際に「て」も含めてそれぞれの節の特徴に留意する必要があるだろう。これについては、次の例を見られたい。

- (51) a. 郵便局に {行ってから/行って/行ったあとで}、銀行に行った。  
 b. 先に写真を {撮ってから/??撮って/??撮ったあとで}、受付してください。  
 c. 昨年健康診断を {受けてから/受けて/\*受けたあとで}、病気が見つかった。  
 (その健康診断で病気が見つかったという意味で)  
 d. A校への入学金を {?払ってから/?払って/払ったあとで}、B校の合格通知が届いた。

例(51a)は、単純に2つの事態の時間的な前後関係を述べた文で、「てから」「て」「あとで」のいずれも可能である。

例(51b)は、「先に」という副詞により、従属節の事態「写真を撮る」ことが、主文の事態「病気が見つかった」に先行することを強調する文で、こうした時間的な先行を強調する場合に最も相応しいのは「てから」である。

例(51c)は、従属節の事態「健康診断を受けた」ことが主文の事態「病気が見つかった」ことの原因であるという意味も含んだ前後関係で、最も相応しいのは「て」である。データの(48a)'の例文も、中国語には理由の意味も含んでいるので、「聞いて」が相応しいが、こうした情報の獲得を表す認識動詞を含む「て」節の用法は、時間的前後と因果関係を同時に含んでおり、時間節と理由節が重なる部分であると考えられる。

最後に、例(51d)は例(51b)とは対照的に、主文の事態が従属節の事態に後行することを強調する文で、この場合「あとで」が相応しい。このように「てから」「て」「あとで」の区別には、時間的前後関係の強調や因果関係が関係している。

同様の例は、データ②の(1)の翻訳にも現れている。

- (1) Xīyān hòu, nǎozi mǎshàng jiù néng xiǎngchū hǎo diǎnzi de qíngkuàng yě bùshǎo ne.

吸烟后，脑子马上就能想出好点子的情况也不少呢。

(たばこを吸うと、いい考えを思いつくということもよくある。)

調査では、この例文の中国語の「后」の翻訳として、「てから」「あと(で)」「たら」の3つがほぼ同程度に選択されていた。この場合時間的な前後関係には「马上(すぐ)」という副詞により即時性も加わっており、選択を一層複雑にしている。

- (52) a. タバコを吸うと、いいアイデアを思いつけることもよくあるんですね。  
 (②-2)  
 b. タバコを吸ったあと、すぐいいアイデアを思いつく場合が少なくない。  
 (②-64)

例(52a)のように「と」を用いると「すぐ」がなくても即時性を含意しやすいが、(52b)のように「あと」は「すぐ」があっても、「と」の場合より時間的に遅いという意味の違いがある。この例は、時間的前後関係を表す形式の意味・用法の記述には、時間副詞も加えた考察も必要であることを示している。

以上のように、時間的前後関係を表す形式の意味の違いとして考えられる基準には、時間的連続性、即時性、因果関係があり、学習者への説明には、こうした基準を活かし、日本語の形式相互の違いだけでなく、対応する中国語との差異も加えた説明を行うのが効果的であろう。

ここでは、時間節に関する誤用を、助詞の有無、条件節との関わり、時間節相互の異同

などの点から考察した。そして、その選択の際に基準となる時間的連続性、即時性、因果関係などがあることを述べた。

#### 4. まとめ

この章では、データ①②を中心に、従属節に関する誤用を、選択形式の近さから見て、広範囲な形式間での選択、類義形式間の選択、助詞の有無に関する誤用の3種に分け、それぞれを概観したあと、誤用の多い「て」節と時間節に関し、具体的な誤用例を考察した。

「て」節の誤用は、文の続け方に関するもの、論理関係に関するもの、従属節相互の選択に関するものに分けられ、文の続け方や論理関係に関する誤用は、中国語からの影響も大きいと考えられることを述べた。また、従属節相互の選択に関しては、主文の述語が事態評価を表す場合、個々の述語がどのような従属節をとり、他の形式とどう違うのか、細かな記述が必要であることを指摘した。

時間節の誤用は、助詞の有無に関するもの、条件節に関するもの、時間節相互の選択に関するものに分けられる。なかでも時間的前後関係を表す際、時間を表す従属節の選択で重要な基準となるのは、時間的前後関係の連続性であり、誤用の説明には副詞なども含めた考察や、中国語との対照も効果的であると考えられることを指摘した。

## 第3部 従属節の選択と複文の種類



## 第8章 従属節の選択

1. 事実性・個別性
  1. 1 「て」節と文の階層構造
  1. 2 「て」節の特徴
    1. 2. 1 形式的特徴
    1. 2. 2 意味・用法の特徴
  1. 3 「て」節と他の従属節の選択基準
    1. 3. 1 「て」節と他の連用節
    1. 3. 2 「て」節と条件節
    1. 3. 3 「て」節と「の/こと」節
  1. 4 まとめ
2. 即時性・新出性・起因性
  2. 1 時間節の種類
  2. 2 時間節と他の従属節の選択基準
    2. 2. 1 あと系時間節と「と」節
    2. 2. 2 あと系時間節と「て」節
3. 時間節と助詞の有無
  3. 1 時間節+「は」
  3. 2 「とき」「ときに」「とき(に)は」
  3. 3 「あいだ」「あいだに」「あいだは」「あいだには」
4. まとめ

### 1. 事実性・個別性

#### 1. 1 「て」節と文の階層構造

この章では、第2部の調査と考察で明らかになった「て」節などの連用節の用法を中心に、それぞれの従属節を選択する基準となる意味的な特徴—事実性・個別性と即時性・新出性・起因性—について述べる。

まず、連用節のうち、従属節の階層構造(南, 1993、野田, 1995)において最も多くの階層に分布する連用節である<sup>1</sup>「て」節について、その階層構造における位置付けと意味・用法の特徴、他の連用節との選択基準について述べる。

「て」節が階層構造のどこに位置付けられるかを、下の表1に示す。これは、文法カテゴリーに基いて提案された、野田尚史(1995)による取り立ての階層構造を、筆者が一部変え、主要な連用節を位置付けたものである。また、階層の認定は、南(1974)以来の方法、すなわち、従属節内部にどのような要素が現れるかと、どのような従属節の内部に入るかという2つの基準により行った。たとえば、目的の「するため(に)」は「定刻に食べはじめるために」のようにアスペクトを含むことができ、「勉強しながら働くために」のようにアスペクトの階層の従属節を含むことができるので、それより高い階層にある。また、「したために」とは言えず(理由節「ため(に)」は言える)、内部にテンスを含むことはできないので、「テンス」の階層の従属節より低い階層にあると考えられる。したがって、目的の「するため(に)」の階層は「肯定否定」ということになる。

「て」節(連用形、「しないで」「せずに」も含め)の場合、形態上内部にテンスやモダリティ形式等の要素を含むことはできないが、「緊張しながら眼鏡をかけて、……」のよう

---

<sup>1</sup> 「て」節は中止節の1つで連用中止節との異同も問題になるが、ここではより使用の多い「て」節のみを対象とする。

にどの階層の従属節を含むことができるかという基準により、表 1 の太字部分のように 3 つの異なった階層に分布する 5 つの用法がある。

【表 1：従属節の階層と「て」節】

階層 従属節	A類			B類		C類
	語幹階層 節	アスペクト 階層節	肯定否定階層 節	テンス階層節	言表事態の モダリティ 階層節	発話・伝達の モダリティ階 層節
同時動作/ 付帯状況	しいしい	しながら	して			
様態				まま/みたいに ように	ように	
目的	しに		するため (に) するよう (に) するに (は)			
条件				すると/すれば したら/なら して		
時間				とき (に) するまえ (に) したあとで して		
原因/理 由				ので/のに したため (に) して		
等位/並 列						し/けれど/が して

これまでの研究でも「て」節には多くの用法が認められてきた。たとえば、日本語記述文法研究会 (2008) は、並列、対比、前触れ、継起、原因・理由、付帯状況、順接条件、逆接条件の用法を挙げているが、階層構造という点から見ると、並列、対比、前触れは、いずれも「て」節が 1 つの文に近く、独立度の高い階層にあると考えられるので、本研究では「等位/並列」1 つにまとめている。また、「継起」はここでは「時間」とし、用法の限られる「順接条件」「逆接条件」は 1 つにした。それにより、ここでは「て」節の用法として、表 1 のような 5 種類—同時動作/付帯状況・条件・時間・原因/理由・等位/並列—を設定する。それぞれの例文は以下のとおりである。

(1) 【同時動作/付帯状況】

「武雄、お母さんが見たければ、その眼鏡を三つとも掛けて見つける。そうして御飯を食べさせてもらえ」  
(『三つのめがね』)

(2) 【時間】

いや待て、かなりの人が来るだろうからもっと早く行って並んでた方がいいかもしれない。  
(『あの橋の向こうに』BCCWJ)

(3) 【順接条件】

改修費分と家賃分を合わせて上限 200 万円です。

(『広報あしかがみ』2008/9BCCWJ)

【逆接条件】

虚栄は、どこにでもいる。僧房の中にもいる。牢獄の中にもいる。墓地にさえ在る。これを、見て見ぬふりをしては、いけない。  
(『答案落第』)

(4) 【原因/理由】

「ふうう…まにあってよかった。」

(『ちょっと気になる転校生』BCCWJ)

### (5) 【等位/並列】

が、売り場に坐っている女性はひょっとして踊り子かと思わせるくらい、若くてきれいで、それでいて、こちらを無視している。

(『食べて歩いてやっとな旅人らしく』BCCWJ)

このように広範囲の用法をもつ「て」節は、日本語学習者にとっては安易に選択しやすい形式であると同時に、類義の従属節との間での選択が困難な形式でもある。以下では「て」節の特徴を、他の従属節と比較しながら明らかにする。

## 1. 2 「て」節の特徴

### 1. 2. 1 形式的特徴

「て」節の形式的特徴については日本語記述文法研究会(2008)が詳しいが、そのうち、意味的特徴や階層構造に関わる特徴として、主文の影響と従属節内の要素について述べる。

#### 【主文の影響】

「て」節は形式的・意味的に主文の影響を受ける。主文が丁寧体の場合、「まして」「でして」という形にすることができる(例(6a))。また、主文のモダリティ形式の意味が従属節にさかのぼって加えられる。たとえば、例(6b)は、主文の命令が従属節にも及び、「今から健康に気をつけてください。……頑張ってください。」と2つの命令を行うのとはほぼ同じ意味を表す。

(6) a. 現在のところ旅券に指紋を押捺している国は極めて限られておりまして、ほとんどがそういうことはないというのが現況でございます。

(『国会会議録』第109回国会1987BCCWJ)

b. 「この調子で今から健康に気をつけて、百まで長生きするつもりで頑張ってくださいよ」

(『理由』BCCWJ)

#### 【従属節内の要素】

「て」節の内部に現れる要素は階層構造により異なる。最も高い階層にある等位節の場合、従属節内に「だろう」は入らないが、「は」「らしい」などのモダリティ形式(例(7))が現れる。

(7) 店員さんも忙しいらしくて声かけるタイミングがないや。

(Yahoo!ブログ2008-BCCWJ)

等位節の「て」節の内部には、同じく等位節の階層にある「から」節も「からこそ」などの形で節内に収まりやすい場合に現れる(例(8))。

(8) モラルというのは一〇〇パーセント守っているからこそモラルであって、ここだけは許されるというものではありません。(『「わがままな女」になろう』BCCWJ)

「て」節の用法で最も高い階層にあるのは等位節であるが、「から」「が」「けれども」といった節よりは、内部に現れるものは限られている。

### 1. 2. 2 意味・用法の特徴

ここでは、表1の5つの「て」節の用法のうち、同時動作/付帯状況、時間、原因/理由、等位の4つの用法について、他の従属節と比較しながらその特徴を述べる。

#### 【同時動作/付帯状況】

「て」節と同じ階層に属す「ながら」「しいしい」の従属節とを比較すると、「ながら」「しいしい」は従属節内に現れる述語は動作動詞に限られ、意味としては同時動作を表すのに対し、「て」節には「緊張してスピーチする」のように、主体の心理状態を表す動詞も現れる(日本語記述文法研究会, 2008)ほか、付帯状況も表すことができる。たとえば、「めが

ねをかけて本を読む」は着脱の動きなどの変化の起こったあとの状態が維持されていることを表し、付帯状況と解釈されるが、「めがねをかけながら本を読む」では、めがねをかける動作の進行を表し、同時動作の解釈になる。

また、変化のあとの状態が維持されることを表す用法は、「まま」との異同が問題になることがある（日本語記述文法研究会，2008）。以下の例は「て」も「まま」も用いられる。

(9) a. 目を白黒させながら、楓は毛布にくるまったまま、きょろきょろと見慣れぬ部屋の中を見回す。  
(『悪魔なロマンチスト』BCCWJ)

b. 楓は毛布に {くるまったまま/くるまって}、部屋の中を見回す。

しかしながら、「まま」の使える事態は「て」節より限られている。次の例(10)は「まま」も「て」も可能であるが、例(11)のように従属節の事態が異常なこととは認識されていないと「まま」は用いにくい。

(10) a. アランの奴、ガスマスクをつけて、まるでカウリーに爆弾でも落ちたように懸命に走っていた。  
(『モンキー・シャイン』BCCWJ)

b. アランの奴、ガスマスクを {つけて/つけたまま}、懸命に走っていた。

(11) a. 最後に水で木材を洗い、じゅうぶんに乾くまで置く。フェイスマスクをつけて、浮き上がった木目を細かな研磨紙で磨く。  
(『木工技術シリーズ』BCCWJ)

b. フェイスマスクを {つけて/?つけたまま}、木目を細かな研磨紙で磨く。

## 【時間】

「て」節には、時間的な前後関係を表す用法がある。この用法は、時間関係を表す「と」節との類義が問題になる。時間を表す「て」節と「と」節の違いは、まず、「て」節は事態の接続の数に制限がないのに対し、「と」節は3つ以上の事態は接続することができないということである（日本語記述文法研究会，2008）。

(12) a. たくさん景色の写真を撮って、おいしい料理を食べて、一日が終わった。  
(③-10)

b. \* たくさん景色の写真を撮ると、おいしい料理を食ると、一日が終わった。

次に、「昨日は家に {帰って/帰ると}、食事をしました」を比べると、「と」節は2つの事態の時間的間隔が短いという意味（「即時性」と呼ぶ）が強い。

また、いわゆる発見の「と」節のように、主文に事態の出現を表す用法はない。

(13) a. ドアの呼び鈴が鳴り、デスクを離れてドアを開けると、小太りで人の良さそうな、いかにも田舎のおばさんといった感じのエレナが立っていた。

(『ラブ・アクチュアリー』BCCWJ)

b. ドアを {開けると/\*開けて}、エレナが立っていた。

「て」節は同一主体による事態を限りなく接続して述べられるのに対し、「と」節は前件と後件の2つの事態に限り主体の異同に関わらず接続でき、前後の時間的間隔も短い<sup>2</sup>。

次に、「て」節の時間を表す用法を、「あとで」「てから」のような先行を表す時間節と比べると、まず、時間節は2つの事態の時間関係しか表すことができない。

(14) \*たくさん景色の写真を撮ったあとで、おいしい料理を食べたあとで、一日が終わった。

また、「て」節は時間節よりも即時性を表すことができるので、「て」節の時間的前後関係を表す用法は、継起の用法とも言われている。

(15) a. 典子は、向いの毛皮店へ走って行って、すぐにも戻って来た。

(『二階の沈黙』BCCWJ)

b. 典子は、向いの毛皮店へ走って {行って/行ったあとで/?行ってから}、すぐに戻って来た。

<sup>2</sup> 「と」節は近世初期の成立時には「とそのまま」「とすぐに」から発達したもので、本来2つの事態の生起の「同時性・即時性を基本としている」（小林賢次，1996）。

以上をまとめると、時間の用法における「て」節の複文の意味的な特徴は、時間節と比べれば即時性があり、「と」節と比べれば即時性に欠けると言えるだろう。

### 【原因/理由】

次に、理由を表す「て」節と、「から」「ので」「(した)ため(に)」のような原因/理由節の用法の違いは、まず、主文が感情を表す述語の場合、その感情を引き起こした原因は「て」節で表されるということである。

(16) a. 「日本に生まれて、よかった」 (『一行力』BCCWJ)

b. 日本に生まれた {??から/??ので/\*ため}、よかった。

次に、主体が命令や依頼など、他者への働きかけを表す場合、その理由は「から」「ので」のような理由節が相応しく、「て」節では理由を表すことができない。

(17) a. 熱すぎると肌を痛めるので、気をつけてください。 (Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ)

b. 熱すぎると肌を {\*痛めて/痛めるから/痛めるので}、気をつけてください。

以上の2つの現象からわかることは、「て」節は「から」「ので」のような従属節ほど明確な原因/理由を示すわけではないということである。「て」節の表す因果関係は論理性が低く、従属節の事態が時間的に先行し、時間が経過した後自然に主文の事態に至ることを表すもので、時間と理由の意味が含まれている。「て」節の表すこうした自然な関係性を、ここでは「経緯性」と呼ぶことにする。

### 【等位】

等位を表す「て」節は、以下の例のようなものである。

(18) 関西で暴力団が資金源として介入したケースで有名なやつがありまして、ごみ処理場への搬入権チケットを処理業者などに売りさばいたケースが昨年ありました。

(『国会会議録』第118回1990BCCWJ)

等位を表す「て」節と、「が」「けれど」のような等位節との違いは、まず、接続の範囲の広さ、独立度の高さである。「が」「けれども」の従属節は、ほとんど1文に近く接続の範囲が広い。例(19a)(20a)の例はいずれも、「が」「けれど」なら適切な例である。

(19) a. \*夢の中のほかのことを忘れて、これが夏休みの一日だ。 (③-30)

b. 夢の中のほかのことを忘れたけど、これが夏休みの一日だ。

(20) a. \*それは僕の夏休みの一日で、普通で楽しかったです。 (③-32)

b. それは僕の夏休みの一日ですが、普通で楽しかったです。

次に、並列節「し」節との違いについてであるが、並列節「し」節の用法は、日本語記述文法研究会(2008)が累加、理由、終助詞的な用法の3種を挙げている。ここでは、終助詞的な用法は理由の一部と考え、累加と理由の2つの用法にまとめておく。累加の用法では、「て」節は「し」節より事態の併存に関わる積極性が低い。

(21) a. ビールも飲みたいし、やきとりも食べたいし、ケバブも食べたいじゃない?  
(Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ)

b. やきとりも {食べたいし/食べたくて}、ケバブも食べたいじゃない?

また、「し」節の方が理由をより明示する。

(22) {遠いし、時間もないし/?遠くて、時間もなくて}、今日はもうやめよう。

以上のように、等位節の用法においては、「て」節は「が」「けれども」のような等位節よりも接続の範囲が狭く、並列節「し」節よりも事態の併存や理由を明示する程度(ここでは「並列性」と呼ぶ)が弱いという特徴をもっている。

## 1. 3 「て」節と他の従属節の選択基準

### 1. 3. 1 「て」節と他の連用節

以上、同時動作/付帯状況、時間、原因/理由、等位の4つの用法について「て」節と他

の連用節との選択の基準についてまとめると、表2のようになる。

【表2：「て」節と他の連用節の選択基準】

従属節の用法	「て」節 選択の基準				他の従属節
同時動作/付帯状況	有	←	状態性	→	無 {「ながら」}
	無	←	異常性	→	有 (「まま」)
時間	弱	←	即時性	→	強 (「と」)
	強	←	即時性	→	弱 (「あと」)
原因/理由	強	←	経緯性	→	弱 (「から」「ので」)
	弱	←	論理性	→	高 (「から」「ので」)
等位	弱	←	独立度	→	高 (「が」「けれど」)
	弱	←	並列性	→	高 (「し」)

ここでは、「て」節と、同じ階層構造にある他の従属節を区別する基準として、同時動作/付帯状況の用法については状態性と異常性、時間の用法については即時性と段階性、原因・理由の用法については経緯性と論理性、そして等位の用法については独立度と並列性という意味的な基準を挙げた。

これらは「て」節の特徴を表すと同時に、「て」節と比べることで顕在化してくる、他の連用節の特徴をも表している。

### 1. 3. 2 「て」節と条件節

次に、「て」節と条件節の違いであるが、序章の(1)の例でも述べたように、「家もてて、幸せだ」と「家もてたら、幸せだ」を比べると、従属節の事態の事実性(反対は仮定性)が従属節選択の基準になっていることがわかる。

「事実性」は、有田(1993)によれば、山田文法以来、条件文に関して議論されてきた概念であり、近年では前田(2009)により、原因・理由文と条件文とを区別する有効な概念として、「リアリティー」という名称で再考されている。

冒頭の(1)の例は、「て」節が理由節として個別の、事実的な事態を表すため、未来の事態や不特定の一般的な事態とは解釈されないことによる誤用である。この現象に関して注目したいのは、「テンス階層節」である。野田(1995)が「現実性」としたように、この階層は事態を特定の時点に位置付けるか否かという、命題とモダリティとの境界的な階層であり、条件節がこの階層で非事実性を表すとすれば、それに対して事実を表す原因・理由節は階層構造において条件節より高い階層に位置することになる。

事実性は、言語に表された事態が現実世界において事実であるかを表すので、仮定性と表裏一体の概念である。たとえば、下の例(23a)の従属節「如果有人想吸烟(たばこを吸いたい人がいたら)」の場合、「たばこを吸う」という事態は発話時において仮定されることであり事実ではないので、事実性が低く仮定性が高い。このような場合、「吸いたかったら」「吸いたければ」などの条件節を用いるが、「て」節は用いられない。

(23) a. Rúguǒ yǒu rén xiǎng xīyān, nàme qǐng dào zhuān wéi xīyān zhě shèzhì de difang qù.

如果有人想吸烟, 那么请到专为吸烟者设置的地方去。 (③-085c)

b. もしある人はたばこを吸いたくて, 彼は専門の地方へ行くはずです。 (③-085j)

c. たばこを吸いたい人がいたら, 決められた喫煙所へ行くべきです。 (翻訳例<sup>3</sup>)

条件節に比べ、「て」節は事実性が高く、仮定性が低いと言えるだろう。

事実性という概念についてももう少し詳しく見てみると、事実として特定の時に位置付けられるということは、事態発生の頻度とも無関係ではない。

(24) a. Gēge yě chōu yān, dànshì yīnwèi bèigào zhī “ bù néng zài wū nèi chōuyān ”,

<sup>3</sup> 筆者による日本語訳の例。

suǒyǐ xiǎng chōu de shíhòu bùdébù qù wàimian.

哥哥也抽烟，但是因为被告之“不能在屋内抽烟”，所以想抽的时候不得不去外面。  
(③-034c ; ② (5) 問題)

- b. 兄もたばこをすっていますが、「部屋の中ではだめ」と言われましたから、すいたいと、外へ出なければなりません。  
(③-034j)
- c. 兄もたばこを吸うが、「家の中では禁煙」と言われているので、吸いたいときは外へ出なければならぬ。  
(翻訳例)

例 (24a) の「想抽的时候 (吸いたいとき)」という時間節は、例 (23a) の「人 (ひと)」のような不特定人物ではなく、「兄」という具体的な人物に関わる事態を表している。また、「兄がたばこを吸いたい (こと)」というのは、すでに日常的にある程度の頻度で行われており、事実性は高いと考えられる。ところが、「\*吸いたくて、外へ出なければなりません」のように、「て」節は使えない。

このような選択を決定するのは、従属節の事態がある特定の時空に位置付けられるかどうかであると考えられる。例 (24ab) の「想抽」「(たばこを) 吸いたい」という事態は、過去も今後も頻繁に発生し得る、複数回の事態として恒常性を帯びて一般条件に近づき、「たばこを吸いたかったら/吸いたければ」のような条件節が相応しくなる。

次の例 (25b) で「て」節が使えないのも同様の理由で、「女性」という不特定な対象についての一般条件となっているため、「と」節が相応しい。

(25) a. Dāng wèndào nǚxìng “wèishénme yào xīyān ne?” Tāmen zǒngshì huì huídá “jiěchú fǎnnǎo”.

当问道女性“为什么要吸烟呢？”她们总是会回答“解除烦恼”。(②-(8) 問題)

- b. 女性にどうしてタバコを吸うのと聞いて、彼女達の答えいつもリラックスするためです。  
(②-23)
- c. 女性にどうしてタバコを吸うのと聞くと、答えはいつも「ストレス解消」である。  
(翻訳例)

事実性と仮定性は表裏の概念であるが、連続的でもある。特定の時に位置付けられる、事実性の最も高い事態から、複数回発生する事態、不特定な対象などに関する事実性の低い事態、一般条件、さらには仮定条件に連続している。一般条件は事実性と仮定性の中間的な存在と言える。

事実性と仮定性をめぐって、一般条件が中間的に位置付けられるということは、松下 (1930)、前田 (2009) でも指摘されている。両者の違いは、一般条件が仮定的か事実的かの二分においてどちらに属するかであり、松下 (1930) は「仮定」に、前田 (2009) は「非仮定的」に位置付けている。また、事実性は前田 (2009) が「リアリティー」について指摘しているように、逆条件節と逆接節、条件節と理由節を区別する概念でもある。

### 1. 3. 3 「て」節と「のは」節

序章で問題提起したように、通常、連用節である「て」節と名詞節の間での選択の問題はあまり論じられないが、中国語話者による誤用は少なくない。ここでは、「て」節と名詞節が主題化された「のは」の違いについて述べたいと思う。両者の違いは上述の事実性 (仮定性) という概念とはやや異なる。次の例で「のは」節が表すのは一般的な事態で、この場合「て」節は使えない。

- (26) a. 暇の時、海へ行くのはいいアイデアと思います。  
(③-16)
- b. \* 暇な時、海へ行っていいアイデアと思います。

しかしながら、「のは」が常に一般的な事態を表すわけではない。次の例は主文が過去の感情を表しており、その対象である「のは」節の事態は、個別の事態と解釈される。

- (27) a. 友達とお茶を飲みながら話し合うのは楽しかったです。  
(③-16)
- b. 半年近くも私の件で家を空けるのはつらかったはずだ。  
(『告白』BCCWJ)

主文が「楽しい」「つらい」のような感情を表す述語の場合、その感情の対象となる事態

は、「て」節でも表すことができる。

- (28) a. 友達とお茶を飲みながら話し合って楽しかった。  
b. 半年近くも家を空けてつらかった。

序章の例 (1) の「幸せだ」という述語も、これと同種の述語であると考えられ、どのような述語の場合に名詞節と連用節が近似する現象が起きるのが問題になる。これについては第9章4で述べる。

以上をまとめると、主文が感情を表す述語の場合、その対象となる事態は「て」節も「のは」節も可能である場合があり、「て」節は事実的な事態を、「のは」は事実的事態も一般的事態も表すことができると言える。

## 1. 4 まとめ

「て」節・条件節・「の/こと」節の間の選択基準となる事実性（仮定性）及び個別性（一般性）に関して、図にすると以下ようになる。

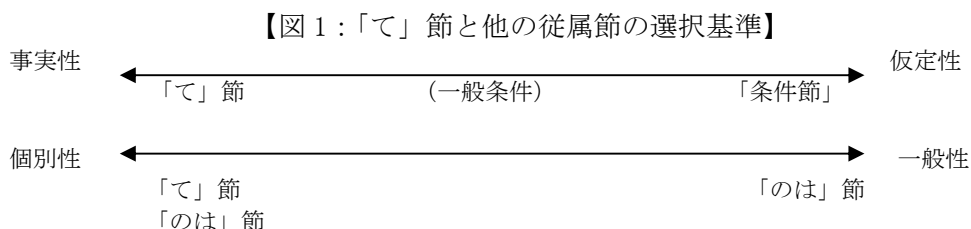


図1で上のスケールは、「て」節と「ば」節などの条件節がいずれも文法的に適切な複文では、「て」節が事実を、条件節が仮定を表すことを意味する。ただし、条件節のうち「と」「たら」節の時間を表す用法は意味的には条件とは言えないのでここには含めていない。また、一般条件は事実性と仮定性の中間的な位置にある。

下のスケールは、「て」節と「のは」節との選択の基準を表す。「のは」節は一般的なことも個別的事態も表せるが、「て」節は個別的事態しか表せない。

事実性（仮定性）と個別性（一般性）という概念は無関係なものではなく、事態を特定の時空に位置付けるという共通した意味をもっているため、第1部第2章2.2で見た工藤 (2002) (2012) による「時間的限定性 (temporal localization)」という概念としてまとめることも可能かもしれないが、条件節の特徴である仮定性という概念は一般性とはかなり性質の異なる概念であるので、ここでは分けて考えている。

ここでは「て」節・条件節・「のは」節の表す意味的な違いについて、事実性及び個別性という観点から説明した。

## 2. 即時性・新出性・起因性

### 2. 1 時間節の種類

以下では、時間節を概観したあと、時間節と他の従属節の選択基準について述べる。

まず、時間節の定義であるが、時間節は「主文の動きや状態が成立する時を、別の事態との関係によって規定する従属節である」（日本語記述文法研究会，2008）。

時間節の形式的特徴としては、従属節内に主語が現れないこと（例 (29a)）、丁寧さも現れにくいこと（例 (29b)）、そして、「に」「は」「で」などの助詞が付くことにより意味・用法に違いが生じること（例 (29c)）が挙げられる。

- (29) a. 【主語】 \*兄は結婚した頃、姉も結婚した。  
b. 【丁寧さ】 ?兄が結婚しました頃、姉も結婚しました。  
c. 【助詞の有無】 父がいない {?あいだ/あいだに}、急いで友人に電話した。

時間節は多くの形式をもっている。その形式を意味的に分類すると、表3のようになる。



詳しい形式のリストは日本語記述文法研究会（2008）にあるが、ここではそのうち代表的なものを挙げる。

【表3：時間節の形式】

同時
【同時点を表すもの】 とき、ときに、ときは、ときには、ころ、ころに、ころは、ころには、際、際に、際は、際には、前後、前後に、前後は、前後には、… 【反復を表すもの】 たび、たびに、ごとに、につけ、… 【同時動作・同時変化を表すもの】 と同時に、とともに、につれ、にしたがい、…
期間
あいだ、あいだに、あいだは、うち、うちに、うちは、最中、最中に、まに、…
前後関係
【「まえ」系】 まえ、まえに、まえは、まえには、まで、までに、までは、までには、… 【「あと」系】 あと、あとで、あとに、てから、てからは、て以来、て以来は、…
状況
ところ、ところを、ところが、ところへ、ところに、ところで、… なか、なかを、なかで、… うえ、うえで、…

時間節の形式の多くは「時」「前」「後」「中」のような名詞が形式化したものであるが、「てから」のような活用形と助詞の組み合わせによるものもある。たとえば、「から」は本来時に関する体言を受けて「最初から」のような副詞的用法をもっていたが、室町時代に「兼ねて」のような副詞句に付くことから「てから」が発生したものとされる（石垣謙二，1955）。このことから、本来日本語の時間節は、歴史的には時・位置を表す名詞、副詞などの状況成分などの発展したものであり、現代語においても時を表す名詞や副詞の用法と共通するところがある。

時間節が形態的に形式名詞を含むことは、従属節の階層構造における時間節の位置付けにも影響を与えている。第1部第1章2. で述べたように、仁田（1987）は、従属節を「連体修飾節」「埋め込み成分節」「接続節」に分類し、そのうち「埋め込み成分節」を「埋め込み成分節」（「の/こと」節）、「付加的修飾成分節」（様態「ように」節）、「時の状況成分節」（「…瞬間」等）に分けているが、この分類は時間節が連体節や名詞節に近い性質をもっていることを反映させたものである。

時間節が連体節や名詞節に近いということは、従属節の独立度の面からも言える。従属度を測る方法として、従属節内にどのような要素が現れるか、あるいは従属節相互が含み含まれるかを考察する方法があるが、形式名詞を含む時間節の内部にはテンスまでしか現れない。モダリティ形式は「\*雨が降るだろうとき」のように現れず、また、「から」節を含むことはできないという点（\*[[友達が来るから]家を出たとき]、雨が降り始めた）は、名詞節と同じである。したがって、「とき」節は階層構造において野田（2003）が指摘するように、テンス階層節であると考えられる。

## 2. 2 時間節と他の従属節の選択基準

### 2. 2. 1 あと系時間節と「と」節

ここでは、第1部第3章3. で見た日中対照の成果を踏まえ、「あと」「てから」といった、従属節の事態が主文の事態に先行する時間的關係を表す「あと系時間節」と、「と」節の選択における誤用の要因を、中国語「后（あと）」を参考にしながら考察する。

あと系時間節と「と」節の意味的な違いは、事態間の即時性（事態間の時間間隔が短いこと）と、主文の事態が新しく認識されたという意味（「新出性」と呼ぶ）であると考えられる。次の例（30a）（30b）はデータ③によるもので、日本語では「てから」、中国語

の対訳は「后（あと）」を用いているが、「てから」では両親が待っていたとばかりにすぐ迎えに出たという意味合いは表せず、その後の文章で表される両親の歓迎の熱烈さに繋がりにくい。

(30) a. 彼氏の家に着いてから、ご両親は迎えに出ました。 (③-23)

b. Dào le tā jiā hòu, tā de fùmǔ chū lái yíngjiē wǒ.  
到了他家后, 他的父母出来迎接我。 (③-23)

c. 彼の家に着くと、彼のご両親が私を出迎えてくれた。 (翻訳例)

「と」節は複数の事態が連続的に成立することを表し、あと系時間節より即時性を表せる。次の例の日本語は「と」節により事態の即時性が表現されており、あと系時間節では十分にそれを表せない。中国語訳では「后（あと）」が用いられている。

(31) a. 山嵐が坐ると今度はうらなり先生が起った。 (『坊ちゃん』④)

b. Háozhū zuò xià zhīhòu, lǎo yāng xiānsheng zhàn qǐ lái.  
豪猪坐下之后, 老秧先生站起来。 (④-447)

ただし、第2部の調査の結果でも指摘したように、「(時間表現)になると」という即時性を表す「と」節はかなり定着している。次の翻訳の問題の例では、70人中「と」を用いたのは33人、「とき」を用いたのは17人であった。

(32) a. Dào wǎnshàng shíèr diǎn de shíhòu, quánjiārén wéizuò zài yī zhāng zhuōzi qián chī jiǎozi.  
到晚上十二点的时候, 全家人围坐在一张桌子前吃饺子。 (②-(11) 問題)

b. 夜中の12時になったら、一家で食卓を囲んで餃子を食べる。 (翻訳例)

c. 夜12時になると、家族こぞって食卓を囲んで坐って餃子を食べます。(②-10)

一方、あと系時間節は、「と」節では不十分な「段階性」とでも言うべき意味を表すことができる。段階性は即時性と表裏の概念であり、複数の事態がある程度の時間的間隔と不連続性をもって継起することを表し、事態の前後関係を強く表す。手順を強調する「手を洗ってから食べなさい」のような「てから」の用法は、この段階性を表す用法である。

次の例(33a)の下線部「一月の勉強したと(ひと月勉強すると)」では、「勉強したあとでやっと実現する」という苦勞して段階を経たという意味が表せず、(33c)のようにあと系時間節を用いたいところである。

(33) a. 一月の勉強したと、私たちもステージで踊りました。 (③-45)

b. Tōngguò yī gè yuè de jiāoxué, wǒmen huì yǒu yí gè wǔtái biǎoyǎn.  
通过一个月的教学, 我们会有一个舞台表演。 (③-45)

c. 私たちはひと月レッスンを受けてから、舞台に立つことができた。(翻訳例)

段階性について中国語ではどう表すかを見てみると、次の例のように、副詞「才」「再」等で前後関係を強調し、段階性を表すことができる。

(34) a. はっきりと調べてから結論を下す。

b. Diàochá qīngchū yǐhòu zài xià jiélùn.  
调查清楚以后再下结论。 (王, 2003 第1部第3章 3. 2 (7))

(35) a. それとも“四喜のスープ”は第四回分の料理を出し終わってから運ぼうか。 (④-1662)

b. Huòzhě, zhè “sì xǐ tāng” shìfǒu zài sì lún rè cài quán shàng guò zhīhòu zài wǎng wài duān ne?  
或者, 这“四喜汤”是否在四轮热菜全上过之后再往外端呢? (钟鼓楼④)

次に、久野暲(1973)、豊田豊子(1977)等で指摘されているが、「と」節には主文に出現を表す動詞を伴い、発見を表す用法もある。ここでは「新出性」と呼ぶ。

次の例では、新出性を表す「と」節の翻訳として、「后（あと）」が用いられている。

(36) a. 町を外れると、鹿島槍が、車の前面に大きい姿を見せ始めて来た。 (『あした来る人』④)

- b. Chū zhènzi hòu, lùdǎoqiāng de shānzī kāishǐ zài chēqián zhújiàn jiā dà.  
出鎮子后, 鹿島槍的山姿开始在車前逐漸加大。 (④-2590)

新出性は、同一動作主の動きの連続する、継起を表す用法とは表裏の関係にあり、次の継起を表す「て」節の例は「后（あと）」が用いられにくいようである。

- (37) a. この辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛り込んでしまった。  
(『坊ちゃん』④)

- b. Zhè zhāng wěirènshū zài wǒ huí Dōngjīng shí, róuchéng yì tuán rēngdào dàhǎi li le.  
这张委任書在我回東京時, 揉成一团扔到大海里了。 (④-46)

以上、ここでは、あと系時間節と「と」節の意味的な違いは、即時性（段階性）と新出性（継起性）にあり、中国語の「后（あと）」は「と」節に近い用法ももち、即時性、新出性も表せるだけでなく、前後関係を強調する副詞を伴い、段階性も表すことを見た。

## 2. 2. 2 あと系時間節と「て」節

「て」節には様々な階層に属する用法が存在するが、ここでは時間を表す「て」節について、あと系時間節と比較しながら見ていく。

塩入 (2012b) では、あと系時間節と時間を表す「て」節の間の選択基準は、事態間の即時性<sup>4</sup>と起因性であることを指摘した。即時性は段階性と対立する概念であり、複数の事態が短い間隔で連続的に成立することを表す。「…とすぐに」に置換できる。起因性は時間性と対立する概念として従属節の事態が後件の事態の原因・理由を表し、「…ので、…」に置換できる。

次の例は、退屈な夏休みの一日を送っていた「私」が、友人の誘いを受けて急いで出掛けるという場面を表しているが、「てから」では、その即時性や即時性は表せない。「聞いてすぐに」「聞くとすぐに」などとしたいところである。

- (38) a. ある日高校時代の友達は遊に誘った。そして、お客さんがあったと言った, 聞いてから私は速く出かけた。 (③-38)

- b. Gāozhōng tóngxué dǎ diànhuà jiào wǒ chūqu wán, hái shuō yǒu shénmì de kèrén, yúshì wǒ mǎshàng jiù shōushi hǎole chūmén.  
高中同學打電話叫我出去玩, 還說有神秘的客人, 于是我马上就收拾好了出門。 (③-38)

- c. ある日高校時代の友だちが遊びに行こうと電話してきた。おまけに珍しいお客様もいるというのを聞いて、すぐに支度して出かけた。(筆者による翻訳例)

時間節としての「て」節は、理由節の場合と境界的な用法も多くある。例えば、「あの本を読んで考えが変わった」のような例は、時間も理由も表している。したがって、「あと」節のように専ら時間関係を表す節に比べると、起因性が強いと言えるだろう。

翻訳の例で原因・理由を表す「て」節と「后（あと）」を見てみると、中国語では「才」を用いて前後関係を強調していることがわかる。

- (39) a. 今日の新聞に辟易して学校を休んだなどと云われちゃ一生の名折れだから、  
…… (『坊ちゃん』④)

- b. Jiǎrú rénjiā rènwéi wǒ shì kàn le jīntiān bàozhǐ shàng de xiāoxi zhīhòu cái qǐngjià xiūxi de, nà shì wǒ yìshēng de chǐrǔ.  
假如人家认为我是看了今天报纸上的消息之后才请假休息的, 那是我一生的耻辱。 (④-532)

このような例から、日本語の理由節は、中国語では比較的弱い因果関係についても用い

<sup>4</sup>塩入 (2012b) では連続性と呼んでいる。

られるということが考えられる。次の例では、「生徒が報知に来る（こと）」と「検分をする」ことは、時間的前後関係でもあり、弱い因果関係でもある。日本語は理由節「から」節が用いられているが、中国語では時間節「后（あと）」が用いられている。

- (40) a. 三時になると、受持級の生徒が自分の教室を掃除して報知にくるから検分をするんだそうだ。 (『坊ちゃん』④)
- b. Tīngshuō dào le sān diǎn, běn bān de xuésheng dǎsǎowán jiàoshì qián lái huì bào hòu, hái děi jiǎnchá yíxià, zài bǎ diǎnmíngbù fān kàn yī biàn, zhè shí cái néng huíqù.  
 听说到了三点，本班的学生打扫完教室前来汇报后，还得检查一下，再把点名簿翻看一遍，这时才能回去。 (④-68)

一方、中国語の「后（あと）」節の日本語訳に、理由節が用いられている例も少なくない。

- (41) a. Bǔ wán suànshù yǐhòu, mǔqīn juéde duì yú T nǚshì yīng yǒu yì diǎn biǎoshì, tā zìjǐ pǎodào Fúlong gōngsī, mǎile yí jiàn hěn guìzhòng de yīliào, jiào wǒ sòng qù.  
 補完算術以後，母亲觉得对于T女士应有一点表示，她自己跑到福隆公司，买了一件很贵重的衣料，叫我送去。 (关于女人④)
- b. 私が数学をものにできたので、お礼のしるしにでもと、母は自ら福隆商店まで出掛けて高級生地を買いもとめ、私に持たせた。 (④-102)

以上のように、「て」節はあと系時間節より即時性を表すことができると同時に、原因・理由も表すことができる。「て」節とあと系時間節、理由節の意味範囲を中国語の「后（あと）」と比べると、おおよそ以下ようになる。確実な結論を出すにはより多くの用例調査が必要であるが、ここでは日本語と中国語の時間節の意味範囲のずれを指摘しておきたい。

てから/あと	て	から/ので
后	后 (+才)	因为

### 3. 時間節と助詞の有無

#### 3. 1 時間節+「は」

従来の研究でも指摘されてきたが、「とき」節は「は」を伴って主題的なはたらきをすることがある。このように従属節が主題的にはたらくことを本研究では「従属節の主題化」と呼び、第10章1.において定義、説明している。主題化した従属節は主題相当の独立度を示し、主題と同様に疑問詞を含みにくい（例「？何をしているときは楽しいですか」）などの特徴をもつ。

「とき」節以外の時間節について「は」が付加した場合の用法を見てみると、① 主題になりやすいもの、② 対比の意味になりやすいもの、③ 「は」を伴うと時間節ではなくなるもの、④ 「は」は伴わないもの、の4種類に分けられる。

【表4】時間節+「は」の種類

種類	時間節+「は」
①主題になりやすい	ときは・ころは・際は
②対比になりやすい	あいだは・うちは・まえは・てからは
③時間節でなくなる	うへは・ところは・なかは
④「は」は伴わない	*たびは・*と同時には・*とたんは

以下、①～④の用例を見ていく。

### 【① 主題になりやすいもの】

「とき」「ころ」「際」などは、「は」の付加により従属節が主題となるが、対比を表すこともある。下の例(42a)の「頃は」節は主題、例(42b)の「頃は」節は主題ともとれるが、別の時間との対比の意味を表わしている。

- (42) a. 私が『「いき」の構造』を書いた頃はマルクス主義全盛の頃で、私は四面楚歌の感があった。(『伝統と新取』)  
b. 十二月の中旬、木枯らしは梢の効用を吹き飛ばした頃は、まだ湖面に氷が張っていないから小舟を水に浮かべて釣ったが、一月に入ると湖はすっかり氷結するから、厚い氷へ、一尺四方くらいの穴をあけて、そこへ鉤を下ろすのである。(『榛名湖の公魚釣り』)

また、これらの節は、「は」がなくても、主文が「の/こと」節を対象としてとる述語の場合や、いわゆる強調構文の場合に主題として解釈されることがある。

- (43) a. 「遠藤さんに“ピアノが生きている”と言われたとき、まるで“澄子が生きている”と言われたようで、とてもうれしかった」(『いのちの響き』BCCWJ)  
b. 幻軍が白湖を過ぎ、蘇江を船旅でもするようにのんびりと渡った頃、すでに六月であった。(『後宮小説』BCCWJ)

例(43a)で主文の述語「うれしい」の対象は「遠藤さんに…と言われた(こと)」であり、従属節の部分を「……と言われたのは/が」のように名詞節で言い換えることができる。例(43b)の複文は強調構文「紅軍が…渡ったのは、…六月であった」に近い構文で、やはり時間節の部分が名詞節で言い換えられる。例(42a)のような主文が「の/こと」節を対象としてとる述語の場合の主題的用法については、第10章で詳しく論じている。

### 【② 対比になりやすいもの】

ここに分類されるのは、「は」の付加により主題ともなるが、対比の意味を含みやすいもので、「あいだ」「うち」「まえ」「あと」「まで」などである。期間や、相対的な空間的位置を表す名詞出自のものが多い。

下の例で、例(44a)の「……利用が少ないうち」は「利用が多くなってから」との対比を表した用法である。例(44b)の「……打ち明けないうちは」は否定形に接続し、下線部は「ママに打ち明けないと眠れない」という必須条件を表す用法になっており、対比の意味として因果関係「ママに打ち明けると眠れる」という誘導推論を含意している。

- (44) a. 大学図書館は、蔵書規模が小さく、利用が少ないうちは、大学の教員によって片手間に仲間うちで管理することができました。(『司書の教義』BCCWJ)  
b. 「……私のこの感激を隣の部屋で寝ているママに打ち明けないうちは、とても眠れそうにない」。(『カヴァレリア・ルスティカーナ;道化師』BCCWJ)

期間を表す「あいだは」節もやはり対比の意味になりやすい。次の例で「おれが生きているあいだは」は「おれが死んだあと」との対比の意味を含んでいる。

- (45) 「そのうちに自滅するさ」「おれが生きているあいだは、まだ自滅しそうにない」とヒューズがこぼした。(『メッサーシュミットを撃て』BCCWJ)

「うち」「あいだ」など期間を表す時間節や、「まえ」「あと」など時間的前後関係をもつ時間節は、「とき」節に比べ、それ以外の時間を想定しやすく、対比の意味が生じやすい。

また、「まえ」「あと」は、「とき」や「あいだ」と違い、従属節の事態の成立時が主文とは異なるため、主文が「楽しい」のような評価を表す述語であっても「旅行したあと、楽しかった」と「旅行したのは、楽しかった」という複文とでは、意味が異なってしまう。したがって、「とき」節が主題と解釈され名詞節に置換できるのは、主文と従属節の事態がほぼ同時点に成立している場合と言える。

### 【③「は」を伴うと時間節でなくなるもの】

「うえ」「ところ」「なか」は、いずれも時間的情況を表す以下のような用法をもつ。

- (46) a. ともかくも両親に相談した上で御返事をすることにして、その日は継子さんと別れました。(『停車場の少女』)
- b. 聞いたら、主人は新潟生まれ、東京も京都も知らず、参考のために僕がすきやきの模範を示したところ、「へー、すきやきというものは、そういうふうにして作るものですか」と目を丸くしていました。(『アメリカの牛豚』)
- c. 1950(昭和25)年、朝鮮戦争が勃発し、アメリカ軍の上陸に遭って朝鮮人民軍が撤退する中、持病の心臓病が原因で行方不明となり、死亡したと推定されている。(『金史良 作家データ』)

例(46a)の下線部「…うえで」は「…してから/したあとで」のようなあと系時間節、例(46b)の下線部「…ところ」は「…示したら/示すと」のような条件節、そして、例(46c)の下線部「…する中」は「…しているあいだに」のような期間を表す時間節に、それぞれ近い意味・用法となっている。

これらの節は、いずれも「は」が付加することにより時間節ではなくなるという点で、上述の「とき」節や「あいだ」節などの時間節とは異なる。「うえは」「からは」「には」に類似した理由を強調する理由節、「ところは」は具体的・抽象的な場所名詞、「なか」は「には」を伴いやはり抽象的な空間を表し、時間節ではない。

- (47) a. しかし、いいだしたうえは、なんでもそのことを通す主人の気質をよく知っていましたので、彼は、急に返事をせずに思案をしていました。(『北の国のはなし』)
- b. お母さんの善いところは、汲んでも、汲み尽されない、その愛情にあります。(『お母さんは僕等の太陽』)
- c. 今の<sup>かねもち</sup>富豪が高い金を惜しまないで骨董品を集めるなかには、こうして狡い考えをするのが少くない。(『贗物』)

したがって、時間節が主題として解釈されるもう1つの条件として、時間節の形式名詞そのものが時を表すものであるということも挙げられる。「は」を伴うことで、これらの形式名詞は、それぞれの出自の名詞の意味が出やすいものと考えられる。

#### 【④「は」を伴わないもの】

「たび」「と同時に」「たん」などの節は、形態的に「は」が伴うことがなく、主題・対比のいずれの用法もない。

以上、時間節と主題化について考察した結果をまとめておく。

- ・時間節のうち、「とき」「頃」など同時点を表す時間節は、「は」を伴い主題となりやすい。これは、従属節と主文の事態が同時点であることから、主文が評価の述語である場合に評価の対象としての意味が要求されるためであると考えられる。
- ・「あいだ」「まえ」など期間や時間的前後関係を表す時間節は、「は」を伴って対比の意味を表すことが多い。期間は別の期間を想定しやすく、また、「まえ」などの相対名詞は大義を意味しやすいためである。

### 3. 2 「とき」「ときに」「とき(に)は」<sup>5</sup>

時間節を代表する形式として、「とき」「ときに」「ときは」「ときには」がある。ここではこれらの形式のうち、「ときは」「ときには」は交替形と見なし<sup>6</sup>、「とき」「ときに」「とき(に)は」の3つの形式を比較する。

<sup>5</sup> ここでの議論は塩入(1995a)を修正、引用している。「ときは」と「ときには」の意味・用法には勿論相違点も存在するが、用例の数や、主文の類型を論じる際の体系性から、交替形と見なすことの説明力と利点が大きいと考えている。

<sup>6</sup> 「一度失われた{時は/時には}戻らない」のような「時」が実質名詞の場合は考察外とする。

これらの使い分けに関して、寺村（1983）は文のタイプに注目して分析し、次のようにまとめている（例文は塩入による）。

(48) 寺村（1983）による「とき」節の記述

#### 【「PトキハQ」】

この形式が最も適切なのは次の場合である。

a. PトキQが一般的なきまりを表している時。

(49) ガスコンロ等のそばを離れる時は、必ず火を消す。（『広報こおりやま』BCCWJ）

b. 一回きりの事象でも、Qがある状態を表している時。

(50) 泣いた日もありました。けどだからこそ卒業した時は、めっちゃ嬉しかったし、ほっとした。（Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ）

#### 【「PトキニQ」】

この形が最も適当なのは、一回きりの事態の発生を報告する文の場合である。

(51) 私も〈ハビタ〉でスカンジナビアの家具を売ろうとした時に、工場の理解が得られなくて苦労したんだ。（『Casa BRUTUS』 2003/3BCCWJ）

#### 【「PトキQ」】

この形は、上のどの場合にもほとんど使用可能だが、特に話し手がまずPという事態を述べ、次にそれに続いて起こったことを、いわば発見として述べる場合には、この形が最も適当である。

(52) かれが瞑想と祈禱に沈潜していた時、イエス＝キリストが現れた。

（『アッシジのフランチェスコ』BCCWJ）

寺村（1983）以降の研究も、基本的には寺村の説明を支持するものとなっている。「ときに」が、主文の出来事の時を表すとすれば、「とき（に）は」が「主題」や「設定時」（益岡，1997）「言及時」（reference time）（森山，1984）を表すという見解は、用語こそ異なるが、工藤（1989）（1995）、益岡（1997）、塩入（1995）などで示されている。

「とき（に）は」の用法は大きく分けて3種ある。主文が状態の場合（例（53a））、複文が一般的なきまりを表す場合（例（53b））、従属節が仮定条件を表す場合（例（53c））である。

(53) a. 毎日気にかけてながら水をやっていたので今日、発芽したのをみつけたときは、とっってもうれしかったです。（Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ）

b. 咳、くしゃみなどをするときには、ティッシュなどで口と鼻を覆いましょう。

（『広報たかまつ』-BCCWJ）

c. ……小さなマリモです。生きてるらしいですが、死んじゃったときは、何か見た目に変化はあるのでしょうか？

（Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ）

塩入（1995）は、主文の述語の違い、従属節としての独立度の違いなどについて3形式の使い分けの基準を以下のように述べた。

#### 【主文の述語の違い】

塩入（1994）では工藤（1989）を参考に、3形式の主文の述語を「動作」（歩く、食べる、開ける、…）、「変化」（開く、来る、～てくる、…）、「状態」（夜だ、うれしい、～べきだ、…）に分けた。

それによれば、動作は3形式平均に現れるが、状態は「とき（に）は」の主文（例（54a））、変化は「とき」「ときに」の主文に多く（例（54b）（54c））、「とき」では従属節と主文の動作主（または状態主）の異なる場合が多かった（例（55d））。

(54) a. こんなの釣り上げたときは、さぞ嬉しいことだろうね。（『釣の楽しみ』BCCWJ）

b. 労働の供給よりも需要が不足するとき失業が生じる。

（『新しい公民教科書』BCCWJ）

c. ところが、電話をかけようとしているときに、あのマンションから人が出てきた。

（『さて、これから…』BCCWJ）

d. これはきっとテストなんだわ。ダッシュが砂利を敷いた駐車場に車を乗り入れ

たとき、クラレンはそう思った。

(『ルールは無用』BCCWJ)

### 【節としての独立度の違い】

3つの形式とも南(1974)のC類(「が」「けれども」等)には含まれるが、B類(「と」「ば」「たら」等)に含まれるのは「とき」「ときに」で、「とき(に)は」は含まれにくい。

(55) a. つまり、走ってるときにこれがついたら、かなりヤバいんですよ。

(『ちょっと気配りするだけでクルマの寿命がどどんのびる!!』-BCCWJ)

b. 走っている {とき/\*とき(に)は} これがついたら、かなりヤバいんですよ。  
連体節に現れやすいのも、「とき」「ときに」である。「とき(に)は」は対比の意味でない限り、連体節内には現れにくい。

(56) a. 自作PCを作りたいのですが組み立てるときに必要な(あったら便利な) 道具ってありますか?  
(Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ)

b. 組み立てる {とき/?とき(に)は} 必要な道具ってありますか?

塩入(1994)の調査では、連体節に含まれる率は「ときに」が圧倒的に高く、全体の四分の一を占めた。これは「ときに」の独立度の低さを表すものである。

益岡(1995)は、格助詞の有無による時間節の違いについて情報構造の面から論じ、格助詞を伴う時間節は焦点化が可能であると述べているが、「ときに」は情報構造面から見ると焦点化が可能な従属節と言えるだろう。

### 【仮定条件の形成】

時間節のうち「とき」節や「場合」節は、仮定条件に相当する用法をもっている。仮定条件に相当する用法とは、従属節と主文の事態がいずれも未然の事態であり、従属節内に「もし」が共起できるような用法を指す。

仁田円(2001)は『新潮文庫の100冊CD-ROM版』を用いて「とき」「ときに」「ときには」と「もし」等の副詞との共起を調べたもので、それによると、「ときに」が67例中1、「ときは」は67例中4、「ときには」は82例中5例であった。このことから、仮定条件を表すのに最も相応しいのは、「は」の付いた形式「とき(に)は」であると言える。

(57) もし、シンビが数鉢あったときには、パフィオはその根元近くに置くようにしたい。  
(『洋ラン栽培コツとタブー』BCCWJ)

ただし、「とき」「ときに」も、「は」がなくても「もし」と共起して仮定条件を表すすることもある。

(58) a. もし明日携帯電話を買うとしたとき、あと数日の6月末に月額の使用料を払わないといけないのですか?  
(Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ)

b. 果たして、もしそうなったときに、また「住民投票を!」という声上がるのだろうか。  
(『住民投票』BCCWJ)

「とき」「ときに」が「は」のない形で、「もし」と共起するような仮定条件的に用いられやすいのは、例(58a)「…とする」のように、仮定条件を表す表現を用いる場合や、例(58a)(58b)のように疑問の形をとる場合などである。

こうした細かな用法もあるが、基本的には「とき」節は「は」が付加することで仮定条件を表しやすくなると言える。これは、「は」により従属節の状況の対比が行われるため、とくに「ないときは」のように否定に接続する場合などは、当該の事態を成立させるものとそうでないものとの対比を意味しやすく、仮定条件節を形成しやすい。

ところで、私見では時間節による仮定条件の用法は、日本語教育文法で取り上げられることが少ないと思われる。この用法を習得することで、学習者による以下のような誤用を防ぐことができるであろう。

(59) じゃあ気をつけて。?家に着いたときは電話してください。

この例で「とき(に)は」を用いると、家に着かないこともあるという仮定条件の意味になり不適切な文になる。「家に着いたら」「家に着いたときに」としたいところである。



## 【時の限定】

従属節の時を限定する場合は、「ときに」が相応しい。

(60) a. もうすぐ世界が終ろうとしているときに地下鉄の切符の一枚や二枚のことでこれ以上わずらわされるのはうんざりだ。

(『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』塩入, 1995 (12))

b. もうすぐ世界が終ろうとしている {とき/?とき (に) は} これ以上わずらわされるのはうんざりだ。

(61) a. そんなことで、この忙しいときに、僕に道案内をさせたんですよ。

(『封印再度』BCCWJ)

b. この忙しい {とき/?とき (に) は}、僕に道案内をさせたんですよ。

上の (60) (61) の例のように、逆条件の「のに」に近い関係を表す場合は「ときに」が相応しく、「この忙しいときに」「この大変なときに」のような表現はかなり固定して使用されている。

また、主文の事態がいつであるかを限定する場合には「ときに」が相応しい。この場合の「ときに」は、「とき (に)こそ」や「とき (に) はじめて」「てはじめて」に置き換えられるような、必須条件に近い意味として時を限定的に強調する意味を表す。

(62) a. 人の器は、人から頼まれごとをした時にわかる。

(『なぜか「人が集まる人」の共通点』BCCWJ)

b. 人の器は、人から頼まれごとをした {とき/?とき (に) は/ときこそ/ときはじめて} わかる。

このような限定の意味は、主文の事態がいつであるか問題になるような時、すなわち焦点になる場合に用いられる。

(63) 役者が何で変かというと、違う人間になるときに自分の力を発揮するからだ。

(塩入, 1995-(21))

したがって、行為要求をする際など、時を明確に限定するのに「ときに」が用いられることが多い。

(64) 今は、何もしなくて良いですよ。次に再婚なさった時や、何かお祝いがあった時に、お祝いしてあげてください。

(Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ)

以上、ここでは「とき」「ときに」「とき (に) は」の3形式の用法の違いについて述べた。まとめると、次のようになる。

### ・「とき」

独立度 : 高い場合も低い場合もある。無標の形式で最も制限が緩い。

表現 : 主文が新しい事態の発生や発見の場合に相応しい。

主文の述語 : 変化が多い。従属節と主文で動作主が異なる場合が多い。

### ・「ときに」

独立度 : 低い節として連体節の中に現れやすい。

表現 : 一回の事態の発生を報告する場合、時を限定する場合に相応しい。

主文の述語 : 変化が多い。

### ・「とき (に) は」

独立度 : 高い。主題化された形式で、対比用法は独立度が低い。

表現 : 一般常識、対比、仮定条件を表す場合に相応しい。

主文の述語 : 状態が多い。

実際の文はこれらの個々の特徴の組み合わせである。たとえば、次のような例は、発見を表すので「とき」が相応しいとも言え、主文は状態であるから「とき (に) は」が相応しいとも言える。

(65) ゆっくりと目を開けた {とき/ときに/とき (に) は}、時計は十時二十分を指していた。

(塩入, 1995)

単に1つの特徴だけでは選択が決定できないところに、この3形式の使い分けの難しさ

がある。

### 3. 3 「あいだ」「あいだに」「あいだは」「あいだには」<sup>7</sup>

時間節のうち、期間を表す形式として、「あいだ」「あいだに」「あいだは」「あいだには」がある。ここではこれら4つの形式を、主文の述語の違いを中心に比較する。

#### 【「あいだ」「あいだに」の主文の述語のアスペクト】

「あいだ」「あいだに」「あいだは」「あいだには」の選択に関しては、「あいだ」の場合、主文は「継続的な動作及び状態を表す述語」、「あいだに」の場合は「動作の結果として状態の変化を表す述語がくる」(名柄迪・広田紀子・中西家栄子, 1987)とされ、以下のような例が挙げられる(例文は塩入)。

(66) a. 園長先生と中村先生がしゃべっているあいだ、トクオは書類戸棚をじっとみていた。  
(『おばあちゃん宇宙へいく』BCCWJ)

b. 園長先生と中村先生がしゃべっているあいだ、トクオは書類戸棚を見た。

上の例(66b)の「見た」は一定の時間見たこと、すなわち状態的な意味として解釈することはできるが、瞬間的な動きとしては解釈されない。

(67) a. おそらく父が引返して提灯を持って来るあいだに、(彼女は)そこを這い出して姿をかくしたのであろうが、……  
(『穴』)

b. ?父が提灯を持って来るあいだに、彼女はずっと姿をかくしていた。

上の例は、「あいだに」の主文に「かくしていた」のような継続相が現れにくいことを示している。

同様の記述は工藤(1992)(1995)にも見られる。工藤(1995)は「あいだ」「までに」の主文の述語は運動動詞の完成相、「あいだ」「まで」の場合は継続相あるいは存在動詞であり、従属節の「に」の有無は主文のアスペクト(完成相の有無)と相関的にあるとし、それにより、出来事を「運動動詞の完成相であるか否か」により二分している。

工藤(1992)(1995)による「あいだ」の助詞の有無と主文のアスペクトの完成相の相関についての説明は、本研究も基本的にこれを支持するものであるが、実際にはそれほど明確ではないこともある。次の例(68a)は「あいだ」の主文に完成相が現れる例、(68b)は「あいだに」の主文に継続相が現れる例である。いずれの例も「あいだ」「あいだに」のどちらでも用いることができる。

(68) a. でもあたし、デザートが来る前にみんながおしゃべりしてるあいだ、遊びに行ったの。  
(『武器と女たち』BCCWJ)

b. けど、てきがしゃべっているあいだに、ぼくはクモとさくせんをねっていたんだ。  
(『ハナクソ太郎のぼうけん』BCCWJ)

例(68a)の「遊びに行く」なども、「あいだ」の主文では時間的な幅のある動きと解釈される。また、例(68b)の「あいだに」は「すきに」に近い用法で「その機会に」という意味をもち、主文には継続相も現れる。

「あいだに」の主文に継続相が現れる例は、他にもいくつかの用法がある。次の学習者向けの練習問題(69a)は「あいだに」が非文法的となっているが、逆条件「のに」に近い意味で非難を含んだ意味を表すことができると思われる。

(69) 君がグーグー寝ている {あいだ/\*あいだに}、僕はずっと勉強していたんだよ。  
(名柄他, 1987, \*も名柄他による)

以下の例も、「あいだに」の主文が継続相である例である。

(70) a. 起きてからびっくりするほど枕が濡れていることがある。眠っているあいだに、本当に墨の涙がわたしの上に降り注いでいたかのようだ。  
(『白い薔薇の淵まで』BCCWJ)

b. いつも子どもが眠っている {あいだ/あいだに}、お掃除しています。

<sup>7</sup> ここでの議論は塩入(1995b)を加筆・修正している。

例 (70b) が示すのは、主文が継続相の場合、「あいだに」は従属節の事態の時間が主文の動きの継続時間より長く、主文の事態は従属節の時間内の一部の時間であることを表すということである。

反対に、次の例は主文が運動動詞の完成相だが、「あいだ」が用いられている。主文の動きは過去形ではないので習慣的・恒常的な含意がある。

- (71) 二層式の洗濯機にも、コインを入れての効率的な使い方にも慣れた安子は、回しているあいだ、部屋の様子を見に返る。やはり一人にしておくのは心配である。  
(『行路 100』BCCWJ)

このように、「あいだ」「あいだに」の主文のアスペクトは、基本的には継続相と完成相と二分できるが、そうでない用法も存在する。両形式の選択には、主文の動詞の種類も関係している。思考を表す動詞には幅のある動きを表しやすいものがある。以下の例は時間的に幅のある動きを表しており、「あいだ」「あいだに」のいずれも可能で、「あいだ」「あいだに」の選択が主文のアスペクトだけでは決まらないことを示している。

- (72) a. 人通りのすくない町をあるいているあいだ、彼は自分のことばかりを考えた。  
(言語学研究会・構文論グループ, 1993)
- b. 彼らもぼくの大きさと色に驚き、ほかのイルカたちが周囲を飛んだりはねたりするあいだ、三頭はぼくに大洋のニュースを伝えてくれた。  
(『氷海のクジラ』BCCWJ)

### 【「あいだは」の主文の述語】

次に、「あいだは」の主文の述語の特徴を見る。

「あいだは」が「ときは」と異なるのは、「あいだは」の主文の述語は「とき(に)は」より、動きの否定(例(73a))、不可能(例(73b))、蓋然性の低さ(例(73c))など、否定を含む表現が多いということである。

- (73) a. 私の母は、子供が寝ているあいだは決して食事をしませんでした。  
(『Dr. アグネスのポジティブ育児』BCCWJ)
- b. 保険金を払い込んだことを覚えているあいだは、お支払いできません。  
(『二度目の大往生』BCCWJ)
- c. そういうものが横行しているあいだは、消費者だっていくらなんでも画面の映像だけを信じるわけではない。  
(『中古車売買でだまされない本』BCCWJ)

これは、「あいだは」が対比の意味を持ちやすいためと考えられる。以下の表はBCCWJの「あいだは」の用例87<sup>8</sup>と、「ときは」の用例86の、それぞれの主文の種類を示している。「あいだは」の主文には動きの否定や否定を含むモダリティ形式が多く、「ときは」の主文には動きの肯定、働きかけのモダリティ表現が多いことがわかる。

【表5：BCCWJに見られる「あいだは」の主文】

動き完成相	動き継続相	動き+モダリティ形式等 <sup>9</sup>	可能動詞	形容詞	名詞
肯定 18 否定 12	16	12 しなければならない2/するしかない/するわけではない/しようがない/しなくていい/しそうにない/してはならない/したくない/した方がいい等	肯定 7 否定 4	7	11

<sup>8</sup> 「あいだは」は従属節が動詞の場合のみ「るあいだは」で検索している。「ときは」は用例が多いため「る時は、」で検索した649例の最初の100例のうち複文の例81を対象としている。

<sup>9</sup> 数字のないものいずれも1例ずつである。

【表7：BCCWJに見られる「ときは」の主文】

動き完成相	動き継続相	動き+モダリティ形式等 <sup>10</sup>	可能動詞	形容詞	名詞
肯定 38 否定 2	12	20 しましう 6 / してください 5 / した方がいい 2 / すべきである / してもらいたい / せざるを得ない / したい / したらいい / することもない等	肯定 3	6	5

【「あいだには」の主文の述語】

「あいだには」は言語学研究会・構文論グループ（1993）が述べているが、表8のように他の3形式に比べ用例が極めて少ない。

【表8：BCCWJに見られる「あいだ」「あいだに」「あいだは」「あいだには」の用例数<sup>11</sup>】

あいだ	あいだに	あいだは	あいだには
741	309	91	5

また、「ときには」が「ときは」と用法の差が少ないのに比べ、「あいだには」には「あいだは」とは明確に異なる、時間的な限界を含意する用法がある。

(74) a. まるで時代劇のような古い話になってしまったのですが、これもなんとか、生きているあいだには、まとめてみたいというふうに思ったりすることもあります。  
 (『人生の目的』BCCWJ)

b. なんとか、生きている {\*あいだは/あいだに/\*あいだ}、まとめてみたい。

このような「あいだには」は「うちに」の意味に近く、「あいだは」にも「あいだ」にも置き換えられない。

4. まとめ

ここでは、従属節の選択に関して問題になる、各形式のもつ意味的な特徴と、助詞の有無の2つについて、「て」節と時間節を中心に述べた。

時間節と他の従属節との選択基準としては、「即時性（段階性）」「新出性（継起性）」「起因性（時間性）」といった概念があることを述べた。日本語の場合は中国語に比べ、弱い因果関係に原因・理由節を用いることなど、中国語の「后」と日本語の時間節との意味のずれを指摘した。

あと系時間節、「と」節、「て」節との選択における即時性（段階性）、新出性（継起性）、起因性（時間性）の関係は次のようになると考えられる。

【図2：あと系時間節・「と」節・「て」節の選択基準】



<sup>10</sup> 数字のないものはいずれも1例ずつである。

<sup>11</sup> 検索は「るあいだ」「るあいだに」「るあいだには」「るあいだは」で行っている。

## 第9章 複文の種類

1. 複文の種類を決まり方
  1. 1 文の種類についての本研究の立場
  1. 2 複文の種類を決まり方
2. 連用節の階層構造と文の種類
  2. 1 A類の従属節と文の種類
  2. 2 B類の従属節と文の種類—主題的解釈—
  2. 3 C類の従属節と文の種類
3. 補足節の階層構造と文の種類
  3. 1 補足節の定義
  3. 2 補足節の階層構造と文の種類
    3. 2. 1 補足節内の要素
    3. 2. 2 補足節と階層構造
    3. 2. 3 補足節と文の種類
  3. 3 名詞節の階層構造と文の種類
    3. 3. 1 名詞節と階層構造
    3. 3. 2 名詞節と文の種類
4. 「の/こと」節と事態評価の述語
  4. 1 「の/こと」節の特徴
  4. 2 「の/こと」節の主題用法
    4. 2. 1 感情表現と評価表現
    4. 2. 2 事態評価の述語
    4. 2. 3 感情表現と従属節
    4. 2. 4 評価表現と従属節
  4. 3 「の/こと」節と他の従属節の選択基準
    4. 3. 1 「の/こと」節の誤用
    4. 3. 2 「の/こと」節と事態評価の述語
  4. 4 まとめ
5. 引用節の階層構造と文の種類
  5. 1 引用節と階層構造
  5. 2 引用節と文の種類
6. 疑問節の階層構造と文の種類
  6. 1 疑問節と階層構造
  6. 2 疑問節と文の種類
7. まとめ

### 1. 複文の種類を決まり方

#### 1. 1 文の種類についての本研究の立場

第1部第2章では、文の種類あるいは叙述の種類に関する先行研究を概観したが、ここではそれらを踏まえ、本研究における文の種類の様相について述べる。

まず、文の種類を「時間的安定性 (time stability)」の連続的なスケールとして捉える立場 (Givón, Talmy, 1984; 工藤, 2002, 2012) をとっている。「時間的安定性」の一端は「一時的な文 (stage-level sentence)」、もう一端は「恒常的な文 (individual-level sentence)」である。文の種類を連続的なものと捉えるのは、文の種類の下位分類の境界に必ず中間的な例

が存在することによる。

このスケールの下で、文の類型を大きく、動き、状態、属性に三分する。これは工藤 (2002) (2012) 及び仁田 (2001) (2012) の分類を参考にしている。動きは「内的展開過程」一開始・展開・終了一をもつものと規定される (仁田, 2012)。典型的な動きは「(し) はじめる」「(し) おわる」などのアクションスアルトの形式が付いて動きの開始と終了の限界を取り出せるものであり、これにより「本を読みながら食事した」→「……食事しはじめた」のような主体運動の典型的な動きから、「食事すると胃が痛む」→「……胃が痛みはじめた」のような意味的には状態に近い生理動詞による文や、「子どもの成績を心配する」「→……心配しはじめた」のような心理動詞も動きとして位置付けられる。

状態は「等質的な、具体的なモノの一時的な (時間的限定をもった) ありよう」 (仁田, 2012) とされる。時間的限定をもっているということは一定の期間同じ状態を保っているということであり、「3時から5時まで」「来年まで」「昨日から」のような期間を表す副詞的成分と共起する。

さらに、動きと状態、状態と属性のそれぞれの境界に、準状態、準属性という領域を位置付けた。準属性は第2章2.3で述べたように、影山 (2008) により提案されたもので、「ふだんは」という副詞を付けることで恒常性に変化がないかを確認することができる。属性は「-化」という接辞が付くものである。

心理動詞を動きと状態のどちらに位置付けるかについては、動きと状態の定義にもよるが、アスペクトの相違などの考察から、吉永尚 (2008)、小池直子・酒井弘 (2012) はいずれも動きとして位置付けている。本研究では、心理動詞のこうした位置付けを認めるが、動きと状態の中間的な準動きとして位置付けたいと思う。これは、複文の類型において、多様な従属節を取ることでできる心理動詞が属性叙述文と事象叙述文の中間的な文を形成することから、複文の類型において重要な位置にあることを示すためである。

心理動詞はさらに、寺村 (1982) による感情表現の下位分類、及び吉永 (2008) による心理動詞の下位分類などがあるが、これらをを参考に心理動詞のとり格助詞のタイプにより下位分類する (4.2.2表14) が、表1では準動きとしてまとめている。

表1は、連用節と名詞節を中心とした複文の類型である。

【表1：複文の類型】

時間的安定性	← 事象 (event)      一時的状態 (stage-level states)      恒常的状态 (individual level states) →				
	動き movement	準動き quasi-movement	状態 state	準属性 quasi-property	属性 property
文の類型					
例文	<ul style="list-style-type: none"> <li>本を読みながら食事した。</li> <li>風が強くてドアが開いた。</li> <li>食事すると胃が痛む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>山が見える。</li> <li>彼が来たのに驚いた。</li> <li>失敗するのを恐れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>来てくれてうれしい。</li> <li>ここで諦めるのは悲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>兄は人に頼られるのに弱い。</li> <li>席を譲るのは親切だ。</li> <li>彼の言ったことは本当だ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>皆が共生するのが理想だ。</li> <li>これを説明するのは複雑だ。</li> </ul>

## 1.2 複文の類型の決まり方

第1部で見たように、これまでの研究では、従属節の階層構造についての議論と文の類型についての議論はほとんど別々に行われてきたと言ってよい。従属節の階層構造に関わる研究においては、動詞述語文による単文が暗黙のうちに想定されていることが多く、文の類型との関係が論じられることもあまりなかった。

単文の類型から複文に目を移すと、複文の定義において述べたように、基本的には複文

は単文の拡張と捉えることが可能であり、複文の類型も単文のタイプの延長と考えられるが、複数の述語が存在する複文では、複文全体の類型を決めるのには節の従属度あるいは独立度という観点が必要になってくる。

独立度を示す方法として、主文の「発話・伝達のモダリティ」（仁田，1989）である「働きかけ」に従属節が含まれるかどうかと、文として独立できるかを見る以下のような方法がある（[ ]は意味解釈に含まれる範囲を示す）。

まず、働きかけに含まれるかどうかは、南（1974）のA・B類とC類とで違いがある。

- (1) a. [[食べながら]聞いてください]。(A類「ながら」)
- b. [[よく振ってから]使用してください]。(B類「てから」)
- c. [私も行きますが]、[先に入っています]。(C類「が」)

独立度の比較的低いA・B類の従属節の述語は、主文の働きかけの意味に含まれて解釈される。例(1a)は「食べる」ことと「聞く」こと、例(1b)は「よく振ること」と「使用する」ということを聞き手に働きかけている。一方、独立度の高いC類の従属節の述語は、主文の働きかけの意味に含まれて解釈されることはなく、例(1c)で働きかけているのは「先に観る」ということのみである。

次に、文として独立できるかを見る。～は左の文が右の文に置換できることを示す。

- (2) a. 食べながら聞いてください。 ～\*食べます。聞いてください。
- b. よく振ってから使用してください。 ～?よく振ります。使用してください。
- c. 私も行きますが、先に入っています。 ～私も行きます。先に入っています。

独立度の高いC類の従属節は、野田尚史（1989a）の指摘するように、大きな意味の違いなく文として独立することができる。したがって、主文の発話・伝達のモダリティに含まれるかどうかは文としての従属度あるいは独立度を反映しており、複文のタイプの決まり方について以下のような原則が考えられる。

(3) 【複文のタイプの決まり方】

従属節の独立度が比較的低い（南，1974 のA及びB類）の場合、複文全体の類型は主文により決まる。独立度が高い（C類）の場合、従属節と主文の類型はそれぞれ決まる。

連用節と主文のタイプの組み合わせを、南（1974）と、第1部第4章1. 2の図1で示した従属節の分類を合わせてまとめたのが次の表である。

【表2：連用節の複文の類型】（ ）は用例番号

主文		動き	状態	属性	従属節
【A類】 語幹階層節 アスペクト 階層節	動き	動き	×	×	【語幹階層節】 移動の目的節「しに」/引用節 【アスペクト階層節】 同時動作節「ながら」(4)「つつ」「いしい」 【肯定否定階層節】 「て」節（付帯状況）/同時動作節「ずに」/目的節「ために」/様態節「ように」（様態）
	状態	×	×	×	
	属性	×	×	×	
【B類】 テンス階層節	動き	動き	状態	属性	【テンス階層節】 時間節「とき」(5)～(7)/「て」節/条件節「と」「ば」 「たら」(8)～(10)/様態節「ように」（比喩）/並列節「たり」 【対事的モダリティ階層節】 原因・理由節「ので」「から」「て」(32) （*時間節「やいなや」）
	状態	動き	状態	属性	
	属性	動き	状態	属性	
【C類】 対他的モダ	動き	動き/ 動き	動き/ 状態	動き/ 属性	【対他的モダリティ階層節】 等位節「が」(9ac) (10c)「けれど(も)」(8c) (10b)

リティ分化節	状態	状態/ 動き	状態/ 状態	状態/ 属性	「から」(8ab)「て」/並列節「し」(10a)/様態節「ように」(同等)
	状態	状態/ 動き	状態/ 状態	状態/ 属性	【対他のモダリティ分化節】 引用節「と」「よう(に)」

## 2. 連用節の階層構造と文の類型

### 2. 1 A類の従属節と文の類型

それぞれの例文を見ていくと、まず、A類の従属節には本来、同時動作など動きを表すものしかないので、「状態」「属性」を表すA類の従属節自体が存在せず、また、主文も動きを表すもののみで、組み合わせは従属節も主文も動きの場合だけに限られる。

(4) a. 【従属節・動き/主文・動き → 複文の類型・動き】

本を読みながら、食事をする。

b. 【従属節・動き/主文・状態 → ×複文の類型・状態】

\*彼は、涙を流しながら、冷静だ。

c. 【従属節「動き」/主文「属性」 → ×複文の類型・属性】

\*彼は、強がりを言いながら、心配性だ。

例(4a)(4b)は「彼は涙を流しながらも」のように「ながらも」にすると許容度が高くなるが、これはB類の逆説を表す「ながら(も)」の解釈が生じるためであり、同時動作を表すA類の「ながら」の場合は主文も動きに限られている。

### 2. 2 B類の従属節と文の類型—主題的解釈—

次に、B類の従属節による複文を見ると、A類のような類型の制限がなく、すべての組み合わせが存在する。複文全体の類型は、主文により決定される。主従の類型の組み合わせは9種類が可能になる。時間節と条件節で見ていく。

(5) a. 【時間節・動き/主文・動き → 複文の類型・動き】

どこへ越しても住みにくいと 悟った時、詩が生れて、画が出来る。(『草枕』)

b. 【時間節・状態/主文・動き → 複文の類型・動き】

「あら、恐ろしいときに笑ってしまうことってあるのですよ」(『残る蛍』-BCCW)

c. 【時間節・属性/主文・動き → 複文の類型・動き】

投資者が法人であるときは、前項の規定は、その代表者に適用する。

(『資料体系アジア・アフリカ国際関係政治社会史』-BCCW)

(6) a. 【時間節・動き/主文・状態 → 複文の類型・状態】

我々が知っているのは、我々は無力感を感じていて、他人を支配しているときは、気分がいいということだけです。(『聖なる予言』BCCWJ)

b. 【時間節・状態/主文・状態 → 複文の類型・状態】

おれが苦しいときは、将門も苦しいのだ。(『平将門』BCCWJ)

c. 【時間節・属性/主文・状態 → 複文の類型・状態】

物自体が詩であるときに、初めて詩にイノチがありうる。(『恋愛論』)

(7) a. 【時間節・動き/主文・属性 → 複文の類型・属性】

シンセサイザーという楽器—というか機械—というか—がある。最初に登場したときは、画期的な道具だった。(『顔』BCCWJ)

b. 【時間節・状態/主文・属性 → 複文の類型・属性】

一人は熱心なクリスチャンで、健康だった時分は小学校の教師であったという。(『眼帯記』)

c. 【時間節・属性/主文・属性 → 複文の類型・属性】

キミがまだ赤ん坊だったころ、あまりに言葉をしゃべらない子だったので、知能障害があるのではないかと、心配された。(『メビウス・レター』BCCWJ)

この階層の従属節による複文で特徴的なのは、主文のアスペクトのありかたと、主文が



評価を表す述語の場合である。

まず、主文のアスペクトについてだが、主文が動きである例 (5a) ~ (5c) の場合、時間節は主文の動きの成立時を限定するが、単文の場合とは主文のアスペクトのありかたがやや異なり、動きが個別の事態か一般的な事態かという観点が加わってくる<sup>12</sup>。「8時に家を出ました」という単文は、通常は個別の事態と解釈されるが、時間節の加わった「雨が降っているときは、8時に家を出ました」という複文は習慣的な事態と解釈される。

単文のアスペクトの重点は述語の動きの内的な展開性であるのに対し、B類の時間節や条件節による複文のアスペクトは、個別性（一般性）という事態の生起する頻度が問題になってくる。

次に、例 (6a)「気分がいい」のように主文が評価を表す述語のとき、従属節は主文の評価の対象を示し、下の例 (6a) ‘のように従属節がないと、文としては不十分である。このことは、評価を表す述語がその補足節を要求していることを示している。

(6a) ‘？我々が知っているのは、我々は無力感を感じていて、気分がいいということだけです。

例 (6a) はその従属節を「他人を支配するのは」のように名詞節で置き換えることができ、従属節は連用節でありながら主文の述語の補足節として名詞節の主題とほぼ意味解釈が可能になっている。

次に、「とき」節と同じテンス階層節に属する条件節「と」「ば」「たら」<sup>13</sup>について見てみる。

(8) a. 【条件節・動き/主文・動き→複文の種類・動き】

パリに着いたら、新聞に広告でもして、料理に関する古本や食器など集めてみたいと思っている。 (『欧米料理と日本』)

b. 【条件節・状態/主文・動き→複文の種類・動き】

仕事があれば——道路 普請の人夫でも——大学を止めて働きに行くそうです。 (『母と娘』)

c. 【条件節・属性/主文・動き→複文の種類・動き】

吾々が或る言葉を説明する時、それがもし日常語であるならば、無論之を日常語として説明しなければならない。 (『空間概念の分析』)

(9) a. 【条件節・動き/主文・状態→複文の種類・状態】

これもやはりほんの一時的の建築だろうが、使っている材木を見るとなかなか五十年や百年で大きくなったとは思われないような立派なものがある。 (『ある日の経験』)

b. 【条件節・状態/主文・状態→複文の種類・状態】

一回の釣遊に、五十尾の餌があれば充分だ。 (『那珂川の鱸釣り』)

c. 【条件節・属性/主文・状態→複文の種類・状態】

大正の始めであつたら、又明治に遡つたら、品物はどんなに素晴らしかったかと思える。 (『京都の朝市』)

(10) a. 【条件節・動き/主文・属性→複文の種類・属性】

が、考えてみれば、感激した俺の方がばかだったのだ。 (『無名作家の日記』)

b. 【条件節・状態/主文・属性→複文の種類・属性】

キング連邦首相に、もし日本よりの攻撃があれば矢面に立つのは BC 州であると、執拗に沿岸防衛強化を迫っていたパットウロー (T.D. Pattullo) BC 州首相も、PJBD の提案を一步前進と評価する。 (『太平洋戦争』BCCWJ)

c. 【条件節・属性/主文・属性→複文の種類・属性】

他殺だったら、たしかに奇蹟だ。 (『闘争』)

<sup>12</sup> 千田俊太郎氏の御指摘による。

<sup>13</sup> 「なら」は仮定条件を示す用法もあるが、主題相当の用法もあるのでここでは考察外とした。

条件節の場合も、主文が状態か属性である場合に主題的に解釈されることがある。例(9b)は「充分だ」という評価の対象となる事態「五十尾の餌がある(こと)」が条件節で示されている。同様に、例(10c)「他殺だったら」も「他殺であるのは」に置き換えることができ、従属節は主題として解釈され得る。こうした解釈が可能なのは、主文の述語が事態に対する評価を表す場合である。

もう一つ、別の原因で主題的に解釈される用法もある。例(9a)は「使っている材木には……ものがある」のような存在文に近く、「見ると」のような知覚を表す述語により存在場所を提示している。これは、例(6a)の評価を表す述語が従属節に評価の対象を要求している構造とは異なり、「ある」という存在動詞が要求する存在場所を従属節が提示している用法である。

このように、B類の従属節による複文は、主文が評価を表す述語や存在動詞の場合、その評価の対象や存在場所を従属節が表し、名詞節による主題的な構造の意味と近似することがある。序章で挙げた例(1)の「幸せだ」という述語も、事態に対する評価を表す述語であり、そのために多種の従属節の選択が可能になっている。

## 2. 3 C類の従属節と文の類型

従属節がC類の場合も、文の類型の組み合わせはすべて可能であるが、従属節の独立性が高いため、複文全体の類型は従属節と主文それぞれの類型により複数存在する。たとえば、例(11a)は、従属節が動き、主文も動きで、複文全体の類型は動きであるが、例(11b)は、従属節が動き、主文が状態であるから、複文全体の類型は1つには決定できず、動きと状態であると考えられる。例(12)は主文が状態、例(12)は主文が属性である。

### (11) a. 【従属節・動き/主文・動き】

「たいてい、 今夜は秦君に逢えるだろうから、 逢ったら、そのことを伝えておくよ。」 (『秦の出発』)

### b. 【従属節・状態/主文・動き】

君は東京の新聞社にも知人が多いだろうから、少し力をかしてくれよ。 (『怒りの虫』)

### c. 【従属節・属性/主文・動き】

そしてこれはせつかくの先生の勇敢なる試みではあるけれど遠からずして駄目になるだろうと思った。 (『私の小売商道』)

### (12) a. 【従属節・動き・/主文・状態】

今ならばフォルマリンか何かで消毒するだろうが、あのころそういう衛生上の注意が行き届いていたかどうか疑わしい。 (『蓄音機』)

### b. 【従属節・状態/主文・状態】

小酒井博士を探偵小説の作家として見るのは、恐らく、最も末梢的な、第二義的、第三義的な方面から博士を見ることになると非難する人があるだろうし、その非難は恐らく正当であるだろう。 (『作家としての小酒井博士』)

### c. 【従属節・属性/主文・状態】

武家と町人——それはその時代の何處にもカツキリとされた區別であるが、江戸にはもひとつの別階級がある、職人である。 (『下町娘』)

### (13) a. 【従属節・動き/主文・属性】

隣の部屋の扉、あるいは控えの間の扉をあけてさえも、おそらく二人はあえて彼を阻止しないだろうし、極端にまでやってみることがおそらく最も簡単な、事の解決法であろう。 (『審判』)

### b. 【従属節・状態/主文・属性】

……さて改めてこの小さいけれど生物である赤ちやんを眺めた。(『赤ちゃん』)

### c. 【従属節・属性/主文・属性】

理学士ではなかったがしかし非常に篤学な人で、その専門の方ではとにかく日

本有数の権威者だという評判であった。 (『埋もれた漱石伝記資料』)

独立度の高いC類の等位節「が」「けれども」「から (判断の根拠)」などは、連用節の中で最も独立度が高く、ほぼ主文に相当するような性質をもっている。したがって、これらの従属節の複文は従属節と主文それぞれの文の類型が成り立つと考えられ、主従いずれも文として意味的な充足度が高く、B類のような主題的な解釈も起こりにくい。

- (14) a. 去年に続いて参加しましたが、タイムが良くなったのがうれしい。  
 (『広報たかまつ』2008/22BCCWJ)
- b. 賞を受賞したことを聞いて驚きましたが、とてもうれしいです。  
 (『広報誌もみじだより』2008/1BCCWJ)

上の例では、(14a)の「うれしい」対象は「タイムが良くなった(の)」であり、「が」節は対象とは解釈されない。一方、(14b)では「うれしい」対象は「賞を受賞したこと」と解釈されるが、主文ではそれを省略していると解釈される。この複文を「賞を受賞したことは、とてもうれしいです」のように置換すると、「聞いて驚きました」の部分は欠落してしまい、B類のように全文をほぼ等しく置換することはできない。

### 3. 補足節の階層構造と文の類型

#### 3. 1 補足節内の要素

ここでは、補足節の階層構造における位置付けを、連用節同様、補足節の内部に現れる要素と、従属節相互の包含関係により見ていく。

まず、補足節の内部に現れる要素—主題の「は」や伝達、表現類型、認識のモダリティ形式<sup>14</sup>—について見てみると、制限の少ない引用節に比べ、名詞節と引用節は、従属節の内容や主文の述語、モダリティ形式の種類によって制限が異なる。

【表3：補足節内に現れる要素】○現れる、×現れない、△現れにくい・制限がある

節内の要素	主題「は」	モダリティ形式									例
		認識			表現類型				伝達		
		だろう	かもしれない	らしい	疑問	意志	勧誘	行為要求	丁寧さ	終助詞	
補足節											
名詞節	×	△	△	△	×	×	×	×	○	×	(15)
引用節	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	(16)
疑問節	○	△	×	×	○ <sup>15</sup>	×	×	×	△	×	(17)

まず、名詞節には主題の「は」は現れない。モダリティ形式では、伝達のモダリティ形式の丁寧さは現れるが、終助詞は現れない。表現類型のモダリティ形式（疑問、意志、勧誘、行為要求）も現れない。認識のモダリティ形式は、主文の述語が「命じる」「頼む」など行為の遂行や「決意する」「決心する」など認識の堅持を表す述語の場合は現れない。また、「見る」「知る」など知覚や認識を表す述語などには「(し) そうだ」「らしい」「かもしれない」などが現れる (日本語記述文法会, 2008)。

- (15) a. 【主題「は」】 日本チーム {が/\*は} 勝ったのを知って、大喜びだった。  
 b. 【丁寧さ】 今年も無事に過ごせました {こと/の} を喜んでおります。  
 c. 【終助詞】 \*今日は休みにするよことを伝えた。  
 d. 【行為要求】 \*明日は早く来いことを伝えた。  
 e. 【認識：「だろう」】 彼が来るだろう {こと/\*の} を予め予想していた。  
 f. 【認識：「らしい」】 予定を変更するらしいことを {知らせた/\*決心した}。

次に、引用節は3つの補足節の中で最も制約が緩く、丁寧さは現れにくいだが、他の形式はほとんど現れる。

<sup>14</sup> ここでのモダリティ形式の認定や名称は、日本語記述文法研究会 (2003) による。

<sup>15</sup> 疑問節自体が疑問の形をしていることを指す。

- (16) a. 【主題「は」】 ニュースで日本チーム {が/は} 勝ったと言っていた。  
 b. 【丁寧さ】 \*皆元気ですと思います/「皆元気です」と言った<sup>16</sup>。  
 c. 【終助詞】 店長は今日は休みにするよと言った。  
 d. 【行為要求】 明日は早く来いと言っていた。  
 e. 【認識：「だろう」】 私は田中さんは来るだろうと思っていた。  
 f. 【認識：「らしい」】 予定を変更するらしいと聞いた。

最後に、疑問節には丁寧さは現れることがあるが、主題の「は」、伝達・表現類型・認識のモダリティ形式は現れにくい<sup>17</sup>。ただし、「晴れるのかわからない」のように説明のモダリティ形式「のだ」は現れる。

- (17) a. 【主題「は」】 日本チーム {が/は} 勝ったかどうか、知りません。  
 b. 【丁寧さ】 {?皆元気ですか/在庫がございますか} 確認いたします。  
 c. 【終助詞】 \*店長は休みにするよかと言った。  
 d. 【行為要求】 \*明日は来いか伝えた。  
 e. 【認識：「だろう」】 ?彼が来るだろうかわからない。  
 f. 【認識：「らしい」】 \*予定を変更するらしいか確かめる。

以上のように、補足節内に現れる要素については、名詞節、疑問節、引用節の順に制限が強いと言える。

### 3. 2. 補足節と階層構造

3. 1の考察から、従属節内に現れる要素から見ると、補足節のうち最も独立度が高いのは引用節と言える。ただ、名詞節と疑問節は従属節内に現れる要素も一様ではなく、独立度の高低を一概には比較できないが、従属節内の要素の現れ方から見ると、名詞節も疑問節もテンスは含むことができるので、「ので」など「対事的モダリティ階層節」以上には属していると考えられる。名詞節、疑問節を「ので」と比べたのが次の表である。

【表4：名詞節・引用節・「ので」節内に現れる要素】

○現れる、×現れない、△現れにくい・制限がある

節内の要素	主題「は」	モダリティ形式								
		認識			表現類型				伝達	
		だろう	かもしれない	らしい	疑問	意志	勧誘	行為要求	丁寧さ	終助詞
補足節										
名詞節	×	△	△	△	×	×	×	×	○	×
疑問節	○	△	×	×	○	×	×	×	△	×
「ので」	○	×	○	○	×	×	×	×	○	×

また、第1部第4章1. 2で述べたように、引用節は独立度の低い階層にも属している。野田尚史(2003)は、引用節が階層構造において独立度の低い語幹階層節にも、独立度の高い対他的モダリティ分化節にも属していることを指摘しているが、引用節以外の補足節、すなわち名詞節と疑問節も、同様に2つの側面をもっていると考えられる。いずれも従属節の内部は大きい、同時に主文の述語の補語として機能しているためである。たとえば、「日本チームが勝ったかどうか知らない」という複文は、「日本チームの勝敗を知らない」のような単文にほぼ近い意味を表し、疑問節は「知らない」という述語の補語としてはたらいている。そのため、補足節は語幹階層節に含まれることがある。次の例は語幹階層節で同時動作を表す「ながら」節に、疑問節が含まれている。

<sup>16</sup> 直接引用が成立する場合は丁寧さも現れるが、この場合引用節は名詞相等とも考えられる。

<sup>17</sup> 認識の「だろう」については疑問文で終わるようなものを接続した例はあるが複文とは考えにくい。例：「からかわれているのだろうか、何と答えていいかわからない。」(『無限冥宮』-BCCWJ)

(18) 飛行機の時間にぎりぎり何とか間に合うかどうか危ぶみながら名瀬にもう一度引き返してくれた。 (『奄美ほこらしや』BCCWJ)

一方、引用節が終助詞など対人的なモダリティ形式とは相容れず(例「\*…ですねと思います」)、対応する関係が認められることから、「対他的ムード分化節」という従属節の中では最も高い階層構造にも位置付けられる(野田, 2003)。名詞節及び疑問節の独立度については今後の検討課題としたい。

以上のように、補足節はいずれも主文の補語でありながら、その内部の要素から見ると比較的独立度の高い従属節であることから、連用と連体の両面のはたらきをもつと言えるだろう。

### 3. 3 補足節と文の類型

次に、補足節をとる複文の類型を考えてみる。補足節は述語に対して補語の関係にあることから、連用節とは異なり構造的に単文の延長として捉えられやすい。したがって、補足節をとる複文の類型は主文の述語により決定されると考えるのが妥当であると思われる。例えば、「彼は来ると言った。」という引用節をとる複文の類型は、主文の「言った」という動きにより「動き」と決定される。「家が持てるのは幸せだ。」という名詞節をとる複文の類型は、主文の「幸せだ」という状態により「状態」と決定される。同様に、「学生が自主的にやるのが理想だ。」という複文は主文の「理想だ」という属性により「属性」と決定される。また、主文の述語により、補足節内の要素の現れ方も異なっている。たとえば、「命じる」という述語は、「来る {ことを/ように} 命じる」のように引用節と名詞節をとるが、従属節内の述語は非過去形に制限され、「\*来た {ことを/ように} 命じる」のように過去形は現れない。

補足節の文のタイプの決まり方をまとめると、以下のようになる。

#### (19) 【補足節を含む複文のタイプの決まり方】

- a. 補足節を含む複文のタイプは主文の述語により決定される。
- b. 補足節をとる述語はそれぞれ決まっており、述語により補足節内の要素に制限が加わることもある。

(19b) の「述語により補足節内の要素に制限が加わるのは以下の場合である。

#### (20) 【従属節に過去の事態が現れない：非過去の行為を意味する述語】

- a. これは中華料理を {作る/\*作った} のに使う。(使用の目的)
- b. 友達が {引っ越す/\*引っ越した} のを手伝った。(行為の促進)
- c. すぐに {支払う/\*支払った} ように命じる。(命令)

#### (21) 【従属節に個別の事態が現れにくい：常識に照らした評価を表す述語】

- a. 相手の立場で {考える/?考えた} のは重要だ。(重要性の評価)
- b. 相手の立場で {考える/?考えた} のは難しい。(難易の評価)

補足節をとる述語については、日本語記述文法研究会(2008)を参考に以下のようにおおよそまとめられる。

【表5：補足節をとる述語】(日本語記述文法研究会, 2008をまとめたもの)( )は例文番号

補足節	述語	例
名詞節	・ 名詞述語 属性・評価・主題提示	学生だ、事実だ、～のは名詞だ
	・ 形容詞述語 評価・感情・得手不得手	難しい(21b)、悲しい、得意だ

	<ul style="list-style-type: none"> <li>動詞述語 認識・知覚・感情・態度・停止・目的 言語活動・思考・表示・知覚・促進 阻止・捕獲・遭遇・創作</li> </ul>	知る、心配する、批判する、止める、使う(20a)、話す、思う、表す、見る、手伝う(20b)、止める、捕まえる、行きあう、写す
引用節	<ul style="list-style-type: none"> <li>名詞述語(「とは」の場合) 意外性</li> </ul>	予想外だ、驚きだ
	<ul style="list-style-type: none"> <li>形容詞述語(「とは」の場合) 意外性を含む評価</li> </ul>	意外だ、素晴らしい、ひどい 幸せだ、すごい
	<ul style="list-style-type: none"> <li>動詞述語 発言・思考・命令・依頼・祈願</li> </ul>	言う、思う、命じる(20c)、頼む、祈る
疑問節	<ul style="list-style-type: none"> <li>名詞述語 問題・重要</li> </ul>	問題だ、重要だ(21a)
	<ul style="list-style-type: none"> <li>形容詞述語 確実・不確実・不安・疑問</li> </ul>	不明だ、明らかだ、不安だ 怪しい
	<ul style="list-style-type: none"> <li>動詞述語 知識の獲得・伝達・消失</li> </ul>	質問する、伝える、忘れる

以下では、名詞節、引用節、疑問節について、それぞれの階層構造における位置付けと複文としての文の類型を考察する。

### 3. 4 名詞節と階層構造

名詞節の階層構造については、田窪(1987)が英語との比較を行いながら南(1974)を補完している。それによれば、名詞節(田窪では「埋め込み節」)にもA類とB類の異なる階層が存在し、A類は内部の動詞が現在形と過去形の対立をもたず、一般的な事態を表す(例(22))のに対し、B類はテンスの対立があり、特定の事態を表す(例(23))。

- (22) a. 太るのは簡単だ。  
b. 運動 {する/\*した} のは大切だ。  
c. 私は運動 {する/\*した} ことを約束した。
- (23) a. 運動 {する/した} のは当然だ。  
b. 運動しなかったことを反省した。

こうした観点は、名詞節の階層構造という構造的な観点に当該の事態の一般性や個別性という、文の類型に繋がる意味を加えた考え方であり、本研究もこれを支持するものであるが、いくつか疑問も残る。

まず、事態が一般的か個別のかの区別として、テンスの対立の有無のみを基準にするという考え方である。田窪では例(22c)「運動すること」のような節はテンスの対立がないためにA類、例(23b)「運動しなかったこと」のような節はテンスの対立があるためにB類とされている。しかしながら、例(22c)「私が運動することを約束した。」という文では動作主は個別の主語であり、未実現ではあっても個別の事態と捉えられるので、テンスの対立のみでは個別性と一般性は決められず、動作主体の意味なども関わると思われる。これは、英語などの言語で名詞の総称性が問題になるのとも関連している。

次に、連用節の階層構造の決定に当たって重要な役割をもつ従属節内に現れる要素について、その現れ方の必須性が連用節と名詞節ではかなり異なるということである。たとえば、連用節である「ながら」節は個別の事態も一般的な事態も表せ、事態が個別かどうかということは「ながら」節の独立度に影響は与えていない。「食べながら話すのは行儀が悪い」のような一般的な事態を表す節も、「時間がなかったので食べながら話した」のような個別の事態を表す節も、いずれも動作主が明示されないという特徴をもっている。

すなわち、連用節の場合は従属節の形式により動作主の明示も固定されているのに対し、名詞節の場合は動作主の明示が任意であるため、「運動するのは大切だ」と「お父さんが運動するのは大切だ」のように、動作主の明示により一般的な事態か個別の事態かが決まる

こともあると言える。また、「運動するのは楽しい」のように主文の述語によっては一般的な事態か個別の事態か不明なこともある。

以上の2点から、名詞節の個別性と一般性を階層構造と合わせて考える際、連用節の階層構造とはやや異なる説明の観点が必要なのではないかと考える。

### 3.5 名詞節と文の種類

本研究では以下のような基準により、名詞節を補足節にとる複文の一般性と個別性を連続的に捉えることにする。

#### (24) 【名詞節を補足節にとる複文の一般性と個別性の決まり方】

名詞節を補足節にとる複文は、個別性と一般性を軸にしたスケール上に連続的に位置付けられる。個々の複文の位置付けを決める条件として、以下のような条件が挙げられる。

#### ① 【特定/不特定】 名詞節の事態の主体が特定か不特定か

主文、従属節ともに動作主は特定であれば個別性は強く、不特定であれば一般性が強い。

(25) {お父さんが運動する/運動する} のは大切だ。

#### ② 【過去/非過去】 名詞節の事態が過去か非過去か

過去の事態は個別の事態を、非過去の事態は一般的な事態を表しやすい。

(26) {運動した/運動する} のはいいことだ。

#### ③ 【動き/状態・属性】 主文の種類が動きか状態・属性か

主文が動きなら個別性を表しやすく、状態や属性なら一般性を表しやすい。

(27) 運動するの {を見た/は当然だ}。

#### ④ 【主文述語の語彙的な条件】

状態・属性を表す述語でも、「明らかだ」「事実だ」のような個別の事態の生起を意味するような述語の場合、補足節の事態は個別性を表しやすいが、「大切だ」「幸福だ」のような評価を意味する述語の場合、補足節の事態は一般性を表しやすい。

(28) 実行するのは {事実だ/大切だ}。

#### ④ 【「は」の有無】 名詞節が主題「は」を伴うどうか

名詞節が「は」をとともなう場合は一般性を表しやすい。

(29) {運動するのが/運動するのは} 大切だ。

文の種類が決まり方に関しては、工藤 (2012) も、「は」と「が」の違いや主文が名詞述語かどうかということが、恒常的特性か一時的現象かに影響すると述べている。たとえば、「は」と「が」については、「先生はやさしい」は恒常的特性、「(今日は) 先生がやさしい」は一時的現象となる。

以上の条件をまとめたのが表6である。

【表6：名詞節を補足節にとる複文の種類】

	主体	過去・非過去	主文述語	主文述語	主題「は」	例
個 別 的 ↑ ↓	特定	過去	動き			(25a)
			非動き	個別的述語	無	(25b)
				一般的述語	有	(25c)
		非過去	動き		無	(25d)
				一般的述語	有	(25e)
			非動き	個別的述語	無	(26a)
	不特定	過去	動き		有	(26b)
				一般的述語	無	(26c)
			非動き		無	(26d)
				一般的述語	有	(26e)
		動き	個別的述語	無	(27a)	
		非動き	個別的述語	無	(27b)	

↑ 一 般 的 ↓				一般的述語	有	(27c)
					無	(27d)
		非過去	動き		有	(27e)
						(28a)
			非動き	個別的述語	無	(28b)
					有	(28c)
				一般的述語	無	(28d)
					有	(28e)

以下では表6に照らし、名詞節を含む複文が個別的なものから一般的なものに移行する段階を例で示す。

まず、従属節の事態の主体が特定で、過去の事態の場合、主文述語が動きである例(30a)が最も個別性が強く、特定の主体による行為が特定の時空間に位置付けられている。これに対し、例(30d)(30e)の従属節の事態もやはり特定の主体による過去の事態ではあるものの、主文の述語は一般性を志向する評価の述語となっており、徐々に一般的な意味に移行しているが、例(30d)(30e)は波線部「鈴木さんたちにとっては」「雅宗にとっても」といった評価判断の主体が明示されており、複文全体としては個別的な事態を表している。

- (30) a. 彼女は、二宮由香からの電話を受けて高浜に伝えた。だから彼が二宮由香と会ったのを知っている。 (『鹿島槍ヶ岳殺人事件』BCCWJ)
- b. 通信事業を独占してきたNTTとKDへのチャレンジャーとして誕生した新電電各社だったが、「地域」「長距離」「国際」と分断された枠の中での競合に終始し、参入当初の意気込みは次第に薄れていってしまったのが事実だ。 (『図説通信はどうなる』BCCWJ)
- c. 私の場合、送った額より多くもらった時は、嬉しかったのは事実ですが、ちょっと馬鹿にされた感じがありました。 (Yahoo!知恵袋2005-BCCWJ)
- d. 日ごろボクたちが感じていなかったことが、鈴木さんたちにとってはとても大切な夢なんだとわかりました。(『KinKi Kids レア・ダイアリー・ブック』BCCWJ)
- e. 君の考えてくれたことは、雅宗にとってもとても大切でありがたかった筈だ。 (『心では重すぎる』BCCWJ)

次に、従属節の事態の主体が特定で、非過去の場合を見てみると、やはりいずれも個別の事態を表したり評価したりする文になっており、従属節の事態の主体の特定性が複文の特定性を決定している。ただし、例(31b)～(31d)のように主文が評価を表す述語の場合、一般的な基準に照らした判断がなされるため、意味的には一般的な文に近づいている。

- (31) a. 俺たちはそんなことをしないし、やつらも俺たちがそんなことをしないのを知っている。 (『スパイダー・ワールド』BCCWJ)
- b. 世話役そのものは教授方の一枚下の役だが、鉄太郎の実力を以てすれば、いい足がかりになるのが燎を見るより明らかだ。 (『逃げ水』BCCWJ)
- c. 明恵がこのような体験を華厳の教えと符合することとして受けとめているのが重要と思われるが、明確なことがわからず極めて残念である。 (『明恵夢を生きる』BCCWJ)
- d. 政治的アピールとしての面を考えると、日本政府が実施できる数少ない対抗策に着手するのは重要な意味をもつ。 (『SAPIO』2004/2/25BCCWJ)

次に、従属節の事態の主体が不特定な場合を見ていく。(32)の例はいずれも従属節の事態が過去の特定の事態を表すが、主文が動きの場合(例(32a))と状態の場合(例(32b)(32e))とを比べると、動きの場合の方が特定の事態を想定しやすく、例(32a)の「テレビで盛り上がっていた」のは特定の主体によるものとも解釈できる。

- (32) a. 一番最上階の展望ラウンジには懐かしい長野五輪の栄光のパネルが展示してあります。テレビ観戦で盛り上がっていたのを思い出しましたよ。 (Yahoo!ブログ2008-BCCWJ)



- b. 圧倒的な世論が「県内移設なき基地の整理・縮小」を望んでいたのが明らかである以上、知事の意向表明が遅すぎたことは間違いない。  
(『政治を民衆の手に』BCCWJ)
- c. 公家や平氏の生き残りが四国あたりに寄ったりしながら南へ行ったのは事実だと思うんです。  
(『椎名誠編集長でっかい旅なのだ。』BCCWJ)
- d. 自ら企画したものも含めて各種研修会への参加、乳幼児応急手当のように講師を招いての実技研修などとともに、みずからの実践を総括するための学習会を開催したことが重要である。  
(『生涯学習の教育学』BCCWJ)
- e. 多くの先進国において、サービスや知的財産等の分野でルールが確立したことは重要な意義がある。  
(『通商白書』平成6年版総論 BCCWJ)

最後に、最も一般性の高い不特定・非過去の例(33)について見ると、従属節も主文も動きである例(33a)であっても、従属節の事態が過去である上の例(32a)と比べると、特定の時空間に位置付けられる事態は想定しにくい。

- (33) a. ウグスブルグ市(長浜市の姉妹都市)を訪れて、住民の自主的規制が、美しい町並みを創ることを知った。  
(『「町おこし」の経済学』BCCWJ)
- b. 生活習慣の変化で胃がんになる人自体が減っているのが事実だ。  
(『中央公論』平成14/4BCCWJ)
- c. どこに議論の座標を置くかによって、議論の流れはがらっと変わってくる。テレビ討論会でしくじったら、有権者にそっぽを向かれるのは明らかだ。  
(『学び心』BCCWJ)
- d. 保育者はゆっくりと時間をかけ、きめ細かく観察しながら対応していくことが大切です。  
(『わたしの世界』から「わたしたちの世界」へ』BCCWJ)
- e. 相手の立場で物事を考えるのは重要だよ。  
(『アフリカン・ゲーム・カートリッジズ』BCCWJ)

以上のように、表6は下に進むにつれ、個別の1回の事態から不特定の一般的な事態に移行していく。個別性と一般性を決める要因はいくつかあるが、とくに①名詞節の事態の主体が特定か不特定か、②名詞節の事態が過去か非過去かが大きく関わっていると考えられる。

## 4. 「の/こと」節と事態評価の述語

### 4.1 「の/こと」節の特徴

名詞節「の」「こと」の使い分けに関する研究は、久野暲(1973)、佐治圭三(1993)、野田春美(1995)、川越菜穂子(2006)など、多くの議論が積み重ねられている。これらの主要な議論をまとめると、その使い分けの本質は、「の」節のもつ現場性、「こと」節のもつ一般性、抽象性であり、以下のようにまとめられる。

#### 【「の」だけが用いられる述語】

- ・ 感覚動詞：「見る」「感じる」等
- ・ 事態の実現を表す動詞：「待つ」「移す」「合わせる」「手伝う」

(34) 友人が来る {の/\*こと} を待つ。

#### 【「こと」だけが用いられる述語】

- ・ 発話・伝達動詞：「言う」「伝える」等
- ・ 思考動詞：「思う」「考える」等
- ・ 遂行動詞：「命じる」「決める」等

(35) 来年度の予算を削減する {\*/の/こと} を決めた。

#### 【「の」も「こと」も用いられる述語】

- ・ 認識動詞：「知る」「わかる」「忘れる」等
- ・ 感情・評価の述語：「喜ぶ」「悲しむ」「好きだ」「嫌いだ」「よい」「悪い」
- ・ 対応を表す動詞：「賛成する」「慣れる」等

・ 実現・終了を表す動詞：「やめる」「始める」等

(36) 子どもが成長した {の/こと} を喜んだ。

この分類で本研究と関係するのは、③の【「の」も「こと」も用いられる述語】のうち、川越 (2006) が「の」も「こと」も用いられる述語として挙げている「事柄に対する感情や評価を表す動詞および形容詞」で、上記の「喜ぶ」のような動詞のほか、「好きだ」「嫌いだ」「よい」「悪い」「すばらしい」「ありがたい」などがある。

これらの感情や評価を表す述語は、「君が手伝ってくれるのはありがたい」のように「は」を伴って主題になることが多く、また、「君が手伝ってくればありがたい」のように連用節をとって評価の対象を表すことがある。以下では、このような③の感情・評価の述語のうち、連用節をとることができるものについて考察していく。

## 4. 2 「の/こと」節の主題用法

### 4. 2. 1 感情表現と評価表現

主題用法としての「の/こと」節をとる複文の主文の述語は、寺村 (1982) の文の類型によれば、「感情表現」及び「性状規定」に含まれるものである。

まず、「感情表現」であるが、寺村 (1982) は「感情表現」を大きく「動詞表現」と「形容詞表現」に分け、補語のとり方によりそれぞれを更に2つに分ける。

(37) 寺村 (1982) の「感情表現」

感情表現—動詞表現 ①「一時的な気の動き」(例「～に安心する」)

②「能動的な心の動き」(例「～を悲しむ」)

感情表現—形容詞表現 ③「感情状態の直接的表出」(例「～がうれしい」)

④「感情的品定め」(例「～が…に(とって)好ましい」)

これらの感情表現の補語の分類は、述語の意味が補語や助詞のとり方を決定していることを示す。③と④の違いはわかりにくい、④は感情表現と性状表現の中間的な存在であり、「愛らしい」「好ましい」「嘆かわしい」のように、以下で見る性状規定に近い。これら①～④の述語のほとんどは、感情の対象となる事態を「の/こと」節で表したり、また、感情をもたらした原因を連用節で表す場合もある。

たとえば、①の「安心する」は、「母は息子が合格したのに安心した」のように原因格の「に」をとるが、この原因格は「母は息子が合格したので安心した」のように理由節とすることもできる。また、③の「うれしい」は「私は息子が合格した {の/こと} がうれしい」のように感情の対象を「の/こと」で表すことができ、同じ内容を「私は息子が {合格して/合格したので} うれしい」のように理由節で表すこともできる。

次に、「性状規定」についてであるが、これは佐久間文法に基く寺村 (1982) の「品定め」に属する。佐久間文法の品定め文には「性状規定」と「判断措定」があるが、ここで問題になるのはこのうちの「性状規定」であり、述語としては形容詞を中心に動詞や、名詞+「だ」も含まれる。寺村 (1982) は「性状規定」を以下の3種に分ける。

(38) 寺村 (1982) の「性状規定」

①「何かに対する」性状<sup>3</sup>：「相手」または「片方」が必須または副次補語である。

述語：A：賛成だ、反対だ、満足だ、不満だ、相応しい。

B：似ている、平行している、共通している

C：同じだ、異なる、違う、逆だ

D：親切だ、やさしい、甘い、厳しい、弱い、強い

② 相対的性状：「～に/～にとって」という品定め基準が準必須補語である。

述語：大きい、小さい、長い、短い、重い、軽い、深い、浅い、難しい、易しい、よい、悪い、できる、可能だ、わかる、等。

③ 絶対的性状：「何に対して」ということを言う必要のない、判断措定に最も近い

<sup>3</sup> A～D類の違いはそれぞれの補語のとり方による。(寺村 1982, p. 180)

述語。

述語：丸い、細長い、四角い、赤い、白い、簡単だ、複雑だ、様々だ、病気だ、元気だ、本当だ、うそだ等。

これらの述語のうち、①の「似ている」「同じだ」などいくつかの述語は「の」「こと」節はとるが連用節は取りにくい（例：{君がすることは/?君がすれば} 彼がしたことと同じだ。）。また、③の「絶対的性状」を表す述語「丸い」「白い」などは判断の対象として「の/こと」を含め従属節をとりにくい（例：?雪が降るのは白い。）が、それ以外の述語は対象が複数の従属節で表されることがある。たとえば、たとえば、①に分類される「満足だ」「不満だ」は、「彼が表彰されたのは不満だ」「彼が表彰されて満足だ」のように名詞節や理由節で評価の対象を表す。②の「相対的性状」である「よい」という述語は、「この薬を飲むのは彼にとってよい」「この薬を飲むだけでよい」「この薬を飲めばよい」などいずれも可能である。

以上のように、感情表現及び性状規定の述語は、すべての述語ではないが、多くはその感情や評価の対象を事態として表すことがある。

#### 4. 2. 2 事態評価の述語

感情や評価の対象を事態として表す述語による構文を田中（2004）では「評価・判断の述定構文」とし、評価を表す形容詞述語を格により以下のように分類している。

【表7：評価を表す形容詞述語のとり格】

（田中，2004，p. 561-570より抜粋して引用、筆者が表にまとめたもの）

形容詞述語のとり格	形容詞述語 例
「は」をとるもの 一般的な評価・判断を下すもの。通念的、一般的な意味合いが強い。	おいしい、ひどい、ありがたい、大変だ、あきらかだ、面倒だ、無理だ、困難だ、……
「が」をとるもの 焦点となる感情の出所を差し出す。	こわい、おいしい、うまい、悲しい、つらい、うれしい、不満だ、大変だ、好きだ、……
「も」をとるもの 「さえ」と同じ強調を表す。 話し手の情意を強く表出する。	おこがましい、甚だしい、つらい、恥かしい、いやだ、……
「で（は）」「に（は）」をとるもの 形勢、状態の適否、適合をあらわすことが多い。	・理由背景の要因を表す「で」格を要求するもの。 忙しい、不便だ、…… ・用途対象を表す「に」格を要求するもの。 都合がいい、忙しい、相応しい、……
「～のを/のは～思う」	さみしく思う、なつかしく感じる、残念に思う、……
「だけ」などの付加的成分をとるもの	～だけ気楽だ、～のが～てならない、……

こうした評価を表す形容詞は、評価の対象として事態をとるために、従属節が現れることが多いが、従属節は常に名詞節とは限らない。田中（2004）は、上記のような形容詞述語の対象を示す「のは」節が連用節と交替し、前件が主題的な意味になることを指摘し、評価・判断の述語の語彙的な分類を行った。

ここでは、寺村（1982）、田中（2004）を参考に、感情表現と性状規定の述語で事態を対象とするものを「事態評価の述語」と呼び、それぞれの述語がどのような従属節をとるかを明らかにする。

事態評価の述語のうち、感情表現を表8、評価表現を表9に示す。このうち、評価の対象として複数の従属節をとり得るのは、表8の感情表現すべてと、表9の太字で表した感情の意味を含む述語である。

【表 8：感情表現とその対象となる従属節】（「～」：従属節「…」：評価主体）

①一時的感情を表す動詞	
「～に+動詞」	安心する、悩む、怒る、興奮する、熱中する、失望する、驚く
②能動的感情を表す動詞	
「～を+動詞」	悲しむ、喜ぶ、こわがる、憎む、恐れる、楽しむ、好む、嫌う
③直接的感情を表す形容詞	
「～が+形容詞」	うれしい、こわい、うまい、恥ずかしい、苦しい
④評価的感情を表す形容詞	
「～が…にとって+形容詞」	恐ろしい、ばかばかしい、悲しい、喜ばしい、幸せだ
⑤評価的感情を表す名詞	
「～が…にとって+名詞」	安心だ、悩みだ、驚きだ、悲しみだ、喜びだ、楽しみだ、恐怖だ

【表 9：評価表現とその対象となる従属節】（「～」：従属節「…」：評価主体）

①賛否・充足を表す述語	
「…が～に+述語」「…に～が+述語」	賛成だ/する、反対だ/する、満足だ/する、不満だ、相応しい
②類似・異同を表す述語	
「～が～と/+に+述語」	似ている、平行している、共通している、同じだ、異なる、違う、逆だ（「違う」「逆だ」は「～に」を取りにくい。）
③剛柔・強弱を表す述語	
「…が～に+述語」	甘い、厳しい、弱い、強い
④難易・当為・真偽を表す述語	
「～が～/…に+述語」	難しい、易しい、いい、悪い
「～が…に+述語」	できる、可能だ、簡単だ、複雑だ、理想だ
「～が+述語」	様々だ、本当だ、うそだ

さらに、これらの事態評価の述語を、影山（2008）等を参考にした文の類型に位置付けたものが次の表である。

【表 10：複文の類型と事態評価の述語】

（○：共起する △：共起しにくい、条件付き ×：共起しない）

時間的安定性	時間的安定性 (time stability)				
	←		→		
	事象 (event)	(一時的) 状態 (stage-level states)	恒常的状态 (individual-level states)		
文の類型	動き (movement)	準動き (quasi-movement)	状態 (state)	準属性 (quasi-property)	属性 (property)
感情表現		安心する/悩む /悲しむ/喜ぶ	うれしい/悲しい /幸せだ/安心だ /悩みだ		
評価表現	賛成する/ 反対する	満足する	満足だ/不満だ	厳しい/いい/難 しい/逆だ	複雑だ/理想だ
動き (シ)バグメル	○	○	×	×	×
状態 ～カフ～マデ <sup>o</sup>	○	△	△	△	×
今日は	○	○	○	○	×
属性 ～化	×	×	×	×	○

表 10 について説明すると、まず、文の類型を「時間的安定性」の連続的なスケールとし

て捉える (Givón, 1984 ; 工藤, 2002, 2012) 立場をとっている。「時間的安定性」のスケールの一端である「事象 (event)」から「一時的な状態 (stage-level states)」を経て、もう一端の「恒常的な状態 (individual-level states)」まで連続している。

次に、このスケールの下で文の類型を大きく「動き」「状態」「属性」に三分する。これは工藤 (2012) 及び仁田 (2012) の分類を参考にしている。まず、「動き」は「内的展開過程」(仁田, 2001) 一開始・展開・終了一をもつものと規定される。「動き」は「(し) はじめ/だす」「(し) てくる」などの開始や展開の形式が付くものであり、これにより「彼はドアをたたいた (→たたきはじめて)」のような主体運動の典型的な動きから、「胃が痛む (→胃が痛み始めた)」のような意味的には状態に近い生理動詞による文も「動き」として位置付けられる。ただし、「悲しむ」「安心する」などの心理動詞は、吉永尚 (2008) で指摘されているように「別れを悲しむ (→\*別れを悲しみおわった)」のように終了限界を表しにくいことから、ここでは典型的な動きと区別して動きと状態の中間に位置付けている。

また、「状態」は内的展開過程をもたない、一時的な時間帯の中に存在するもののあり様、「属性」は時間的限定をもたない、恒常的に存在する、物の同質的なあり様である (仁田, 2001) とそれぞれ規定される。「状態」が時間的限定をもっているということは一定の期間同じ状態を保っているということであるが、ここには「3時から5時まで」のような開始時と終了時を明確に示すことのできるもの (「来年まで東京にいる」「昨日から忙しい」と、「今日は悲しい」のように「今日」「さつき」のようなおおよその時間を表す成分としか共起しないものがあると考えられる。

本研究では、「動き」と「状態」、「状態」と「属性」のそれぞれの境界に「準動き」及び「準属性」という領域を位置付けている。「準属性」は影山 (2008) により提案されたものである。本稿で提案する「準動き」には、心理動詞が位置付けられ、動きの限界を取り出す形式とは共起しにくく、「今日は」のようなおおよその時間を示す成分とは共起するが、「3時から5時まで」のような正確な時間的限定が難しい点で、動きと状態の中間的な存在である。

上の表で△とした部分のうち、準動きに属する△は、心理動詞「喜ぶ」「悲しむ」などは典型的な動きである「たたく」などより動きの限界を取り出しにくく、また、時間も正確に限定しにくいことを示す。次に、状態に属する△は、表す形容詞「うれしい」などがおおよその限定しかできないことを示す。

このように文の類型において中間的な部分を設けるのは、本稿で扱う事態評価の述語が心理動詞や感情表現を中心に分布しており、これらが複文の類型の中で属性叙述文の現れである「主題一解説」という文構成を取ることを示し、文の類型における個々の事態評価の述語の位置付けが従属節の取り方にも反映していることを示すためである。

心理動詞による属性叙述文については、小竹直子・酒井弘 (2011) が名詞の主題を対象とした単文を中心に考察を行い、その意味的な条件や、心理動詞による属性文が中間構文や受動的可能文と共通点をもつことを指摘している。本研究は、こうした議論の延長として、心理動詞文における名詞の主題を名詞節に拡大し、名詞節の主題の意味を連用節も表せることから、心理動詞文が複文の類型において属性叙述文を形成することを主張するものである。

#### 4. 2. 3 感情表現と従属節

ここでは、事態評価の述語のうち、感情表現の述語が連用節をどうとるかを見ていく。表 8 で見た感情表現 5 種 ; ①一時的感情を表す動詞、②能動的感情を表す動詞、③直接的感情を表す形容詞、④評価的感情を表す形容詞、⑤評価的感情を表す名詞について、それぞれ 3 つずつ任意に選び、従属節のとり方を見たのが以下の表 11 である。

【表 11：感情表現の対象となる従属節】

○：従属節をとる ×：とらない △：とりにくい、条件付

	「の/こと」 +助詞	条件節	「て」節 中止節	理由節 <sup>18</sup> 「から」 「ので」	「とは」
安心する	○+に	○	○	○	×
悩む	○+に/を	○	○	○	○
興奮する	○+に	○	○	○	○
悲しむ	○+を/に	○	○	○	△悲しむべき
喜ぶ	○+を/に	○	○	○	△喜ぶべき
好む	○+を	×	×	×	×
うれしい	○+が/は	○	○	○	○
うまい	○+が/は	△おいしい	△状態	△状態	○
～たい	○+が/は/を	△あれば	×	×	○
おそろしい	○+が/は	○	○	○	○
ばかばかしい	○+が/は	○	○	○	○
かわいらしい	○+が/は/	○	○	○	○
安心だ	○+が/は	○	○	○	○
悩みだ	○+が/は	○	○	○	○
喜びだ	○+が/は/	○	○	○	○

上の表で、①一時的感情を表す動詞「安心する」は、「娘が就職したのに安心した」のように名詞節+「に」で感情の対象を表すが、「娘が就職すると安心した」のように条件節でも感情の対象を表すことができるので、このような場合を○とする。

②能動的感情を表す動詞「好む」は、「一人でいるのを好む」のように名詞節+「を」で感情の対象を表すが、「\*一人でしたら好む」のように条件節は用いることができないので×となる。△は従属節をとりにくい、条件付きで可能な場合である。たとえば、「悲しむ」は「\*不平を言うなんて悲しむ」のように、「とは」節はとりにくい、「不平を言うとは悲しむべきことだ」のように「べきことだ」にすると可能である。

③直接的感情を表す形容詞の「うまい」は多義語で「上手だ」の意味では連用節はとりにくい、「おいしい」の意味であれば「これにキノコを入れるとうまい。(Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ)」のように条件節が評価の対象となり得る。また、「\*キノコを{入れて/入れるので}うまい」のように「て」節や理由節はとりにくいものの、従属節が状態であれば可能である(例：鍋にキノコが{入っていて/入っているので}うまい)。「～たい」は、「また他にマメ科の園芸品種があれば見てみたい。(Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ)」のように「あれば」という存在を提示する条件節が現れるが、他の連用節が対象となることは難しい。

全体的に、④⑤の形容詞や名詞は連用節をとりにやすいが、①～③の動詞や形容詞では個々の語彙ごとに制限も異なっているようである。

以下では、それぞれの種類別に用例を見ていく。

### 【一時的感情を表す動詞】

「安心する」は一時的感情を表す動詞で、単文のときの「に」格は心的動きの対象または心的動きを引き起こした原因を表し、連体節から連用節に発展する可能性を含んでいる。

(39) a. こんなに温かい感触は、どれぐらいぶりだろう。その肩から伝わる温もりに、ボクは安心し、それまで張りつめていた緊張の糸も切れてしまった。

b. Zhèzhǒng gǎnjué cóng wǒ de jiānbǎng chuánbiàn quánshēn. Wǒ shēnshēn tǐwèizhe zhèzhǒng gǎnjué, jiànjiànde xīnshén āndìng xiàláì, xīnzhōng yuánběn bēngjǐnde xiàng yī tiáo sīxián yīyàngde dōngxi, tūrán duànliè.  
 这种感觉从我的肩膀传遍全身。我深深体味着这种感觉，渐渐地 心神安定下来，

<sup>18</sup> 理由節には「から」「ので」のほか、並列節「し」、「ことから」なども含めている。

心中原本绷紧得像一条丝弦一样的东西,突然断裂。 (『五体不満足』cjc363)

例 (7a) の下線部の原因格に対応する、(7b) 下線部の中国語訳は、かなり解説を加えたものとなっており、「……この感覚を深く感じ、落ち着いてきた」のように連用節を用いた複文となっている。

以下の例は、理由節「から」「ので」、「て」節により原因を示す例である。

- (40) a. 困ったな。まあ俺がついててやるから、安心しな。  
 b. Zhēn bùhǎo bàn. Búguò wǒ péizhe nǐ, nǐ jiù fàngxīn ba.  
 真不好办。不过我陪着你,你就放心吧。 (『野火』cjc242)
- (41) a. 怪我の軽い人だけ転送されたというので安心しました。  
 b. Tīngshuō zhǐyǒu fù qīngshāng de rén cái bèi zhuǎnsòngqù, suǒyǐ fàngxīn le.  
 听说只有负轻伤的人才被转送去,所以放心了。 (『黒い雨』cjc1602)
- (42) a. 「何もしないとき」が苦手。スケジュールを詰め込んで安心する。  
 b. Zuì pà “ wú suǒ shìshì de shíhou ”. Bù bǎ rìchéng páide mǎnmǎn de, xīnlǐ zǒng gǎndào bùān.  
 最怕“无所事事的时候”。不把日程排得满满的,心里总感到不安。  
 (『心の危機管理術』cjc187)

対応する中国語は、例 (40b) では接続関係を明示していないが、(41b) のように「所以(だから)」を用いて因果関係を明示したり、(42b) 「スケジュールを一杯にしないのは不安を感じる」のように否定を用いて条件の意味に近くして因果関係を表したりしている。いずれも日本語ほどは原因・理由を明示していない。

次に、BCCWJ で「安心する」がどのような従属節をとるかを調べたものが次の表である。

【表 12 : BCCWJ に見られる「安心す/安心し<sup>19)</sup>」の従属節】

従属節	名詞節	条件節	中止節	理由節	時間節	引用節
用例数	15	98	139	67	3	31
	ことに 8 他 7	と 63 ても 13 ば 12 だけで 7 なら 3		ので 35 ことで 11 からといって 9 から 8 ため 3 ゆえ 1	とき 2 とたん 1	

この表からわかるように、「安心する」のとり得る従属節で顕著に多かったのは「て」形や連用形といった中止節、続いて条件節「と」、理由節である。以下のような例である。

- (43) a. ナッキーが男の人が嫌いなわけではないとわかって、むしろ安心した。  
 (『地震でも安心な家』に住みたい』BCCWJ)  
 b. まだ起きている人々がいるのだと思うと、竜太は少し安心した。(『銃口』BCCWJ)  
 c. ダルビッシュは 150km 超が無かったけど、球威も気持ちもノッてたから安心した。  
 (Yahoo! ブログ 2008-BCCWJ)

また、「て」節は例 (43a) のように、従属節に「わかって」「知って」「聞いて」といった認識を表す動詞が現れることが多いというのも特徴的である。

このように、「安心する」のとり得る従属節は複数あるが、それらの形式が全ての場合にほぼ同じ意味で交換可能というわけではない。

- (44) a. 俺がついてて {?やるの (に) (は) /\*やったら/\*やって/やるから/\*やるとき/\*やるとは}、安心しな。

19 「安心す」「安心し」を検索することで「安心する」「安心した」「安心します」「安心しました」「安心して」「安心したら」等広範囲の活用形をカバーでき「安心だ」との区別も可能である。

- b. 怪我の軽い人だけと {聞いたの (に) (は) /聞いたら/聞いて/聞いたので/聞いたとき} 安心しました。

例 (44a) のように主文が働きかけを表す場合、理由とする事態は理由性の形式で明示する必要があり、理由節以外は現れにくい。例 (44b) は過去の事態を述べる文であるが、いずれの従属節も共起可能であるだけでなく意味的にも近く、このような場合には誤用が少ないことが予測される。

ここでは、一時的感情を表す動詞の例として「安心する」の従属節のとり方を見た。「安心する」の従属節には、因果関係を表す条件節、理由節、中止節といった連用節が多く現れ、名詞節は比較的少なく、中止節と「と」節が多いのが際立っている。中止節では認識動詞が多いのも特徴である。また、連用節をとる場合、主文が働きかけを表す場合に場合連用節の互換ができなくなることを指摘した。

### 【能動的感情を表す動詞】

次に見るのは、感情の対象として「を」格をとる動詞で、能動的感情を表す、「悲しむ」「喜ぶ」「好む」などがある。単文の「を」格は心的動きの対象を表すが、複文では対象となる事態が心的動きを引き起こした原因の意味も含んでいる。

- (45) a. ただ、人間は感情の動物でもある。昇進から外されて悲しんだり怒ったりするのは当然の心理でもある。

- b. Bíguò, rén yě shì gǎnqíng dòngwù. Yīn méi néng dédào jìnjí ér gǎndào bēishāng, nǎonù —— zhèzhǒng gǎnqíng yě shì yì zhǒng xīn tài de biǎoxiàn, bù zú wèi guài.

不过，人也是感情动物。因没能得到晋级而感到悲伤、恼怒——这种感情也是一种心态的表现，不足为怪。 (『心の危機管理術』cjc324)

- (46) a. (「興味」「円満な人柄」とは) 目標に近づいたり、到達したり突破したりしたらおおいに喜び、うまくいかないと悲しむ精神です。

- b. Dāng zìjǐ nénggòu jiējìn dádào huò tūpò mùbiāo shí huì gǎndào gāoxìng, ér dāng zìjǐ zāoshòu cuòzhé shí huì gǎndào bēishāng.

当自己能够接近达到或突破目标时会感到高兴，而当自己遭受挫折时会感到悲伤。(『ひとりっ子の上手な育て方』cjc966)

上の例で (45a) は中止節「て」、(46a) は条件節「と」により「悲しむ」対象となる事態を示しているが、その中国語訳を見ると (45b) は「因(ために)」を付けて原因を示し、(46b) は「当……時(…した場合)」という時間節による仮定条件となっている。

次に、BCCWJ で「悲しむ」がどのような従属節をとるかを調べたものが次の表である。

【表 13 : BCCWJ に見られる「悲しむ/悲しん/悲しみま<sup>20</sup>」の従属節】

従属節	名詞節	条件節	中止節	理由節	時間節	引用節
用例数	36	42	36	8	11	5
内訳	ことを 21 のを 9 (のは～ベ き 6)	たら 19 と 8 ば 7 ても 6 なら 1 ては 1		から 1 ことで 3 からといっ て 4	とき 9	

「悲しむ」の用例で特徴的なのは、まず、「悲しむ」の複文における条件節「たら」の多

<sup>20</sup> 「悲しむ」「悲しん」「悲しみま」を検索することで、「悲しむ」の非過去・過去、「悲しみます」の非過去・過去をカバーでき、「悲しい」「悲しみだ」と区別できる。



さである。「安心する」の条件節には「と」が多かったことと比べると、安心するという心理的な動きとその原因となる事態の因果関係は「こうすると安心する」という恒常的条件的に捉えられることが多いのに対し、悲しむという感情とその原因となる事態の因果関係は突発的な個々の事例によることが多いためであるのかもしれない。

また、理由節の少なさと中止節の多さも注目される。共起する理由節は数が少ないだけでなく「ことで」によるものがほとんどで、「ので」「から」節は「からとって」のような否定の場合の表現以外は見られなかった。以下の例は「ので」が共起しているが「ので」節の事態が「悲しむ」原因を表しているのではなく、「号泣する」ほど悲しみの程度が甚だしかった理由を表しており、中止節「愛犬の死を知り」が直接的原因を表している。

- (47) 特に、入寺直後に家に置いて来た愛犬の死を知り、家内は自分のすべてを投影して孤独を癒さんと可愛がっていましたので、号泣するほど悲しんだのですが、…  
… (『善き師、よき友』BCCWJ)

「悲しむ」は「安心する」に比べ感情を表す形容詞により近く、感情を引き起こす原因は理由節より中止節で表すことが多いためと考えられる。

次に、「悲しむ」のとり方従属節の形式が全ての場合に交換可能かということ、やはり用法の違いが存在している。

- (48) a. 自分っていうのはこの世で一つしかないんだし、いなくなることで悲しむ人もいる。  
(『いじめの現場』BCCWJ)  
b. 昔からこの地に住んでいた者は、土地を奪われて悲しんでいる。  
(『すらすら読める方丈記』BCCWJ)  
c. おこたりにく、肥料をほどこし、害虫を取り除くなどして育て、成長を喜び、枯れてくると悲しむ。  
(『元気な足のつくり方』BCCWJ)

- (49) a. 彼が {いなくなったの (に) (は) /いなくなったら/いなくなつて/いなくなつたので/いなくなつたとき} 悲しむ人もいる。  
b. 土地を {?奪われたの (に) (は) /?奪われたら/奪われて/奪われたので/?奪われたとき} 悲しんでいる。

例 (49a) は、一般的な因果関係を表すのに、名詞節、条件節「たら」、「て」節、理由節「ので」、時間節「とき」がいずれも用いられるが、「ので」の場合だけ因果関係が事実的に限られることを示している。反対に、例 (49b) のように事実的な因果関係には名詞節、条件節「たら」や「とき」が相応しくないことを示している。

ここでは、能動的感情を表す動詞の例として「悲しむ」を取り上げ、従属節のとり方の特徴を見た。「悲しむ」の従属節には、「安心する」に比べ因果関係を表す中止節が多く現れるが、中止節で継起的に原因を表すのは、感情を表す述語全体の特徴でもある。また、条件節は「安心する」に比べ条件節「たら」が多く現れるが、これは安心することと悲しむことの因果関係の捉え方が恒常的か偶発的かの違いであると考えられる。

また、名詞節は主題用法より「ことを」などの補足節の用法が多く現れる。そして、連用節をとる場合、一般的な因果関係を表す場合や恒常的条件を表す場合に連用節の互換ができなくなることを指摘した。

### 【直接的感情を表す形容詞】

形容詞による感情表現には、感情の対象を「が」格で示す、「うれしい」「うまい」「～たい」などがある。感情の対象となる事態は、その感情を引き起こした原因として従属節に展開する可能性を含んでいる。ここでは、「うれしい」の用例を見ていく。

- (50) a. 朝の十一時頃で、日はかなり強く照りつけ、あたりは日光を反射したが、彼は久しぶりに東京の土をふむのは嬉しかった。  
b. Nà shì shàngwǔ shí yī diǎn zuǒyòu, tàiyáng hěn dú, suǒ zhào zhī chù fǎnshèzhe yángguāng. Èr Yědǎo yīnwèi tà shàngle jiùbié de Dōngjīng de tǔdì, què hěn qièyì.

那是上午十一点左右，太阳很毒，所照之处反射着阳光。而野岛因为踏上了久别的东京的土地，却很惬意。（『友情』cjc921）

上の例（50a）の下線部の日本語の名詞節は（50b）の中国語では理由節「因为…（…から/ので）」の形で理由節として表されており、日本語も「久しぶりに東京の土をふむので」とすることも可能である。

また、対照研究でしばしば指摘されるように、「うれしい」の中国語訳で特徴的なのは、使役表現を用いて「～ことが…を喜ばせた」のように感情を引き起こした原因となる事態を示すことである。次の例（51）（52）はいずれも、日本語は理由節で原因を表しているが、中国語訳は「令…高兴（…を喜ばせる）」という使役表現を用いて「あなたが出てくれたことが私を喜ばせた」という名詞節による表現になっている。

- (51) a. また、君が出てくれたので本当に嬉しかった。  
 b. Nǐ tì wǒ chū zhèn shí zài lìng rén gāoxìng.  
 你替我出阵实在令人高兴。（『友情』cjc746）
- (52) a. ボクは見学が何より嫌いで、新たな課題を与えられると、うれしくて仕方なかった。  
 b. Zuì bù yuànyì dāi zài yī pángguān kàn, zhǐyào ràng wǒ cānyù dào tóngxué men zhōngjiān lái, bǐ shénme dōu lìng wǒ gāoxìng.  
 最不愿意呆在一旁观看，只要让我参与到同学们中间来，比什么都令我高兴。（『五体不満足』cjc243）

次に、BCCWJで「うれしい」がどのような従属節をとるかを調べたものが次の表である。

【表 14：BCCWJに見られる「うれし」の従属節<sup>21</sup>】

従属節	名詞節	条件節	中止節	理由節	時間節	引用節
用例数	316	359	204	59	12	36
内訳	のが 143 のは 105 ことは 50 ことが 18	と 176 たら 101 ば 65 ても 9 なら 8	「て」のみ	ので 41 から 18	ときは 10 とき 2	」と 34 とは 2

表 14 からわかるように、「うれしい」が「安心する」「喜ぶ」のような動詞の場合と異なるのは、まず名詞節の多さである。これは「うれしい」の形成する複文が文の類型において状態に属しており、主題用法の名詞節が多いということである。ただ、「のが」の例が多く、ジャンルを見ると、「のが」の例は白書や法令には皆無で、書籍が半数、残りはブログや雑誌などに例がある。これは、小説などでは主人公が設定され、その主人公を主題として説明を続けていくため、「(人)に(事態)がうれしい」という構文をとることが多いためと考えられる。下の（53a）は、「私」が明示されず「(私は)ことに与那国島の人びとが喜んでくれたのがうれしい。」という構文になっている例であり、（53b）は「私」が文に現れている例である。

- (53) a. 本を出してじつに多くの人々から反響があった。ことに与那国島の人びとが喜んでくれたのがうれしい。（『中日新聞』夕刊 2005/1/13BCCWJ）  
 b. 私はインドにいるのがうれしかった。ユダイカナルにいるのがうれしかった。（『インドの女性問題とジェンダー』BCCWJ）

また、条件節の中では「と」節が多く、「…てくれると/ていただけると/てもらえると」

<sup>21</sup> 「うれしい」は用例が多いので、「うれしい」の直前に現れる従属節だけに絞って集めた。引用節は「」の付く直接引用のみに絞った。

のような恩恵を表す授受表現を用いた例は、「と」節の用例の約半数を占める。このことから、「うれしい」のようなプラス評価の述語の場合は、条件節に評価を加えた「すれば/したら/するといい」のような「評価のモダリティ」（高梨信乃，2010）に繋がるために「と」節と共起することが多いと考えられる。また、授受表現が多いことについては、「てくれるとうれしい」の形で願望や希求を表す用法に繋がっているためと考えられる。

次に、「うれしい」のとり従属節の形式が交換可能かを見てみる。

- (54) a. 五代将軍になる綱吉を萩原健一が演じているのがうれしい。  
 (『へなへな日記』BCCWJ)  
 b. みなさまもこの本をヒントに、これからのエネルギーについて一緒に考えていただけたらうれしいと思います。  
 (『“正しい”エネルギー』BCCWJ)
- (55) a. 綱吉を萩原健一が {演じていたのは/?演じていたら/演じていて/演じていたの  
 で/\*演じていたとき/演じているとは} うれしい。  
 b. 一緒に考えて {いただけるのは/いただけたら/\*いただいて/\*いただけるので/  
 \*いただけるとき/\*いただけるとは} うれしいと思います。

例(54)を様々な従属節で置き換えた例(55)を見てみると、例(55a)は条件節「たら」と時間節「とき」が事実的な因果関係を表しにくいことを示している。反対に、例(55b)は仮定的な因果関係であるため、条件節「たら」と名詞節「の」+「は」が仮定的な意味を表せることを示している。

ここでは、直接的感情を表す形容詞の例として「うれしい」を取り上げ、従属節の取り方の特徴を見た。「うれしい」の従属節は「のは」「のが」「ことは」といった名詞節が中心で、連用節では因果関係を表す中止節、条件節「と」が多く現れる。条件節を伴う用法は評価のモダリティ「といい」に繋がる。条件節には恩恵の授受を表す「てくれる」等が多く現れ、願望表現に繋がっている。また、因果関係が事実的か仮定的かにより連用節が決定されることを指摘した。

### 【評価的感情を表す形容詞】

ここに属するのは、「(事態)が(人)にとって+形容詞」という構文をもつもので、感情形容詞の中でも評価的な意味が強いものである。「おそろしい」「ばかばかしい」「かわいらしい」「悲しい」などがある。

「うれしい」などの直接的感情を表す形容詞との違いがわかりにくいのが、「{おそろしい/悲しい/?うれしい}映画」のように、対象となるものの性質を表すことができる。

「悲しい」は評価的感情を表す形容詞で、評価の対象となる事態が名詞節として現れるほか、感情を引き起こした事態として連用節をとることがある。

- (56) a. 親切な人なのに、一度も生き身をゆるす気になれないのは、悲しいと言う。  
 b. Rén dào hěn qīnqiè, kě tā cónglái wèi céng xiǎng guò bǎ zìjǐ xǔpèi gěi tā, zhè shì tài kěbēi le.  
 人倒很亲切，可她从来未曾想过把自己许配<sup>22</sup>给他，这事太可悲了。  
 (『雪国』cjc836)

- (57) a. 生きているのが、悲しくて仕様が無いんだよ。  
 b. Huózhe shǐ wǒ gǎndào wúxiàn bēiāi.  
 活着使我感到无限悲哀。  
 (『斜陽』cjc1170)

上の例で(56b)の下線部の中国語訳は因果関係を明示せず、後半の文にも「这事(このこと)」という指示表現で指示されるなど名詞節的である。(57b)の中国語は「うれしい」の時と同様に使役表現「…使…悲哀(…が…を悲しくさせる)」を用い、やはり名詞節的になっている。

次に、BCCWJで「悲しい」がどのような従属節をとるかを調べたものが次の表である。

<sup>22</sup> 中国語の xǔpèi (许配) は「嫁がせる・縁組させる」の意。

【表 15：BCCWJに見られる「悲しい」の従属節】

従属節	名詞節	条件節	中止節	理由節	時間節	引用節
用例数	108	69	93	29	9	18
内訳	のが 42 のは 42 ことは 8 ことが 16	と 22 たら 31 ば 12 ても 3 なら 1		ので 5 から 24	ときは 5 とき 4	」と 13 とは 5

表 15 を表 13 と比べると、「悲しい」と「悲しむ」の従属節のとり方の違いがわかる。まず顕著なのは名詞節の数で、「悲しい」は大半が名詞節である。また、両者のとる連用節の内訳を見ると、「悲しむ」は条件節が最も多く、「悲しい」は中止節が最も多い。

感情を引き起こす原因の表し方も、「悲しい」は理由節「から」で因果関係を明示する用法が多いのに対し、「悲しむ」は条件節や中止節で因果関係を表す傾向がある。

次に、「悲しい」のとる従属節の形式が交換可能かを見てみる。

- (58) a. 日々「古文」を教えることで生活している私にとって、「古文」嫌いがこれ以上増えるのは悲しいことです。 (『古典がもっと好きになる』BCCWJ)  
 b. 「古文」嫌いが {増えるのは/増えたら/\*増えて/\*増えるので/\*増えるとき/増えるとは} 悲しいことです。
- (59) a. お母さんがいつも怒ってどなっていて悲しいです。 (『みんなのなやみ』BCCWJ)  
 b. お母さんがい怒って {どなっているのは/どなっていたら/どなっていて/どなっているから/どなっているとき/どなっているとは} 悲しいです。

例 (58a) は一般的な因果関係を述べており、(58b) のように個別の事態を表す「て」形や理由節は現れない。反対に、例 (59a) は個別の事実的因果関係を表しており、例 (59b) のように多様な従属節が現れる。

以上のように、「悲しい」は対象となる事態を名詞節で表す用法が最も多く、連用節では中止節が最も多い点で、条件節の多い「悲しむ」とは異なっている。また、理由節を用いて理由を明示する例も多く、これも「悲しむ」と異なる点である。最後に、「悲しい」を主文とする複文が個別の事実的因果関係を表す場合、複数の従属節を用いることができるが、一般的な因果関係の場合、中止節や理由節は用いにくいことを述べた。

### 【評価的感情を表す名詞】

評価的感情を表す名詞は、感情表現の述語で「(事態) が (人) にとって+名詞」という構文をもつものである。「安心だ」「喜びだ」「悩みだ」など心理動詞の名詞形や「悲しみだ」「面白さだ」など感情形容詞の名詞形がある。

「安心」は評価的感情を表す名詞で、評価の対象となる事態が感情を引き起こした事態として連用節をとることがある。

- (60) a. いくら手をかえて来ても、武子がいるから安心だ。  
 b. Bùguǎn tāmen zěnmě biànhuàn shǒufǎ, zhǐyào yǒu Wǔzǐ zài jiù kěyǐ fàngxīn.  
 不管他们怎么变换手法，只要有武子在就可以放心。 (『友情』cjc663)

上の例で日本語は理由節「から」を用いているが、中国語の下線部は「武子さえいれば」という必須条件を用いている。

次に、BCCWJ で「安心だ」がどのような従属節をとるかを調べたものが次の表である。

【表 16：BCCWJに見られる「安心だ/安心で」の従属節】

従属節	名詞節	条件節	中止節	理由節	時間節	引用節
用例数	14	55	10	44	2	22
内訳	方が 10 のが 2 ことは 1 ことが 1	ば 27 ても 12 と 9 たら 4 なら 3		ので 24 から 19 からには 1	ときも 2	」と 22

表 16 と表 12 を比べると、「安心だ」と「安心する」の従属節のとり方の違いがわかる。まず、名詞節のとり方を見ると、「安心する」のとり名詞節は「ことに」が大半を占めるのに対し、「安心だ」は「方が」という比較の形が多く現れている。これは、「安心だ」が「方が」を伴って「…した方がいい」という「評価のモダリティ」（高梨，2010）の形式に近づいているためと考えられる。

また、理由節のとり方を見ると、「安心する」のとり理由節には「ことで」が多いのに対し、「安心だ」は理由として「ことで」や中止節はとりにくい。以下は、理由節「ことで」「して」「ので」との共起のし方を、「安心した」と「安心だ」で比べた例であるが、「ことで」は「安心だ」の理由節とはなりにくいことがわかる。

- (61) a. 子どもが合格したことで {安心した/\*安心だ}。  
 b. 子どもが合格して {安心した/安心だ<sup>23</sup>}。  
 c. 子どもが合格したので {安心した/安心だ}。

条件節の内訳も、「安心する」は「と」節の方が多かったのに対し、「安心だ」は「ば」が大半を占めるのが特徴的である。

- (62) a. 平置きサイズが記載されていると安心します。 (Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ)  
 b. センサーアラームによる防犯は、この2つの機能を備えていれば安心だと言えます。 (『逃げる！かわす！必携護身マニュアル』BCCWJ)

「安心だ」が条件節として「ば」をとることが多いのは、条件節と結び付いた「すれば/したら安心だ」の間に見られる評価的な意味の違いが反映しているものと考えられる。高梨（2010）は「といい」「ばいい」「たらいい」の3形式を「必要妥当系の肯定評価類」と位置付け、「といい」と「ばいい/たらいい」の違いについて説明している。それによれば「といい」は「当該事態を単純に望ましいものとして評価する」のに対し、「ばいい/たらいい」は「当該事態をある特定のよい結果を得るための必要十分な要件として提示する」。「安心だ」「大丈夫だ」といった評価は必要条件を満たされた状態で下す評価であるため、事態を必要条件として示す用例が多いものと考えられる。

ここでは、「安心だ」の従属節のとり方を「安心する」と比較しながら考察した。「安心だ」のとり名詞節は「方が」という形式とともに「方がいい」という評価のモダリティに近づいている。また、「安心する」のとり理由節には「ことで」が多いのに対し、「安心だ」は「ことで」はとりにくい。

### 【まとめ】

事態評価の述語には、感情表現と評価表現があり、ここでは感情表現の用法を具体的に考察した。感情表現のそれぞれの用法は以下のような特徴があった。

- ①一時的感情を表す動詞：「安心する」
- ・従属節には因果関係を表す連用節が多く現れ、名詞節は比較的少ない。
  - ・中止節と条件節「と」節が多い。

<sup>23</sup> 「安心だ」は「て」節の場合に適切さが低いという指摘もある。用例は少数だが「彼なら任せておいて安心だ」「そうわかって安心だ」のような例がある。

- ・中止節には認識動詞が多く現れる。
  - ・主文が働きかけを表す場合に連用節の互換ができない。
- ②能動的感情を表す動詞：「悲しむ」
- ・中止節、条件節「たら」が多く現れ、理由節を用いずに因果関係を表すことが多い。
  - ・名詞節は主題用法より「ことを」などの補足節の用法が多く現れる。
  - ・一般的な因果関係を表す場合や恒常的条件を表す場合に連用節の互換ができない。
- ③直接的感情を表す形容詞：「うれしい」
- ・従属節は「のは」「のが」「ことは」といった名詞節が中心で、連用節では因果関係を表す中止節、条件節「と」が多く現れる。
  - ・「と」節には授受表現が多く現れ、「といい」という願望表現に繋がっている。
  - ・因果関係が事実的か仮定的かにより連用節が決定される。
- ④評価的感情を表す形容詞：「悲しい」
- ・名詞節が多く、連用節では中止節、理由節が多い。この点で条件節の多い「悲しむ」と異なる。
  - ・複文が個別の事実的因果関係を表す場合、複数の従属節を用いることができるが、一般的な因果関係の場合、中止節や理由節は用いることができない。
- ⑤評価的感情を表す名詞：「安心だ」
- ・名詞節が多く、「方がいい」という評価のモダリティに繋がっている。
  - ・条件節は「ば」が最も多く、「と」の多い「安心する」と異なる。「ばいい」という必要条件を表す評価のモダリティに繋がっている。
  - ・理由節には「ことで」は用いられない。

全体として言えるのは、それぞれの述語が属する文の類型に応じ、事態を表示する従属節が異なるということであり、これらの述語を複文の類型に位置付けることが有効であると考えられる。

#### 4. 2. 4 評価表現と従属節

ここでは、事態評価の述語のうち、評価表現の述語が評価の対象としてどのような連用節をとるかを見ていく。表 8 で見た評価表現 4 種；①賛否・充足を表す述語、②類似・異同を表す述語、③剛柔・強弱を表す述語、④難易・当為・真偽を表す述語について、それぞれ 3 つずつ任意に選び、従属節のとり方を見たのが以下の表 17 である。

【表 17：評価表現の対象となる従属節】

○：従属節をとる ×：とらない △：とりにくい・条件付

	「の/こと」 +助詞	条件節	「て」節 中止節	理由節「か ら」「ので」	「とは」
賛成する	○～が～に	△「なら」	△認識思考	△認識思考	×
満足する	○～が～に	○	○	○	×
不満だ	○～が～に	○	○	○	○
似ている	○～が～に/と	×	×	×	○
同じだ	○～が～に/と	×	×	×	△
逆だ <sup>24</sup>	○～が～に/と	○「のでは」「なら」	△	△	△
優しい	○～が～に	×	×	×	○
厳しい	○～が～に	○「ないと」	○	○	○
弱い	○～が～に	○「られると」	×	×	○
難しい	○～が～に	○	△	△	○
よい	○～が～に	○	○	○	○
理想だ	○～が	○	△	△	○

<sup>24</sup> 「逆だ」の対象となる事態は、「が」「けれども」などの等位節が多く現れた。

この表を【表 11：感情表現の対象となる従属節】と比べると、評価表現の方が連用節をとりにくいことがわかる。たとえば、「賛成する」は「娘が結婚するのに賛成する」のように名詞節をとるが、賛成する対象となる事態を「\*娘が結婚したら賛成する」のように条件節など連用節では表しにくい。ただし、条件節が「娘が結婚するなら賛成する」のように未然の事態の仮定条件を表す場合には、「賛成する」対象と解釈される。中止節や理由節は「\*娘が{結婚して/結婚するので} 賛成する」のように、「賛成する」対象を示すことは難しいが、賛成する内容が認識・発話を表す動詞などで従属節に現れる場合はある。

(63) おそらく、こうした宝石やスイス製の腕時計は、東京の有名店で買ったものだろうから、そうした店を廻って歩けば、買った人間がわかるのではないか。仁科がこう考え、十津川も賛成した。（『日本海からの殺意の風』）

上の例の下線部は、「仁科がこう考えたのに、十津川も賛成した」と置換できそうであるが、具体的に賛成した対象は前文に示された「店を廻って歩けば、買った人間がわかる」ということである。「賛成する」の場合、評価の対象が名詞節と連用節で表され選択が問題になるという可能性は、「安心する」などの感情表現より少ないことが予想される。本研究では、「賛成する」「反対する」は事態を評価する述語ではあるが、複数の従属節をとる「事態評価の述語」には含めないこととする。

また、評価表現でも「不満だ」「厳しい」「弱い」「難しい」「よい」など感情の意味を含む述語は、連用節も多く現れるようである。以下では、それぞれの下位分類別に、従属節をとりやすい評価表現の用例を見ることにする。

### 【賛否・充足の評価表現】

賛否・充足を表す評価表現の述語は「(人)が(事態)に+述語」のように「に」格でその対象を表すのが共通しているが、「満足する」は「に」格が「で」格になることもある。BCCWJに見られる「満足する」「満足だ」の従属節は以下の通りである。

【表 18：BCCWJに見られる「満足する」の従属節】

従属節	名詞節	条件節	中止節	理由節	時間節	引用節
用例数	16	34	16	1	0	3
内訳	ことで 10 ことに 6	ば 15 だけで 10 と 5 たら 2 なら 2		から 1		と 3

【表 19：BCCWJに見られる「満足だ」の従属節】

従属節	名詞節	条件節	中止節	理由節	時間節	引用節
用例数	3	16	20	7	1	1
内訳	ことが 2 ことに 1	だけで(も) 8 ば 5 なら 2 たら 1		ので 4 から 3	時は 1	と 1

以上のように、「満足する」「満足だ」は、いずれもその評価の理由を条件節や中止節で示すことが多い。上の表 18 と表 19 の中止節の例は、すべて理由を表す例である。次の例は、対応する中国語も理由節は用いていない。

- (64) a. われわれは彼を介して総督に時計を贈りましたが、総督はシナには珍しい、このようなくふうのこらされた品をもらって満足し喜んだ様子でした。  
 b. Zǒngdū dédào zhèyàng xīhǎn ér jīngqiǎo de lǐpǐn shífēn mǎnyì.

总督得到这样稀罕而精巧的礼品十分满意。（『マッテオ・リッチ伝』 cjc325）  
また、評価の対象が「だけで（も）」で最低条件を示すのは、中国語の「満足（満足だ）」などの述語もほぼ同様で、対応関係が見られる。

(65) a. 里子を寺に入れただけで、もう慈海は満足だった。

b. Zhǐyào Lǐzǐ néng zhù zài sì lǐ péibàn tā, Cíhǎi jiù mǎnzú le.

只要里子能住在寺里陪伴他，慈海就满足了。（『雁の寺』 cjc702）

次に、「不満だ」は、「(人)に(事態)が不満だ」と「(事態)に(人)が不満だ」という2種の構文があり、対象を「に」格または「が」格で示す。対象となる事態は「不満だ」という評価を引き起こした原因でもあるため、以下の例で日本語は名詞節であるが、中国語は理由節「因为…（…から）」を用いている。

(66) a. 本当に約束せぬというのが不満だと言うのですじやろう。

b. Nǐ shì bushì yīnwèi méiyǒu zhēnzhèng de hūnyuē ér bù mǎnyì ya?

你是不是因为没有真正的婚约而不满意呀？（『布団』 cjc440）

しかしながら、「安心する」などの心理動詞に比べれば、「不満だ」は名詞節をとる用例が多く、次の例では中国語も対象となる部分が名詞節的な構文となっている。

(67) a. 南嶽はいつまでも慈海が妻帯しないことに不満らしかった。

b. Nányuè duì Cíhǎi bù qǐ qī hǎoxiàng jīngcháng liúlùchū bù mǎn.

南岳对慈海不娶妻好象经常流露出**不满**。（『雁の寺』 cjc55）

BCCWJに見られる「不満だ/不満で」の従属節は、以下の通りである。

【表 20：BCCWJに見られる「不満だ/不満で」の従属節】

従属節	名詞節	条件節	中止節	理由節	時間節	引用節
用例数	31	6	14	9	0	4
内訳	のが 15 ことが 6 のは 3 のも 2 他 5	と 2 たら 2 なら 1 だけでは 1		から 4 ので 2 ため 1 ゆえに 1 点で 1		と 4

最も多いのが名詞節「のが」（例（68a））で、中止節（例（68b））、理由節（例（68c））、条件節（例（68d））、引用節（例（68e））も現れる。

(68) a. ブローデルがわれわれ派遣団を牛耳りたいと思っているのが私には**不満**であったので、……（『ブローデル伝』 BCCWJ）

b. スナイクス兄貴のアクションも少なく、**不満**だったな。

（Yahoo! ブログ 2008-BCCWJ）

c. 自分の望みどおりいかない、自己主張が通らないから**不満**であり、不満イコール不幸だということになるのです。（『明日はわが身』 BCCWJ）

d. 室内でストレス発散できた方が猫にとっても安心ですので、キャットタワーの購入、おもちゃで疲れるまで遊んであげるなどしてあげるといいと思います。外に出さないと**不満**だろう、ということはありません。

（Yahoo! 知恵袋 2005-BCCWJ）

e. 会話を習いにきたのに英文を読ませられるなんてと**不満**に思う人もいられるかもしれないが、……（『英語の学び方』 BCCWJ）

述語の形から見ると、動詞である「満足する」とナ形容詞である「満足だ」「不満だ」とでは、動詞の方が連用節、ナ形容詞の方が名詞節をとることが予想されるが、「満足だ」は名詞節をとることが少なく、中止節、条件節で理由を示すことが多い。このことは、「満足」という意味が品詞に関わらず理由を要求する度合いが「不満」より高いためであろうか。また、「不満だ」のとる名詞節が「は」ではなく「が」で示されることが多いのも特徴的である。



ある。評価の述語の従属節は述語の品詞だけでは決まらず、語彙的な意味により従属節のとり方や助詞のとり方も異なると言えるだろう。

【類似・異同の評価表現】

類似や異同を表す「似ている」「同じだ」「逆だ」は、「(事態)が(事態)と/に+述語」の構文で1つまたは複数の事態を表す従属節を含むことがある。この種の評価はその対象を別の対象と比較して判断するもので、いわば事態間の関係に重点があり、先に見た「不満だ」のように感情を表すもののように原因が主題となることはなく、したがって連用節と名詞節の選択が問題になることも多くないと考えられる。

ただし、これらの述語のうち「逆だ」は、対象となる事態に対する否定的感情を表し連用節をとることが多い。BCCWJに見られる「逆だ」の従属節は以下の通りである。

【表 21：BCCWJに見られる「逆だ/逆で」の従属節】

従属節	名詞節	条件節		中止節	理由節	時間節	等位節
用例数	16	17		22	2	3	38
内訳	のは 9 の/ことと 3 ことが 2 ことは 1 のでは 1	条件 4 たら 4 と 3 ば 2 なら 2 他 1	逆接 2 ものの 2 のに 2 ても 1	肯定 13 ではなく 9	から 2	中 1 ときは 1 時とは 1	が 32 けれど 5 のに対して 1

実際の「逆だ」のとり方を見ても、単文の「AとB(と)(は)逆だ」から予想される名詞節を用いた複文「…の/ことは～の/こと(と)(は)逆だ」の例よりも、等位節「けれども」「…のに対して」のような独立度の高い等位節(例(69a)(69b))や、前文(例(69c))に評価の対象が示されている例が多いことである。ここでは後者の例は数えていないが、独立度の高い従属節をとることの証左の1つとして注意する必要がある。

- (69) a. 本当に人をばかにしたような前提で代理母に反対しているけれども、それは逆だと思う。もう少し人間の優しさとか、そういうものを大切にしてほしいですね。(『はじまった着床前診断』BCCWJ)
- b. 日本では周囲の人達が気を効かしてそのような会合、パーティなどを開いて招待してくれるのに対して、ヨーロッパではそのまったく逆で、自分がその気にならなければなにごとにも起こらないと言っても過言ではありません。(『誰も知らなかった常識の背景』BCCWJ)
- c. 飼い主がワンちゃんに似るんですか? 逆ですか? (Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ)

これは、「逆だ」という述語の評価の対象が、事態のレベルよりさらに大きな発話・伝達のモダリティのレベルまで含み得ることを示している。そのため、「逆だ」という述語としての用例より、「逆に」という文副詞での用法が多く見られる。BCCWJ全体で「逆だ」の例は172例に過ぎないが、「逆に」の例は7922例である。次の例では中国語も「我却正好相反(私はそれとは反対に)」のように前の文全体を指した表現となっている。

- (70) a. すべての価値が崩壊したと人は言うが、私の内にはその逆に、永遠が目ざめ、蘇り、その権利を主張した。
- b. Yóurén shuō, yíqiè jiàzhí dōu jiětǐ le. Ránér wǒ què zhèng hǎo xiāng fǎn, nèixīn zhōng de yǒnghéng xǐng zhuǎn, fùsū le, tā jiānchí zìjǐ de quánlì.  
有人说，一切价值都解体了。然而我却正好相反，内心中的永恒醒转、复苏了，它坚持自己的权利。(『金閣寺』cjc406)

また、等位節以外の従属節では、逆接条件節「ものの」(例(71a))「のに」(例(71b))、中止節で「ではなく」といった否定形が現れる(例(71c))のも特徴である。

- (71) a. 今日は大幅な円安ユーロ高になったものの前日はその逆で円高ユーロ安が進ん

なので、ミリチロは思わず楽天でドンペリと輸入チーズの価格チェックしてしまいました。(Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ)

- b. 多くの国では政治犯の方が罪が重いケースがほとんどなのに、ここでは逆だ。  
(『鴉』 BCCWJ)
- c. リーダーは自分たちの失敗を見つけようとしているのではなく、その逆だとい  
うことに気づき、こうした職場で働くメンバーは心も開くようになる。  
(『ほめ上手のリーダーになれ!』 BCCWJ)

### 【剛柔・強弱の評価表現】

「優しい」「厳しい」「弱い」は人の対象となる事態に対する態度を剛柔や強弱で評価する。「優しい」「厳しい」は「(事態)が(人)に優しい/厳しい」、「弱い」は「(人)が(事態)に弱い」という構文をとる。ただし、引用節「とは」を用いるときは「(事態)とは優しい/厳しい/弱い」のように、いずれも事態に対する評価を述べる構文となる。

「厳しい」は厳格であるという意味と難しいという意味をもつ多義の述語で、他の言語では別の語彙で翻訳され、解説を補うこともある。例(72a)で日本語の「厳しい」は、(72b)の中国語では波線部「神经高度紧张, 身体疲惫不堪(神経がひどく緊張し、体を激しく披露させ)」のように説明が補われている。

(72) a. このような危険な状態のなかで車椅子を30分走らせるというのは、かなり厳  
しいものだった。

- b. Sān shí fēnzhōng de “ fēngyǔ lùchéng ”, shénjīng gāodù jǐnzhāng, shēntǐ  
píbèibùkān, duì wǒ lái shuō, shízài shì tài cánkù le.

三十分钟的“风雨路程”, 神经高度紧张, 身体疲惫不堪, 对我来说, 实在是太  
残酷了。 (『五体不満足』 cjc1009)

また、下の例(73b)の中国語は二重下線部「形势就会相当严峻(状況はかなり厳しい)」のように「形勢(状況)」という意味を補っている。

(73) a. センター試験の問題は90点以上は取らないと厳しいと言われるのに、最も得意なはずの日本史で、70点しか取れなかった。

- b. Wǒ zhīdào, tǒngyī kǎoshì de měi mén kè, rúguǒ débùliǎo jiǔ shí fēn yǐshàng,  
xíngshì jiù huì xiāngdāng yánjùn. Kě shì, wǒ zuì nǎshǒu de Riběnnshǐ jìngrán  
zhī kǎole qī shí fēn.

我知道, 统一考试的每门课, 如果得不了九十分以上, 形势就会相当严峻。可  
是, 我最拿手的日本史竟然只考了七十分。 (『五体不満足』 cjc1046)

BCCWJに見られる「厳しい」の従属節は次の表の通りである。

【表 22 : BCCWJに見られる「厳しい」<sup>25</sup>の従属節】

従属節	名詞節	条件節	中止節	理由節	時間節	引用節
用例数	47	41	3	9	0	3
内訳	のは 32 のが 8 ことは 4 ことが 1 には 1 のでは 1	と 35 (ないと 22) たら 4 だけに 1 では 1		ので 5 から 3 とあっては1		と 2 とは 1

「厳しい」がとる従属節は、名詞節と条件節が多い。例(72a)下線部は名詞節の例、(72b)

<sup>25</sup> 「厳しい」は用例が多いため「厳しい」の直前の形式と読点を含むものに絞っている。たとえば「のは」は「のは厳しい」「のは、厳しい」の2種である。

は条件節の例である。

(74) a. 僕の場合は、休みがいつ取れるかが、あまり早くには分からないのが厳しいね。  
(Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ)

b. DNPデザイナーになりたいと思っているのですが、やはり芸大や専門学校を出てないと厳しいのでしょうか？  
(Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ)

例 (74b) 「出てないと厳しい」は、「出ていなくてはいけない」という必要を表す評価のモダリティに繋がっているために用例が多いものと考えられる。

ここで、「厳しい」と同じ下位分類に属する「優しい」について見ると、「優しい」は「母は優しい」という人の性質を述べる用法のほかに、「車に乗らないのは環境に優しい」のように事態について評価する用法があるが、「厳しい」に比べ用例が少なく、BCCWJ では全ジャンルでわずか3例で、いずれも「のは」節であった。

同じ分類の「弱い」は、名詞節をとる「頼られるのに弱い」のほか「頼られると弱い」のように「と」節で受身の動きを表す用例が多いが、他の連用節は現れにくい。ただし、「厳しい」「優しい」「弱い」はいずれも「とは」節で意外性を表すことはできる。ここで取り上げた剛柔・強弱を表す述語の従属節のとり方には、語彙による偏りが見られた。

### 【難易・当為・真偽の評価表現】

「難しい」「複雑だ」「よい」「本当だ」「理想だ」など、難易・当為・真偽の評価を表す述語のうち、「難しい」は「(人)に(事態)が難しい」のように、評価の対象となる事態を「が」格で示す。これらの述語の形成する複文は、第1部第2章2.3で見た、影山(2008)の属性・準属性に関するテストにより、「-化」の付く「複雑だ」「理想だ」などが属性、付かない「難しい」などは準属性に分けられる。以下では、準属性の「厳しい」と属性の「複雑だ」についてどのような従属節をとるかを見ていく。

まず、BCCWJに見られる「難しい」の従属節は次の表の通りである。

【表 23：BCCWJに見られる「難しい」<sup>26</sup>の従属節】

従属節	名詞節	条件節	中止節	理由節	時間節	疑問節
用例数	1505	157	15	75	0	24
内訳	のは 701 ことは 353 のが 213 ことが 179 というのは 47 って 12	と 80 (ないと 51) ても 31 ば 28 (なければ 20) たら 9 なら 6 だけに 2 では 1	て形 10 (すぎて 3) (なくて 2) ようで 3 そうで 2	ので 37 から 36 だけで 2		かは 20 か 4

「難しい」のとり従属節で圧倒的に多いのは名詞節で、「は」を伴う「のは」「ことは」が多い(例(75a))。次に多いのは条件節で、「と」節が多く(例(75b))、「ないと難しい」という形(例(75c))が多い。前者は「厳しい」と同様、必要を表す評価のモダリティ表現に繋がっており、例(75c)のように、波線部の「……さがし出すのは」が主題、「よほど頭の回転の速い人でないと難しい」が解説という構造になっている。

(75) a. でも天井にカビとりハイターを塗るのは難しいですね？

(Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ)

b. 実験は、最初から国レベルでやろうとすると難しいです。

<sup>26</sup> 「難しい」は「厳しい」より更に用例が多いため「難しい」の直前の形式のみに絞っている。たとえば「のは」は「のは難しい」のみである。

(『時代が動くとき』BCCWJ)

- c. 調査日に一番近い人を短時間にさがし出すのは、よほど頭の回転の速い人でないと難しいと思われるが、そうした方法も用いられているようである。

(『部分から全体を』BCCWJ)

「ない」と「難しい」のように、述語の否定と条件節とが結び付き、評価のモダリティに近い機能を果たしている場合、語彙によっては条件節が名詞節に置き換えにくいことがある。下の例(76a)と(76b)を比べると、「難しい」は名詞節で置き換えにくい、「厳しい」は置き換えられることから、「…ないと難しい」の方がより固定した表現と考えられる。

(76) a. この実験は、国レベルで {やらないと/?やらないのは} 難しい。

b. この実験は、国レベルで {やらないと/やらないのは} 厳しい。

こうした用法が進んだ「ないと困る」「ないとだめ」などの中国語の翻訳は仮定条件より必須条件を表す「得…才行(…なければならぬ)」表現が用いられる。

(77) a. やはり、こういう時はおれが出ないとだめらしいな。

b. Zhèzhǒng shíhòu, kànlái háishì děi wǒ chūmǎ cái xíng!

这种时候，看来还是得我出马才行！ (『あした来る人』cjc3713)

以上のように、「難しい」は圧倒的に名詞節をとることが多いが、「…ないと難しい」という評価のモダリティに近い用法では条件節が現れる。

次に、BCCWJに見られる「複雑だ」の従属節は次の表の通りである。

【表 24：BCCWJに見られる「複雑だ/複雑なの/複雑です/複雑でし/複雑であ<sup>27</sup>」の従属節】

従属節	名詞節	条件節	中止節	理由節	その他	前後文
用例数	4	6	31	20	25	103
内訳	というのは 1	と 4	て形 9	ので 8	連体節 10	前文 45
	のは 3	ても 1	連用形 22	だけに 3	等位節 7	後文 58
		ては 1		ため 2	並列節 2	
				から 1	疑問節 2	
				ことで 1	引用節 2	
				ことから 1	時間節 2	
				ゆえに 1		
				からには 1		
				様子(具合)に 2		

「難しい」とは対照的に、「複雑だ」の対象が名詞節で示されることは非常に少ない。最も多いのは中止節で、「て」形より連用形が多いことも特徴的である(例(78a))。また、評価の対象となる事態の内容が豊富なために従属節を越え、等位節(例(78b))や、さらには前後の文で内容を示したり(例(78c)(78d))、連体節を用いたり(例(78e))するのも特徴的である。

- (78) a. このように複雑な事柄を伝える場合は「ことば」がないとほとんど伝達は不可能ですから、話さないと分かりません。これに対して、意思や感情は、いろいろな表し方、現われ方があり複雑です。

(『会社でうまくいくビジネスコミュニケーション』BCCWJ)

- b. こうして、大手組織による寡占化は急速に進展していくのだが、凸凹クンたち末端組員の心境は複雑だ。 (『ヤクザという生き方』BCCWJ)

- c. 誰かがその犠牲を払わなければ、ドツクゾーンは倒せない。そしてそれは、男性がなることができる…。でもそうなったら食べ物も飲み物も楽しめなくなる…複雑だなぁ… (Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ)

<sup>27</sup> 「複雑だ」は「複雑で」を含むとかなり数が増えるのでそれを除いた活用について調べている。

- d. あ、そういえば、アフリカの人種抗争自体も複雑だ。アメリカのようなレイス（皮膚の色による人種）の問題に加えて、部族の対立があるからだ。  
（『日はまた熱血ポンちゃん』BCCWJ）
- e. 誠が今でも世界の事を気にしているのを知った刹那の心境は複雑だった。  
（Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ）

「複雑だ」や「逆だ」などは、評価の対象が事態になると、必ずしも「……のは複雑だ」のような名詞節を用いるわけではない。事態はかなり長文になることもあり、前後の文で示すことも多い。これは、単文レベルの属性叙述と複文レベルの属性叙述の異なる点で、複文の場合には属性叙述の対象が事態、文、文章と大きく広がっていることを示している。

## 【まとめ】

事態評価の述語には、感情表現と評価表現があり、ここでは評価表現の用法を具体的に考察した。評価表現のそれぞれの用法は以下のような特徴があった。

- ①賛否・充足を表す述語：「満足する」「満足だ」「不満だ」
- ・「満足する」「満足だ」はいずれも名詞節をとることが少なく、中止節、条件節で理由を示すことが多い。「満足」という意味が品詞に関わらず理由を要求する度合いが「不満」より高いということの意味しており、評価の述語の従属節のとり方は、述語の品詞だけでなく意味の影響もあるということである。
- ②類似・異同を表す述語：「逆だ」
- ・類似・異同を表す述語の評価は事態間の関係に重点があり、原因が主題となることは少なく、連用節と名詞節の選択が問題になることも多くない。ただし、「逆だ」は、対象となる事態に対する否定的感情を含むことがあり、連用節をとることが多い。
  - ・「逆だ」は対象となる事態が名詞節で示されることが少なく、「が」のような独立度の高い等位節や前文により示される例が多い。これは後述の「複雑だ」と同様である。
  - ・「逆だ」という述語としての用例より、「逆に」という文副詞での用法が多く見られる。
  - ・等位節以外の従属節では、逆接条件節「ものの」、中止節「ではなく」等否定を含む従属節が現れる。
- ③剛柔・強弱を表す形容詞：「厳しい」
- ・「厳しい」がとる従属節で多いのは、名詞節と条件節「…ないと」である。
  - ・「…ないと厳しい」は、「…なくてはいけない」という必要を表す評価のモダリティに繋がっているために用例が多い。
- ④難易・当為・真偽を表す形容詞：「難しい」
- ・「難しい」のとる従属節で最も多いのは名詞節で、「は」が付くことが多い。
  - ・連用節で最も多い条件節では「と」節が多く、「…ないと難しい」「…なければ難しい」という形で、「厳しい」と同様、必要を表す評価のモダリティに繋がっている。
  - ・否定の条件節と共に評価のモダリティに近づいている場合、必須条件として解釈される。「複雑だ」
  - ・評価の対象として名詞節を用いることは少ない。評価の対象となる事態はかなり長文になることもあり、前後の文で示すことも多い。これは、複文の属性叙述の場合には、対象が事態、文、文章と大きく広がっていることを示している。

全体として言えるのは、評価表現には、評価の対象として名詞節を多くとるものと、「逆だ」「複雑だ」のように文あるいは文章レベルで対象を示すものがある。評価表現の述語の場合も、連用節のとりやすさは述語により異なるが、類似・異同といった、事態間の関係に関わる評価の場合、連用節をとりにくいものもある。一方、「不満だ」「厳しい」「難しい」のように感情の意味を含んだ述語は多様な従属節をとることができる。

以上の結果を文の種類のスケールと表に合わせてまとめたのが、以下の表である。述語で太字のものがここで具体的に用例を考察した述語である。

【表 25 : BCCWJ に見られる事態評価の述語の類型と従属節】

(太字の語彙に関して◎：最も多い ○：次に多い)

時間的安定性 T(ime stability)	← 事象 (event) 一時的状態 (stage-level states) 恒常的状态 (individual-level states) →					
	動き (movement)	準動き (quasi-movement)		状態 (state)	準属性 (quasi-property)	属性 (property)
感情表現		<b>安心する/悩む</b>	悲しむ/ 喜ぶ	うれしい/悲しい/幸せだ	<b>安心だ/悩みだ/喜びだ</b>	
名詞節			○	◎	○	
条件節		○	◎	○	◎	
中止節		◎	○	○		
理由節		○			○	
その他						
文の類型	動き (movement)	準動き (quasi-movement)		状態 (state)	準属性 (quasi-property)	属性 (property)
評価表現		<b>満足する</b>		<b>満足だ/不満だ</b>	優しい/よい/難しい/厳しい/逆だ	複雑だ/理想だ
名詞節			○	◎	◎	
条件節			◎		○	○
中止節			○	○		○
理由節				○	○	
その他					◎等位節・逆だ	◎前後文

この表からわかるように、事態評価の述語のとり方従属節で、「最も多い」は名詞節、次が条件節、そして中止節の順に多い。また、中止節は「次に多い」述語が最も多く、幅広く用いられていることがわかる。さらに、中止節が「最も多い」のは「安心する」などの一時的感情を表す動詞の場合で、いわゆる心理動詞でも「悲しむ」などの能動的感情を表す動詞とは従属節のとり方が異なっている。

### 4. 3 「の/こと」節と他の従属節の選択基準

#### 4. 3. 1 「の/こと」節の誤用

ここでは、塩入 (2002) の結果について説明し、「の/こと」節の誤用を分析する。

【表 26 : 他の従属節選択に関する誤用】 (塩入, 2002)

従属節のタイプ/誤用数	従属節のタイプ/誤用数	従属節のタイプ/誤用数
<中止節> 246 例 (31.0%) <sup>28</sup>	<条件節> 89 例 (11.2%)	<理由節> 85 例 (10.7%)
連用中止→基本形 2	すると→中止節 20	から 50
て形→連用形 3	→他の条件節 23	ので 26
→条件節 88	→理由節 1	ために 3
→副詞節 3	→の/こと節 1	せいで 2
→接続節 25	→基本形 1	で 4

<sup>28</sup> %は誤用数 793 に対する割合を示す。数字は一部訂正してある。

→時間節	2	→その他	6	<b>&lt;時間節&gt; 60例 (7.6%)</b>		
→の/こと	12 ①	すれば→中止節	3		とき	27
→基本形	10	→他の条件節	6		と同時に	5
→文の終了	13	→の/こと節	1 ②		てから	11
なくて・ないで	49	→その他	2		あと	8
だけ等	34	したら	11	まえ	3	
その他	5	なら	4	うち	3	
<b>&lt;の/こと節&gt; 115例 (14.5%)</b>		ては	2	まで	2	
③		のに	2	その他	1	
の→こと	21	ても	6	<b>&lt;等位・並列節&gt; 58例 (7.3%)</b>		
こと→の	5	<b>&lt;基本形&gt; 86例 (10.8%)</b>		が	23	
の/こと→中止節	4	→中止節	22	けれども	11	
→条件節	21	→条件節	17	たり	2	
→副詞節	8	→理由節	5	し	22	
→理由節	3	→接続節	24	<b>&lt;その他&gt; 54例 (6.8%)</b>		
→接続節	6	→時間節	1	ために	15	
→時間節	1	→の/こと節	12	ように	5	
→基本形	5	→その他	5	ながら、つつ	8	
～のは～ことだ	29			しに→の/こと	1	
→その他	12			その他	25	

上の表の①②は、「の/こと」節+「は」にすべきところを、中止節、「(し)に」、「(する)と」、「(すれ)ば」にした誤りで、計13例である。逆に、③で示した、他の従属節を使うべきところに「の/こと」節を用いた例は115例で圧倒的に多く、この結果から、「の/こと」節は学習者にとって安易に使いやすい形式、使っても間違える形式であると言える。以下に、①②それぞれの例を挙げる。

【①中止節→「の/こと」の例】

(79) 好きな人と同棲して、婚姻生活のように生活して、自由にして (→自由にするのは)、いいではないだろうか。(150<sup>29</sup>)

【②条件節→「の/こと」の例】

(80) 居間は一番重要なことは温かい感じが感じられると思うので、広すぎれば (→広すぎるのは) 寂しくてきらいだ。(222)

【③「の/こと」→他の従属節の例】

(81) a. 夫だけが仕事をするのは (→するのでは) あまり不足だから、……。 (69)  
 b. 勿論、庭についているのは (→ついていれば) もっと素晴らしい。 (73)

以下では、これらの誤用のうち、「の/こと」節と中止節及び条件節の間の誤用を見る。数から見れば、一見この種の誤用は多いとは言えないようだが、表26からわかるように、従属節の誤用の種類は極めて多種多様で、まず目立つのは中止節と条件節との誤用、類義表現相互の誤用、そして「の/こと」節に関する誤用であり、やはり従属節の誤用の中では少なくないと言ってよいだろう。

#### 4. 3. 2 「の/こと」節と事態評価の述語

「の/こと」節と中止節、「の/こと」節と条件節の間の誤用とは、それぞれ以下のような例である。

(82) a. 学生時代別学にしても、社会人になると、やはり異性と付き合うべきだから、学生時代男女の生徒と一緒に青春を楽しんでいいことではないか。(25)  
 b. 夫だけが仕事をするのはあまり不足だから、……。(69)

例(82a)は、主文が「いいことだ」のような事態評価の述語で、その評価の対象を中止

<sup>29</sup> 本章で文末の( )の数字は塩入(2002)の調査の例文の通し番号を示す。

節（「て」節）で接続した誤りである。「ていい」とすると許容を表す「てもいい」の用法に解釈される<sup>30</sup>。また、(82b)の例は、主文が「不足だ」という「では」を補語にとる述語で、その内容を表す従属節として「(する)のでは」を使うべきところを、「のは」を用いた誤りである。この種の誤用の原因は、日本語の事態評価の述語には、その対象を「の/こと」節以外の従属節で示すものがあること（たとえば「不足だ」「足りない」）、反対に「の/こと」をかなり固定的にとるものがあること（たとえば「…のはいいことだ」）が、充分学習者に理解されていないことが考えられる。

### 【「の/こと」節と中止節・条件節】

事態評価の述語のうち、「の/こと」節をとり、他の従属節をとりにくいものには、真偽判断、当為、恒常的感情等を表す「当然だ」「本当だ」「大切だ」「貴重だ」「稀だ」「必要だ」「きらいだ」「好きだ」などがある。これらの述語はいずれも事態を一般的なものとして評価する述語であり、その対象となる内容は「の/こと」節で示され、中止節や条件節は現れにくい。

- (83) a. 外国語を {学ぶのは/ 学んで/\*学ぶと} 当然だ。  
 b. 復習を {することは/\*して\*すると} 大切だ。  
 c. 宿題を {するのは/\*して/\*すると} きらいだ。  
 (84) a. だから栄養料理という言葉が、まずい料理の代名詞のように使われたのも、むしろ当然である。 (『料理と食器』)  
 b. 栄養料理という言葉が、まずい料理の代名詞のように {?使われて/\*使われたら} 当然である。

ただし、「…て当然だ」のように「て」節は当為を表す述語と共に用いられる。

- (85) なぜ、ルソオの懺悔録が、オーガスチンのそれより世人に広く読まれているか、  
 また読まれて当然であるか。 (『思索の敗北』)

また、「驚きだ」「喜びだ」等、原因格をとる動詞の名詞化したものと、「いいことだ」「ありがたいことだ」のように「ことだ」により名詞述語化したものは、その内容を名詞節で示し、中止節・条件節はとりにくい。

- (86) a. 外国語を {学ぶのは/\*学んで/\*学ぶと} 喜びだ。  
 b. 外国語を {学ぶことは/\*学んで/\*学ぶと} 楽しいことだ。

一方、充足（不足）を表す述語「充分だ」「足りる」「不足だ」「満足だ」などは「で」格をとる述語で、条件節をとることが多く、中止節も現れる。これらの述語は、その多くが「不足する」「満足する」のように動詞の形をもつことから、何らかの事態の結果ある状態に達する（または達しない）という動きの意味を含んでいる。これらの多くは「百円で足りる」のような「で」格をとる述語でもあり、この「で」格の部分に従属節になると、「百円出せば足りる」「百円出すだけで<sup>5</sup>足りる」のような条件節や、「喜んでくれて満足だ」のように「て」節で表されることになる。以下に例を挙げる。

- (87) a. 彼一人 {\*行くのは/\*行って/行けば} 充分だ。  
 b. あなたが喜んで {?くれるのは/くれて/くれると} 満足だ。

また、「足りない」「不足だ」「不満だ」のように否定の意味を表す場合に、「百円では足りない」の「では」の延長として、「百円出すだけでは足りない」のように「だけでは」を用いることになるが、「\*百円出すのは/百円出しては足りない」という誤用が生じやすい。

これらの述語は「の/こと」節をとることができないわけではない。たとえば、「満足だ」は「彼がしたことには満足だ」のように「には」の形であれば「の/こと」節をとりやすい。また、「満足だ」は、「喜んでくれて」のように恩恵で理由を強調すると理由節をとることが

<sup>30</sup> 高梨 (2010) では「ていい」は「てもいい」の用法の一部とされている。

<sup>5</sup> 「だけで」の形式は「だけすれば」の形に置き換えられることから、条件節の一つと見なされる。中国語の必須条件と「だけで」の対応もある。



できる。この場合授受表現を用いないと「\*あなたが喜んで、満足だ。」のように不適切な文になる。中止節と理由節の境界についての議論は吉田（1994）にも考察がある。

また、「不足だ」「足りない」のような充足を表す述語の他にも、「大変だ」「困る」「間に合わない」のようなマイナス評価を表す述語の場合、その内容は「ては」という条件節で表すこともできる。「大変だ」などは従属節の形式の選択肢が多い。

- (88) 性の自体は悪いことではないが、十分な性知識を持っていなかったら、享楽だけを求めるのは大変だ。 (489)

上の例はやや坐りが悪いが、「求めるのは」を「求めては」「求めるのでは」のようにするとより適切になる例である。こうした「だけでは」を使えるのは上級の学習者であろう。

### 【条件節に固定した表現】

「すればいい」「したらいい」「してもいい」等は、仮定的な事態に願望や提案を意味するような文脈で用いられるが、これらを用いるべきところで「の/こと」節を用いてしまう誤用もしばしば見られる。

- (89) a. 自分の健康管理のために、栄養のいい物をとって、カロリーの高い物を敬遠するのはいいと思う。 (41)

- b. もちろん、庭についているのはもっと素晴らしい。 (73)

上の例はいずれも下線部の従属節が「すればいい」などの評価の表現に連続する例である。以下の例は、「大丈夫だ」を用いているが、「しなくてもいい」という不必要を表す表現に繋がるものである。

- (90) 適齢期が過ぎても結婚しないことが大丈夫だと思われている。 (152)

「したらいい」「してもいい（しなくてもいい）」という表現は、日本語学習においては初級の段階から提示される文型であるが、「いい」という述語以外にも様々な表現が可能であることも習得する必要があることを示す例である。

また、注意しておきたいのは、「いい」をはじめ、「素晴らしい」「大丈夫だ」等の述語が「の/こと」節をとらない述語というわけではなく、「したらいい」類の固定した表現の延長と考えられる文脈においてのみ不適切であるということである。もちろん「…するのはいい」「…するのは素晴らしい」という文は可能だが、事態が仮定的に示される文脈では、「したらいい」等の条件節を含む表現に繋がっている。

「すればいい」等の固定した表現は、研究者によっては擬似的なモダリティ、あるいは評価のモダリティ形式（高梨，2010）として位置付けられている。述語が「いい」だけでなく他の述語でも入れ替えができることや、その述語自体は条件節以外の様々な従属節をとることができるということも学習者に与えるべき情報かと思われる。

### 【従属節の事実性】

最後に、どの従属節も可能な述語の場合、節の選択はどう行われるかを見てみる。事態評価の述語には、「の/こと」節、中止節、条件節、いずれもとれるものが多くある。たとえば、「安心だ」「よい」「いやだ」等はどの節も可能である。これらの選択はどんなされるのだろうか。

- (91) a. 君がそう言って {くれるのは/くれて/くれると} ありがたい。

- b. あなたに協力して {もらえるのは/もらえて/もらえると} 心強い。

このように全て可能な場合に選択の基準となるものに、従属節の事態の事実性がある。主文が事態評価の述語の場合、従属節となる「の/こと」節、「て」節、条件節が表す事態の事実性に関しては、以下のようにまとめられる。「の/こと」節に関しては、事実性だけでなく、一般性という意味特徴も必要になる。

- ①「て」節は、個別の事実をあらわす。

例：留学が決まって、うれしい。（個別の事実）

- ②条件節は、既成事実も仮定条件も表す。

例：留学が決まったら、うれしいだろう。(仮定条件)

留学が決まったのなら、さぞかしうれしいだろう。(個別の事実)

③「の/こと」節は個別の事実も一般的な事態も表す。

例：留学が{決まった/決まる}のは、うれしい。(個別の事実/一般的な事態)

こうした事態評価の述語のとり方と従属節の事実性や一般性に関しては、述語を網羅的に分析していないためにまだ分析が不足しているところであり、今後の研究課題としたい。

#### 4. 4 まとめ

以上、名詞節「の/こと」節をとる事態評価の述語について考察した。

まず、事態評価の述語を感情表現と評価表現に分け、それらを意味と格のとり方で下位分類し、それぞれに属するいくつかの述語について、用例を引きながら従属節のとり方を分析した。その結果、事態評価の述語は文の種類に応じ事態を表示する従属節が異なること(「悲しむ」と「悲しい」の違い)、また、述語のもつ意味により共起可能な従属節の違いがあること(「…と安心する」「…たら悲しむ」の違い)が明らかになった。また、事態評価の述語の中には、「複雑だ」のように、評価の対象が従属節を越えて示されるものもあり、複文における属性叙述が、単文における名詞+「は」による主題を中心とする属性叙述のあり方とはやや異なる様相を呈していることがわかった。

最後に、日本語学習者の作文の誤用例に見られる、「の/こと」節と、中止節・条件節との間の誤用に関して、従属節選択に関わる3つの基準—「の/こと」節をとるが他をとりにくい述語、条件節に固定した表現、従属節の個別性と一般性—を述べた。

### 5 引用節の階層構造と文の種類

#### 5. 1 引用節と階層構造

引用節は、第1部第4章1. 2で述べたように、従属節の階層構造において、独立度の低い語幹階層節と、最も高い対他的モダリティ分化節のいずれにも属している。下の例(92)は、引用節の内部に対他的モダリティの終助詞「ね」が現れ、引用節が高い階層に属することを示すと同時に、最も低い階層の語幹階層節「ながら」に含まれる例である。

(92) 女の子もいるのねと話しながら見ていると隣にいた地元の方が「昔はだめだったけど今は嫁入り前の娘は参加できるのよ…」 (Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ)

また、引用節の用法の中で、「…とは{思わなかった/意外だ}」のような「とは」の用法は、そうでない引用節と階層構造においてやや異なり、名詞節と共通するところがあると考えられる。たとえば、引用節「と」は「彼はくると思う」のように節内に主語が現れるが、「\*彼は来るとは意外だ」のように、「とは」節には現れにくい。モダリティについても、「とは」節の場合、認識のモダリティ「(し)よう」は現れる(例(93a))が、「だろう」「はずだ」などは現れにくい(例(63b))。また、意志や命令は現れるが、終助詞「よ」など伝達のモダリティは現れにくい(例(93c))。

(93) a. まさかあそこから不渡りが出ようとは思ってもみなかった。

(『駆ける少年』BCCWJ)

b. まさか彼が{来よう/??来るだろう/?来るはずだ} とは思ってもみなかった。

c. 敵を相手に{商売しよう/商売しろ/?商売しろよ} とは凶々しい。

「とは」節とそれ以外の引用節の内部に現れる要素を比較したのが次の表である。

【表 27：引用節内に現れる要素】 ○現れる、×現れない、△現れにくい・制限がある

節内の要素	主題「は」	モダリティ形式								
		認識			表現類型				伝達 <sup>31</sup>	
		だろう -よう	かも しれ ない	らしい はずだ	疑問	意志	勧誘	行為 要求	丁寧さ	終助詞
補足節										
引用節	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○
「とは」節	×	○	○	△	△	○	○	○	○	△

「とは」節の内部に引用節「と」よりやや制限があるのは、「とは」が「というのは」という名詞節に近い性質をもっているためと考えられる。たとえば、丁寧さは「とは」節では「このような場所でお目にかかれますとは」（『陸奥甲冑記』BCCWJ）のように現れることや、疑問が現れにくいこと（例「?明日来ますかとは意外だ<sup>32</sup>」）も名詞節に似ている。

## 5. 2 引用節と文の類型

次に、引用節をとる複文の類型について見ていく。引用節には「と」節のほか「よう（に）」などもあるが、ここでは「と」節のみを考察の対象とする。

先に述べたように、引用の「と」節は、主文の述語が動きの場合、主文の動詞は上述の発言・思考、命令・祈願を表す述語に限られ、語幹階層節との共通点をもっているが、引用節内には主題の「は」や意志のモダリティ「（もらお）う」（例（94a））、認識のモダリティ「だろう」（例（94b））、終助詞など対人的なモダリティ（例（94c））も現れ、引用節が高い階層に属することを示している。

- (94) a. 【引用節・動き/主文・動き】 地区部長は、リキさんにやってもらおうと思いますが、いかがでしょうか。（『新・人間革命』）  
 b. 【引用節・状態/主文・動き】 平日だから空席があるだろうと思いきや、ほぼ満席でした。（Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ）  
 c. 【引用節・属性/主文・動き】 小さな店だねと思って入り口を入ると「奥へどうぞ!」という。（Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ）

主文が状態や属性の場合は、例（95）のように「意外だ」「おかしい」「驚きだ」など意外性を表す評価の述語に限られており、引用節は「は」が必須である。

- (95) a. 【引用節・動き/主文・状態】 実に厳然として威風そなわり、見るからに利巧そのものの大家の奥様が、万引をするとは意外なことだ。（『明治開化安吾捕物五』）  
 b. 【引用節・状態/主文・状態】 エンジンはとまっているのに、重力があるとは、おかしい。（『宇宙の迷子』）  
 c. 【引用節・属性/主文・状態】 ……幼稚園なみのキャッチボールも満足にできそうにない福田恆存が大ヤジウマだとは意外千万であった。（『安吾巷談』）

- (96) a. 【引用節・動き/主文・属性】 おおらかな万葉の時代にも、このようなことがあったとは驚きです。（Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ）  
 b. 【引用節・状態/主文・属性】 説明をするとは大変な侮辱だ。（『或る五月の朝の話』）  
 c. 【引用節・属性/主文・属性】 われながら美德をこんなに好きだとは驚きだ。（『アリーヌとヴァルクールあるいは哲学的物語』BCCWJ）

このような用法については、従属節の主題化として第 10 章 5. で詳しく述べている。

<sup>31</sup> 丁寧さや終助詞は、引用節全般に、直接引用の場合以外は現れにくい。

<sup>32</sup> この例も、発話を直接引用した場合は適切であるが、その場合引用部分は名詞節的である。

## 6. 疑問節の階層構造と文の類型

### 6. 1 疑問節と階層構造

3. 1の表3で見たように、疑問節には主題の「は」や丁寧さが現れるほか、推量の「だろう」、意志の「(し)よう」、説明の「のだ」などのモダリティ形式が現れるが、「かもしれない」「はずだ」などや終助詞は現れない。

- (97) a. 【主題「は」】早速ですが、金売り吉次という人物は実在したかどうかを最初に聞きたいんですが。(『東北歴史推理行』BCCWJ)  
b. 【丁寧さ】佳代子の母親とおぼしき女性が、電話に出た。おりますかどうか見てください、とその女性は言い、台のうえに受話器を置いた。(『メイン・テーマ』BCCWJ)  
c. 【推量】私は、やっぱりこれらの問題を解釈論議で過ごしていく一つのことが憲法として正しいんだろうか、この辺を社民党さんと共産党さんにお聞きしてみたいと思います。(『国会会議録』第147回国会2000BCCWJ)  
d. 【意志】今の職場をやめて、数時間のパートでもしようか考えてます。(Yahoo!知恵袋2005-BCCWJ)  
e. 【「のだ」】平衡感覚がパニックを起こし、自分の頭がどこにあり、足がどこにあるのかわからなくなってきた。(『あした蜚蜚の旅』BCCWJ)

ただし、推量の「だろうか」が現れるのは、上の例(97c)のような、真性モダリティをもたない(野田尚史, 1989a)場合か、次の例のように「のだろうか」「せいだろうか」などで理由を推測する用法の場合であり、独立度が高く主文の補語とは言えない用法である。

- (98) a. 冷房が寒いのだろうか、体が震えている。(『子どもの王様』BCCWJ)  
b. 灯のあまり多くない夜間風景として見るせいだろうか、何だかごく自然なバンクの景色のつづきのようにも思えてしまう。(『神よりも尊き者たち』BCCWJ)

疑問節の中に推量のモダリティ形式が現れにくいのは、疑問節をとる述語「質問する」「不明だ」などが当該事態の何らかの情報の不足を問うものであり、話し手の主観に関わらない部分を疑問としているためと考えられる。

### 6. 2 疑問節と文の類型

疑問節をとる複文の主文にも、引用節同様、限られた述語が現れる。主文に現れる述語には、「知識の獲得・伝達・消失に関する述語、知識の有無に関する述語、推測・判断・決定に関する述語、命題の重要性・関連性に関する述語」(日本語記述文法研究会, 2008)がある。

また、疑問節も引用節の「とは」のように、主文が状態や属性の場合は「主題—解説」の構造をとっている。たとえば、「彼が成功するか(は)不明だ」という文では、疑問節「彼が成功するか」が主題となり、「不明だ」という評価の対象となっている。引用節と異なるのは、引用節「とは」では「は」が必須であったのと異なり、疑問節の主題は「は」が任意であるということである。

- (99) a. 彼が成功する { \*と/とは } 意外だ。  
b. 彼が成功する { か/かは } 不明だ。

このことは、疑問節の方が引用節より名詞節に近いと考えられる。「は」がなくても主題と解釈されるのは、従属節では名詞節と疑問節のほか、名詞出自の時間節や目的節がある。

- (100) a. 彼が { 来たの/来たのは } 知ってる？  
b. うまくいった { とき/ときは } うれしい。  
c. 合格する { ために/ためには } この本を読みなさい。

例(101a)(101b)、(102a)～(102c)、(103a)のように「は」を伴わないことも多いが、

これらはいずれも「は」があっても意味が大きく変わることがない。

また、例 (103c) の「そんなことは」のように指示表現で置き換えられることもあり、真性モダリティをもたない用法が多いのも、疑問節の特徴である。

- (101) a. 【疑問節・動き/主文・動き】  
この人がいなかったら、果たして日本に帰れたかどうかわからない。  
(『遙かなる大連』BCCWJ)
- b. 【疑問節・動き/主文・状態】  
後日、植木屋が来た時、その意見では、この椎の木が生きるか死ぬか、全く不明だとのことでした。  
(『古木—近代説話—』)
- c. 【疑問節・動き/主文・属性】  
插画も何もなしで、彼程夢幻的な美が具体的に感じられるかどうかは疑問だけれども、よい本だと思う。  
(『最近悦ばれているものから』)
- (102) a. 【疑問節・状態/主文・動き】  
けれども、私は、私のどこが、いけないのか、わからないの。(『きりぎりす』)
- b. 【疑問節・状態/主文・状態】  
しかし、東京中で西洋猫を飼っているA姓の人が何人あるか不明であるから(一)の問題はやはり不明である。  
(『ある探偵事件』)
- c. 【疑問節・状態/主文・属性】  
国語によってあらわすものを翻訳と呼ぶならば、これらの言葉を翻訳と呼ぶことがふさわしいかどうか疑問である。  
(『外来語とはなにか』BCCWJ)
- (103) a. 【疑問節・属性/主文・動き】  
何の商売をしているひとか知らないけれど、わたしは、そのひとが、とてもきざなのできらいだ。  
(『淪落』)
- b. 【疑問節・属性/主文・状態】  
この「或記」がどの史料であるかは不明である。  
(『日蓮大聖人御書講義』BCCWJ)
- c. 【疑問節・属性/主文・属性】  
嘉平が元祖か、昌造が元祖か、そんなことは大きな問題ではない。  
(『光をかかぐる人々』)

## 7. まとめ

この章では、複文における文の種類の決まり方が、従属節の独立度と関係していることを述べた。

さらに、連用節と補足節を分けて議論を進め、連用節に関しては、独立度の高低に応じ、複文の種類が決定される様子を見た。

補足節に関しては、名詞節、引用節、疑問節それぞれの形成する複文が、どのような文の種類に位置付けられるかを見た。そして、名詞節の場合、主文が事態評価の述語の場合に連用節が主題的に解釈されることを指摘し、事態評価の述語がどのような従属節をとるかを考察した。また、引用節と疑問節においては、述語が状態や属性の場合に従属節が主題となる現象があることを指摘した。

複文は単文の拡張として文の種類を構成しており、主文が状態や属性の場合には、連用節が主題的にはたらくことがあると考えられる。従属節の主題化については次の章でさらに詳しく述べることにする。

# 第10章 従属節の主題化

1. 従属節の主題化と文の種類
  1. 1 従属節の主題化とは
  1. 2 顕在的主題化と潜在的主題化
2. 時間節の主題化
  2. 1 「とき(に)は」節の主文の特徴
  2. 2 「あいだは」節の主文の特徴
3. 目的節の主題化
  3. 1 従来の研究
  3. 2 「ため(に)は」節の主文の特徴
  3. 3 「ため(に)は」節の独立度
4. 「て」節の主題化
  4. 1 「ては」節の顕在的主題化
  4. 2 「て」節の潜在的主題化
5. 引用節の主題化
  5. 1 「とは」節と主題化
  5. 2 「とは」節の事実性と情報の新旧
  5. 3 「とは」節の主文の述語
6. 疑問節の主題化
7. 条件節の主題化
  7. 1 潜在的主題化の構造的・意味的条件
  7. 2 「なら」節の主題化
  7. 3 条件節と主題
  7. 4 連体と連用の対応
8. まとめ

## 1. 従属節の主題化と文の種類

### 1. 1 従属節の主題化とは

ここまで何度か主題あるいは主題化ということばを用いてきた。主題についての国内外の研究を網羅することはできないが、益岡(2004)、堀川智也(2012)などを参考に、複文と関係の深い点に絞り、本研究の立場を述べておきたい。

主題をめぐる見方には、一文の中で「解説されるものと解説」という構造を考える観点と、より談話的なレベルの観点がある(堀川, 2012)。益岡(2004)はいずれの観点をも取り入れながら主題を文の種類にも関係させ、「文内主題」と「談話・テキスト主題」の2種を区別する。それによれば、「太郎は優しい」という属性叙述文では対象「太郎」と属性「優しい」は相互依存の関係にあるが、「子どもが笑った」という事象叙述文は「子どもが」という項(argument)と述語(predicate)から成り、事象叙述という類型において主題は要請されない。そこで、属性叙述文の主題を「文内主題」、事象叙述文の主語を「談話・テキスト主題」とするということである。

本研究では、以上のような文の種類と主題の性質とを関連付けた見方を取り入れるが、その場合述語が状態や属性であることを条件として複文に応用したいと思う。本研究の主題及び主題化は以下のように定義される。

- (1) ① 主題(topic)は文において解説(comment)される対象である。
- ② 主題化(topicalization)は本来主題でない文の構成要素が主題になることを指す。
- ③ 日本語の従属節の主題化には、「は」による顕在的主題化と「は」のない潜在的主題化がある。潜在的主題化は主文が事態評価の述語の場合に成立し、主題

化した従属節は大きく意味を変えずに名詞節+「は」に置換することができる。このうち③の顕在的主題化と潜在的主題化について見てみると、まず、下の例(2)はいずれも「は」を含む連用節による顕在的主題化である。

- (2) a. 淳一がパリに行ったときは、石井好子さんや砂原美智子さんがすでにいらっしやっていました。(『夫中原淳一』BCCWJ)  
b. すなわち、遺伝を研究していくためには、遺伝という現象の枠組みを明らかにしておくことが必要であった。(『生物学の歴史』BCCWJ)  
c. だが、ニュルンベルク裁判の目的は理想にすぎなかったとしてなおざりに扱っては、無知と無理解によって、私たちはいつそう悲劇的な道を歩むことにもなりかねないだろう。(『ニュルンベルク軍事裁判』BCCWJ)  
d. 壹岐さんがこういうところをご存知とは驚きましたね。(『不毛地帯』BCCWJ)  
e. 何のためのサインだったかは不明である。(『ムスリム・ニッポン』BCCWJ)

顕在的主題化において「は」が必須かどうかは、従属節の種類と主文の述語による。例(2a)「ときは」の「は」は任意であるが、主文が形容詞などより状態的になると「は」の必須性が高まる(例(2a)')。例(2e)「かは」も「は」が任意であるが、主文が動的になると「は」は対比的な意味になる(例(2b)')。

- (2)' a. ?淳一がパリに行ったとき、つらかった。  
e. 何のためのサインだったかは教えてください。

また、従属節に「は」の付いた形式が一様に顕在的主題化であるというわけではない。たとえば、時間節でも「まえは」(例(3a))「てからは」(例(3b))などは主題より対比の意味が強い。また、理由節「から(に)は」は理由の強調を表し主題とは言い難い(例(3c))。

- (3) a. 演ずる前はとても不安ですが、演じきったあとには幸福感が待っていますね。(『介護保険を動かす女たち』BCCWJ)  
b. ボクも若いころは議論好きだったが、これを読んでからは、相手を論破して満足するということを避けるようになった。(『巨泉』BCCWJ)  
c. 人間は生まれたからには、地位、貧富の差もなく、死は平等にやってくるのです。(『空の世に生かされていのちありがたし』BCCWJ)

下の例(4a)は条件節、(4b)は「て」節による潜在的主題化で、いずれの連用節も名詞節+「は」に置き換えることができる。

- (4) a. こんな介護ができて、こんなに喜ばれたらうれしいやろな。(『走れ介護タクシー』BCCWJ)  
    ~こんな介護ができて、こんなに喜ばれるのはうれしいやろな。  
b. 短い間だったけど夢を見ることができてうれしかった。(『ピアノ・サンド』BCCWJ)  
    ~短い間だったけど夢を見ることができたのはうれしかった。

以下では、顕在的主題化と潜在的主題化について、それぞれの用法を詳しく見ていく。

## 1. 2 顕在的主題化と潜在的主題化

ここでは従属節の主題化がどのような従属節で見られるかを述べる。従属節の主題化のうち、顕在的主題化は「は」の付加によるもので、時間節、目的節、「て」節、引用の「と」節、疑問節に見られる。

潜在的主題化は、連用節では独立度の中程度以上のものに見られる。潜在的主題化は主文の評価を表す述語が意味の充足を従属節に求める現象であるため、主文の述語が動きに限られる従属節では起こらない。たとえば、同時動作を表す「ながら」節や「しに」節、付帯状況を表す「て」節、「ずに」節、動きの様態を表す「ように」などでは、主文述語は動きであり、主文に評価の述語は現れにくい。

- (5) a. ?眼鏡をかけずに幸せだ。  
b. 眼鏡を{?かけないで/かけなくて}幸せだ。

この例は、主文が評価を表す述語であっても、付帯状況を表す「ずに」や「ないで」節がその評価の対象としての内容を表す従属節となることは難しく、仮に成立してもその解釈は理由節「なくて」によるものであることを示している。

反対に、独立度の高い「が」「から」などでは、主文の述語の評価の対象となる事態は従属節内から解釈されることがあるが、従属節をそのまま「の/こと」節+「は」に置き換えることはできない（例 (6b)）。

(6) a. 100均でいい感じの和柄判子を見つけたので使ってみましたが、難しい。  
(Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ)

b. \*100均でいい感じの和柄判子を見つけたので使ってみたのは、難しい。

c. 100均で見つけた和柄判子を使うのは、難しい。

上の例で (6a) の主文の述語「難しい」はその評価の対象としてほぼ例 (6c) のような部分的な解釈を行っており、「が」節全体をそのまま名詞節にした例 (6b) には置換できない。したがって、従属節の潜在的主題化が見られるのは、連用節では従属節の階層で中程度の独立度の従属節（南のB類）が中心であると考えられる。

顕在的主題化と潜在的主題化が、どのような従属節の形式に現れるかをまとめたのが以下の表である。ただ、○は常に主題化が起こることを意味するわけではない。主文の述語が対象として要求する意味と合致した場合に限られる。

【表1：従属節と顕在的/潜在的主題化】 ○：主題化あり ×：主題化なし

従属節		主題化	顕在的 主題化	例文	潜在的 主題化	例文
連用節	肯定否定階層節	「ため(に)」	○	(7)	×	—
	テンス階層節	「とき」	○	(8a)	○	(8b)
		「たら」(条件)	×	—	○	(9)
		「なら」	×	—	○	(10)
	対事的モダリティ階層節	「て」(理由)	○	(11a)	○	(11b)
		「から」	×	—	○	(12)
「ので」		×	—	○	(13)	
補足節	引用節	「と」	○	(14)	×	—
	疑問節	「か」	○	(15a)	○	(15b)

以下ではそれぞれの例文を示す。潜在的主題化については、名詞節+「は」に置き換えられるかを～で示している。

(7) ものごとを客観的に把握し、表現するためには、言葉のもつイメージから解放されなければならない。【**顕在的**】 (『DNAから私へ』BCCWJ)

(8) a. 何度か試作を重ねて完成したときはもう、うれしかったですわー、ほんまに。【**顕在的**】 (『万能!おかずの素』BCCWJ)

b. この大切な仕事を引き受けようと思ったとき、お父さんもお母さんもとてうれしかったのよ。【**潜在的**】 (『十五歳の自分探し』BCCWJ)  
～この大切な仕事を引き受けようと思ったのは、うれしかった。

(9) 家族の誰か一人でも欠けたら悲しいから、フィリピンにいるアヤニの家族だってきっと一緒に暮らしたいと思ってると思う。【**潜在的**】 (『真夏の夜の夢』BCCWJ)  
～家族の誰か一人でも欠けるのは、悲しい。

(10) 昭和五十五年の夏の甲子園の「低目のストライクゾーン」のことを思い出していただけるなら、ありがたい。【**潜在的**】 (『初球はストレート』BCCWJ)  
～…のことを思い出していただけるのは、ありがたい。

(11) a. いくら野次馬根性でも、命に別状があつては大変だ。【**顕在的**】 (『爆裂スパーク刑事』BCCWJ)



- b. 「戦争が終わってうれしい。これ以上、命が失われないことを願っている」  
**【潜在的】** (『朝日新聞』朝刊 2003/4/10BCCWJ)  
 ～戦争が終わったのはうれしい。
- (12) ちょっと周二が恐かったし、辛かったんだけど、周二が抱きしめてくれたからうれしかった」 **【潜在的】** (『楽土』BCCWJ)  
 ～周二が抱きしめてくれたのはうれしかった。
- (13) お世話になった先生にあえたので、うれしかったです。 **【潜在的】**  
 (Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ)  
 ～お世話になった先生にあえたのは、うれしかったです。
- (14) このとき、彼は父のあとを継ぐことになろうとは夢にも思っていない。 **【顕在的】**  
 (『マフィアの嘶』BCCWJ)
- (15) a. だが、自分が女性を追いかけると結果がどうなるかは、わかりきっている。  
**【顕在的】** (『愛を忘れた大富豪』BCCWJ)  
 b. 英語以外の母語がわからないので、日本語を母語とする子どもはどうか不明だ。 **【潜在的】**  
 (Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ)
- 以下、それぞれの従属節の主題化について見ていく。

## 2. 時間節の主題化

### 2. 1 「とき(に)は」節の主文の特徴

以下では、時間節「とき」「あいだ」について、顕在的・潜在的の用法を考察する。「とき」「あいだ」のような形式名詞を含んだ連用節は、形態的にも名詞節や連体節に近い。次の例は、「とき」の実質名詞性が高く、連体節に近い例である。

- (16) また本当にこの人と結婚して良かったと思うときは、どのような時ですか？  
 (Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ)

「とき」節が主題化しやすいのは形態的な理由だけでなく、時間節の中で最も一般的な時間状況そのものを表せることから、状況について解説を加えるという主題—解説構造を形成できるという意味的な理由にもよると考えられる。

「とき」節全体の意味・用法については多くの論考がある。そのうち、寺村(1981)(1983)、塩入(1994)(1995)、工藤(1995)、益岡(1997)をまとめると、以下ようになる。

- ①「とき」はいわば無標の形式であり、3形式のうちで最も制限が緩い。主文の事態には新しい事態の出現を表すものが多い。

- (17) 赤穂浅野家が瓦解したとき、赤穂城中で三日間にわたる大評定があった。  
 (『義士の群れ』BCCWJ)

- ②「とき(に)は」には2つの用法がある。

- 1) 「…ときは、…だ」の文型で、従属節の状況に対する判断を主文で述べる。

- (18) 議論する時は、声の大きい方が勝ちだというのは一応の真理だが、私は一言も喋らずに黙っている方が勝つということを最近発見した。  
 (『中毒』)

- 2) 「…とき(に)は、…ていた/ている」の文型で、設定時間における主文の動きの状態を述べる。

- (19) S君の家に着いた時には、もう夜がすっかり更けていた。(『土淵村にての日記』)

- ③「ときに」節の複文は、主文のアスペクトに制約がある。これについて工藤(1995)は、「ときに」節の主文のアスペクトは運動動詞の完成相であるが、「とき」節の場合は運動動詞の継続相や存在動詞、形容詞、名詞述語でもよいと述べている。

- (20) a. 僕が小学生だった時に父が死んだ。(「死んだ」は完成相)  
 b. \*父が死んだ時に僕は小学生だった。(「小学生だった」は名詞述語)

(例文は工藤, 1995)

- ④「ときに」は連体節内に収まりやすく、「とき(に)は」は収まりにくい。

- (21) a. これは眼底網膜の一部が偏光で照らされた時に生じる主観的生理的現象である。

(『錯覚数題』)

b. これは眼底網膜の一部が偏光で照らされた {ときに/?ときには} 生じる主観的生理的現象である。

また、「ときに」は逆条件節「のに」に近い意味を表す場合がある(塩入, 1995)。

(22) 人の苦しんでいるときに冗談をいうとは何事だと栗木は八木に詰めよった。  
(『時間』)

～人が苦しんでいるのに冗談をいうとは何事だ。

以上の特徴から、「ときに」は動きを表す述語の成立時を限定する、位置的にも動詞に近い従属節であり、独立度も「とき(に)は」より低いと言える。「とき」を含む従属節は助詞の有無により階層構造にも違いがある。また、文の種類から見ても「ときに」の主文は動き、「とき(に)は」の主文は状態や属性が多く、動きの場合も継続相が中心となる。このように、「とき」節では助詞の有無が階層構造と文の種類とに関わっている。

## 2. 2 「あいだは」節の主文の特徴

「とき」節のように助詞の有無が階層構造と文の種類とも関わっている時間節には、「あいだ」「あと」「まえ」がある。

「あいだ」も「とき」と同様、「は」が付いた「あいだは」「あいだには」という形式が存在し主題となる。次の例はいずれも、当該の期間にはどうするか、どうだったかを述べる文であり、従属節が主題となり、主文に焦点のある情報構造となっている。

(23) a. マッサージをしている間は、深く息を吸ったり吐いたりしましょう。  
(『アロマセラピーのレシピ 12 か月』 BCCWJ)

b. ずいぶん長く物書きの仕事をやっているあいだには 苦しいこともありましたが、それこそ仕事が進まないでノイローゼっぽくなることもありました。  
(『人生の目的』 BCCWJ)

「あいだは」「あいだには」の用法をまとめると以下ようになる。

①「あいだは」「あいだには」は主題用法があるが、「とき(に)は」と比べると対比の意味をもちやすい。

期間を表す「あいだは」「あいだに」は他の期間を含意しやすく、対比の意味をもちやすいため、否定も多く現れる。

(24) おじさんが生きているあいだには、それはできそうにないけれど、人類がいずれ住むはずの『第二の地球』を、おじさんはこれからもずっと探していきたいと思っているよ。  
(『この宇宙に地球と似た星はあるのだろうか』 BCCWJ)

②「あいだには」の主文には完成相も現れ、状態が少ない。

まず、「あいだには」は「あいだは」に比べ、用例が非常に少ない。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』では、従属節の「あいだは」を含む例が 575 例あるのに対し「あいだには」の場合はわずか 27 例で、「あいだは」の 5%にも満たない。これは「ときには」5,804 例が「ときは」16,698 例の 26%程度であるのに比べるとかなり少ない<sup>33</sup>。

「あいだには」の主文には、動きの完成相が現れるが、やはり典型的な個別の動きを述べる文は少なく、一般的な事態となっている(例(25a))。また、存在文の文型も現れる(例(25b))。主文には状態や属性の述語も現れるが、「とき(に)は」に比べると対比的な意味が強い(例(25c))。

(25) a. 三六億年生きつづけている間には、傷ついた細胞も生まれたにちがいない。  
(『生命の奇跡』 BCCWJ)

b. 毎夜、立ち聞きをつづけるあいだには、捜査の報告以上のものを耳にすることもあった。  
(『わが故郷に殺人鬼』 BCCWJ)

c. 彼とつき合う前、私が留学していた間には、あなたが彼の彼女だったんだね。

<sup>33</sup> いずれも述語の用法のみの数字である。また表記が漢字と仮名両方の形式を含んでいる。

『ノンノ』2001年3月20日号』BCCWJ)

また、「に」の必須性も「ときには」と異なり、「あいだには」の主文の述語が動きの完成相<sup>34</sup>である例(25a)の場合「に」の必須性は高い。

(26) a. ?生きつづけている間は、傷ついた細胞も生まれたにちがいない。

b. ?仕事をしている{あいだには/\*あいだは}、成功させたい。

以上のように、「あいだは」「あいだには」は、主文が状態の場合には主題となるが、「ときは」より対比の意味をもちやすいと言えるだろう。

### 3. 目的節の主題化<sup>35</sup>

#### 3. 1 従来の研究

目的節には、「しに」「するのに」「するため(に)」「するよう(に)」という形式があり、それぞれの異同は佐治圭三(1984)、益岡(1987b)(1991)、前田(1995)など多くの研究で説明されている。ここではそのうち、主題化に関係する「は」を伴った形式をもつ、「するため(に)」とその主題化した「するため(に)は」、そして、「するのに」とその主題化した「するのには」を取り上げる。

先行研究の中で、佐治(1984)は類義表現分析の例として、目的を表す「しに」「するに」「するのに」「するには」「するために」「するよう(に)」を取り上げ、それらの使い分けを調査、分析している。そのうち、「するのに」「するには」に関する説明を簡単にまとめると、次のようになる。

(27) 「するのに」と「するには」の用法(佐治, 1984を筆者がまとめたもの)

① 「するには」は場合の表現(「する際に」「する時に」など)であり、主文は何かに対する判断の表現(「何が必要だ」「何が良い」)である。

② 「するのに」は「する場合」という表現を一般的に仮定した一種の仮定条件であり、場合の想定である。主文は常に状态的な述語(「役に立つ」「必要だ」)である。「するのには」で場合の想定も可能である。「するためには」もほとんど同じ意味を表せる。

以上の説明で注目されるのは、「するのに」の主文について以下のような例を挙げ、説明している点である。

(28) a. ×ちょっとそこまでタバコを買うのに行く。

b. ○この本を買うのに昨日わざわざ町へ行ってきた。

(この例で×○はそれぞれ6割以上の被験者が×、○と回答したことを表す。)

「するのに」は「その場合にどうするか」ということが問題になるため、「どう」のない例(28a)はだめで、「どう」の部分(「昨日わざわざ町へ」)のある例(28b)は良いと言う。

益岡(1987b)は目的表現としての「するために」「するよう(に)」「するためには」の違いを説明するに当たり、南(1974)の従属節の階層構造という観点から、従属節全体の中で位置付けている。益岡もやはり「するために」「ためには」の主文の性質の違いに言及し、「ためには」の主文が必要条件を述べるものであることを指摘している。さらに、益岡(1987b)では、「するために」の従属節内部の制約(たとえば、動作主が主文の動作主と同一か、否定の「ない」は含まれるか、事態の意志性かどうか)についても考察している。

#### 3. 2 「ためには」節の主文の特徴

主題化された目的節「ためには」について述べる前に、「するため」と「するために」の違いについて明らかにしておく。「するため」は「するために」より書き言葉的であり、また、「だけ」を用いて目的を限定する場合、「ただけに/ためにだけ/\*ためだけ」のように「に」が必要である。このような違いはあるものの、「するため」と「するために」の主文

<sup>34</sup> 工藤(1995)による時間節の「に」の有無に関する「+アクチュアルな限界達成性」に相当する。

<sup>35</sup> 3. は塩入(1995c)を加筆修正している。

には制約の違いはなく、「するため(に)」と表してよいだろうと思われる。

次に、「するため(に)」と「するため(に)は」の違いは、「するため(に)は」の主文には特定の時に限定された一回の過去の事態は現れにくいということである。

(29) a. はっきりさせるためには、病院でチャレンジテストをするしかありません。  
(Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ)

b. \*はっきりさせるためには、病院でチャレンジテストをした。

c. はっきりさせるためには、病院であらゆるテストをした。

序章で述べたように、このような現象は英語にもあり、Faraci, Robert A.(1974)によれば、「in order to-節」が文頭にある場合、主文に意図的述語 (volitional predicates)、条件の述語 (conditional predicates; must, need, be sufficient)、モダリティ形式 (modal) のいずれかが含まれないと、つまり主文が述語の単純過去形では、文としての許容度が低いと言う。

(30) a. \*Ivan was tall (in order)<sup>36</sup>to attract attention.

b. Ivan must be tall (in order) to attract attention.

c. It is sufficient for Ivan to be tall (in order) to attract attention.

(Faraci, A., 1974, p.34)

さらに、目的節の中でも「ためには」に相当するような独立度の高い「in order to」節が文頭にあると、主文は述語の単純過去形だけでは文の許容度が低い。これは、目的節が文頭の位置にあることが、日本語のように「は」という主題の形式の存在しない英語では、主題的な意味をより顕在化させるためであると考えられる。以下の例では、「in order to」節が文頭にある。

(31) (序章 = (3))

a. You have to pay to go in. ~ (In order) to go in, you have to pay.

b. He waited to see her. ~ ?(In order) to see her, he waited.

(Quirk, et. al. 1985, p.1189)

日本語の「ためには」の場合も同様の現象があり、過去の1回の事態を単純過去形で表すのは難しい。

(32) \*留学するためには、お金を貯めた。

ただし、必要条件を表すような、複数の事態を含意する場合は可能である。

(33) a. 留学するためには、随分苦労した。

b. 留学するためには、いろいろな仕事もした。

以上のように、「ために(は)」の主文には特定の時に限定される過去の1回の事態は現れにくく、英語でも同様の現象があることを指摘した。

### 3.3 「ために(に)は」節の独立度

次に、「ために(に)は」の独立度と複文としての類型について、①動作主の同一性、②否定が現れるか、③否定・疑問の焦点になるか、④従属節が他の節に含まれるか、⑤従属節の事態の意志性、⑥主文の性質という6つの点から述べたいと思う。

#### 【①動作主の同一性】

目的節の内部に現れる要素については益岡(1987b)にも指摘があるが、動作主について見てみると、「ために」節の動作主は主文の動作主と同一であるのが普通で(例(34))、従属節と主文の動作主が異なると許容度が低い(例(35))。

(34) お菓子を作るために、順子は材料を買いに行った。

(35) ?恵子がお菓子を作るために、順子は材料を買いに行った。

一方、「ために(に)は」の場合はこうした制約はない。

(36) 恵子がお菓子を作るためには、順子は材料を買いに行かなくてはならない。

したがって、「ために」の内部には主文と異なる動作主は含まれにくい、「ためには」

<sup>36</sup> 例文中の( )は、この例文では( )内の形式が任意であることを表す。

はそのような制約はないという違いがあると言える。しかしながら、動作主の同一性に関する「ために」の制約は、同時動作を表す「ながら」「つつ」ほど強い制約ではなく、従属節と主文の動作主の関係付けがしやすい場合（例（37a））や、主文が必要性を表す場合（例（37b））は許容度が高い。

- (37) a. 娘が夕食を作るために、母親は材料を買いに行った。  
b. 恵子が夕飯を作るために、順子は材料を買いに行く必要がある。  
c. \*娘が夕食を作り {ながら/つつ}、母親は買い物に行った。

したがって、「ために」が「ながら」などと同じA類の階層というのは、動作主に関してはやや疑問のあるところであるが、後述する③の節の包含関係などからはやはりいずれもA類と考えられる。A類の中でも節の大小は存在するのであろう。移動動作の目的を表す「しに」は動作主が現れないので、「ながら」と同じA類に属すると考えられる。「ために」は「しに」「ために」よりさらに上の階層ということになる。

## 【②否定が現れるか】

次に、従属節の内部に否定が現れるかどうかを見てみると、「ために」の場合（38b）のように従属節の事態によっては否定が現れにくいことがある。これは事態の意志性と関係する。意志性の程度が低い目的には通常「ように」を用いるが、実際には（38c）のように「ために」節内にも否定が現れることがある。

- (38) a. 自分はある時、伎楽面の美しさがはっきり見えるように眼鏡の度を合わせておいて、そのままの眼鏡で能面を見たのであった。（『能面の様式』）  
b. 美しさがはっきり見えない {ように/?ために} 眼鏡の度を合わせておいた。  
c. 「話す」ということを発見した人類のころの中には、苦痛をのり越えてきたものの切実な祈りがひそんでいる。直接に血を流さないために、人類はここまで歩みきたったのである。（『二十世紀の頂における図書館の意味』）

この点でも「ために」は否定の現れない「ながら」のような節（例「お茶を飲まないながら」<sup>37)</sup>）とは、独立度において区別する必要がある。一方、「ためには」節にはしばしば否定が現れる。

- (39) 紛糾した可能性の岐路に立ったときに、取るべき道を誤らないためには前途を見透す内察と直観の力を持たなければならない。（『科学者とあたま』）

以上のように、動作主と否定を含むかどうかという基準からも、「ために」と「ためには」は独立度の異なる節であることがわかる。

## 【③否定・疑問の焦点になるか】

従属節の独立度の反映として、否定・疑問の焦点になるかという情報構造の面での違いがある。田窪（1987）は「修飾節」に「制限/非制限」の区別をし、「潜在的な焦点位置」になるのは「制限修飾節」であり、南（1974）の階層構造のA類、B類であることを指摘している。「潜在的な焦点位置」は否定・疑問の焦点になるという特徴をもっている。たとえば、「何があったから休んだんですか？」という疑問文では、「から」節が疑問の焦点になっている。

「ために」節は「潜在的な焦点位置」になり否定・疑問の焦点になるが、「ためには」節はならない。これもやはり、「ために」と「ためには」の独立度の違いによるものである。

- (40) a. 橋本元首相は何をするために国会へ行っているのですか。  
（Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ）  
b. 首相は何をする {ために/\*ためには} 国会へ行っているのですか。

## 【④従属節が他の節に含まれるか】

<sup>37)</sup> 「ながら」節は等位節「けれども」にはほぼ等しい意味・用法を表す場合、状態を含む。

節の包含関係もやはり南（1974）の提案した独立度を確かめる基準の1つである。「ために」は「ながら」のような独立度の低い節に含まれ得るが、「ためには」は含まれない。

(41) a. そして、叔父の話を思い出したり、ときどきパイクが動きださないか確かめるために氷面から覗きこんだりしながら、氷に穴をあける準備を始めた。

（『フランク・ソーヤーの生涯』BCCWJ）

b. \* ……確かめるためには氷面から覗きこんだりしながら、 ……

また、「ために」「ためには」のいずれも、「が」「けれども」のような独立度の高い節を含むことは難しい。

(42) 背が低い、ひねこびた木がまばらに生える環境は、山羊だと耐えやすいけれども、体が大きい牛の命を支えるためには、草と水を求め、移動し続けねばならなかった。

（『ムツゴロウの動物交際術』BCCWJ）

上の例で「けれども」節が「ためには」節に含まれていると解釈するのは難しい。

### 【⑤従属節の事態の意志性】

目的節の事態の意志性については、國廣哲彌（1982）、佐治（1984）、益岡（1987b）（1991）、前田（1995）等の先行研究が「ように」と比較、説明している。それによれば、「ために」節の事態は意志的なものでなければならない。下の例で、非意志的な「よくなる」は「ために」節には現れない（例（43a））が、意志的な「よくする」の場合は「ために」節には現れ、「ように」節には現れない（例（43b））。

(43) a. 成績がよくなる {\*ために/ように}、塾へ行くことにした。

b. 成績をよくする {ために/\*ように}、塾へ行くことにした。

これは「ために」と「ように」の基本的な相違点ではあるが、実際には「ために」は文頭の位置にあるときに「は」がなくとも主題的に用いられることもあり（例（44a））、また、非意志的な動詞でも意志的な使われ方をする場合（例（44b）「見える」）や、名詞節内の場合（例（44c）は「ために」節に非意志動詞も現れる）。

(44) a. なるべくはやくよくなるために、たくさんすることがあります。

（『けんこうだいいち』BCCWJ）

b. “父の仇”に見えるために、全身を鎧で包んで出て来たのだ。

（『青春の証明』BCCWJ）

c. そこで、経営者がいつも気をつけていなければならないことは、社員のメリットを注意深く観察して、社員の働くメリットと、会社が発展するために必要なメリットがずれないように常に気を配っておくことである。

（『勝つための非常識のすすめ』BCCWJ）

一方、「ため（に）は」には意志性に関する制約がなく、非意志動詞も現れる。

(45) a. 正しい診断ができるためには何が必要か、をよく分析すること。

（『画像診断を考える』BCCWJ）

b. ?正しい診断ができるために何が必要か、をよく分析すること。

### 【⑥主文の性質】

「ために」の主文と異なり、「ため（に）は」の主文には1回の実現した事態が現れにくく、複文としての類型は動きから状態に傾いている。

(46) a. 一家八人の生活を支えるために、高校中退の私は地下鉄の駅売店で働くことになったのです。

（『資産ゼロから大成功する「魔法の粉」の使い方』BCCWJ）

b. ?一家八人の生活を支えるためには、 ……駅売店で働くことになったのです。

「ため（に）は」の主文は「必要だ」「…なければならない」のように必要条件を表すという制限がある（益岡，1987b，1990）。

「ため（に）は」の主文には1回の実現した事態は現れにくい（例（47a））が、複数の事態を含意する場合（例（47b）（47c）（48））は可能である。

- (47) a. \*彼に会うためには、休暇を取った。  
 b. 彼に会うためには、休暇まで取った。  
 c. 彼に会うためには、あらゆることをした。  
 (48) お客様は神様であり、買っていただくためには何でもします。頭も下げます。  
 (『プロジェクトリーダーたちの言葉』BCCWJ)

ただし、1回の事態でも未実現の事態への意志を表す場合は、他の選択肢を意味しやすいためか、「ため(に)は」の主文に現れることもある。

- (49) a. 彼に会うためには、休暇を取る。  
 b. 読みたい本を見つけるためには、参考図書(レファレンス・ブック)を活用します。  
 (『現代社会』BCCWJ)

「ため(に)は」は主文に選択肢が可能のため、「どうすればいいか」「何が必要か」などの疑問文が現れ、疑問の焦点となることが可能になる。

- (50) 香水など作ったりする仕事は、なんという職業ですか？また、なるためにはどうすればよいのでしょうか？  
 (Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ)

以上、6つの観点から「ため(に)は」の独立度に関わる特徴を述べた。6つの観点はいずれも、「ため(に)は」の独立度が高く、情報構造の面からも主題相当の役割を果たしており、文の種類から見れば典型的な動きの文から状態に傾いていることを示している。

## 4. 「て」節の主題化

### 4. 1 「ては」節の顕在的主題化

「て」節には、顕在的主題化(例(51a))と潜在的な主題化(例(51b))がある。

- (51) a. 赤楽の茶わんもトマトスープでも入れられては困るであろう。  
 (『青磁のモンタージュ』)  
 b. 「子供がスーパーマンのまねをして困る」という苦情が、TBSには多く寄せられたという。  
 (『そのとき一億人が感動した』BCCWJ)  
 ~子どもがスーパーマンのまねをするのは困る。

例(51a)の「ては」は順接条件と言われるもので、例(51b)の「て」は理由節である。

順接条件と言われる「ては」節の特徴や制約については、仁田(1982)、蓮沼昭子(1987)、森田良行・松木正恵(1989)、塩入(1993)、日本語記述文法研究会(2008)、有田(2007)、前田(2009)などで説明がなされている。それらをまとめると、「て」節に「は」の付加した「ては」節には2つの用法が認められる。1つは「千切っては投げ、……」のような動きの反復を表す用法で、これはその複文が動きに限られているので、主題とは見なされない<sup>38</sup>。もう1つは条件を表す用法である。いずれの用法も、現れる文の種類は異なるが、共通するのは、主文に1回の過去の出来事を表しにくいという、目的節や時間節の場合と同じ現象である。

- (51) ' a. ? 赤楽の茶わんもトマトスープでも入れられては困った。

また、「ては」の条件節としての用法は蓮沼(1985)などの研究で述べられているように、主文がマイナスの評価に傾くことが多いのが特徴であり、「いけない」「だめだ」「困る」等の評価の述語が多く現れる。これも、「ては」節の複文が状態を述べる文に傾いていることを示している。

さらに、「ては」節には、「と聞いては」「と知っては」「を目にしては」のような認識を表す形式や「とあっては」のように、必然的な因果関係を表す用法がある。

- (52) a. ……うちの系列校である滋賀大学や三重大学あたりまで出掛けて、縄張り荒らしをしているという情報が入って来ては、われわれだって洛北大学の名誉にか

<sup>38</sup> 有田(2007)は反復の「ては」と条件の「ては」の2つの用法を構造的に位置付け、前者を非時制節、後者を不完全時制節としている。本研究では前者は南のA類で典型的には動き、後者は主題化されたC類相当の節で典型的には典型的動きの文には現れにくいと考えている。

けて負けれられないではありませんか。(『続白い巨塔』塩入, 1993)

- b. 初がつおが出だしたと聞いては、もう矢も楯もたまらずやりくり算段…、いや借金してまで、その生きのいいところをさっとおろして、なにはさておき、まず一杯という段取りに出ないではいられなかったらしく、未だに葉桜ごろの人の頭にピンと来るものがある。(『魯山人の食卓』BCCWJ)
- c. いくら自分を引き立ててくれた岩下が進めている話とはいっても、阪神に合併されるとあってはおもしろいわけがない。

(『小林一三 夢なき経済に明日はない』BCCWJ)

主文には例 (52a)「負けれられない」、(52b)「矢も楯もたまらず」、例 (52c)「わけがない」のような必然性の高さを表す当為表現が現れる。こうした「ては」節による必然的な因果関係は、「と困る」のような評価の形式に繋がっている。このような顕在的主題化による「ては」節の複文の特徴は、主従が必然的因果関係を表すことと、その延長として主文に当為の評価の述語が現れることである。

次に、主文が事態評価の述語である場合、「ては」節の事態はその評価の対象と解釈される。これは条件節の潜在的な主題化と同様の現象である。

- (53) a. 料理がずらりと並んでいます。それをざっと見渡しただけで何にするか決めてしまつては、シェフにとっては悲しいものがあります。

(『ホテル・レストランのマナーマニュアル』BCCWJ)

～それを……決めてしまうのは、悲しいものがあります。

- b. だけど、好きなだけサボつては、効果がない。

(『COSMOPOLITAN』日本版 2001 年 2 月号 BCCWJ)

～好きなだけサボっているのは、効果がない。

上の例を他の条件節と比べると、「ては」節の場合はやはり当然の意味を含んでいる。

- (54) a. 料理をざっと見渡しただけで何にするか決めて {しまつては/しまつたら}、シェフにとっては悲しいものがあります。
- b. 好きなだけサボつて {いては/いたら} 効果がない。

したがって、「て」節の顕在的主題化としての「ては」節には、必然的因果関係、当為評価を表す用法 (例 (52)) と、主文に事態評価の述語をとる用法 (例 (53a)) があるが、両者はいずれも主従の事態が当為の因果関係を表すという連続したものと考えられる。

なお、「て」節に取り立て助詞「も」の付いた譲歩節「ても」節には「並列条件」と「逆条件」(前田, 2009) の用法があり、「並列条件」の場合に主題としての解釈が可能である。

- (55) a. 見ているだけでも楽しいし、タイムに注目してもおもしろい。

(『CAR BOY』2001 年 7 月号 BCCWJ)

～見ているだけでも楽しいし、タイムに注目するのもおもしろい。

- b. 何しろブルペンに行つて見ても楽しくないんだもの。

(『週刊ポスト』2003 年 4 月 4 日 BCCWJ)

～?ブルペンに行つて見ているのも楽しくないんだもの。

並列条件では、従属節部分は例 (55a) のように「タイムに注目するのも」という名詞節の主題用法に置換できる。しかしながら、逆条件は常識的な因果関係を前提としてそれと異なる帰結を述べるもので、「楽しい」という主文の帰結が範列的に含意されるのであるが、例 (55b) のように名詞節に置き換えると、「ブルペンに行つて見ているのも楽しくないし、他の場所で見ると楽しくない」のように上述の並列条件同様、従属節が範列的に含意されてしまう。

「ても」のような「も」による主題化も、顕在的主題化の 1 つと考えられる。他に「て」節に取り立て助詞の付随した従属節には、「てこそ」「てまで」などがあるが、「は」「も」に比べ付随する意味が多く、主題的には解釈しにくい。

- (56) a. 人間は疑問を持つたり、悩んだりしてこそ進歩する。(Yahoo! ブログ 2008-BCCWJ)
- b. ?人間は疑問を持つたり、悩んだりすることこそは進歩する。



(57) a. 普通の人は骨折してまで何かをやるようなことの意味をなかなか理解してくれません。  
(『直角死』BCCWJ)

b. \*……骨折することまで何かをやる。

上の例では、「てこそ」「てまで」は名詞節に置換するのは難しく、顕在的主題化は「ては」、並列条件の「ても」の場合に可能であると言える。

#### 4. 2 「て」節の潜在的テーマ化

理由を表す「て」節は、主文が事態評価の述語の場合に主題として解釈されることがある。第9章4. 2. 3の表11と4. 2. 4の表17で示したように、「て」節は主文が感情表現の場合、「評価的感情を表す名詞」の場合を除き、多く現れるが、評価表現の場合は「満足だ」のような感情の意味を含むもの以外はあまり現れない。

まず、感情表現における「て」節の潜在的テーマ化の可能な例を以下に挙げる。

(58) a. 【一時的感情を表す動詞】(=第9章(43a))

ナッキーが男の人が嫌いなわけではないとわかって、むしろ安心した。

(『「地震でも安心な家」に住みたい』BCCWJ)

～ナッキーが男の人が嫌いなわけではない(とわかった)<sup>39</sup>の(に)は、むしろ安心した。

b. 【能動的感情を表す動詞】(=第9章(48b))

昔からこの地に住んでいた者は、土地を奪われて悲しんでいる。

(『すらすら読める方丈記』BCCWJ)

～昔からこの地に住んでいた者は、土地を奪われたのを悲しんでいる。<sup>40</sup>

c. 【直接的感情を表す形容詞】

みんな素直で元気。話も熱心に聞いてくれてうれしい。

(『中国新聞』朝刊2003/3/29BCCWJ)

～話も熱心に聞いてくれたのはうれしい。

d. 【評価的感情を表す形容詞】(=第9章(59a))

お母さんがいつも怒ってどなっていて悲しいです。(『みんなのなやみ』BCCWJ)

～お母さんがいつも怒ってどなっているのは悲しいです。

e. 【評価的感情を表す名詞】

演出する必要は比較的少なく、人形独自の動きに関しては、彼らに任せておいて安心だった。

(『幸福な朝食』BCCWJ)

～彼らに任せておいたのは安心だった。

例(58e)のように主文が名詞述語の場合、「て」節の用例は「任せて安心」のような頻繁に用いられるもの以外は非常に少なく、「て」節が連用節として動詞述語または形容詞述語の場合を中心に用いられることを示している。

次に、評価表現における「て」節の用例を見ると、感情表現に比べ全体的に用例が極めて少なくなっている。

(59) a. 【賛否・充足の評価表現】(=第9章(64a))

われわれは彼を介して総督に時計を贈りましたが、総督はシナには珍しい、このようなくふうのこらされた品をもらって満足し喜んだ様子でした。

(『マッテオ・リッチ伝』cjc325)

b. 【類似・異同の評価表現】(=第9章(71c))

リーダーは自分たちの失敗を見つけようとしているのではなく、その逆だとい

<sup>39</sup> 「わかる」等の認識動詞の「て」節が主題化に多いことは4. 2. 2でも述べたが、この場合認識の内容が評価の対象となる。

<sup>40</sup> この文は「昔からこの地に住んでいた者」が主題であるため「土地を奪われた(こと)」は名詞化されず補語になっている。

うことに気づき、こうした職場で働くメンバーは心も開くようになる。  
(『ほめ上手のリーダーになれ!』BCCWJ)

c. 【剛柔・強弱の評価表現】

総合力で戦う小林・横山美和監督「主力だった三年生が卒業して厳しい。……」  
(『新潟日報』2001/3/21BCCWJ)

d. 【難易・当為・真偽の評価表現】

TZのベストタイム7秒台を更新したいと思いますが、さすがに寒すぎて難しいでしょうか。  
(Yahoo!ブログ2008-BCCWJ)

比較的用例の多いのは、例(59a)の「満足だ」など感情表現に近いものや、例(59b)の「……ではなく」といった連用形の用法、例(59d)の「……すぎて」のように理由を強調する場合などである。なお、例(59c)の「厳しい」は多義語であるが、この用例は剛柔より難易の評価「難しい」などに近くなっている。

全体的に見て、「て」節による潜在的主題化は、主文が感情表現の場合に多く現れること、主文は動きや状態を中心としており、名詞文には現れにくいと言える。

## 5. 引用節の主題化

### 5.1 「とは」節と主題化<sup>41</sup>

引用節「と」は「は」を伴い主題化する。

(60) a. 「暴力団の世界は理不尽がまかり通ると言われているが、これほどまでにひどいとは思わなかったな。」  
(『翔んでる警視正』BCCWJ)

b. 「ねえ、女は何のために大学に行くの?」いきなりそんな質問が、彼女の口から出るとは意外だった。  
(『ウォーク in チャコールグレイ』BCCWJ)

c. ここに、大きな鯛がいるとはびっくりしました。  
(Yahoo!ブログ2008-BCCWJ)

主文には、「思う」「考える」「信じる」のような認識・思考を表す動詞の否定や、「びっくりした」のような意外性を表す心理動詞、「意外だ」「予想外だ」のような意外性を表す形容詞や名詞述語が現れる。

「とは」節が意外性を表す場合、取り立て助詞「なんて」に置き換えることができるが、「なんて」は「述語+だ」に接続する用法もある(例(61b))ことから、「なんて」の接続部分が名詞であるのに対し、「とは」節は述語に接続するという違いがある。

(61) a. 僕と夢子が訣別するだなんて、あり得べきことだとも思えない。  
(『緑幻想』BCCWJ)

b. \*僕と夢子が訣別するだとは、あり得べきことだとも思えない。

例(60a)の「とは」の主題化した用法は、次の例(62)のような認識・思考動詞の否定とは、従属節の事態の事実性により区別される。

(62) 「ああ、きみの友だちを呼ぶほど重態だとは思わないね」(『竜とイルカたち』BCCWJ)

例(60a)の「とは」節の事態—「これほどまでにひどい(こと)」—は既成事実であるが、(62)の「とは」節の事態「きみの友だちを呼ぶほど重態(であること)」は事実とは限らない。

主題用法の「とは」節のうち、主文が意外性を表す述語の場合「は」が必須であるが、認識・思考動詞では「は」が任意である。

(63) a. これほどまでにひどい {と/とは} 思わなかったな。

b. いきなりそんな質問が彼女の口から出る {とは/\*と} 意外だった。

c. きみの友だちを呼ぶほど重態だ {とは/と} 思わないね。

以下では、例(60a)～(60c)のような「とは」節を主題化したものとし、従属節の事実性と文の類型について考察する。

<sup>41</sup> ここでの記述は塩入(1994)を加筆・修正している。

## 5. 2 「とは」節の事実性と情報の新旧

塩入 (1994) では、Karttunen, Lauri (1970)、井上 (1976)、Akatsuka, Noriko (1985)(1987) の「叙実性」(factivity) に関する議論を参考にし、叙実性という概念を用いて、「とは」節の意味・用法を説明した。次の例は叙実性を説明する例である。

(64) 精いっぱい演奏したが、賞を頂けるとは思わなかった。

(『神戸新聞』2003/1/16BCCWJ)

この例は2通りの意味解釈があり、1つは話し手が賞をもらえたかどうかの事実は不明であるが、話し手はもらえることを諦めているという解釈である。もう1つは話し手が実際に賞をもらい、それに対して予想外だったという解釈である。「思う」という動詞は井上和子 (1976) で「非叙実述語」(non-factive predicate) とされているように、従属節の命題が真であるという前提がないため、二義が生じたのである。すなわち、1つ目は従属節内の事実が真ではないという解釈、2つ目は真の解釈である。

「とは」節による「意外だ」という意味は、予想外のことから事実であるという認識への変化を表すため、「思わなかった」のように認識・思考動詞の過去の否定が現れることが多い。また、「信じられない」のように真と認めることが不可能だと可能の否定で直接述べる場合もある。こうした認識・思考動詞のほか、「意外だ」「驚きだ」のような形容詞や名詞が現れる。

「知る」「わかる」のような叙実述語の場合、非叙実述語のように二義は生じず、常に叙実的である。たとえば、次の例で、話し手は従属節の内容をいずれも真とみなしている。

(65) a. そんなところに城壁に通じる出入口があったとは知らなかった。

(『旅涯ての地』BCCWJ)

b. ムハンマドは地面に文字を書きつづけた。もっともわたしには、それが文字だということはわからなかった。(『ディリー、砂漠に帰る』BCCWJ)

叙実述語を主文とする従属節の事態は「これほど」のように眼前の指示を意味する表現が多く現れる。

叙実性という概念を用いて、引用節の主題化を、情報構造の面から説明することも可能である。Akatsuka(1985)(1989)は、補足節をとる動詞の用法に関して情報の新旧という観点を取り入れ、下の例(66b)のように「newly-learned information (新規獲得情報<sup>42</sup>)」の場合は叙実述語の「知る」なども「と」をとることが可能であることを指摘した。これは久野暉 (1973) の指摘した(66a)のような補足節のとり方の違いについての指摘を説明したものである。

(66) a. 母は息子が来る {のを/ことを/?と} 知っている。

b. 母は息子が来ると知って、喜んだ。

以上の議論を受け、塩入 (1994) では非叙実述語の「思う」「知る」などが否定の場合に叙実的な場合とそうでない場合がある(例(67a))ことを指摘し、叙実<sup>43</sup>的な場合は主文に意外性を表す述語をとる(例(67b))こと、そして意外性とは情報という観点から見ればAkatsukaの指摘する新規獲得情報であることを指摘した。

(67) a. 息子が失敗するとは、思わなかった。

b. 息子が失敗するとは、{意外だ/驚いた}。

「とは」節の主文の「思わなかった」「意外だ」「驚いた」という述語は、いずれも知らない状態から知っている状態への変化を表しており、新規情報の獲得を意味している。新規獲得情報はまだ完全に話し手の知識とはなっておらず、この場合の「とは」は田窪 (1989) の言う「メタ的な用法」である。

情報構造から見ると新規獲得情報が主題化されるということは、引用節だけの現象ではない。(67b)の「母は息子が来ると知って、喜んだ」という複文では、「て」節が新規獲得

<sup>42</sup> 日本語訳は塩入による。

<sup>43</sup> 本研究では事実性で統一している。

情報である。「見る」「知る」「聞く」などの知覚動詞は、条件節や「て」節により「…を見ると/知って」「…と見ては/知っては」のように複文に導入され、新規獲得情報を表すことがある。

主題の「とは」節の叙実的な事態は、情報面から言うと新規獲得情報である。話し手はその情報が真であるとみなしているが、確実な知識となるには至っていないのである。

### 5.3 「とは」節の主文の述語

次に、「とは」節を含む複文の主文の述語に現れる、認識・思考動詞以外の事態評価の述語について見ていく。

まず、主文には現れにくい述語として、持続的感情を表す述語がある。

(68) a. 彼が来るとは、{ うれしい/?いやだ}。

b. 散歩するとは、{\*好きだ/\*きらいだ}。

「うれしい」「いやだ」のように、事態を認識した瞬間に感情を表せる述語とは違い、「好きだ」「きらいだ」のような述語は「持続的な感情」(西尾寅弥, 1972)を表す。「とは」節の表す新規獲得情報に対し、持続的な感情を表すことは難しいため、「好きだ」「きらいだ」などの述語は主文には現れない。ただし、「箸もつけないとは、彼はよほど魚が嫌いなんだね」のように「とは」節の事態の主体である「彼」の性質を表す場合は「好きだ」「きらいだ」のような述語も可能になる。

「とは」節を含む複文の構造には、以下の2種がある。

(69) a. 【性質を表す】:[従属節の主体] が (→とは) [主文の述語]

b. 【感情を表す】:[発話者] (に) (は) [従属節の事態] が (→とは) [主文の述語]

(69a) に属する述語としては、動作主の性質を表す「凶々しい、すごい、大胆だ、傲慢だ、勝手だ、しっかりしている、不用意だ、ひどい、生意気だ、あまい、さすがに…だ」などがある。

(70) a. 十一時を過ぎて女の部屋へかけてくるとは、少し凶々しい。

(『愛のごとく』BCCWJ)

b. それにしても、敗戦からわずか五日後に開店したとは、ものすごい行動力である。

(『地図から消えた東京遺産』BCCWJ)

このタイプの述語には人間の性質を表すものだけでなく、物の場合にも「こんなにんごが千円もするとは、高いね」の「高い」のように、物の性質を表す述語も含まれるが、「四角い」「垂直な」などの形を表す形容詞で程度を表しにくいもの(「とても四角い」)や、「薄暗い」「うずたかい」「無害な」「同一な」のように程度を表しにくいもの(「とてもうずたかい」)は、このタイプの述語として不適切である。このタイプの述語として適切なものは、人や物の、程度性のある性質を表す述語である。これは、「とは」節を含む複文の主文に表される意外性といった評価が、事態の程度の甚だしさや異常さに対するものであるためであろう。「さすがに山本君だ」のような表現も、当該人物に対して予めもっている高い評価と一致することを表し、人の属性に程度性をもたせる表現である。

一方、(69b)のタイプに属する述語としては、感情を表す「うれしい、悲しい、恐ろしい、意外だ、不思議だ、心外だ、許せない、ありがたい、かわいそうだ、あきれる、夢のような、感動する、驚きだ」などがあり、新規獲得情報に対し、瞬間的な感情を表せる述語である。

(71) a. はるかに遠い、陝北のこのへんぴな片田舎で、あろうことか、北京の知り合いに出会うとは、何ともうれしい限りだった。

(『わが父・鄧小平』BCCWJ)

b. 龍前社主が、ココまで日本史に、そして織田信長にお詳しいとは、非常に驚きと同時に感銘、共感を覚えました。

(Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ)

以上の2種；性質を表す述語と感情を表す述語は、「とは」節の主文においていずれも程度の甚だしさに対する評価を表すが、以下ではこれらとは異なるタイプの述語を見ていく。

- (72) a. この町で事件があるとは、{\*本当だ/\*うそだ/うそのようだ}。  
 b. この町で事件があるとは、{\*確実だ/\*真実だ/あり得ない}。  
 c. この町で事件があるとは、{\*普通だ/異常だ}。

例(72a)の「本当だ」「うそだ」「あり得ない」は真偽を判断する述語、例(72b)の「確実だ」「あり得ない」は事態の可能性を判断する述語、例(72c)の「普通だ」「異常だ」は事態の尋常さを判断する述語である。まず、真偽の判断については、(72a)のように、「とは」節の主文には真偽の判断は断定の形では現れにくく、「…ようだ」のように真偽に対する疑いを含むものである。これは先に述べたように、「とは」節の複文の主文は、新規獲得情報としての事態を真としながらも、それがまだ十分に受け入れられないことを表すためである。また、事態の可能性については、例(72b)のように、主文には従属節の事態の成り立つ可能性が低いことを示す述語が現れる。これも、従属節の事態を真とは認め難いことを表すためと言える。事態の尋常さについては、例(72c)のように、主文には従属節の事態の異常さを表す述語が現れる。これもまた、従属節の事態を尋常なこととは認められないことを表すことによる。「とは」節を含む複文の主文に現れる、思考・認識動詞以外の事態評価の述語の意味的な特徴は、事態の真偽に対する疑い、可能性の低さ、異常さなどであると言える。

## 6. 疑問節の主題化

疑問節にも「は」を伴う主題化があるが、「は」が任意の場合もある点で引用節とは異なっている。「は」は主文の述語が動きより状態の場合に多く現れる傾向が見られる。

【表2：疑問節の「は」の有無】(BCCWJ全メディア・ジャンルによる)

主文 \ 疑問節	知らない	わからない	不明	問題
か	808 (79.1%)	2945 (84.9%)	170 (42.3%)	10 (28.6%)
かは	213 (20.9%)	524 (15.1%)	232 (57.7%)	25 (71.4%)
合計	1021 (100%)	3469 (100%)	402 (100%)	35 (100%)

表2は、疑問節を含む複文の主文が「知らない」「わからない」といった動詞の場合と、「不明(だ)」「問題(だ)」のような形容詞や名詞の場合とで、「は」の現れる割合はどう違うかを比べたものである。動詞文では「は」の付いた「かは」が20%前後であるのに対し、形容詞・名詞文では「かは」が50~70%とかなり多い。このことから、主文の述語のタイプが従属節の「は」の現れ方と関係があると考えられる。

主文が動詞の場合、疑問節は「は」を伴わない場合も多い。

(73) けれども、私は、私のどこが、いけないのか、わからないの。 (『きりぎりす』)

疑問節は、日本語記述文法研究会(2008)が示しているように、そのすべてが「は」で主題化されるわけではなく、「が」の方が多い場合もある。主題化のされやすさに関して、少なくとも3つのレベルが、「は」「が」の付き方の違いにより区別できる。

- (74) a. 本当に {うまいか/?うまいか} は食べてみる。  
 b. どの店がうまいか {は/が} わからない。  
 c. 本当にうまいか {??は/が} 問題だ。

### ①【疑問節に「は」が付きにくい場合】(例(74a))

主文が「食べてみる」「決める」「明らかにする」のような動詞述語の肯定形の場合、疑問節に「は」は付きにくい。

### ②【疑問節に「は」も「が」も付く場合】(例(74b))

主文が「わからない」のような対象の確実性や明白性を表す述語の場合、「は」も「が」

も付く。

③【疑問節に「は」より「が」の方が現れやすい場合】(例 (74c))

主文は「問題だ」「重要だ」など対象の重要性を表す述語の場合、表3のように「が」の方が現れやすい。

【表3：疑問節の「は」「が」】(BCCWJ全メディア・ジャンルによる)

疑問節 主文	かは	かが	かφ
重要だ <sup>44</sup>	19 (10.0%)	168 (88.4%)	3 (1.6%)
問題だ	7 (5.0%)	123 (87.2%)	11 (7.8%)

従属節が「は」で主題化されるのは②③の述語の場合であるが、③の場合は重要性を強調する「が」の用法が多くなっている。こうした「が」は属性叙述文においては有標と考えられ、特立の意味を表す。

5. で見た引用節の場合に「思わなかった」のような思考動詞の否定が意外性の評価に繋がる意味をもつと同様に、疑問節の場合も「わからない」という認識動詞の否定が不確実・不明白という評価に繋がっている。引用節と疑問節いずれの場合も、複文の類型において動きと状態の接点は、「思わない」「わからない」といった認識を表す動詞述語の否定である。引用節と疑問節の主文の述語と、文の類型を示したのが次の表である。

【表4：引用節と疑問節の主文の述語の類型】

類型	引用節	疑問節
動き	思考・伝達動詞等 「思う」「考える」	知識の獲得を表す動詞等 「質問する」「伝える」
	思考動詞否定過去 「思わなかった」	認識動詞否定 「わからない」
状態	意外性 「意外だ」 「驚きだ」	不確実性 「不明だ」 「問題だ」
属性		

## 7. 条件節の主題化

### 7. 1 潜在的な主題化の構造的・意味的条件

潜在的な主題化は「は」を伴わない主題化であり、本研究では主文の述語が評価を表す述語である場合にのみ用いることとする。本研究ではこれらの述語が複文の類型において重要な役割をもつことを指摘し、事態評価の述語と呼び、個々の述語がどのような従属節をとるかを第9章4. で明らかにした。

ここでは、潜在的な主題化のみのある条件節について論じる前に、事態評価の述語が潜在的な主題化を引き起こす構造的・意味的条件を見ておく。

#### 【構造的条件】

事態評価の述語はその評価の対象となる事態を示すものであるが、この事態は評価の対象であると同時に、評価を齎した原因・理由となる事態でもある。Sweetser(1990)は happyのような語を、その内容に明示的に言及しないで否定することは不可能であると述べている。「幸せだ」「安心する」「難しい」といった事態評価の述語の語彙的な意味には、その評価を齎した内容—原因・理由となる事態—があることが含意されていると言えるだろう。

<sup>44</sup> 検索に当たっては「重要だ」は名詞用法がないので「かが重要」の形で、「問題だ」は名詞用法があるので「かが問題だ」「かが問題で」の2種で調べている。

そのため、これらの述語を用いた際は、その原因・理由に言及する必要性が高く、否定にするとその前提となる内容への言及の必要性が高くなる。

(75) 「あなた、幸せじゃないんじゃないの？わたしたちのあいだがうまく行ってなくて？」  
(『城壁に手をかけた男』BCCWJ)

上の例では、「あなた、幸せじゃないんじゃないの？」と評価の内容を明示せず、後でその理由を説明している。このように、評価の対象となる内容は、原因・理由となるべき事態であり、従属節の階層構造では事態レベルの述語を含むことができる階層以上の従属節であることが予測される。

事態レベルの述語を含むことができる従属節は階層構造のB類とC類を指すが、「すると」「したら」「して」のように形態的にはテンスを含まなくてもよく、大きな線引きはA類とB類の間にある<sup>45</sup>。南(1974)のA類の形成する複文は主文も従属節も動きであるが、A類の従属節は主文の事態評価の述語の対象とは解釈されない。たとえば、以下の例でA類の「ながら」節は「安心する」の同時動作として「食べる(こと)」を示しているが、「安心する」対象、あるいは「安心する」理由である事態は、その前の条件節の「あなたの料理を食べる(こと)」である。

(76) 一人の食べ手として言うと、あなたの料理を食べると、食べながら安心するんです。  
(『ル・シェフ』BCCWJ)

事態評価の述語の評価の対象となる従属節は、事態を含むことのできるB類以上の条件節や理由節、時間節、中止節(時間・理由を表すもの)が中心となるが、C類の従属節が事態評価の述語の評価の対象と解釈されることもある。次の例はC類の並列節「し」が「安心です」の対象または理由と解釈される例である。

(77) a. 市販の材料を参考にして、アレンジを加えると自分流になります。買った物より安全ですし、安心です。  
(Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ)  
b. 買った物より安全なのは、安心です。

### 【意味的条件】

独立度の高い従属節がすべて事態評価の述語の評価の対象として解釈されるわけではない。C類の逆説を表す等位節(例(78a))は、逆説の論理関係を保ったまま事態評価の述語の感情や評価の対象として解釈されることは難しい。

(78) a. ディーラーでの車検は料金は高めですが、安心です。(Yahoo!知恵袋 2005-BCCWJ)  
b. \*料金は高めなのは、安心です。

以上から、事態評価の述語のとり従属節は、評価の対象あるいは根拠となり得る事態レベル以上のものであることが第一の条件であり、従属節の階層構造におけるB類の従属節である中止節や条件節が中心となっているが、C類でも常識的推論や時間的継起による順当な因果関係として解釈できるものは可能であると言える。

ただし、主文が事態評価の述語であっても、常に従属節がその対象を表すというわけではない。たとえば、C類のうち引用節には、主文が事態評価の述語で従属節がその評価の対象あるいは理由を表すもの(例(79))と表さないもの(例(80))がある。

(79) a. 腫そのものの艶は少しも変わっていないのだと安心したものの、……  
(『がんと闘う・がんから学ぶ・がんと生きる』BCCWJ)

b. 腫そのものの艶は少しも変わっていないのに安心した。

(80) a. 先週、子供達が風邪をひき、保育所をお休みしましたが復活！これは良かったと安心したのもつかの間、……。  
(Yahoo!ブログ 2008-BCCWJ)

b. \*これは良かったのに安心した。

<sup>45</sup>従属節が事態を含むかという観点には有田(2007)の時制節性とも関わるが、事態評価の述語の評価の対象となり得るか否かには、A類とB類の違い、すなわち時制節か非時制節かが重要な区分であると考えられる。



例 (80a) は、引用節が評価の理由となっておらず、評価の対象と解釈されない。

また、引用節は「とは」の形で、意外性を表す主文の述語の理由や対象を表す例 (81) のような用法があるが、「とは」と意外性を表す述語の関係はかなり固定的で、他の従属節との選択が問題になることは少ないと考えられる。

(81) a. なにごととも「洋風」の印象が強い神戸に、常盤花壇のような日本料理の名店があったとは意外だが、…… (『花隈啓蔵』BCCWJ)

b. 神戸に常盤花壇のような日本料理の名店があったのは意外だ。

以上のように、事態評価を表す述語が潜在的主題化を引き起こす意味的な条件には、順当な因果関係を表すということがあるが、連用節と「の/こと」節のような名詞節が意味的に近づくのは、事態評価の述語が因果関係という時間的な変化の意味を含むものであり、因果関係の「因」を表す連用節と「果」を表す名詞節がいずれも評価の対象となり得るためであると考えられる。たとえば、「安心する」「幸せだ」などの動きや状態は、何らかの理由や対象となる事態を想定させ、原因・理由とその結果という 2 つの段階を意味的に含んでいる。反対に、「大きい」「好きだ」のような「特性形容詞」(八亀裕美, 2003) は、意味的に因果関係を含んでおらず、事態評価の述語とはなりにくい。

ここでは事態評価の述語が潜在的主題化を引き起こす条件について、構造的な条件と意味的な条件を述べた。構造的な条件は、従属節が事態を表せる B 類以上のものであること、意味的な条件は 2 つあり、まず、逆説のような常識的推論とは相反する因果関係を表す従属節は事態評価の述語の評価の対象とはならないこと、2 つ目は、事態評価の述語が因果関係という時間的な変化の意味を含むことである。

以下では、顕在的主題化のない条件節を例として潜在的主題化について詳しく考察する。

## 7. 2 「なら」節の主題化

「と」「ば」「たら」「なら」の各形式による条件的用法<sup>46</sup>は、主文が事態評価の述語で、条件節がその理由を表している場合に主題的に解釈されることがある。以下の例では、下線部の条件節はいずれも波線部の連体節または名詞節に、近い意味で置き換えられる。

(82) a. 必要とされているのがわかると、うれしいものです。 (『名医名患』BCCWJ)  
~必要とされているのがわかるのは、うれしいものです。

b. われわれユーザーが、いろいろな知能を付け加えて行くことができれば素晴らしいと思うが、…… (『ロボットと人工知能』BCCWJ)

~われわれユーザーが……できるのは素晴らしいと思うが、……

c. これからは、個人でゴルフに行くとき、誘ってくれる人がいたら、それだけでも本当にありがたいと思わなくてはいけなくなるだろう。

(『定年後、夫婦で楽しく生きるコツ』BCCWJ)

~……誘ってくれる人がいるのは、それだけでも本当にありがたいと……

d. 人それぞれ、自分自身の「物差し」でブランドを評価するなら素敵なことだ  
と思う。 (『それでもブランド品を買いますか?』BCCWJ)

~……自分自身の「物差し」でブランド品を評価するのは素敵なことだ……

潜在的主題化の生じる意味的な要件の 1 つとして、条件節の事態が主文の評価を引き起こす原因・理由であることが挙げられる。また、構造的には、潜在的主題化の生じる条件節はどの階層に属するのだろうか。

条件節「なら」には南の階層構造の B 類と C 類のものがあることは、網浜信乃 (1990) で指摘されている。下の例 (83a) の下線部が B 類、(83b) の下線部が C 類である。

(83) a. 国の圧力に耐えかねた金正日が暴発し、もしもこの最終兵器が行使されたなら、

46 「条件的用法」は前田 (2009) による分類で国立国語研究所 (1964) の「周辺の用法」などをまとめた「非条件的用法」と区別されている。



朝鮮半島は一日にして地獄絵図と化す。 (『サンデー毎日』2003/2/2BCCWJ)

- b. オランダ国内でさえこんなにひどいのなら、もっと遠くの、野蛮な地方へ送られたら、いったいどんなことになるでしょう。 (『アンネの日記』BCCWJ)

こうした2種の条件節は、いずれも名詞節+「は」で置き換えられるであろうか。以下の例(84a)(84b)の下線部はそれぞれB類、C類の「なら」節で、主文にそれぞれ「ありがたい」「大切なこと(だ)」という事態評価の述語を含む。

- (84) a. もしもその方が行ってくれるなら ありがたいのだが、どうだ、行ってはくれまいか? (『金瓶梅』BCCWJ)

~?……その方が行ってくれるのはありがたいのだが、……

- b. 博士さんがそれほどまで決心したことなら、よほど大切なことなのね。 (『ひょっこりひょうたん島』BCCWJ)

~博士さんがそれほどまでに決心したのは、よほど大切なことなのね。

例(84a)のB類の「なら」節は名詞節にすると仮定の意味が失われてしまうので、置換するのが難しいが、例(83b)の「なら」節は事実的であり、名詞節にしても事実性は変わらない。条件節のうちC類の「なら」節は常に事実的で名詞節に置き換えられるが、B類の「なら」節は例(85)のように事実性が高い場合に名詞節に置き換えられる。

- (85) 「このパンはうまいし、よくできてるじゃないか」「気に入ってくれたならうれしいね」 (『図説夜の中世史』BCCWJ)

~気に入ってくれたのはうれしいね。

### 7. 3 条件節と主題

序章で触れたように、接続や条件の意味的な解釈のレベルの問題は、認知意味論の分野においても議論されている。Sweetser(1990)及び中右(1994)は、英語の条件文にも3つの意味的なレベルがあることを指摘している。

Sweetser(1990)によれば、以下の例(86a)(86b)(86c)は、順に「内容条件文(content conditionals)」「認識条件文(epistemic conditionals)」「言語行為条件文(speech-act conditionals)」である。

- (86) a. If Mary goes, John will go. (Sweetser,1990,p.114(2))  
(ジョンは、メアリーが行けば行く。) (澤田治美訳, 2000)

- b. If John went to that party, (then) he was trying to infuriate Miriam. (同上,p.116(7))  
(ジョンがそのパーティに行くとすれば、(そうだとすれば)それはミリアムを怒らせようとしたのだ。) (同上)

- c. If I may say so, that's a crazy idea. (同上,p.118(8))  
(こう言うてはなんですが、その考えは馬鹿げていますよ。) (同上)

この分類は、南による階層構造と重なる部分がある。たとえば、例(86a)の内容条件文の条件節は南のB類、例(86b)の言語行為条件文の条件節はC類の判断の根拠であると考えられ、7. 2で示した「なら」の2種に相当する。

Sweetser(1990)は、Haiman(1978)の提案した条件節を主題<sup>47</sup>(topic)として捉える議論を取り上げ、英語の既知条件文(given conditionals; 前件の内容が前提条件となっている条件文)がすべて認識条件文か言語行為条件文であるとしている。すなわち、既知条件文は南のC類以上の独立度の高い節であるということである。

条件節を主題と見ることの利点は、一部の条件文のもつ主題的性質が他の従属節と関係付けられ、機能的な分析で解釈することが可能になることである。しかしながら、Sweetserが指摘するように、既知性は条件文専用の意味ではなく文脈に依存したものであり、それが条件文のプロトタイプであるとは言えない。内容条件文における仮定性は、既知性とは

47 澤田(2000)の翻訳では「話題」となっているが、ここでは統一して主題を用いる。もちろん概念としての相違はあるので本文で論じている。

相反する概念であり、内容条件文を機能的にどう分析するのも疑問が残る。

本研究では、条件節にB類とC類のものが存在することを認めるが、B類の条件節の場合にも主文が事態評価の述語であれば、潜在的主題化が起こることを主張する。例(82)の「と」「ば」「たら」「なら」を用いた条件節はいずれもB類であり、Sweetserの言う内容条件文を形成するが、これらの条件節はいずれも名詞節+「は」で置換することが可能である。これは、主文の事態評価の述語が対象を要求するためであり、属性叙述文における主題が文の内部の要求で現れることを意味している。益岡(2004)では単文における属性叙述文の主題を「文内主題」、堀川(2012)は形容詞文の主語に相当すると解釈可能な成分を「狭義主題」と称しているが、B類の条件節の主題は、複文における文内主題、あるいは狭義主題と言えるだろう。

最後に、発話態度や知識の獲得といった、機能的なはたらきをする条件節の用法について述べる。

まず、Sweetserの言語行為条件文の条件節についてであるが、これは中右(1994)では「発話態度の条件節」に相当し、いくつかの下位分類されている。日本語では「言うなれば」「そう言えば」「よろしかったら」などの文副詞的な条件節がこれに当たる。日本語の条件節に関する研究では、これまで発話態度といった機能的な分類はあまりされておらず、本研究でもこうした条件節の位置付けは課題として残っている。

次に、条件節の述語が「見る」「聞く」のような認識を表す用法がある。次の例の下線部は主文の評価の対象を認識することを示しており、認識を表す動詞を省略し、波線部の名詞節+「は」に置き換えることができる。

(87) さらに噂を聞きつけた好事家の後白河院が度々泰親を宮中に呼び、綺譚伝を請うていると聞けば、面白い筈もない。 (『陰陽師鬼一法眼』BCCWJ)

～……後白河院が……綺譚伝を請うているのは、面白い筈もない。

これは条件節だけでなく「て」節でも多く見られる用法である。

(88) とにかく、あなたに殺意がなかったと知って、安心したわ。

(『網にかかった悪夢』BCCWJ)

～……あなたに殺意がなかったの(に)は、安心したわ。

条件節や「て」節などの連用節が省略されて名詞節+「は」に置換されるということは、因果という連用関係において因果を介する認識の意味が希薄化、形式化すると、対象としての事態とそれに対する評価という主題—解説の構造に近づく。これは、事態評価の述語による複文が、複文の類型において意味的にも構文的にも事象叙述文と属性叙述文の中間に位置することを示すものである。

## 7. 4 連体と連用の対応

事態評価の述語が事象叙述文と属性叙述文の中間に位置し、その従属節が連用節と名詞節で意味的に近くなっていることから、以下では、連用と連体の意味の接近する言語現象との関わりについて、奥津敬一郎(1997)(2007)を参考にしながら議論を進めたい<sup>48</sup>。

奥津(1997)は、以下のように「連体と連用の対応」を定義し、両者の意味が接近する8種の場合について考察した。

(89) 奥津(1997)

ある文があり、その中の名詞句が統語上・意味上主たる名詞と、従たる成分(連体成分またはこれに準ずる成分)から成るとき、この従たる成分が連用成分になっても、二つの文の知的意味が同じである現象を連体と連用の対応とする。

このような観点は、連体節と名詞節という異なりはあるものの、本研究の潜在的主題化において連用節が名詞節に置換可能な現象と似たところがある。奥津(2007)の挙げる7種の場合のうち、本研究で扱う潜在的主題化の現象に最も近いと思われるのが、「一般述語

<sup>48</sup> 堀畑正臣氏の御指摘による。

文」(例(90))「制限的連体と条件構文」(例(91))とされている例である。

(90) 連体：裸のジョンが 生の肉を 食べている。  
連用：ジョンが 裸で 肉を 生で 食べている。 奥津(2007)

(91) 連体：酒を飲んだ ドライバーは 運転をしてはいけない。  
連用：ドライバーは 酒を飲んだら 運転をしてはいけない。 奥津(2007)

このうち、例(90)のような非限定的名詞修飾節(日本語記述文法研究会, 2008)で連体と連用の対応が生じるのは、奥津(2007)で引用されているWilliams(1980)の英語についての「述語構造(predicate structure)」と基本的には同じ意味解釈の原理によるもので、物・人を表す名詞を修飾する部分が連用と連体の形をとるといふ、名詞を修飾する構文の問題である。

(92) a. **John ate the meat nude.**  
b. **John ate the meat raw.** (Williams,1980)

上の例を見ると、「nude(裸で)」「raw(生で)」という修飾成分は、その意味に応じて主語や目的語の位置に関わらず被修飾名詞を選ぶ。非限定的名詞修飾節の連体と連用の対応は名詞修飾の意味解釈の問題であり、主文の動詞には制限がなく、基本的に主文はどのような述語でも可能である。次の例は、主文が動き(例(93))、状態(例(94))、属性(例(95))の場合の連体と連用の対応である。

(93) a. 食事を終えた鈴木は、足早に社に戻った。  
b. 鈴木は食事を終えて、足早に社に戻った。(日本語記述文法研究会, 2008)  
(94) a. 建築設計の仕事をしていた父は、神社、お寺など古い建物を見に行くことが多く、私もついていきました。(『北海道新聞』2004/10/23BCCWJ)  
b. 父は、建築設計の仕事をしていたので、神社、お寺など古い建物を見に行くことが多く、私もついていきました。  
(95) a. 支店長に抜擢され、銀行の経営をまかされた父は、実に個性的な上司だったらしい。(『未来は長く続く』BCCWJ)  
b. 父は、支店長に抜擢され、銀行の経営をまかされたが、実に個性的な上司だったらしい。

一方、例(91)のような限定的名詞修飾の場合、連用と連体の対応が生じるのは、条件による限定の場合であり、理由や時間の意味の場合は非限定的名詞修飾節に解釈される。以下の例の「塩辛い漬物」は、対応する連用が「漬物は塩辛いから健康によくない」という非限定的名詞修飾の解釈(例(96))と、「漬物は塩辛いと健康によくない」という限定的名詞修飾の解釈(例(97))が成り立つ。

(96) 連体：塩辛い 漬物は 健康に よくない。  
連用：漬物は 塩辛いから 健康に よくない。(奥津, 2007)

(97) 連用：漬物は 塩辛いと 健康によくない。

限定と非限定のこうした違いは存在するものの、例(90)(91)(96)の文はいずれも「ジョン」「ドライバー」「漬物」という名詞について述べる文である。

本研究における潜在的な主題化の生じる従属節と主文の事態も条件や理由といった因果関係を中心としているが、あくまでも事態に対して述べる複文である点で、奥津の言う連用と連体の対応とは性質を異にしている。下の例で例(98a)が非限定的名詞修飾節による連用と連体の対応、例(98b)が限定的名詞修飾節による連用と連体の対応、例(98c)が本研究で扱った潜在的な主題化である。

(98) a. 田中は家を買って幸せだ。⇔ 家を買った田中は幸せだ。  
b. 人は家を買ったら幸せだ。⇔ 家を買った人は幸せだ。  
c. 家を買ったら幸せだ。⇔ 家を買えるのは幸せだ。

例(96a)は「田中は幸せだ」という「田中」を評価する文、例(98b)は「人は幸せだ」という「人」を評価する文であるのに対し、例(96b)は「家を買える(こと)」という事態を評価する文である。

潜在的主題化において連用節が名詞節に置換できるのは、こうした名詞修飾節の場合とは異なり、主文の述語が事態評価の述語に限られるので、奥津の挙げた連体と連用の対応の中には含まれないと考えられる。しかしながら、連体と連用の対応の原理をより広く考えるとき、名詞節と連体節の意味的な違いと接近については示唆するところが大きい。

ここでは、条件節の潜在的主題化について、認知意味論の条件文をめぐる議論を参考にしながら、潜在的主題化が文内主題という文の類型により要求されるものであることを示した。さらに、連用節と名詞節が置換できるという潜在的主題化の意味解釈の原理について、名詞修飾節における連体と連用の対応と比較しながら述べた。

## 8. まとめ

この章では、従属節の主題化を規定し、顕在的主題化と潜在的主題化について述べた後、時間節、目的節、「て」節、引用節、疑問節、条件節について、それぞれの従属節の主題化を考察した。

主題をめぐる見方には、構造を考える観点と、談話的なレベルの観点がある。本研究では、文の類型と主題の性質とを関連付けた見方を取り入れ、主題及び主題化を定義した。

さらに、顕在的・潜在的主題化がどの連用節で見られるかを考察し、以下のようにまとめた。

従属節		主題化	顕在的 主題化	潜在的 主題化
連用節	肯定否定階層節	「ため(に)」	○	×
	テンス階層節	「とき」	○	○
		「たら」(条件)	×	○
		「なら」	×	○
	対事的モダリティ階層節	「て」(理由)	○	○
		「から」	×	○
「ので」		×	○	
補足節	引用節	「と」	○	×
	疑問節	「か」	○	○

さらに、主題化の見られるこれらの連用節について、それぞれの主題化の用例を挙げ、主文の特徴を中心に考察した。最後に条件節と主題に関する認知意味論における議論に言及し、潜在的主題化という意味解釈が生じる理由についても考察した。そして、潜在的主題化が文内主語という文の類型により要求されるものであることを示し、連用節と名詞節が置換できるという潜在的主題化の意味解釈の原理について、名詞修飾節における連体と連用の対応と比較しながら述べた。

# 第11章 結論と今後の課題

1. 結論
2. 言語類型論・認知意味論への示唆
3. 日本語教育における活用
4. 今後の課題

## 1. 結論

本研究は、日本語の複文における従属節の選択と複文の類型に関わる、従属節の主題化という現象について考察を進めた。その結果、いわゆる主題卓越言語である日本語の複文は単文同様に、動きから属性に至る時間的安定性 (time stability) のスケールの上に位置付けられ、状態を中心とした中間的な位置には、連用節でありながら意味的に主題としてはたらく「事態評価の述語」による複文と、主題を明示した「は」の付く従属節による複文が存在し、連体と連用の中間的な位置にあることを示した。

本研究が序章で掲げた目標は、①【従属節の独立度と文の種類の統合】②【従属節の主題化と事態評価の述語に関する規則性の発見と記述】③【従属節選択における有効な概念の提出】の3つであった。以下では、この目標に沿って、本研究の結論を述べたい。

まず、①【従属節の独立度と文の種類の統合】については、従属節の独立度あるいは階層構造という観点と文の種類という観点が、3つの点において相互に関連していることを示した。1つは、複文の種類は従属節の階層が低い場合は主文が、高い階層では主文と従属節それぞれにより決まることである。2つ目は、事態評価の述語の評価の対象となる従属節は南 (1974) のB類以上の独立度をもつことである。3つ目は、B類とC類の意味的な違いには事態の一般性 (個別性) という時間的安定性が大きく関与しており、時間的安定性は文の種類のスケールを形成していることから、節の独立度と類型は、時間的安定性を介して意味的に深く関わっていると考えられる。3つ目の点については、以下の2.において認知意味論との関わりから詳述する。

次に、②【従属節の主題化と事態評価の述語に関する規則性の発見と記述】については、従来の単文研究で進められてきた文の種類という観点を複文において考え、主文が「事態評価の述語」である場合に、連用節や引用節、疑問節は、その従属節自体が主題的に解釈される (潜在的な主題化) ことを指摘し、いくつかの述語について具体的にどのような従属節が現れ、複数の従属節が現れる場合は相互にどのような違いがあるのかを考察した。その結果、事態評価の述語がどのような従属節をとるかは、複文の種類における位置と従属節の独立度という構造的な要因と、個々の述語のもつ語彙的な特徴という意味的な要因によることを示した。

一方、「は」の付加した顕在的主題化においては、主文の述語のアスペクトや語彙などに制約があり、主文は典型的な動きを述べる文とは異なっている。顕在的主題化は潜在的な主題化と同様に、複文の種類において状態・属性を基本として位置付けられる。

最後に、③【従属節選択における有効な概念の提出】については、上述の「従属節の主題化」、「事態評価の述語」、そして各従属節の意味的特徴として事実性 (個別性) をはじめとする意味概念を提出した。具体的には、中国語話者を対象とした調査のデータを中心に、従属節に関する誤用を、選択形式の近さから見て概観したあと、誤用の多い「て」節と時間節に関し、具体的な誤用例を考察した。

「て」節の誤用は、文の続け方に関するもの、論理関係に関するもの、従属節相互の選択に関するものに分けられ、文の続け方や論理関係に関する誤用は、中国語からの影響も大きいと考えられることを述べた。また、従属節相互の選択に関しては、主文の述語が事態評価の述語の場合、個々の述語がどのような従属節をとり、他の形式とどう違うのか、

細かな記述が必要であることを指摘した。

一方、時間節の誤用は、助詞の有無に関するもの、条件節に関するもの、時間節相互の選択に関するものに分けられる。なかでも時間的前後関係を表す際、時間を表す従属節の選択で重要な基準となるのは、時間的前後関係の即時性（段階性）であり、誤用の説明には副詞なども含めた考察や、中国語との対照も効果的であると考えられることを指摘した。

以上の3つの結論のうち、日本語研究において新たな知見であると思われるのは①と②、日本語教育に有用であると思われるのは③である。

①については、従来別々に論じられてきた、従属節の階層構造と文の類型という2つの観点の関わりを指摘したこと、②については文の類型を複文に拡張して考え、その中間的な位置に事態評価の述語を設定したことである。感情表現が複数の従属節をとり主題的にも解釈されることは田中（2000）でも指摘があるが、本研究ではこれらの述語の構文を複文の類型上に位置付け、その従属節のとり方には個々の語彙の特徴のほか、品詞など類型上の位置付けが関係していることを明らかにした。

## 2. 言語類型論・認知意味論への示唆

以上のような本研究の結論は、言語類型論及び認知意味論に示唆するところもある。

「は」の付いた従属節や事態評価の述語の対象として示される従属節による複文は、連用節であっても「主題—解説」構造をとるものであると考えられる。とくに潜在的主題化における事態評価の述語である心理動詞が属性叙述を構成することは小竹・酒井（2011）でも考察されており、これらの述語が文の類型において状態を中心に分布していることは明らかである。このことは、日本語が連用節をとる複文においても意味的に「主題—解説」構造をとることを示しており、益岡（2008）による主語と主題に関する言語類型の観点からの主張—日本語が属性叙述を基盤とする言語である—を裏付けるものと思われる。

また、連用節が主題的に解釈されるという接続の意味解釈の問題は、従属節の階層構造という構造的な問題がより認知的な意味解釈とどう関わるかという問題も含んでいる。発話に内容、認識、言語行為の3つの領域を設定した Sweetser (1990)は、この領域の区分がモデルティ、条件、接続における意味解釈に適応できることを主張するものであるが、内容と認識の領域は、南の階層構造のB類とC類に重なる部分がある。主題は両者においてそれぞれ認識レベルあるいはC類に属すると考えられる。序章で挙げた以下の例(1)の「て」節は内容レベルあるいはB類、例(2)の名詞節+「は」による主題は認識レベルあるいはC類ということになるであろう。

(1) 自分の家一軒が持てて、幸せなことだと思う。

(2) 自分の家が持てるのは、幸せなことだと思う。

例(1)と(2)の従属節の事態には、事態の個別性（一般性）といった時間的安定性が大きく関与していると考えられる。心理動詞を述語とする属性文の成立条件を考察した小竹・酒井（2011）は、「心理事象が恒常的に成立すると話し手が認識していること」という条件を挙げているが、事態の意味に恒常性や一般性といった時間的限定性が認識された場合、主文の述語が同じであっても、属する複文の類型は動きから状態へと移行し、内容領域の従属節による事象叙述とは異なってくるものと考えられる。

## 3. 日本語教育における活用

次に、本研究で明らかになったことが日本語教育においてどのように活用できるかについて、具体的に述べてみたい。

1つ目は、中級以上のレベルでの接続表現や感情表現の文法説明に関して、より細かく、系統的な説明を与えることが可能になるということである。例(1)の文は台湾の大学日本語学科3年生によるものであるが、こうした複文レベルの接続の異同が問題になるのは、日本語教育においても他の外国語教育においても、中級以上のレベルの学習者ということになるであろう。

本研究で扱った感情表現の従属節の取り方をまとめた文法書は私見ではまだ見当たらない。これまでの従属節に関する説明はおそらく、理由の「て」節と「から」節の相違や、条件の「たら」と「と」の相違といった類義表現間の選択に関する意味用法の説明が多く、個々の述語がどのような従属節を取り得るかについての説明が欠けていたと思われる。とくに本研究で示した個々の語彙がどのような従属節を取ることが多いかというデータは、個々の語彙のコロケーションに関する貴重な情報を提供するもので、学習者や教師にとって有益な情報となると思われる。また、従来「は」の付いた従属節に関する説明も、それぞれの意味的な分類（たとえば目的節の「ために」と「ためには」の違い）の中で行われているが、「は」の付く従属節全体をまとめ、その共通する用法について言及したものも見当たらない。

2つ目は、接続表現や感情表現に関する、学習者の母語を考慮した文法説明を可能にするということである。野田尚志（2005）はコミュニケーションのための日本語教育文法についての提言の中で、一律の文法から学習者ごとの文法へシフトすることを提言し、その1つとして学習者の母語を考慮することを挙げている。現在でも日本国内の日本語教育機関では教室に多様な母語の学習者がいるという理由で特定の学習者の母語を用いないことが多いようである。しかしながら、海外においては文法の授業などは学習者の母語で行う場合が多く、それ以外の授業においても暗黙のうちに学習者の母語を考慮するのが前提となっている。

国内でも日本語能力試験を受ける上級の学生が、母語の対訳の付いた参考書をわざわざ母国から取り寄せて学習している光景もよく見られる。母語への考慮は初級から上級までそれぞれのレベルに応じた必要性があり、上級では抽象語彙や書き言葉が増加し、文法・意味をより確実に理解するために母語使用の必要性も高まる。

学習者の母語への考慮は教師の意識の問題でもあるが、日本国内においても可能な限り学習者の母語と日本語の違う部分に焦点を当てて教えたり、文法説明や例文に学習者の母語の対訳を付けることは、効率的で理解しやすい方法であろう。こうした学習者の母語を考慮した文法説明の実現のためには、日本語教育と日本語学双方の意識化が必要であり、本研究で対訳作文を資料とし、多くの資料に中国語の対訳を用いたのも、学習者の母語を考慮した文法を常に意識し、教育面における活用にも貢献するためである。

以上のように、本研究は複文に関する文法説明の精密化と系統化、さらに母語を考慮した文法説明の促進と意識化といった2つの点から、日本語教育に貢献できるものとする。

#### 4. 今後の課題

最後に、今後の課題を述べて本稿を閉じることとしたい。

残された問題は数多くあるが、まず、ここでの事態評価の述語の記述がごく一部であったことが挙げられる。今後はより多くの語彙についての調査が必要である。

次に、事態評価の述語の用法と従属節の主題化に関する中国語の考察を行えなかったことが挙げられる。個々の語彙の従属節のとり方が日本語と中国語で異なれば、それは対照研究の視点からも、教育文法の視点からも意義が大きいであろう。

また、これと関係して、従属節の主題化について、様々な言語での考察も残されている。文の類型を様々な言語により考察していくことにより、複文と主題に関し、言語類型論などに新たな知見を加えたいと考える。

他にも多くの問題が残されているが、今後の課題としたい。

## おわりに

従属節に関する修士論文を提出してから20年以上の歳月が流れました。今回博士論文のテーマを決める際は、時間節を中心に分析を進めようと考えていましたが、論を進めるうちに修士論文のときの問題に戻ってきてしまいました。文字通りの拙稿ではありますが、自分なりに長い間解けなかった問題の一応の答えを得た喜びがあります。

まずは、本論文の執筆を御指導いただきました福澤清先生に心から御礼申し上げます。先生には常に他言語を意識した視点と、具体的な言語現象を丁寧に解釈することの大切さを教えていただきました。先生の御指導なくしては本論文の提出には至りませんでした。

また、様々な御専門の見地から多くの貴重な御助言を賜りました、隈元貞弘先生、坂元昌樹先生、千島英一先生、千田俊太郎先生、堀畑正臣先生に心から感謝申し上げます。導かれた新たな視界の豊かさに充分応えられたとは申せませんが、今後も続けて解き続けるべき課題をいくつも与えていただきました。

深圳大学での資料収集に御協力いただきました中国深圳大学の魏浦嘉先生、王崗先生、そして、作文とアンケートに御協力いただきました深圳大学日本語学科の学生さん達、熊本大学の留学生の皆様にも御礼申し上げます。

最後に、資料収集に当たり研究助成をいただきました、勤務校の熊本学園大学に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。



## 参考文献

- 跡上裕子 (2012) 「中国語母語お話者の日本語作文における接続表現の不使用について」2012年度日本語教育学会九州・沖縄地区研究集会 研究発表資料
- 網浜信乃 (1990) 「条件節と理由節—ナラとカラの対比を中心に—」『待兼山論叢 日本学篇』24号, 大阪大学, pp. 19-38
- 有田節子 (1995) 「日本語条件文研究の変遷」『日本語の条件表現』(益岡隆志編), pp. 225-278, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2006a) 「条件表現研究の導入」『条件表現の対照』益岡隆志編, pp. 3-28, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2006b) 「時制性と日英語の条件文」『条件表現の対照』益岡隆志編, pp. 127-150, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2007) 『日本語条件文と時制節性』くろしお出版
- 石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』岩波書店
- 市川保子 (1997) 『日本語誤用例小辞典』pp. 273-450, 凡人社
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語・上』大修館書店
- 井上優 (2001) 「日本語研究と対照研究」『日本語文法』1-1, pp. 53-69, 日本語文法学会
- \_\_\_\_\_ (2002) 「『言語の対照研究』の役割と意義」国立国語研究所編集発行『日本語と外国語の対照研究X 対照研究と日本語教育』pp. 3-20, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2003a) 『日本語教師のための対象研究入門』井上優 (編) 国立国語研究所
- \_\_\_\_\_ (2003b) 「文接続の比較対照—日本語と中国語—」『言語』32-3, pp. 54-59
- \_\_\_\_\_ (2005) 「学習者の母語を考慮した日本語教育文法」『コミュニケーションのための日本語教育文法』野田尚史編, pp. 83-102, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2006) 「言語データとしての作文対訳データベース」『作文対訳データベースの多様な利用のために—日本語教育のための言語資源及び学習内容に関する調査研究成果報告書』pp. 43-52, 国立国語研究所
- 岩男考哲 (2008) 「叙述類型研究史 (国内編)」『叙述類型論』くろしお出版
- 宇佐美洋 (2006) 「『作文対訳データベース』作成の目的とその多様な利用について」『作文対訳データベースの多様な利用のために』『日本語教育のための言語資源及び学習内容に関する調査研究』成果報告書, pp. 9-42, 国立国語研究所
- 遠藤織江 (1984) 「～からは/～からには」『日本語学』3-10, pp. 42-51
- 遠藤織江他 (1994) 『使い方の分かる類語例解辞典』小学館
- 王 崗 (2001) 「『たら』と『とき』・『てから』との関連点と相違点—中国語との対照を兼ねて—」『国語学会 2001 年度秋季大会研究発表会発表要旨』
- \_\_\_\_\_ (2003) 「時を表す複文構造に関する日本語と中国語の対照研究—『たら・とき・てから』と『時候・以后』」『日中言語対照研究論集』(5), pp. 137-146
- 奥田靖雄 (1986) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文—その体系性をめぐって—」『教育国語』87, pp. 2-19, むぎ書房
- \_\_\_\_\_ (1988a) 「文の意味的なタイプ—その対象的な内容とモーダルな意味とのからみあい—」『教育国語』92, pp. 14-28, むぎ書房
- \_\_\_\_\_ (1988b) 「時間の表現 (1)」『教育国語』94, pp. 2-17
- \_\_\_\_\_ (1988c) 「時間の表現 (2)」『教育国語』95, pp. 28-41
- \_\_\_\_\_ (1996) 「文「の/こと」その分類をめぐって—」『教育国語』2-22, pp. 2-14
- 奥津敬一郎 (1997) 「連体即連用?」『日本語学』16-9, pp. 92-98
- \_\_\_\_\_ (2007) 『連体即連用?—日本語の基本構造と諸相』ひつじ書房
- 影山太郎 (2008) 「属性叙述と語形成」『叙述類型論』益岡隆志編, pp. 21-43, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136, pp. 1-34
- 川越菜穂子 (2006) 「輔文標識「の」「こと」「もの」の使い分けについて: 韓国語を母語と

- する日本語学習者の立場から」『人間文化学部研究年報』 8, pp. 29-44
- 川端善明 (1976) 「用言」『講座日本語 6 文法 I』 pp. 169-217, 岩波書店
- 工藤眞由美 (1989) 「現代日本語の従属文のテンスとアスペクト」『横浜国立大学人文紀要』  
第二類語学・文学第 36 輯, pp. 1-24, 横浜国立大学
- \_\_\_\_\_ (1992) 「現代日本語の時間の従属複文」『横浜国立大学人文紀要』第二類語学・  
文学第 36 輯, pp. 169-192, 横浜国立大学
- \_\_\_\_\_ (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 ひ  
つじ書房
- \_\_\_\_\_ (2002) 「現象と本質—方言の文法と標準語の文法—」『日本語文法』 2-2,  
pp. 46-61
- \_\_\_\_\_ (2012) 「時間的限定性という観点が提起するもの」『属性叙述の世界』 影山太  
郎編, pp. 143-176, くろしお出版
- 國廣哲彌 (1982) 「タメニ・ヨウニ」國廣哲彌編『ことばの意味 3』, pp. 104-111, 平凡社
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店
- 言語学研究会・構文論グループ (1988a) 「時間・状況を表すつきそい・あわせ文 (1)」『教  
育国語』 92, pp. 2-13, むぎ書房
- 言語学研究会・構文論グループ (1988b) 「時間・状況を表すつきそい・あわせ文 (2)」『教  
育国語』 93, pp. 37-46, むぎ書房
- 言語学研究会・構文論グループ (1993) 「同時性をあらわす時間的なつきそい・あわせ文—  
「あいだ」と「うち」—」『ことばの科学 6』 言語学研究会編, pp. 141-177, むぎ書房
- 小泉 保 (1987) 「譲歩文について」『言語研究』 91, pp. 1-14
- 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』 国立国語研究所報告 3
- \_\_\_\_\_ (1964) 『現代雑誌九十種の用語用字 第 3 分冊』 国立国語研究所報告 25
- 小竹直子・酒井 弘 (2012) 「『こころの動き』を言語はどのように捉えるか」『日中理論言  
語学の新展望 3 語彙と品詞』 影山太郎・沈力編, pp. 145-167, くろしお出版
- 佐久間鼎 (1936) 『現代日本語の表現と語法』 厚生閣増補版, 恒星社厚生閣 (増補 1966)
- \_\_\_\_\_ (1941) 『日本語の特質』 育英書院
- 佐治圭三 (1984) 「類義表現分析の一方法—目的を表す言い方を例として—」『金田一春彦  
博士古希記念論文集 第二巻』 pp. 314-294, 三省堂
- \_\_\_\_\_ (1993) 「「の」の本質—「こと」「もの」との対比から—」『日本語学』 12-11, pp. 4-14
- 塩入すみ (1991) 『とりたて型従属節について』 大阪大学修士論文
- \_\_\_\_\_ (1992) 「「Xハ」型従属節について」『阪大日本語研究』 4, pp. 59-71, 大阪大学
- \_\_\_\_\_ (1993) 「『テハ』条件文の制約について」『阪大日本語研究』 5, pp. 67-81, 大阪大  
学
- \_\_\_\_\_ (1994) 「「トハ」文の主文の述語について」『現代日本語研究』 1, pp. 75-84. 大阪  
大学
- \_\_\_\_\_ (1995a) 「トキの副詞節に関する調査」『臺灣日本語文學報』 6, pp. 239-260, 臺灣  
日本語文學會
- \_\_\_\_\_ (1995b) 「期間を表す副詞節の主文の制約について—アイダ・アイダニ・アイダ  
ハ・アイダニハの場合—」『台湾日本研究国際シンポジウム論文集』 pp. 49-58, 台湾日本  
語教育学会
- \_\_\_\_\_ (1995c) 「スルタメニとスルタメ (ニ) ハ」「カラとカラ (ニ) ハ」「トキとトキ  
ニとトキ (ニ) ハ」『日本語類義表現の文法 (下)』 宮島達夫・仁田義雄編, pp. 460-467,  
pp. 514-520, pp. 539-546, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2002) 「「の/こと」節と中止節・条件節との誤用について」『東呉外語學報』  
pp. 173-196, 東呉大学
- \_\_\_\_\_ (2006) 「周辺の時間節の主文のモダリティについて」『日本語文法の新地平・  
3 複文・談話編』 (益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編) くろしお出版

- \_\_\_\_\_ (2012a) 「中国語母語話者による日本語従属節選択の誤用傾向—『日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース』を用いて—」『海外事情研究』39-2, pp. 21-35, 熊本学園大学
- \_\_\_\_\_ (2012b) 「日本語の従属節選択について—「て」節を中心に—」『文学・言語学論集』19-1, 熊本学園大学
- \_\_\_\_\_ (2012c) 「日中対訳・翻訳データに見られる時を表す従属節について」2012年日本語教育国際研究大会口頭発表
- 謝 福台 (2011) 「中国語と日本語の複文における並列・累加関係」『琉球アジア社会文化研究』12, pp. 69-92, 琉球大学
- 徐 一平 (2007) 「コーパス言語学から見た日本語研究—中日対訳コーパスの構築とその応用研究をめぐる—」『日中対照言語学研究論文集—中国語から見た日本語の特徴、日本語から見た中国語の特徴』彭飛編, pp. 149-167, 和泉書院
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 麦書房
- 鈴木義昭 (1990) 「条件句の日中対照—『ば』・『たら』・『なら』・『と』をめぐる—」『紀要』2, pp. 53-73, 早大日本語研究教育センター
- 曹 大峰 (2007) 「多言語研究と教育のための多言語コーパス開発と利用」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』最終成果報告シンポジウム (研究代表者 宇佐美まゆみ) 発表 ppt, 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 曹 大峰・千葉庄寿 (2007) 『中日対訳コーパス (「中日対訳語料庫」) 第一版の利用方法』麗澤大学言語研究センター第7回講演会レジュメ
- 高橋太郎ほか (2003) 『日本語の文法』海山文化研究所
- 高梨信乃 (2010) 『評価のモダリティ—現代日本語における記述的研究—』くろしお出版
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5, pp. 37-48
- 田中 寛 (2004) 『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造—』白帝社
- 張 麟声 (2011) 『新版 中国語話者のための日本語教育研究入門』日中言語文化出版社
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の連節とモダリティ』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1981) 『日本語の文法 (下)』(日本語教育指導参考書5) 国立国語研究所
- \_\_\_\_\_ (1982a) 「日本語における単文、複文認定の問題」『講座日本語学 第10巻 外国語との対照研究 I』 pp. 202-220, 明治書院
- \_\_\_\_\_ (1982b) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (1983) 「時間的限定の意味と文法的機能」『副用語の研究』 pp. 233-266, 明治書院
- \_\_\_\_\_ (1983) 『文法的誤用例の収集、入力、分類、および分析 (中間報告)』文部省科学研究費特別推進研究 (1) 研究報告 (4)
- \_\_\_\_\_ (1990) 『外国人学習者の日本語誤用例集』文部省科学研究費特別推進研究「日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究」分担研究「外国人学習者の日本語誤用例の収集、整理及び分析」
- 豊田豊子 (1977) 「「と」と「～とき」」『日本語教育』33, pp. 90-106
- 中右 実 (1994a) 『認知意味論の原理』大修館書店
- \_\_\_\_\_ (1994b) 「日英条件表現の対照」『日本語学』13-8, pp. 42-51
- 名柄 迪・広田紀子・中西家栄子 (1987) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ2 形式名詞』名柄迪監修, 荒竹出版
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 仁田 円 (2001) 「仮定的な時の副詞節について—「とき (に) は」を中心に—」『日本語・日本文化研究』11, pp. 139-152, 大阪外国語大学日本語講座
- 仁田義雄 (1979) 「日本語文の表現類型—主格の人称制限と文末構造のあり方の観点において—」『英語と日本語と』 pp. 287-306, くろしお出版

- \_\_\_\_\_ (1982)「助詞類各説」『日本語教育事典』大修館書店
- \_\_\_\_\_ (1985)「主格の優位性—伝達のムードによる主格の人称指定—」『日本語学』4-10, pp. 39-52, 明治書院
- \_\_\_\_\_ (1989)「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』pp. 1-56, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (1991)『日本語のモダリティと人称』くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2001)「命題の意味的類型についての覚え書」『日本語文法』1-1, pp. 5-25
- \_\_\_\_\_ (2012)「状態をめぐる」『属性叙述の世界』影山太郎編, pp. 177-199, くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2003)『現代日本語文法 6 第11部 複文』くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2008)『現代日本語文法 4 第8部 複文』くろしお出版
- 日本語教育学会編 (1982)『日本語教育事典』大修館書店
- 野田春美 (1992)「複文における「の(だ)」の機能—「のではなく(て)」「のでは」と「のだから」「のだが」—」『阪大日本語研究』4, pp. 73-90, 大阪大学
- \_\_\_\_\_ (1995)「ノとコト—埋め込み節をつくる代表的な形式—」『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』宮島達夫・仁田義雄編, pp. 419-428, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2011)「『現代日本語文法』からみた日本語の記述文法の未来」『日本語文法』11-2, pp. 17-29
- 野田尚史 (1984)「副詞の語順」『日本語教育』52, pp. 79-91
- \_\_\_\_\_ (1989a)「真性モダリティをもたない文」『日本語のモダリティ』仁田義雄・益岡隆志編, pp. 131-157, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (1989b)「文構成」『講座日本語と日本語教育 1』宮地裕編, pp. 67-95, 明治書院
- \_\_\_\_\_ (1995a)「現場依存の視点と文脈依存の視点—日本語の複文・連文でボイス・テンス・ムード形式がとる視点—」『複文の研究(下)』仁田義雄編, pp. 327-351, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (1995b)「文の階層構造からみた主題ととりたて」『日本語の主題と取り立て』益岡隆志・野田尚史・沼田善子編, pp. 1-35, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2003)「単文・複文とテキスト」『日本語の文法 4 複文と談話』仁田義雄・益岡隆志編, pp. 3-61, 岩波書店
- \_\_\_\_\_ (2005)「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」『コミュニケーションのための日本語教育文法』野田尚志編, pp. 83-102, くろしお出版
- 蓮沼昭子 (1987)「条件文における日常的推論—「テハ」と「バ」の選択要因をめぐる—」『国語学』150, pp. 1-14
- 林 四郎 (1960)『基本文型の研究』明治書院
- 原やす江 (2008)「中国語母語話者の日本語習得過程—自由発話文に現れた複文の使用の広がり—」『城西国際大学紀要』16-2, pp. 13-39
- 藤田保幸 (2000)『国語引用構文の研究』和泉書院
- 文化庁 (1978)『日本語教育研究資料 中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- 堀川智也 (2012)『日本語の「主題」』ひつじ書房
- 前田直子 (1995)「スルタメ(ニ)、スルヨウ(ニ)、シニ、スルノニ」『日本語類義表現の文法(下)』宮島達夫・仁田義雄編, pp. 451-459, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2006)『「ように」の意味・用法』笠間書院
- \_\_\_\_\_ (2009)『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- 益岡隆志 (1987a)『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (1987b)「目的表現と文の階層構造」土曜ことばの会レジュメ
- \_\_\_\_\_ (1991)「動詞の意志性と無意志性の捉え方—目的表現を手がかりとして—」『高度な日本語記述文法書作成のための基礎的研究』平成2年度科学研究費補助金総合研究(A)

- \_\_\_\_\_ (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (1995) 「時の特定, 時の設定」 『複文の研究 (上)』 仁田義雄編, pp. 149-166, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (1997) 『複文』 くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2000) 『日本語文法の諸相』 くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2004) 「日本語の主題—叙述の類型の観点から—」 益岡隆志編 『主題の対照』 pp. 3-17, くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2007) 『日本語モダリティ探求』 くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (2008) 「叙述類型論に向けて」 『叙述類型論』 pp. 3-18, くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) 『基礎日本語文法』 くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (1992) 『基礎日本語文法 改訂版』 くろしお出版
- 松下大三郎 (1930) 『改撰標準日本文法』 1974年, 勉誠社改訂版
- 眞野美穂 (2008) 「叙述類型研究史 (海外編)」 『叙述類型論』 益岡隆志編, pp. 193-220, くろしお出版
- 三尾 砂 (1942) 『話言葉の文法 (言葉遣編)』 帝国教育会出版部, 1995年くろしお出版より復刊
- \_\_\_\_\_ (1958) 『話しことばの文法』 法政大学出版局
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説』 刀江書院, 1972年くろしお出版より復刊
- \_\_\_\_\_ (1963) 『日本語の構文』 くろしお出版
- 水谷信子 (1997) 「作文教育」 『日本語教育』 94, pp. 91-95
- 南不二男 (1964) 「複文」 『講座 現代語 6 口語文法の問題点』 pp. 71-89, 明治書院
- \_\_\_\_\_ (1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店
- \_\_\_\_\_ (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2』 角川書店
- 森田良行・松本正恵 (1989) 『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』 アルク
- 森山卓郎 (1984) 「テンス・アスペクトの意味組織についての試論」 『語文』 42, pp. 1-1, 大阪大学
- 八亀裕美 (2003) 「形容詞の評価的意味と形容詞分類」 『阪大日本語研究』 15, pp. 13-40
- \_\_\_\_\_ (2008) 『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』 明治書院
- 山岡政紀 (1999) 「発話機能と発話内行為」 『創価大学人文論集』 11, pp. 135-154
- \_\_\_\_\_ (2008) 「発話機能論の歴史」 『日本語日本文学』 18, pp. 49-64
- 吉田妙子 (1994) 「台湾人学習者における『て』形接続の誤用例分析—『原因・理由』の用法の誤用を焦点として—」 『日本語教育』 84, pp. 92-103
- 吉永 尚 (2008) 『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』 和泉書院
- 李 光赫 (2007) 「条件文の誘導推論をめぐる日中対照」 『国語学研究』 46, pp. 100-111, 東北大学
- \_\_\_\_\_ (2011) 『日中対照から見る条件表現の諸相』 風詠社
- 渡辺 実 (1971) 『国語構文論』 塙書房
- Akatsuka, Noriko. (1985) Conditionals and epistemic scale, *Language* ,61-3, pp.625-639
- Akatsuka, Noriko. (1987) Another look at no, koto, and to: Epistemology and complementizer choice in Japanese, in Hinds, J. and Howard, I. (eds.) *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, pp. 178-212, Tokyo: Kaitakusha,
- Carlson, Gregory (1980) *Reference to Kinds in English*. New York: Garland Press.
- Davidson, Donald. (1967) The logical form of action sentence. Reprinted in *Essays on Actions and Events*, by D. Davidson, pp. 105-122. Oxford University Press, 1980. (日本語訳『行為と出来事』 1990, 服部裕幸・柴田正良訳, 勁草書房)
- Faraci, Robert A. (1974) *Aspects of the Grammar of Infinitives and For-Phrases*. D. dissertation, MIT.
- Givón, Talmy. (1984) *Syntax*. vol. 1. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Haiman, John. (1978) Conditionals are topics. *Language* ,54-3, pp. 564-589

- Karttunen,Lauri.(1970) On the semantics of complement sentences, *CLS* 6,pp.328-339
- Li ,Charles.N.and Sandra A.Thompson. (1976) Subject and Topic:a new typology of language.  
In Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*, , pp.458-489,New York: Academic Press.
- Quirk, Randolph.et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*.London:  
Longman.
- Sweetser,Eve E.(1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of  
Semantic Structure*. Cambridge University Press. (日本語訳『認知意味論の展開—語源学から  
誤用論まで—』 2000,澤田治美訳,研究社)
- Vendler,Zeno.(1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca,N.Y.:Cornell University Press.
- Williams,Edwin(1980) Predication.*Linguistic Inquiry*,11-1,pp.203-238

## 用例の出典

【青空文庫】(著者名五十音順) \*用例の一部の旧仮名遣いを改めて用いている場合がある。

/芥川龍之介『葱』/上村松菫『中支遊記』/海野十三『宇宙の迷子』/海野十三『十八時の音楽浴』/大野裕『金史良 作家データ』/岡本かの子『慈悲』/岡本かの子『母と娘』/岡本かの子『巴里の唄うたい』/岡本綺堂『穴』/岡本綺堂『停車場の少女』/岡本綺堂『夢のお七』/小川未明『お母さんは僕等の太陽』/小川未明『北の国のはなし』/小川未明『金の輪』/織田作之助『中毒』/梶井基次郎『海断片』/梶井基次郎『檸檬』/菊池寛『俊寛』/菊池寛『無名作家の日記』/岸田國士『こんな俳優が欲しい』/岸田國士『笑について』/北大路魯山人『欧米料理と日本』/北大路魯山人『近作鉢の会に一言』/北大路魯山人『料理と食器』/北大路魯山人『料理の第一歩』/九鬼周三『小唄のレコード』/九鬼周三『伝統と新取』/黒島伝治『渦巻ける鳥の群』/小泉八雲『耳無芳一の話』/小酒井不木『闘争』/小酒井不木『白痴の知恵』/小林多喜二『蟹工船』/坂口安吾『安吾巷談』/坂口安吾『明治開化安吾捕物五』/坂口安吾『恋愛論』/佐佐木俊郎『首を失った蜻蛉』/佐藤垢石『莢豌豆の虫』/佐藤垢石『那珂川の鱸釣り』/佐藤垢石『榛名湖の公魚釣り』/薄田泣菫『贖物』/相馬愛蔵『私の小売商道』/高浜虚子『丸の内』/竹久夢二『風』/太宰治『きりぎりす』/太宰治『思索の敗北』/太宰治『答案落第』/太宰治『碧眼托鉢』/太宰治『みみずく通信』/田中貢太郎『美女を盗む鬼神』/種田山頭火『行乞記 北九州行乞』/辻村もと子『早春箋』/妻木しづ『かなしみの日より』/寺田寅彦『ある探偵事件』/寺田寅彦『ある日の経験』/寺田寅彦『埋もれた漱石伝記資料』/寺田寅彦『科学者とあたま』/寺田寅彦『錯覚数題』/寺田寅彦『青磁のモニタージュ』/寺田寅彦『先祖祭』/寺田寅彦『蓄音機』/寺田寅彦『年賀状』/寺田寅彦『春六題』/徳永直『光をかかぐる人々』/戸坂潤『空間概念の分析』/豊島与志雄『怒りの虫』/豊島与志雄『古木一近代説話一』/豊島与志雄『秦の出発』/豊島与志雄『沼のほとり一近代説話一』/豊島与志雄『轢死人』/中井正一『二十世紀の頂における図書館の意味』/中島敦『鏡花氏の文章』/中島敦『弟子』/永井隆『ロザリオの鎖』/夏目漱石『草枕』/夏目漱石『手紙』/夏目漱石『道楽と職業』/野上豊一郎『レンブラントの国』/長谷川時雨『下町娘』/原民喜『死のなかの風景』/火野葦平『ゲテ魚好き』/平林初之輔『作家としての小酒井博士』/平林初之輔『犠牲者』/平林初之輔『予審調書』/平山千代子『赤ちゃん』/北條民雄『眼帯記』/堀辰雄『花を持てる女』/牧野信一『或る五月の朝の話』/正岡容『随筆寄席囃子』/松本泰『P 丘の殺人事件』/水野葉舟『土淵村にての日記』/宮沢賢治『土神ときつね』/宮本百合子『小鳥』/宮本百合子『最近悦ばれているものから』/宮本百合子『列のこころ』/三好十郎『アメリカ人に問う』/三好十郎『「廢墟」について』/柳宗悦『京都の朝市』/夢野久作『空を飛ぶパラソル』/夢野久作『正夢』/夢野久作『三つのめがね』/横光利一『時間』/和辻哲郎『人物埴輪の眼』/和辻哲郎『孔子』/和辻哲郎『寺田寅彦』/和辻哲郎『能面の様式』/魯迅『鴨の悲劇』井上紅梅訳/薄松齡『珊瑚』田中貢太郎訳/Edgar Allan Poe『ウィリアム・ウィルスン』佐々木直次郎訳/Franz Kafka『審判』原田義人訳

【その他】

山崎豊子『続白い巨塔』新潮社